

古代山城の成立と変容 平成三〇年度 鞠智城・古代山城シンポジウム二〇一八

平成三〇年度 鞠智城・古代山城シンポジウム二〇一八

古代山城の成立と変容

開催日時等

場所:明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール(東京都千代田区神田駿河台 一一一) 日時:平成三○年一○月一四日(日)一○時三○分~一七時一○分

主催 ::熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援:明治大学博物館 明治大学社会連携機構 熊本県文化財保護協会

一、講演等プログラム

・基調講演「古代山城の成立と変容」

亀田 修一(岡山理科大学教授)

講演①

「七世紀後半の国際関係と古代山城」

仁藤(敦史(国立歴史民俗博物館教授)

・講演② 「朝鮮式山城の特徴 | 主に兵站と備蓄について―」

.③ 「神籠石系山城の捉え方~築城年代・築城主体論の克服」赤司 善彦 (大野城心のふるさと館館長)

向井 一雄(古代山城研究会代表)・講演③ 「神籠石系山城の捉え方~築城年代・築城主体論の克服

コーディネーター 佐藤 信(人間文化研究機構理事)

パネルディスカッション

中村友一(明治大学准教授)」
市井一雄氏

矢野裕介(熊本県教育委員会職員) 五十嵐基善(明治大学講師)

シンポジウム概要

主催者あいさつ 1

基調講演 「古代山城の成立と変容」 亀田 一. はじめに 8 修 7

(二) 遺物 (一) 遺構 24 33

三.遺構と遺物の個々の検討と総合化

二: 未完成と完成 9

四.古代山城の成立と変容

石川 日出志 5

明治大学文学部教授·日本古代学研究所長

熊本県教育長

宮尾千加子

古代山城の成立

六六○年の百済滅亡、六六三年の白村江の戦いの前に築かれた古代山城 神籠石系山城はいつ築かれた?

44

古代山城の終焉とその変容

古代山城の変容―使用され続けた古代山城 古代山城の停廃記事 45

| 48

【はじめに】 60 講

Ŧ.

おわりに

53

演① 「七世紀後半の国際関係と古代山城」

仁藤

敦史

59

【白村江後の倭国の立場】 61

【大宰総領と国宰】 72

【天智期の外交】 64

【おわりに】 74

はじめに 76 講

演②

朝鮮式山城の特徴

主に兵站と備蓄について一」

赤司 善彦

75

朝鮮式山城の特徴 朝鮮式山城とは 77

古代山城の兵士 施設 石積 土塁 立地 97 96 94 78

講演③

はじめに 「神籠石系山城の捉え方~築城年代・築城主体論の克服」

110

神籠石とは何か

神籠石論争

111

神籠石遺跡の発掘調査

112

大宰府と古代山城(筑紫城)の関わり -筑紫城の倉庫群の意義-102 106

六 Ŧi. 四

筑紫城の存続と備畜

朝鮮式山城の兵站

98 99

おわりに一

106

向井 雄

柳田國男の神籠石批判 113 神籠石系山城という学術用語の変遷 神籠石系山城にアプローチする方法 129 上古代山城にアプローチする方法 121 125 123 121 125 123 121 125 123 121 125 123 121 117 117 117 117 117 117 117 117 117										-				
	の構造	にかかった日数	かり	際防御と縦深防御	地と縄張り	の関係	・大宰総領制・山陽道	からみた古代山城	山城にアプローチする方法	研究からみた古代山城	山城に関する諸説	石系山城という学術用語の変遷	・石神としての神籠石	田國男の神籠石批判

参考資料

講演③(向井

基調講演(亀田 本語)

敦 善 一雄)

13 23 35

シンポジウム次第

(亀田 修一) 1

【平成30年度鞠智城・古代山城シンポジウム 資料編】

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末に まとめました。

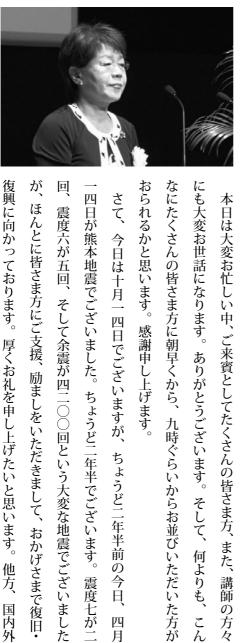
主催者あいさつ

主催者あいさつ①

熊本県教育長 宮尾千加子

いりまして、 お越しいただきまして、ほんとに感謝でいっぱいでございます。゛ころう君゛も年々スキルがアップしてま ありがとうございます。皆さま、本日はようこそお越しくださいました。こんなにたくさんの皆さま方に 鞠智城の PR を一生懸命やっておりますが、お楽しみいただけましたでしょうか。ありがと

うございました。



なにたくさんの皆さま方に朝早くから、九時ぐらいからお並びいただいた方が おられるかと思います。感謝申し上げます。 にも大変お世話になります。ありがとうございます。そして、何よりも、 本日は大変お忙しい中、ご来賓としてたくさんの皆さま方、また、講師 一の方々 こん

が、ほんとに皆さま方にご支援、励ましをいただきまして、おかげさまで復旧 回、震度六が五回、そして余震が四二○○回という大変な地震でございました 四日が熊本地震でございました。ちょうど二年半でございます。震度七が二 さて、今日は十月一四日でございますが、ちょうど二年半前の今日、 四月

もほんとに微力ではあるんですが、少しでも恩返し、そして、熊本地震での反省点とか教訓を次の世代につ で大変な災害が頻発しておりまして、日本国内だけでも、今年に入っても大阪での地震、 台風、 そして北海道の胆振東部地震等々、ほんとに災害列島でございます。そういった意味では、 西日本での集中豪 私ど

とでご配慮いただいたと伺っております。 催することができました。感謝申し上げます。熊本県が熊本地震からの復興・復旧に向かっているというこ 今年度も明治大学日本古代研究所をはじめ、 重ねてお礼を申し上げます。 関係者の皆さまのご支援とご尽力のおかげで、この会場で開

ないでいくことができればと願っております。

明を進めるとともに、近年では、その成果を報告するまとめ、講座やシンポジウムなどさまざまな機会を通 跡として高く評価されております。熊本県では昭和四二年に始まる発掘調査や研究を通して鞠智城の構造解 たが、七世紀後半の激動する東アジア情勢の中で大和政権によって築かれた古代山城で、全国有数の重要遺 さて、鞠智城は多くの皆さまがご存じのとおり、今から約一三五〇年前、 鞠智城の歴史的価値を明らかにしてきたところでございます。 先ほど VTR にもございまし

来はもう少し早く実施する予定でございましたが、熊本地震での影響で延期していたものでございます。 本年度からは、 第三次鞠智城跡保存整備基本計画に基づいて、発掘調査を八年ぶりに再開いたします。 本

後も地道な取り組みを一つ一つ積み重ねていきたいと考えています。

本日のシンポジウムにおいては、「古代山城の成立と変容」と題して、鞠智城のみならず、古代山城全体

を取り上げることといたしました。古代山城とは何なのか。その姿が時間の経過とともにどのように変わっ

ウムを通じて古代山城全体に関する理解と研究が深まることで、 ていったのか。講演・ディスカッションで活発な議論がなされるものと期待しております。今回のシンポジ 鞠智城の歴史的・学術的価値がさらに高ま

り、多くの皆さまに広く知っていただくことを願っております。

結びに、ご来場いただきました皆さま方に重ねてお礼を申し上げ、熊本県教育委員会からのあいさつとさ

せていただきます。本日は大変お世話になります。ありがとうございます。

主催者あいさつ②

明治大学文学部教授・日本古代学研究所 石川日出志



はほんとにさわやかな、ほんとにほんとに素晴らしい秋の一日となりました。 が続いてまいりました。だいぶその暑さも残っておりましたが、ようやく本日 **究所の石川が一言ごあいさつ申し上げます。まず、非常にこの夏、暑い暑い日** をお運びいただきまして誠にありがとうございます。 そのようなすがすがしい本格的な秋の大事な大事な一日を、ここ明治大学に足 皆さん、おはようございます。主催者の一員として、私、明治大学古代学研

とともに感激をしております。本日は鞠智城古代山城シンポジウム、一日、夕 方までたっぷり時間を用意いたしまして、なおかつ、本日は古代山城研究のト 先ほど、後ろを振り返りまして、満席の状態を目の当たりにしまして、驚き

古代史像を描き直そうではないかということで、取り組みを続けてまいりました。 古代文学という三分野だけではなくて、それらを横断する形で、少し戦いながらも共同で今までと違う日本 代学研究所は十数年前、一五年ほど前から教育・研究両面で、これまでの考古学、また古代史学、あるいは ップランナーの先生方をお招きしまして、ここでシンポジウムを開催いたします。私ども、明治大学日本古

東国の東京が根拠でありますので、思いをどう積み重ねても限界があります。 従い 6

そうはいいましても、

まして、本日のように、こうして九州から、あるいは西日本から、近畿から、さまざまな先生方をお招きし て、古代学研究の最前線をご紹介いただく。私たち明治大学のスタッフとしても最先端を学ばせていただく、

を持てることを本当にありがたく、うれしく思っています。夕方まで、ほんとに長丁場でございます。 こういう機会がどうしても必要です。 本日は熊本県および熊本県教育委員会の皆さまのご尽力、ご協力、ご理解をいただきまして、こうした会 面白い鞠智城の姿を存分に味わっていただければありがたいと思います。本日はどうぞよろしくお願い

しか

いたします。

ありがとうございます。

基調講演

古代山城の成立と変容

講演者紹介

亀田 修一(かめだ しゅういち)

九州大学文学部卒業。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。大韓民国忠南大

専門は考古学。博士(文学)。

学校留学。岡山理科大学助教授を経て、現在、

岡山理科大学生物地球学部教授。

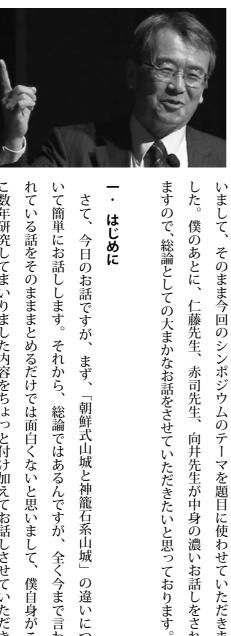
基調講演「古代山城の成立と変容」

岡山理科大学教授 亀田 修

おはようございます。岡山理科大学の亀田でございます。今日はよろしくお願いいたします。一時間ほど

ということで伺っています。

「古代山城の成立と変容」という題目ですが、事務局側から、こういうお話で、総論的にということを伺 した。僕のあとに、仁藤先生、赤司先生、向井先生が中身の濃いお話しをされ いまして、そのまま今回のシンポジウムのテーマを題目に使わせていただきま



・ はじめに

こ数年研究してまいりました内容をちょっと付け加えてお話しさせていただき れている話をそのまままとめるだけでは面白くないと思いまして、僕自身がこ いて簡単にお話しします。それから、 さて、今日のお話ですが、まず、「朝鮮式山城と神籠石系山城」の違いにつ 総論ではあるんですが、全く今まで言わ

ます

が、 このような見方で検討しますといろいろ違った見方ができるのかなというお話を以前させていただきました は、以前から言われているんですが、かなりのものができあがってないんじゃないだろうかということです。 いわゆる朝鮮式山城は大体できあがっていると思います。しかし神籠石系山城と言っているものに関して **連のシンポジウムの一つの回が東京国立博物館であった時に一度お話しさせていただきました。古代山城** 今回もちょっとそのようなお話をさせていただきます。 つが、ここにあります「未完成と完成」というテーマです。これは、何年前だったでしょうか、この一

ろうと思い、僕自身もやり始めました。遺構という構造物、それから遺物という土器などのものを個々に検 討した上で総合化すると、いろいろ見えてくるんじゃないだろうかと思っています。 しい成果を挙げられています。その後、このような視点でほかの古代山城を見ていくとどのようになるんだ すが、その中で、今日も来られてます矢野さん、それから、土器のほうを検討された木村さんたちが素晴ら それから、この三番目の「遺構と遺物の検討と総合化」。鞠智城の立派な報告書が数年前に出されていま

あらためてわかってきました。今回は、ちょっとそのような新しいねたも少し含めながら、古代山城の成立 僕たちは習ってきました。しかし、実は、よく見てみるとそうでもない、よく分からない部分があるんだと、 て少しお話ししたいと思います。ここに書いています「堰板」という、枠の板を使って土留めをしていると 特に今回は、 古代山城の土塁を築く時に、一層一層積み上げていく版築という丈夫な土塁の築き方につい



図1 日本の古代山城 (総社市2005)

九州に広がっています。ここでちょっと見にくい

から大体西側の地域、瀬戸内海沿岸地域から北部

図なんですが(図1)、ここが高安城です。

ここ

んですが、

赤い丸が神籠石系山城、

それから三角

記録

に あ

が朝鮮式山城といわれているものです。

何が違うんだという点について少しお話ししま る鞠智城もこの朝鮮式山城に含まれますが、 こういう分布状況になっております。 そこで、朝鮮式山城と神籠石系山城というのは 大体

して現在定着している分け方ですが、『日本書紀』であるとか、『続日本紀』などの記録に名前が出てくるも いう話にはどうしてもなりづらいのです。同じ古代の山城の中でグループが違うというぐらいのものなんで その違いをどう理解するかによってグルーピングのしかたが変わってきます。それで、 あとでまた向井さんのお話にも出てくると思いますが、「こことここが違うから確実に分かれるよ」と ひとまずの話と

す。

と変容についてお話を進めていきたいと思って

ます。

まず、

これはよく皆さんがご覧になられる分布

城 智城が加わります。これら以外にここに載っています、備後の国、広島県南東部の茨城・常城があります。 のを朝鮮式山城と呼んでいます。 (基肄城)、 それから金田城、 屋嶋城、 例えば、 高安城。そして、六九八年の繕治、 水城は朝鮮式山城に入れるかどうか悩ましいですが、 修繕でいいと思いますが、 大野城、 鞠 椽

この二つの城は築城記事や繕治記事は出てこず、城の停止記事だけがでてきます。

の石城山などで、このような山城が北部九州を中心に確認されていまして、ひとまず神籠石系山城と呼ばれ 確認されているものです。もともとは列石が注目されていました。筑後の高良山や筑前の雷山、 それから、 記録にはみられませんが、考古学的に確認されているものがあります。 山の上に土塁や列石が そして周防

州大学の鏡山猛先生や小田富士雄先生たちが発掘調査をされて、土塁があることが確認されました。さらに 較をすればやっぱり山城なんだという説があります。それで有名な神籠石論争になるわけです。そして、九 列石は神域、 がちょうどお宮さんの範囲を囲んでいるものが高良山や石城山の神籠石でみられます。ということで、この のものが神籠石と呼ばれたと向井さんが述べられています。いずれにしても列石が大きな特徴で、その列石 石をずっと列に並べています。この列石が神籠石の名前の元になったといわれています。ただもともとは別 これらの大きな特徴は、記録が見られないことと、切石の列石です。北部九州の場合、 神のエリアを囲うものだという説があります。 いや、そうじゃなくて、 これは朝鮮の類例と比 きれいに加工した

その土塁に版築を使っていることが明らかになり、朝鮮式山城と同じようなものなんだろうと考えられるよ

味で、やはり違いはあるわけです。ただし、きれいに割り切ることができません。そういう微妙な違いもご 式山城では、あとで赤司さんからお話が出てくると思いますが、たくさんの倉庫群があります。そういう意 見つからないということです。一部あるものもあるんですが、基本的に見つかりません。大野城などの朝鮮 が一つのキーワードになってきました。それから「版築土塁」、そして、もう一つが、城内に建物がどうも いるものがわかってきて、ちょっと多様な様相が見えてきます。このようにこのグループの山城は こうして調査が進んできますと、瀬戸内側では切石ではなくて加工した石、 割石、 そのままの石を使って 列石

二・ 未完成と完成

理解いただいた上で、

次のお話に進みたいと思います。

意味で言いますと、 中にあります。 国の山城はほんの少し発掘したことがございますが。日本の古代山城は、城壁の長さが大体二キロ前後で大 僕自身、神籠石等の発掘調査に主体的に関わったことはございません。学生時代、韓国に留学にして、韓 韓国の場合、百済地域ですと一○○メータークラスから、九○○○メーター台ぐらいまでの幅 王城といわれている、王様がいた公山城とか、扶蘇山城ですと大体二キロ台です。そういう 日本の神籠石や朝鮮式山城もそれぐらいの大きさですのでかなり規模の大きいものとい

うことになります。

の地形を使っているようですが、少し下の方にある浦生石塁というところは、今注目されて発掘調査もされ すが、きちんとめぐっていないものが意外に多そうです。朝鮮式山城の香川県の屋嶋城、上部の城壁は自然 いるのかというと、岡山県の備中鬼ノ城と福岡県の豊前御所ヶ谷神籠石の二カ所だけはいいだろうと思いま そして、大野城とか、基肄城などは城壁にそって回っていきますと、城壁がちゃんとあります。基本は土 一部石垣の城壁があるところがあります。神籠石系のものですと、ほんとうに石垣とか土塁が回って

見ていきますと一六遺跡中、 このように、古代山城にはそれなりに未完成のものがあるのではないかという視点で、神籠石系の山城を 豊前唐原山城跡や筑前阿志岐山城跡など、少なくとも六遺跡は未完成と考えざ

るを得なくなってきました。

ているんですが、この付近はどうも未完成のようです。

なかったのではないかと、思われてきました。 城などは、重要な場所で古い段階から築かれ始めたのではないか。未完成の場合はそこまで重要視されてい そして、それらの価値付けといいますか、そのような視点で、完成したお城を見ていくと、大野城や基肄

たからここで止まって、休憩して二期工事にしようかと。例えばこの段階で工事が止まってしまった場合、 を造ろうとする時、一期工事、二期工事みたいな区別がありますよね。その時にひとまず一期工事が終わっ すか」という質問が時々あります。僕は未完成にもいくつかの段階があると思っています。例えばある施設 以前、 新たな未完成説を提示させていただいてから、「亀田さんの言ってる未完成ってどういう未完成で

ういうのはないのかと考えています。政治情勢との絡みもやはりあるのかなと思っています。 ビル工事が途中で止まってしまっている、そういうビルもありますよね。神籠石とか朝鮮式山城の中にもそ それから、ここに書きました「意図的な未完成」。例えばあるビルを造っていたら資金が続かなくなって、 これを未完成と見るのか、それとも少なくとも一期工事は完成しているんだと見るのかという、見方です。

ておきゃいい、こっちは重要だから先に造ったけど途中で止まってしまった、とか、いろいろな状況が推測 意味合いがあると考えられます。古代にもそのような意識はあったと思います。こちら側の見える所だけ造っ います。「見せる」ということは、こういう城があるんだよと見せることによって敵が来るのを防ぐという それから、「見せる城」。これは向井さんが以前書かれた考えですが、僕もそのような考えはあると思って

勢を反映したものだろうと僕は思っています。「見せる」というのはそのとおりなんですが、それプラス、 ですから、「未完成」という言葉に関して、途中での停止は単なる偶然ではなくて、当時の政治、社会情 されます。

深い意味もあると考えておいたらどうでしょうかということです。

のか、 が出てくるのはこの三つですから、当時の国家としてはこれらを意識し、重要性、その城の性格なども加 治」されます。 それから、 意見があります。六九八年という、奈良時代直前の時期なんですが、「繕治」しています。 これに関わる話で「繕治」ということばがあります。 この前後に高安城も修繕などがされています。この 大野城・基肄城・鞠智城が六九八年に 「繕治」 が修繕なのか、 何か新たに造る

して繕治しているんだと思います。

実は「修繕」が確認された例はほとんどありません。「繕治」という見方で考えてみる必要もあるのかなと思っ ています。大野城もちゃんと城壁を修繕しています。つまり維持管理しているということになるわけですね。 繕」でしたら、岡山の鬼ノ城も城壁の修繕をしています。この「修繕」っていう発想もすごく重要だと思っ 繕治」っていう行為は、そういう意味で城の重要性を示していると僕は思っています。 その「繕治」が「修

あそこを押さえると通りにくくなるという重要なエリアです。記録には出てきませんが、鬼ノ城が造られた 地方を攻めて行く時に途中にあり、とても重要な城だと思っています。あの地域の海は、 一つの要因だと思っております。鬼ノ城と屋嶋城でこの海を監視するわけです。 ノ城に関しましては、僕は今、 **備讃の「備」は吉備の「備」で、「讃」は讃岐です。岡山県と香川県の間の海、ちょうど** 岡山におりますから特にそうなんですが、 朝鮮半島から北部九州、 備讃瀬戸という言 近畿

い」、これらをキーワードとしてお話ししていきたいと思います。 そこでこれから「完成と未完成」、「未完成の諸段階」、「遺構の有無、 多い・少ない」、「遺物の多い・少な

ちゃんと加工の痕跡があります。そういう意味で、ちゃんと据えて、上に土塁を作ろうとしているんです 土塁がない部分があります(**写真1**)。このスライドは唐原の、先ほど言いました列石です。この上部には まず、未完成のお城ということで土塁の有無でみていきます。豊前の唐原山城、 筑前の阿志岐山城などは

実線のところは、基本的に斜面の加工と列石、

ありません。つまり、

唐原の山城に関しましては土塁がない、そういうことになります。これはもう一カ所

部土塁らしきものがある所もあるんですが、

明確な土塁が

先

塁がもともとあって削られたんでしたら、こういう削られ方はしないのではないかといわれております。

ご覧のように後ろに何もありません。どうも土塁がなかったのではないかと考えられています。もし土

ほどの場所はちょうどこの辺(図2、丸で囲ったところ)ですが、この点々々の所は土塁も列石もありません。

写真1 豊前唐原山城跡(末永2003)

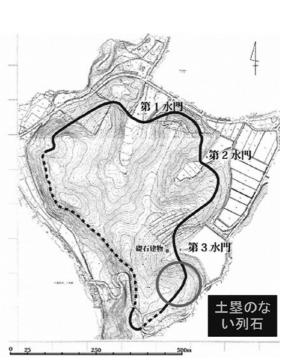


図2 豊前唐原山城跡 (古代山城サミット実行委員会2010)



大分県中津城石垣に転用された石材





大分県中津城石垣に転用された石材



写真3 唐原山城跡 (南東部)

もし後世に削られたのであるならば、もう少し違っ

た削られ方があっていいんじゃないかと思っていま

みたいです。これが、その裏の状況です(写真3)。

れたかと思いますが、そこで止まってしまっている

す。

造ったお城なんですが、そこに、この唐原山 ていたのか、あることが知られていた、そして、持っ といわれています。 列石の石が持って行かれています(写真4、 津城というお城があります。 すが、この遺跡の近くの山国川という川の対岸に中 になるのかと思いますが、 黒田官兵衛が中津城を造る時に持って行ったんだ さらに、 行橋市の小川さんが明らかにされたんで つまり、 唐原山城跡の列石が見え ちょうど豊臣秀吉の頃 有名な黒田官兵衛 <u>5</u> 城 跡 が 0)

図3 筑前阿志岐城跡(向井2010b)



写真6 阿志岐城跡第12トレンチ列石と土塁(草場2008)

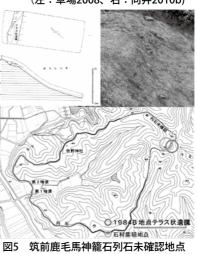


写真7 阿志岐城跡第12トレンチ列石と土塁(草場2008)

6、7)。ちょっとここは特徴的で石を二段に積んだりもしています。出てくる土器はこういう土器です(図4)。 見える場所だけに土塁を築いたのかもしれません。これが土塁で、きれいに版築して石が置いてあります(**写真** で、もともと土塁がなかったんだろうといわれています。 て行かれた。その時に、もし石が欲しくて、そして石の上に土塁があったのならば、 の一ほどしかないということになります。上側が大宰府側になりますので、ここは大事な場所だねっていって、 べて削らなくても石の所だけ持って行けばいいわけですよね。土塁が全部ないというのはやはりおかしいの それから阿志岐山城跡、 ここも、この北側部分に土塁があって、 南側はありません(図3)。ですから、三分 その土塁をわざわざす

阿志岐城跡第3水門の土器 右:向井2010b) (左:草場2008、

図4



(井上1984、



図6 筑後女山神籠石(向井2010b)

の場合は南側に列石があって、北側にはないといわれております。これは向井さんが書かれた図なんですが、 ようです。 ていて石がないところがあります。 域きれいに残っているんですが、 べる段階で工事が止まったのではないかと思われます。 だいたい八世紀の前半ぐらいかなといわれております。 それから、 それからもう一カ所、 近くに石が転がっています。 みやま市の女山神籠石です これは筑前の鹿毛馬神籠石です (図5)。 後ろのほうに行くと、発掘調査をした時点で右上の写真のように段がつ おそらく石を置くために段加工はしたんだけれど、 ここも、 (図 6)。 造る途中の最後の最後だったのかもしれませんが、 福岡県の南のほうの有明海に面するところですが、ここ こういう例が各地にあるようです。 それ以外に分かっていません。 福岡県飯塚市にあります。 石が置かれなか ここはほぼ全

った

石を並

ずこれらは未完成のグループに入れています。 北側はひとまずなくても、 ております。つまり、「ここだけでもう完成なんだ」という言い方もあるかもしれませんが、僕は、ひとま で土塁が全周しない、そういうものが各地にあるようです。これらを僕はひとまず未完成のグループに入れ て、 有明海を意識すると南から攻めてくるんじゃないかと意識したのではないかと思われます。そうすると、 南側さえまず造っとけばいいんじゃないのという話です。こういうようなやり方

それからもう一つ、瀬戸内海沿岸地域の山城には、 門を建てる時の門の基礎部分に石を添える、 唐居敷と

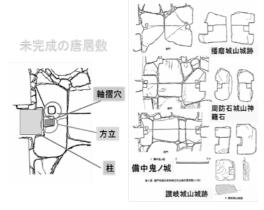


図7 未完成の唐居敷(村上1998)

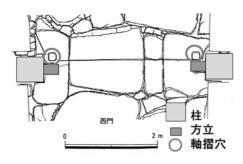


図8 備中鬼ノ城西門(村上1998)



写真8 備中鬼ノ城西門

城の西側に駅路があって、こちら側を意識したと考えられています。これはある面で鞠智城と通じる面があっ

写真9 備中鬼ノ城西門 (村上1998)

える。

扉の軸、

いうものがございます(図7)。ちょっと見にくいかと思いますが、この石の凹んだところに四角い柱を添

その横に方立という扉と柱の隙間を埋める材を立てる穴、それから、

「ギギー」って回した時の軸を据える穴などがあります。このような唐居敷があります。これ

周防の石城山などにあります。それから、

ここが軸摺穴です

(図 8 (

写真

この辺の石敷は当時のままのものです。

讃岐のほうにもございます。

この写真10は唐居敷を使用した門の下の部分の復元の様子です。

は鬼ノ城(図9)のものなんですが、鬼ノ城以外に播磨の城山、

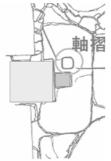


図9 備中鬼ノ城西門唐居敷(村上1998)



写真10 備中鬼ノ城西門唐居敷(村上1998)

せん。つまり、これはもう未完成だと考えざるを得ないということです。つまり、 軸摺穴はございません。 ています。 先ほどの鬼 ササキ原産 ノ城 それから、 發根絲北 91.85 本松東南方東 のものは四角の穴がきちんと抉られています。 1515L 特にこれ。 發根結束 =1/30000) と門礎関連の石製遺物 (S =1/80)サルブチ滝 柱 用 サルブチ油 0) 四 角 の穴が途中まで彫られていますが、 概念パエ ge noute 門礎の図は「課鉄城山城の研究」古代山 城研究会、1996年より引用、

讃岐城山城跡の唐居敷(松尾・谷山2006)

で、

讃岐

山ではたくさん見

かっ

てい

・ます。 の城

これは総社市

の松

の中に、 仕事がベースになっています。 尾さんが作られた資料です(図10) この城-る穴が通ってないも もともと向井さんたちがされた Щ 明らかに四角い柱を添え のものには方立用 のが見つか の穴や ح

讃岐の城山に関しまして

貫通していま

22

ŋ

ます。

この小さい方形

0 Ł

0

こ

ō

兀 角

大きいほうが柱にな

ります。この穴に扉の軸があって、

「ギギギッ」と回すわけです。

先ほど挙げた唐居敷

の資料の中

れが方立、そしてこちらが扉に

な

の山城、

学させていただきましたが、よく見ると、石垣に土塁がつながっていないんです。石垣だけなんです。

は

て建物を建てるところまでは行ってないということが、こういうことからお分かりいただけるかと思います。

門を造る準備をして、その門に据える石を準備して加工を始めたんだけれど、少なくとも唐居敷を据え

これは播磨の城山の図です(図11)。点線が加藤さんという地元の方が想定された城壁のラインです。こ

城壁が残っておりません。部分的に、石塁と書いてあります。それから門の跡と書いてある所がご

この写真が先ほどの石塁の所です(**写真11**)。僕も現地にお邪魔させていただき、この石垣を見

図11 播磨城山城跡(加藤1995)



写真11 播磨城山城跡石塁C(加藤ほか1988)



写真12 播磨城山城跡唐居敷

門の所に行きましたら、このように唐居敷がおかれてありました (写真12)。

いただきながら、次に行きます。 このように見ていくと、結構未完成のものがありますねという話になります。 のを造って扉をまわすことも可能なんですが、 いう話になります。少なくとも先ほどの讃岐の城山のものはそう考えざるを得ないということです。つまり、 方立の穴はあるんですが、 軸摺穴がありません。 ひとまずあるだろうと想定すると、 実は 扉の軸を唐居敷に入れなくても、 このようなことを頭に入れて これも未完成なのかなと 柱の中に支えるも

Ξ 遺構と遺物の個々の検討と総合化

遺構

は百済の 築に関することです(写真13)。 つい最近行った仕事の一つがこ 風納土城といいまして、 西 ح ō 層 れ 版

た城

の築城の様子です。

これ

四七五年ぐらいまで、

百済の王様

が

見にくいかと思うんですが、

城壁を造っているところです。ここに、



百済風納土城の城壁復元模型 写真13 (漢城百済博物館2012『漢城百済博物館』

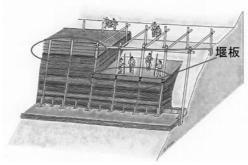


図12 豊前御所ヶ谷神籠石版築土塁復元模式図 (기기 | 2006)



図13 備中鬼ノ城西門復元図(平門) (総社市2007)

く。

本来ならこの側面にも板をはめ、

いると思うんですが、

この絵では板が描か

が、 が、 これが復元された版築土塁(写真14)なんです あって、こちらのほうに土塁が残っております。 がこの場所ですが、その横にこのような石垣が 板がなかったのかなって思っています。 いません。 これは鬼ノ城の城壁です(図13)。 先ほどの門 もともとはこの右のような様子です。 版築の様子を再現しているところです 最近、 僕はどうもここにはもともと これ **図**

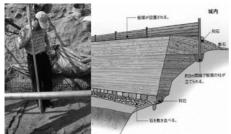
を立てて、板をはめて中に土を入れて突いてい 復元図です(図12)。 版築していく時にここに柱 トして片側だけに土を入れるやり方をしている 山の斜面をカッ 版築して れ 7

これは豊前御所ヶ谷神籠石の

枠で囲んで、

人が突いています。

写真14 石敷(左:総社市2005)



備中鬼ノ城土塁復元図 (総社市2005) 図14

14)。こういう棒で、こちら側に堰板があって、

まず、 この図、 石 すごく細か 垣 0) 右 端 つまりこの右側 ちょっと見にくいかと思いますが、 Ö ところに石が立っていまして、 い図ですみません その右側の様 の土塁は 学が一 (図な 左側 番下の図です の石垣 お手元の皆さんのレジュメにも入れてあります。 そこから土塁があるのですが、 などのあとに作られたことがわ 赤い矢印のところが堰板 (図15)。この図で大事なところが、 の場所と思わ その かります。 右側に斜め上 ħ います。 赤い矢印 そしてこ そ か

右下のところが水門で、 の線が見えます。 てその横の土層をみますと、 つけたところです。 その堰板のところで少し上に上がります。 灰黄色微砂 (2.5Y7/2)、硬、 10. 55 (0.0624) 備中鬼ノ城第5塁状区間版築土塁・堰板痕跡、土層端部 の上がり(村上・松尾2005『古代山城鬼ノ城』 タテのしきりなし このような土層になるのはそこに こ下がる 列石 右に下がる 左: D地点2トレ 下右:D地点3トレ D地点2・5トレンチ:こ

こはわずかに下がる? 備前大廻小廻山城の版築土塁・図面 図16 (出宮・乗岡1989)

上から突いています。

そうするとこんなふうになりますよという模式図です。

を

などがあるからだと思います。 つまりこの鬼ノ城の土塁には正面だけでなく、 側面にも堰板があったことが

わかると思います。

板が使われなかった可能性があります。 左下の図も同じです。大廻小廻山城では土塁の前面の柱穴が見つかっておりません。この部分の土塁には堰 ような縦方向の線はありません。さらに次の図では列石の上から前に土塁が被っていることがわかります。 これは同じ岡山県ですが、備前大廻小廻山城の土塁の図です(図16)。まず、正面からの図には鬼ノ城の

方 堰板がなくて水平の土層ができるのかという疑問もあります。実は奈良の薬師寺の東塔を掘ってい 版築模式図 す。 んに「堰板なし?」と伺うと、その可能性を述べられて がっていることに気がつきました。そこで担当の青木さ いました。そして報告書にはそのように書かれていま を見学させていただくと、基壇の両端側が少しずつ下 るときに見学に行ったことがあります。 あれだけ立派な版築なんですが、堰板がなくてもで そのとき、 土層

備中鬼ノ城(1)では正面と側面に堰板を使用し、豊これらを模式的に示したものがこの図です(図17)。

きるようです。

前御所ヶ谷神籠石(2)などでは正 面には使用しますが、 側 面 には堰板を使用せず、 最後 あ 大廻小 廻 屲

(3)では正面にも側面 これは韓 の木 にも堰板を使用しない土塁があると考えられますと言うことです。 のものですが、 この稷山蛇

鬼ノ城と同じような敷石があります 面 の堰板 の痕跡が推測されます。 国 Щ 土 娍 図 18 正 面観ですと、 (図 19)。 土層がずれている部分があります。 ここにも堰板の痕跡が見られます。 この蛇山城では前 山城でも 面 側

そして、これは一二五○年に築かれた高 麗時代 の)江華島(の 外回. りに築かれた江華中 城の土塁です (写真

図18 韓国忠清南道木川土城西側土塁 (尹武炳1984『木川土城』忠南大学校博物館)

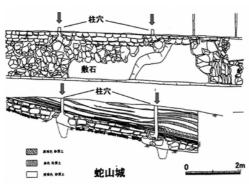


図19 韓国蛇山城 (成周鐸・車勇杰1994『稷山蛇山城跡』

城

<u>20</u> 15 も堰板を取り外しながらあげていくやり方と、そのままにしておく両方のやり方があったのかもしれませ でしょう。 とは堰板がそのまま被さっていたことを示していると思います。 実は日本の筑前鹿毛馬神籠石でも前面に一部板が残っていたという話があります。ということは、 そして正面側に堰板の痕跡がきれいに残っている痕跡です(写真16)。これだけきれいに残ると言うこ 写真のように側面の堰板が埋もれたままになっている状況がよくわかります。 つまり堰板を取り外さなかったと言うこと 次がその模式図です(図

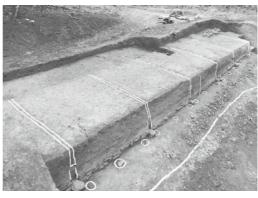


写真15 江華中城土塁(1250年築城) (中原文化財研究院2012『江華玉林里遺跡』)

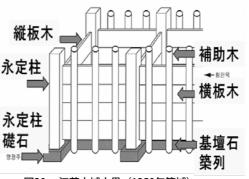


図20 江華中城土塁(1250年築城) (中原文化財研究院2012)



写真16 江華中城(1250年築城) 3地点2トレンチ外側土塁堰板痕跡 (中原文化財研究院2012)

日本で

中にお邪魔して撮らせてもらったものですが、 ております。 んですが、土塁の築き方が異なっています。 そして、百済最後の泗沘時代の王城、 これは百済漢城期の四、五世紀の王城、 これは同じく百済漢城期の王城の一つ、 写真17 風納土城東側土塁断面:版築 扶蘇山城の版築土塁です(写真19)。これは統 夢村土城の東側土塁の写真(写真18) 写真18 夢村土城東側断面 で、

扶蘇山城南門東側土塁 写真19

風納土城の城壁の断面(写真17)で、版築の痕跡がきれいに残っ 版築ではありません。つまり同じ百済漢城期の王城ではある 新羅時代のもので 発掘調査途

鞠智城・古代山城シンポジウム 2018

ん。このような視点でまたみると違ったものが見えるかもしれません。

あるという話もありますが、きれいな版築土塁です。

も見つかっています。このあたりから日本に入っているんだねって、 いって、葉っぱとか、枝とかをそのまま埋めて土塁を作る工法が採用されています。これが大宰府の水城で 石を葺いて、被せています。これは土塁外側の基礎部分の写真(写真なし)で、敷粗朶(しきそだ)工法と 積み上げた石垣があります。土塁の断面です(図なし)。裏込めの様子がわかります。こちらが裏側です。 これは泗沘羅城の東側の土塁です(**写真2)**。六世紀代のものと思われます。外側の下部に加工した石を

また注目されました。

宰府の水城でこの工法が採用されているのは、まさに水気が多いと の多いところではこのような敷粗朶工法が使用されたようです。 ようです。この土塁が築かれたところは水気が多いところで、 何枚も粗朶を入れては土を入れて、粗朶と土とを繰り返して積んだ す。ここもそうです。この上の面に、葉っぱとかが散らばっています。 のが見えますでしょうか。これは粗朶がスパッと切られた状況です。 つまり、この部分にも同じように粗朶をいれていることがわかりま 次の写真(写真なし)をよく見ていただくと、土層の中に黒いも 水気 大

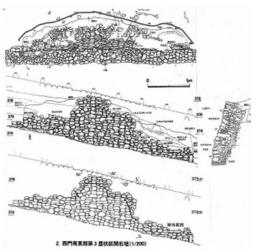


写真20 扶余泗沘東羅城(北東より)

ころだからだと思います。

れは と写真が見にくくて申し訳ないですが、 るように見えます。 このような多様性をどう捉えるかということは今後の課題です。 新羅 の梁山蓴池里土城というお城の土塁です(写真1)。 ただし、 梁山蓴池里土城(新羅)6世紀前半・城周約1000m 金東鎬1983『梁山蓴池里土城』東亜大学校博物館) これはこういう柱はちゃんとあります 版築にはなっていません。 写真22 ・金東鎬1983)

そうですが、そういう視点でもう一度日本の山城も見ていく必要があるのかなと思っています。 六世紀前半頃のものといわれています。 先ほど見ていただいた高麗時代の土塁も 日本の古墳築造時の土の入れ方に似て (写真22)。



西門南東部第3塁状区間石垣(1/200) 図21 (村上・松尾2005)

ちょ

朝鮮半島の土塁の築き方も結構多様だということです。

今

なんのお話しをしているかといいますと、

それから先ほどもお話しした修繕の話です。ここに石が立っているのをご覧いただけますか(図21中・下)。

ここから先の石垣は修繕した部分だと思っています。この上図はこの部分を上から見たところです。

規模にこうやって修繕したのではないかと思っています。鬼ノ城はほかの神籠石系山城とはちょっと違って て石を積み上げたのではないかということです。そう考えると、この高石垣は修繕したものになります。 ます。これは土塁が壊れて落ちた時の跡、つまり土砂崩れで落ちて、そこを埋める時にその穴をそのまま使っ ものではないと思っています。当初のものでしたら、普通は直線的になると思います。これは弧を描いてい いると思っています。 この赤い弧状のラインは石垣を作るときの穴といいますか、掘方です。この弧状のラインは、僕は当初の おそらく古代、 鬼ノ城が使われている時代にされたんだろうと。つまり、鬼ノ城に関してはかなり大 そ

(二) 遺物

以外に瓦も出ます。神籠石系山城では基本的に瓦は出ませんが、鬼ノ城ではごく少数出土しています。ただ、 鮮式山城では比較的遺物が出土しますが、 次に遺物のお話をします。 ゆっくりしゃべると時間がなくなってきていますので、 神籠石系山城ではほとんど出土しません。 ちょっと急ぎます。 朝鮮式山城では、 土器 朝

これらは讃岐の屋嶋城跡、 伊予の永納山城跡の遺物です。図22-1~6は屋嶋城跡のものです。当初この これはもともと鬼ノ城に使ったものかは分かりません。

3の杯身は古過ぎるように思われていましたが、
 紀に入るくらいのものだと思いますが、 とおっしゃっていますが、 それからこれは愛媛県の永納山城跡のものです(図23)。 僕はおそらく築城時のものでいいと思っています。 こういう古いものもあると思っています。 近年では築城時でもいいのかなと思われています。 7の杯身に関しましては、担当者の方は「うーん」 永納山の大多数の土器は八世 屋嶋城に関しては六六七

10cm 5 6 (高松市教育委員会2010

図22

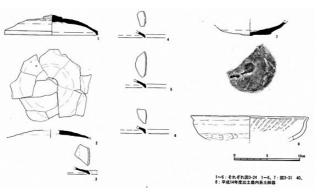


図23 伊予永納山城跡 (渡邊2012)

し問題視されます。

しかし、

嶋城を参考にして土器をみまし

すが、

永納山:

城跡に関しては少

きても、

別に問題ないと考えま

ŧ

そして八世紀のものが出

す。 たら、 ないのではないかと思っていま 鬼 ノ城に関しましては、 永納山城跡のものも問 この 題

ように城壁が全周回っています

年の築城記事がありますので、

図22-3のようなものが出 7

34

はしようがないですね。 さらに、鬼ノ城に関しましては貯水施設が見つかっています。これが土手(写真27)で、この内側が池に この写真は倉庫です(**写真26**)。傾斜地に造っていますのでやはり前面が流れやすくなっています。

考えられています。



備中鬼ノ城復元模式図(山陽新聞)

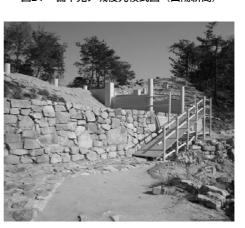


写真23 備中鬼ノ城北門(懸門)



写真24 (村上・松尾2005)

これ

棟ではないかと言われています(**写真2**)。そしてこの西端の長い建物の近くに平安時代のお堂があったと

かけて上に上がる構造になっています。城内で建物群が見つかっています。この建物はちょっと長くて管理

(図24)。このように復元もされています。これは北側の門(写真23)なんですが、懸門といって、

梯子を

写真25 鬼ノ城礎石建物(2×6間:管理棟?)



写真26 鬼ノ城礎石建物(3×3間:倉庫)



写真27 備中鬼ノ城貯水施設土手1 (金田・岡本2013)

鬼ノ城以外は対馬の金田城と先ほどの永納山だけです。何を造っているのか。武器を造っているんじゃない なっています。この池の意味は、 こに柱穴があって、どうも小さな小屋ぐらいはあったようです。このような鍛冶炉が見つかっていますのは います。このような貯水施設と考えられるものは豊前の御所ヶ谷の神籠石にも似たものがあります。 れてしまいますので、途中に池を造ることによって城壁を壊れないようにするためのものだとも考えられて このような施設がある山城はやはりきちんと城ができあがっていたんだろうなと思っています。 さらに、 これは東門の近くの鍛冶炉の一群です 飲料用の池でもあるでしょうし、 図 25 。 鉄器などを作る鍛冶炉が出てきております。 雨水が直接城壁にぶつかると、城壁が壊

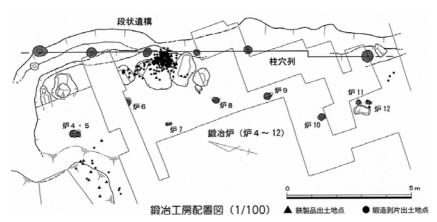


図25 (金田 岡本2013)

たり、 自分らが使うたがねを自分で鍛冶をするんです。鬼ノ城の鍛冶場 るようにし、それで石を切るんだ」と。つまり、石屋さんたちは やるんだ」とおっしゃっていました。「まず、たがねを打って使え 宴会をしたことがあります。 調査してくれ」ということで発掘したんですが、石屋さんたちと 掘調査をやったことがあります。「石切屋さんが石を採るから発掘 鉄鏃です。 もまさにそういう話でもいいのかなということです。 の方と飲んでいましたら、「俺たちは朝現場に行ったらまず鍛冶を かとよく言われていますが、 城に比べて、 次に土器です。 もう十何年も前のことですが、 修繕していたんじゃないかと考えられています。 つまり、 神籠石系山城の中では最も多いほうです。 いろいろあります。 築城時の石を加工したりする時のものを作っ 出てくるのは、 その席で、 姫路の沖の家島っていう所で発 たくさん出ました。 石屋さんのちょっとお たがねとか、 釘とか、 ほ か

年

0)

図面、

飛鳥の宮殿から出土した土器の編年表です(編年表1)。

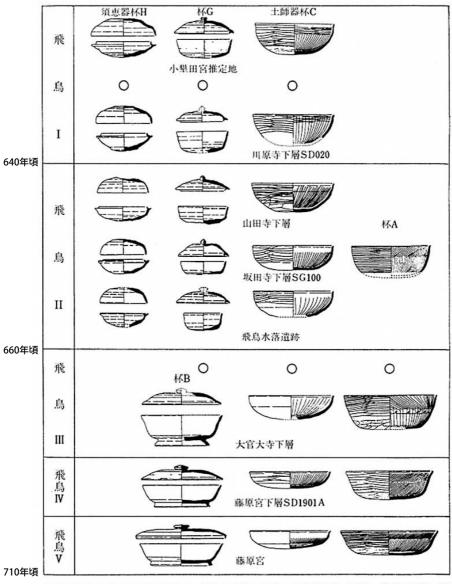
国立歴史民俗博物館の教授が昔出した本

これ

0)

林部さんといいまして、

Ш

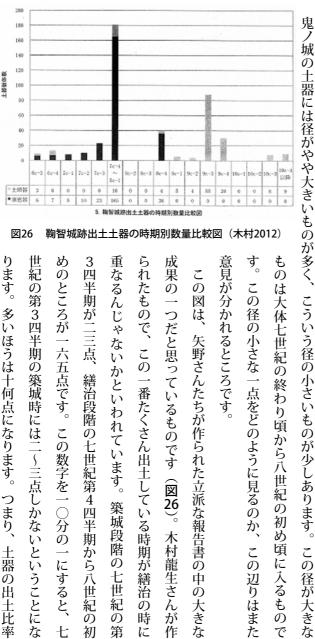


飛鳥時代を大まかに 5 時期に区分した。飛鳥 I は600~640年、飛鳥 II は640~660年、飛鳥 IIIは660~680年、飛鳥 IVは690年前後、飛鳥 V は710年前後。飛鳥 I ・ III ・ III をさらに細分したのは、伝承飛鳥板蓋宮跡で検出される宮殿遺跡の年代を明確にするためである。

編年表1 飛鳥時代土器の編年(林部2001)

です。この考え方は、 津宮に都が移ったときに飛鳥の王宮では、 この六六○年頃に空白があります。 僕は素直にいいんだろうと思っています。 その理由は、 ちょうどその時期の土器が出ない、 飛鳥を一時離れた時期、 先ほど見ました径の小さい土器はまさにこ 大津宮の時期です。 というのが林部さんの考え方 つまり、大

のあたりのものです。



す。 意見が分かれるところです。 ものは大体七世紀の終わり頃から八世紀の初め頃に入るもので この径の小さな一点をどのように見るのか、 この辺りはまた

られたもので、この一番たくさん出土している時期が繕治 成果の一つだと思っているものです (図26)。木村龍生さんが作 世紀の第3四半期の築城時には二~三点しかないということにな めのところが一六五点です。この数字を一○分の一にすると、 3四半期が二三点、 重なるんじゃないかといわれています。 この図は、矢野さんたちが作られた立派な報告書の中の大きな 繕治段階の七世紀第4四半期から八世紀の 築城段階の七世 紀 の時 0)

ります。多いほうは十何点になります。つまり、土器の出土比率 初 第 39 基調講演 古代山城の成立と変容

からいったら、 やはり築城時は数が少なく、繕治段階にたくさん使用されていたと考えられます。

です。六六七年頃の築城時のものか、六九八年の繕治段階のものか、すみませんが、今日は置いておきます。 古いものではないかと思っています。そしてこの残りのものが六四号建物の遺物です。ここでは瓦も出てお この図 そして、遺構と遺物の総合化の話です。 鞠智城跡の瓦としてよく取り上げられるものですが、この瓦をいつにするのか、すごく難しい .は鞠智城の六四号建物のものです(図27)。一番はちょっと別のものなんですが、これが築城時 あとの赤司さんのお話にも出ると思いますが、この図は赤司さん が二〇一六年に出されたものです(図28)。僕は基本的にこ 삠

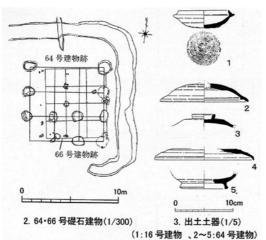


図27 肥後鞠智城跡礎石建物と出土遺

ということを確認しました。 ね」と。つまり、「使用年代はもう少し幅を持たせて結構です」 村さんの土器の年代観は作られた年代を言っているんです に電話して確認しました。何を確認したかといいますと、「木 今回の発表に関連してこの図26の年代について、木村さん 智城では六九八年の繕治の時に瓦を使ったのか、

す。これは大野城と鞠智城の建物の流れを合わせたものです。

れに同意していますので、

そのまま使わせてもらっていま

かったのかということはやはり大きなポイントかなと思って

使わ

な

0)

建物に伴っていたと考えています。 今後どうなるか次第ですが、 物がよく分かっていません。 ものは僕が ある山城は大野城、 まとめの話をします。 瓦も出土しており、 たことは動かないだろうと思います。 も礎石建物周 の軒丸瓦は少なくともこの建物から出ています。 のお手伝いに行き、 査で瓦が出 い きす。 次に遺構 一方で基肄城に関しましては、 少なくとも基 佐賀 土してい 遺物 辺でい 部関 誤の 基 わったものです。その左の四分の一の 基肄城、 肄城 、ます。 記 土器も新しいものが出土しています。 拓本や図面を採りました。 わゆる百済系単弁軒丸瓦が出ております 肄 城 城 録が語るものということで、 に関 の話 内に遺構があって、 ちょうど僕が大学院 金 調査がまだ十分進んでない ひとまずは基肄城 しては礎 ですが、 \mathbf{H} 城 礎石建物以外の掘立 基肄城では奈良時 礎石建物第 鞠智城で、これに僕は 石建物に 遺物がたくさん では 瓦が このあた 生 これ以外に 0 9 これらの 瓦は 地点 使 時 崩 で、 ざれ 破片 柱 代 ŋ 0) 0)



図28 大野城・鞠智城建物群の変遷案(赤司善彦2016)

鮮式山城と、 これは神籠石系のものに多いんじゃないかと考えています。これらを併せますと、 かと思います。遺構がなくて遺物もほとんど出ない山城が神籠石系のもので未完成であったんじゃないか。 記録はありませんが、プラス鬼ノ城、これらは大多数の神籠石系の山城は違うのではないかと 北部九州の記録のある朝

四 古代山城の成立と変容

いうお話です。

(一) 古代山城の成立

六六〇年の百済滅亡、六六三年の白村江の戦いの前に築かれた古代山城

天皇二年の六五六年の是歳条の「宮の東の山に石を累ねて垣となす」という記録があります。石垣を造った 村江の戦い以前にあったのかという話です。これも以前からいわれていることですが、『日本書紀』の斉明 んだ。これは酒船石遺跡ではないか、という明日香村の報告書が出ています。 さて、ここからが本来の総論のお話です。まず、古代山城はいつできたのかということで、六六三年の白

はないかとおっしゃっています。これにつきましても意見が分かれています。 それから、 渡辺正気先生が六五八年是歳条の『日本書紀』の中の記録を取り上げて、 これが神籠石なので

遺構として、酒船石遺跡をどう捉えるかですが、少なくとも場所としては板蓋宮、 後飛鳥岡本宮の東の山

地震で倒れたんだろうといわれています。それを修繕して、積み直したものがこちらです。 の上にありますので、そういう意味ではおかしくありません。左側の写真が発掘した時のものです。 これは

うお話です。 が、 狂心の渠のお話というのは、斉明天皇が、大規模土木工事ばかりしてだめだという話の中に出てくる話です 砂岩が先ほどの斉明天皇が関わる「狂心(たぶれごころ)の渠」に関わるのではないかと考えられています。 下に花崗岩の石材を並べ、その上に、砂岩、奈良県天理市の砂岩で作った方形の石を積んでいます。この その中の一つに、まさに天理の石上山から石を運んできた話があります。この石がそれではないかとい

年より前にあった可能性、少なくとも明日香村の出土土器の編年をそのまま信用するならば、先ほどの記録 と別にして、 僕はこの酒船石遺跡関連の話は、一応可能性はあると思っています。これを山城と呼ぶかどうかはちょっ 山城状のものであるのは間違いないと僕は思っています。ですから、それらしきものが六六三

に関連する可能性は無視できないと思っています。

という論争が続いています。朝鮮式山城より古いんだ、新しいんだ、一部重なっているんだという論争が続 築城記事があります。このあとは繕治や修繕の記事になっていきます。そして神籠石系山城の築城はいつか いませんが、 次に六六三年以降についてです。ここからが本番です。六六四年の水城、 六六五年の大野城、 基肄城、六六七年の高安城、 屋嶋城、 金田城。ここまでは六六七年以前 それから長門は場所が分かって

いています。さらに瀬戸内系のものに関して、北部九州系のものとは、やはり違うんじゃないか、区別すべ

神籠石系山城はいつ築かれた?

てはいろいろ考えられますが、 れている土城です。 神 籠 "石系山" |城の 朝鮮半島における類例として、 このお城では百済の瓦が出ます。 この城壁の造り方、 昔から気になっていた山城があります。 Щ それ以降の瓦も出ます。ですので、 . の 斜 面をカットして石を置いて土を入れるというやり 益山猪-年代観に関しま 土城と呼ば

方は

日本の神籠石の土塁と似ています。

この写真の

世紀の前半段階で良いと思います。
考えています。これが百済時代のものでよければ、七良いと思います。発掘担当者は当然百済時代のものと追当初のものであるならば、これは百済時代の土城で分、場所によってちょっと違いますが、この部分が築

道との関係はとても重要だと思っていますという図でこの図29は、おもな流れからは外れるんですが、官

す。

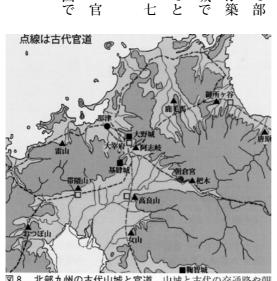


図8 北部九州の古代山城と官道。山城と古代の交通路や朝 倉宮、大宰府との密接な関係がわかる。「九州国立博物館 日韓の古代山城を掘る」2006を改変。

図29 古代山城と官道(九国博2006)

(二) 古代山城の終焉とその変容

古代山城の停廃記事

ると思います。記録でも考古学的資料でもだいたいそういう年代観です。当然ちょっとずれもありますが。 停止します。ということで、少なくとも八世紀の初め頃には、これらの山城はやめるということになってい 七〇一年の高安城の廃城。それから烽、のろしを七一二年にやめる。そして七一九年に備後の茨城・常城を その中で宗教的施設を作るものがあります。大野城では、新羅が悪いことをしているので懲らしめるといっ ようやく古代山城の終焉とその変容という話にたどり着きました。まずやめるお話です。大宝元年、 四天王の塑像を四体造るという話が出てきます。これは七七四年です。その後、八〇一年に大野山寺の

とあります。このようなことが八世紀の後半から九世紀の初めの頃に大野城の中で起こっています。 といって戻したという話があります。そしてこの時に「大野城の鼓峰に堂宇を建てて四天王像を安置する」 四天王像を筑前金光明寺(筑前国分寺)に下ろします。そうしましたら疫病が流行ったので、よくないから

す。 器が出ています。これに関して小田先生は、よそから持ってきたのではないかということもおっしゃって それから、 何年前かに基肄城にお邪魔して、基山町の田中さんにご案内いただき、基肄城の近くに古いお寺さんと それも当然あり得ますが、素直に、基肄城の中に山寺があっても構わないのではないかと思っていま 基肄城に関しましても八世紀の後半、先ほど見ていただきましたが、「山寺」と書いた墨書土

かお宮さんはないですかっていいましたら、連れて行ってくださったのが荒穂神社です。基肄城の南側約

キロ とするという記録がきちんとあります。 もしかしたら小さなほこらのようなものがあったかもしれませんね。 番高い所の近くに、もともとあったんだということをおっしゃっていました。ですから、 の所にあります。 『日本三代実録』 の貞観二年、八六○年のところに、 そして基肄城に登った時に教えていただいたんですが、 従五位上の荒穂天神を正五位 基肄城の山頂部に あそこの

少なくともお宮さん関係はこのように記録が残っています。 の神ですね。それぞれ従五位下、従四位下の位をもらっています。 それから、 高良山は、 高良大社の話ですよね。それから、 周防の石城山も有名な話です。 石城の神のほうが、ランクが高いですね 高良の神、 石城



写真28 荒穂神社(『延喜式』式内社:860年)



写真29 石城神社(『延喜式』式内社:867年)

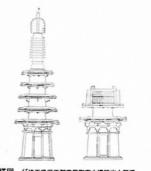


写真30 屋島寺

◎瓦塔

瓦塔とは焼き物で作った仏塔で、本来木造建築である三重塔 や五重塔の代替えとして、仏教信仰の対象として作られたもの。 従来平安時代のものが多く知られているが、最近では7~8世 紀のものも知られる。今回の出土は、城内で仏教信仰のシンボ ルとして用いられたものと考えられ、文献に残る他の山城同様、 築城に百済人が関わり、彼らの信仰の象徴としてもたらされた可 能性も指摘されている。





寺さんはどうもありそうだと思われます。

その関係は分かりません。少なくとも古いお

弘法大師との関係でよくいわれていますが、







図30 備中鬼ノ城・瓦塔(岡山県立博物館2010)

だと思います。それから、

これが石城神社

で

(写真29)。これはかなり昔に撮った写真で

穂神社です(写真28)。

上に見える山が基肄

城

これは基肄城の麓の

『延喜式』

式内社

の荒

すが、

こんな感じで厳かな感じで残っていま

した。これは屋島寺です(写真30)。現在、

のですが、関東で瓦塔を研究されている池田 30)。この瓦塔に関しては、年代決定は難 た中でこのような瓦塔が見つかりました 島の観光の中心の一つになっています。 鬼 城に関しましては、 発掘調査をしま

図

せんが、土器は九世紀頃のものが出てきます。 屋島に関しましては正確 に は分かってい

屋

の穴から隆平永寶が出ています。 管理棟と推測している礎石建物の横で、 難しいところですが、 敏宏さんからこの造り方だったら関東では八世紀まで上るよと伺いました。それでこれをどう理解するかは ひとまずこういう仏教関連遺物があったことがわかります。それと先ほど述べました 最初に鋳造されたのが七九六年ですので、それよりあとなんでしょうが、 平安時代前期の仏堂と想定される遺構が見つかりました。そこの柱

平安時代前期ぐらいの仏堂があったのは間違いないと思われます。

ているものがありますが、その近辺になります。 この時期には新山寺はあるんだろうと考えられます。 でしたか、そういう記録があって、この人が中国に行く時にここで修行をしたという話です。 行って修行をしたという場所がここだろうといわれています。これは国文学の世界で、『成尋阿闍梨母集 その後、鬼ノ城の近くには新山寺というお寺が出てきます。一〇七一年に成尋阿闍梨が備中国新山別所に 現在、 鬼ノ城の入り口近くに、大きな鬼の釜といわれ ということで、

以上が、古代山城が宗教的施設に変わった、または古代山城のなかに宗教的施設ができた例です。

古代山城の変容-使用され続けた古代山城-

うことを示していると僕は思っています。継続的に、七世紀後半の瓦、八世紀前半の軒先瓦がでる山城は大 は八世紀前半以降の軒先瓦があると年代が分かりやすいんですが、 次に、 古代山城が八世紀以降も使用された、 大野城、 基肄城、 鞠智城についてお話しします。 軒先瓦を使うということは格が高 考古学的に

野城と基肄城です。

れていますねということになります。それから、そのあと、『続日本紀』 中に大野城の修理というのがあるよと書かれています。ですから、この時期、 たように、いろいろな記録が大野城にはありますが、天長三(八二六)年の太政官符の中で、 あとで赤司さんのお話に出ると思いますが、 礎石建物の倉庫群との関連も出てきます。 の八四〇年の条に、 大野城はきちんと維持管理 先ほども言いまし 大野城の管理 衛卒の仕 事の を

年の記録が大野城に関する最後の記録で、 者の一人である大主城一員を廃したと書かれています。 考古学資料も大体この辺で その後八七六

終わるといわれています。

が阿志岐山城跡近くです。大野城の中にはこのような掘立柱建物と礎 として使用されたと考えられています。 入る頃に礎石建物に変わり、 石建物が見つかっています。 ね。これが水城で、これが基肄城で、そして最近土塁が見つかったの 大野城に関しましては、皆さんよくご存じのとおり、この場所です その後ずっと礎石建物が倉庫群や管理棟 大体七世紀代は掘立柱建物で、 八世紀に

が頑張って、 大野城に関しましては、何年前でしたか、大雨で壊れた時に若い方 危ない崖の所などで発掘をしていました。その時の成果

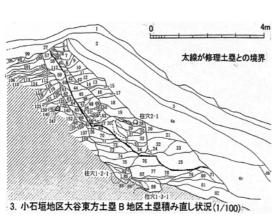


図31 小石垣地区大谷東方土塁積み直し状況(入佐・小澤2010)

す。 の一つなんですが、この太い線の外側は明らかに修繕ですと報告書に載って いました つまり、 図 31 。 土塁の積み直しをやっているだろうということです。 これを見ると何度か修繕しているんだろうなと思わ れ

ま

ています。 八世紀の前半まで下がりますと、瓦は大宰府政庁の造営と連動すると言われ に2、そして3が六九○年代から七○○年代の初めぐらいとされています。 を出されています(図32)。ひとまずこの左端のものを築城期と考えて、 るという話になるという資料です。 瓦に関しましては、 さきほど読みましたように大野城も八世紀前半にきちん動いてい 最近、 小田富士雄先生がまとめられて、細かな年代観 次

では継続して使用されているんだろうと思います。 して、 あることになります。 田先生が七世紀後半とされている瓦です(図33 4 それから、 がセットで使用されていまして、最低でも七世紀末には礎石建物群が 先ほど言いました八世紀後半の 基肄城に関しましても、百済系単弁軒丸瓦が出ています。 そのあとに八世紀前半の老司系の瓦 「山寺」土器 -1·2)。重弧文軒平瓦 (3)、そして九世紀ま (3) も出ていま 小

それから『万葉集』の左注といいまして、ちょっと横に書いてある文章の

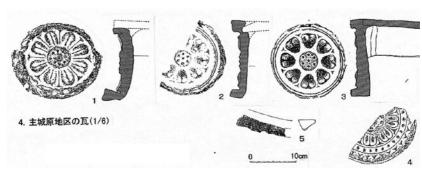


図32 大野城跡7世紀後半の瓦(横田・芳沢1979)

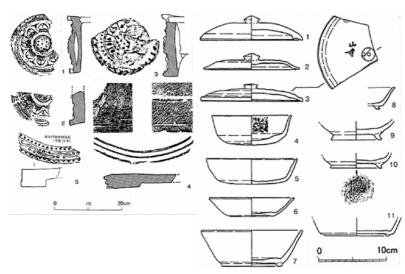


図33 基肄城跡の瓦と土器(7世紀後半~9世紀初)(小田2011)

最後、

鞠智城です。

七世紀の後半から八世紀初めのところ

み゛でしょうか。田中朝臣さんって人が動かしたっていう話平年間の土層から木簡が出ています。それに基肄城の稲゛も

中に

「記夷城」

っていう名前が出てきます。

これは七二八

です。さらに、

大宰府の前面

の政庁に関連するところで、

天

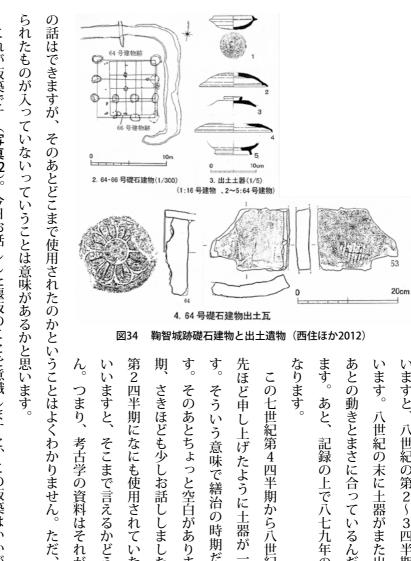
です。が出てきます。左が木簡です。右がさきほどお話しした軒瓦

瓦も同様で、七世紀から八世紀のものがあります。す。あと、これらの土器は九世紀ぐらいの可能性があります。これはだいたい八世紀後半のものと考えて問題ないと思いまこの図面3が先ほどお話しした「山寺」の墨書土器です。

と性格が変わるのかなと思っています。土器に関しましては平瓦と丸瓦がありますが、軒先瓦は出てきません。ちょっ34)。八世紀中頃はちょっと空白があって、八世紀末に今度に、軒丸瓦が入っていることにちょっと注目してください(図

Ł

先ほど言いましたように、木村さんがやった編年観でい



鞠智城跡礎石建物と出土遺物 (西住ほか2012)

先ほど申し上げたように土器が一番多い

時

期

で

この七世紀第4四半期から八世紀第1四半期が

す。

そういう意味で繕治の時期だと思っ

7

い

ま

ます。

あと、

記録の上で八七九年の記録が最後に

あとの動きとまさに合っているんだろうなと思

い

、ます。

八世紀の末に土器がまた出てきて、

この

いますと、

八世紀の第2~3四半期の所が抜けて

なります。

図34 ٨ 第2四半期になにも使用されていなかったのかと 期 す。 いいますと、そこまで言えるかどうか分かりませ つまり、考古学の資料はそれが作られ さきほども少しお話ししましたが、八世紀の そのあとちょっと空白があります。 この空白 た時 期

これが版築です(**写真3**)。今日お話しした堰板のことを意識しますと、この版築はいかがでしょうか。

その時期に作

ちょっと気なりますね。そういう中央で少し沈んでいる感じが

いただくと、何か違って見えてくこういう部分を意識して調査してこかでもう一度調査される時に、

るのかなっていう気はします。

それからこの池はすごく大事だ

調査されるならば、この中を掘っと思います(写真31)。今後もし

います。「秦人」の話もそうですいた木簡を出してほしいと思っててほしいです。そして、年号を書

仏像もそうなんですが、やはり貯水施設は、

いろんなものが入りやすい場所になります。



写真31 鞠智城跡貯水施設と「秦人」木簡・百済系菩薩立像 (熊本県教育委員会1999『グラフよみがえる鞠智城』)(岡山県2010)



写真32 肥後鞠智城跡版築(古代山城サミット実行委員会2010)

五・ おわりに

「おわりに」です。皆さんもうお分かりのことだと思いますが、 日本列島の古代山城は六六〇年の百済滅

鞠智城・古代山城シンポジウム 2018

代は七世紀の後半を中心とする年代ですが、その前後関係、 違いであるとか、建物の有無、 籠石系山城に関しましては、 基本的に同じ古代山城ですが、 遺物の多寡、そして完成・未完成などでもやっぱり多少違いがある。 重なりの関係は今のところ僕も整理できていま 記録の有無、それだけでなくて、 土塁の列石 築城年

せん。

す。 だいた時に、下のお宮さんに連れて行ってもらいました。 そして宗教的施設に変わっていく。大野城もそうですが、 と思っています。これら三つの城は大きい意味では一緒なんですが、細かく見ると違う可能性があります。 築城目的はヤマト政権による対外防御が第一義だと思います。そのあと変わっていく部分も当然ありま 特に八世紀の初頭に止まって、その後、大野城・基肄城、そして鞠智城はちょっと様相が変わるのかな 細かな時期はわかりませんが、鞠智城にもお宮さ 鞠智城に関しても、これも矢野さんにご案内いた

んあるんだなと思いました。

一一時四九分になりました。ご静聴、どうもありがとうございました。

〈おもな引用・参考文献〉

- 赤司善彦 二〇一六 「鞠智城の建物景観の推移」『海と山と里の考古学』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会
- 明日香村教育委員会 二〇〇六
- 『酒船石遺跡発掘調査報告書
- 井上裕弘・宮小路賀宏 一九八四 『鹿毛馬神籠石』頴田町教育委員会

『特別史跡大野城跡整備事業V』福岡県教育委員会

岡田博・亀山行雄 二〇〇六 『国指定史跡鬼城山』 岡山県教育委員会

入佐友一郎・小澤佳憲編 二〇一〇

- 岡山県立博物館 二〇一〇 『鬼ノ城―謎の古代山城―』
- 小川秀樹 二〇〇六 『史跡御所ヶ谷神籠石I』行橋市教育委員会
- 小田富士雄編 一九八三 『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書一〇、 名著出版
- 小田富士雄編 一九八五 『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書一三、名著出版
- 小田富士雄 「基肄城跡」『基山町史』資料編、 基山町史編さん委員会
- 小野忠凞 一九八三 「石城山神籠石」小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』 名著出版
- 加藤史郎 一九九五 「播磨・城山」『古代文化』四七-一一、古代学協会
- 金田善敬・岡本泰典編 二〇一三 『史跡鬼城山 2』岡山県教育委員会
- 亀田修一 二 〇 四 「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編 『鞠智城跡Ⅱ-論考編一』
- 亀 **"田修一** 現状』 <u>二</u> 〇 五 一平成二七年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第二八回研修会発表要旨集、 「古代山城を考える―遺構と遺物-岡山県古代吉備文化財センター編 『古代山城と城柵調査 全国公立埋蔵文化財

センター連絡協議会

- 亀田修一 二〇一八 と課題Ⅱ』大韓民国ウリ文化財研究院 a「日本列島古代山城土塁に関する覚書-版築・堰板について-」『水利・土木考古学の現状
- 亀田修一 二〇一八 b「繕治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究(大宰府史跡発 掘調査五〇周年記念論文集)』 高志書院
- 木村龍生 二○一二 「第Ⅵ章 第一節(一)鞠智城跡出土の土器について」『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 木村龍生編 二〇一五 園鞠智城・温故創生館 『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』熊本県立装飾古墳館分館歴史公
- 九州歷史資料館 一九九八 『大宰府復元』
- 草場啓一編 草場啓一編 二○一一 『阿志岐城跡Ⅱ-阿志岐城跡確認調査報告書総括編』 二〇〇八 『阿志岐城跡―阿志岐城跡確認調査報告書 (旧称 宮地岳古代山城跡)』筑紫野市教育委員会 筑紫野市教育委員会
- 古代山城研究会 一九九六 「讃岐城山城跡の研究」 『溝漊』 六

古代山城サミット実行委員会 二〇一〇 『古代山城サミット展示会

あつまれ!!古代山城

- 猿渡真弓 二〇一三 『女山神籠石』みやま市教育委員会
- 末永浩一 110011 『唐原神籠石Ⅰ』大平村教育委員会
- 末永浩一 二〇〇五 『唐原山城跡Ⅱ』大平村教育委員会
- 鈴木拓也 二〇一一 「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』二六、条里制・古代都市研究会
- 須原緑 一九九八 『国指定史跡鹿毛馬神籠石』頴田町教育委員会
- 総社市教育委員会 二〇〇五・二〇一二 『古代山城鬼ノ城-展示ガイド-』

田平徳栄 九八三 「基肄城考」九州歴史資料館編 『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』 上 吉川

出宮徳尚・乗岡実 一九八九 『大廻小廻山城跡発掘調査報告』 岡山市教育委員会

西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 二○一二 『鞠智城跡Ⅱ-鞠智城跡第八~三二次調査報告-』熊本県教育委員会

松尾洋平・谷山雅彦 二〇〇六 『古代山城鬼ノ城 2』総社市教育委員会

二 〇 八 「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』 四三、九州歴史資料館

松川博

向井一雄 一九九九 「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』二七、 地域相研究会

向井一雄 a「古代山城研究の最前線— 近年の調査成果からみた新古代山城像-」『季刊邪馬台国』

〇 五

向井一雄

二〇二六

『よみがえる古代山城―

向井一雄 b「駅路からみた山城―見せる山城論序説―」『月刊地図中心』四五三、(財) 日本地図センター

「国際戦争と防衛ライン−』歴史文化ライブラリー四四○、

吉川弘文館

村上幸雄 一九九八 「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」総社市教育委員会 『総社市埋蔵文化財調査年報』八

村上幸雄・松尾洋平 二〇〇五 『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会

山元敏裕編 二〇〇三 『史跡天然記念物屋島』高松市教育委員会

山元敏裕編

二〇〇八

『屋嶋城跡Ⅱ』高松市教育委員会

横田義章 一九九一 『特別史跡大野城跡Ⅷ』 福岡県教育委員会

横田義章・芳沢要 九七九 『特別史跡大野城跡Ⅲ』 福岡県教育委員会

渡辺正気

一九八三 「神籠石の築造年代」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻、 吉川弘文館 57

渡邊芳貴 二○一二 『史跡永納山城跡Ⅱ』西条市教育委員会渡邊芳貴・半沢直也 二○○五 『永納山城跡』西条市教育委員会

渡邊誠 二〇一八 「古代山城築城とその後」考古学研究会岡山例会シンポジウム資料

七世紀後半の国際関係と古代山城

講演者紹介

学。早稲田大学第一文学部助手、国立歴史民俗博物館助教授を経て、現在、 歴史民俗博物館教授、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任。専門は日本 早稲田大学第一文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退 敦史(にとう あつし)

古代史。博士(文学)。

国立

講演①「七世紀後半の国際関係と古代山城」

国立歴史民俗博物館教授 仁藤 敦史

ます。ただいまご紹介いただきました、国立歴史民俗博物館の仁藤と申します。よろしくお願いします。 こんにちは。昼休み明けの少し眠たい時間ですけれども、四○分間お時間を借りてお話をさせていただき

私はこれまで山城そのものについての論考は発表はしてきませんでしたが、周辺を巡る外的条件といいま サマーセミナー、そこで発表させていただいたのが、山城について考える契機 すか、外交と行政については、レジュメ等に書きましたものをいくつか発表し ております。最初のきっかけになりましたのは二○○五年の高安城での古代史



【はじめに】

要素となります外的条件、これについてお話をしたいと思います。 二人控えている専門の先生にお任せしまして、私は築造とか維持管理に大きな 本報告では、こうした議論を前提にして、古代の山城そのものの検討は、 お

~22頁あたりにまとめておりますので、最後時間がなければそこを見ていただければと思います。 お話をしたかったのは、なぜ山城体制が八世紀の初頭まで続いていたのかという疑問を自分なりに考えてみ 私のレジュメは13~2ページにわたるところになります。結論的なところは18ページ、ないしは末尾の21 一番今回

【白村江後の倭国の立場】

たいというところあります。

うに中国からの使者を侵攻軍と誤解するような緊張状態がある。筑紫の防人が唐の使者を侵攻軍と誤解する のではないかと思います。高安城に塩や穀を集積した記事が、前後にあったり、さらには百済の兵法を導入 ところなどと表現されてるような、倭国への侵攻の現実的可能性が、天智朝末期までは少なくとも存在した がかなり後まで存続したと考えられます。レジュメに書きましたように、倭国を征伐するとか、 してるとか、あるいは、17ページに資料を載せておきましたが、「彼の防人、驚駭みて射戦わん」とあるよ 白村江の敗戦後の倭国の状況として、唐の軍隊が旧百済領に駐留しており、 倭国に攻めてくる可能 唐人が図る

七世紀後半の国際関係と古代山城

り、 方行政官によって造営・管理されていたと考えられます。天智朝の当時においては大宰と呼ばれる役所があ 高安城は、 その下に国宰と呼ばれる国司、そしてその下に評-五十戸という体制をかなり急速に作り上げようとし 大和・河内を単位とし、総領といわれる一国を超えたかなり広域を担当する地

ような緊迫した状況が存在しました。

畿内あるいは、

みやつこ)から編成された軍隊から、 行政単位と山城の整備が連動していると思います。 ていました。 六○余州という国の上に、 唐の律令に基づいた軍団兵士制への転換が急速に進められていたと考 さらに大きな単位があったのではないかと考えられます。その広域 白村江の敗戦以降、 国造軍と呼ばれる古い国造(くに

えられます。

津の宮に進軍するまで一カ月かかっています。 るいは動員体制が整備されたということの証拠ではないかと思います。 よ数年かかっています。 いうことになっていて、 端的な証拠としては、 この時間の短縮というものは、この間に大幅に軍団兵士制的なものが整備され、 ところが、皆さんご存じの壬申の乱、 白村江の戦いでの軍事動員は準備から渡海するまで、 兵を集めるまでにほぼ半月、 これは大海人皇子が吉野から出て、そして大 そしてもう半月で決戦に及ぶと いろいろに事情があったにせ あ

あって、白村江以後はこういう防衛体制ないしは内政の整備に努めていた状況が見て取れ てますし、もともと都があった倭京という所には留守司が置かれて、そこには兵庫が置かれたという記載 **この時期には古代の山城造営だけでなく近江に遷都しています。これも防衛的な側面が指摘され** にます。

との和睦を強要し、 る懐柔策を取りつつも、唐は百済・新羅に対して中国的な州県制の整備を進めます。 は新羅と唐との戦争が開始されます。 立点になったわけですが、共通の敵である対高句麗戦の終了までは、この対立点は必ずしも顕在化しません 海外関係に目を転じるならば、 新羅による百済併呑は認めませんでした。このことが後に唐と新羅との大きな論争・対 唐 13~14ページにあります年表を見ていただくと、現地勢力の登用によ 新羅は百済の滅亡後、 高句麗征討に集中しますが、 新羅に対しては旧 高句麗滅亡の後に 旨済

5 ちに肩入れをするかについて明確な意思表示していません。通説では協調外交とか全方位外交とも評される や百済勢力も含めて、唐や新羅から外交使節団が頻繁に倭国にやって来ますが、倭国は必ずしも明瞭な、どっ ではないかと思います。唐と新羅の抗争を背景に、天智期には倭国に対する取り込み政策として、旧高句麗 の対立抗争は、天智朝を超えて、天武朝の初期まで及んでいることが、倭国の防衛体制を考える場合に重要 でした。高句麗戦の趨勢が決したあと、 わけですが、 新羅による対唐戦争が発生します。この対立は唐が朝鮮の征服を断念する六七七年まで継続します。 私は、 倭国内部には異なる外交路線の対立が存在したのではないかと思います。以下、 旧高句麗や旧百済の残存勢力をそれぞれ自己の勢力に抱き込みなが 具体的 そ

の遣唐使が考えられ、 六六六年の遣唐使が「封禅の儀」へ参列するというのが一つのチャンスでしたし、六七○年に高句麗が滅亡 とに大きな異論はないと思います。 のはいつからかということがまずは問題になるわけですが、新羅とは高句麗滅亡後の六六八年以降とするこ に見て行きたいと思います。 した時にそれをことほぐ使いが行っているというのが二度目のチャンスでした。最終的には七○一年の大宝 つなのかという問題です。倭国・唐と新羅との国交回復時期を検討すると、新羅使や遣新羅使が行き来する まず、山城体制の維持と関連する重要な論点としてここでお話ししたいのは、唐との正式な国交回復はい この三回が倭国から主体的に中国と関係修復できる機会であったと考えられます。 ただ、 中国と最終的にいつ講和したのかという問題を考える場合は

ただ、六六六年の「封禅の儀」への参加、これは白村江の捕虜と留学生による参列と考えられ、おそらく

なくとも壬申の乱以降、外交方針が新羅寄りに変わりますから、その点で一時的なものの可能性があると思 北したことからすれば、唐と仲良くしようとするのはあくまで一時的な和平であった可能性があります。 中臣鎌足とか、天智天皇らは、それほど影響力を及ぼせない時期でした。このあと大友皇子は壬申の乱で敗 乱の直前でして、大友皇子がメインの時期でありました。近江朝廷の中心は大友皇子で、大海人皇子とか います。結局、大宝の遣唐使というのが、 以後も連続する正式な和平ではないか。これが山城体制の転換と

【天智期の外交】

密接に関連するというのが、前半の大きな結論です。

者であることを口実にして追い返しております。すなわちこの段階には、 ですが、倭国のほうが難癖をつけて、これは天子の直接の使いではなく、百済へ派遣された将軍の私的な使 した書物によると、天智三年にやって来た唐の使いですが、唐は高句麗征討に先立ち、戦後処理を考えたの それでは以下、天智期の外交を資料に則して見ていきますが、『善隣国宝記』と呼ばれる中世に作られま 唐使に対して積極的な国交回復の

入京させています。ただし、宇治の道では閲兵があったという記載がありますように、おそらく、これは唐 翌年には、 前年にいちゃもんをつけられたので、今度は天子の正式な使者が来たということで、 大津京に 意思がなかったと考えられます。

正式の使者ではないと思います。さらに二度目の高句麗平定の賀使についても、この時期はちょうど壬申の

大友皇子の人相を見たという記載もあって、唐使と大友皇子の間には交流があった可能性が指摘できます。 への示威行動であって、必ずしも熱烈歓迎ではなかったと思われます。この時、『懐風藻』 には唐の使いが

見られます。 遣唐使と評価されていますが、しかし、よくよく見ますと、本文を注で補っているように記載にやや混乱が 位階も、 小錦・小山・大乙など、中途半端な位階の記載となっており、混乱した記載になって

天智四年、守君大石と坂合部連石積らを唐に遣わすという記載があります。通説ではこの記載が第五次の

この時の唐からの使者ですが、翌年の「封禅の会」に参加するための使者と通説的にはいわれていますが、 帰国は一二月と書いてありますので、翌年の「封禅の会」には時間的に間に合わないということが指

います。

す。その根拠としては、この守君大石という人は元百済救援の将軍で、帰国記事がありません。小錦という る使い、あるいは百済からの捕虜の使いというような議論が提起されていて、その説が首肯されると思いま 摘されております。遣唐使、すなわち国交回復の全権大使というふうにはちょっと考えづらくて、唐人を送

七世紀後半の国際関係と古代山城

天智四年に唐へ送られた使節のうち、 坂合部連石積のみが天智六年に帰っていますが、 守君大石の名前は

唐の捕虜であったのではないかと考えられています。

曖昧な位階表記からも、

ら天智六年まで唐にいたと考えられます。このように『日本書紀』の記載は混乱があると言わざるを得ませ 記載がありません。渡唐した白雉四年以後に帰ってきたという記載がないことからすれば、 彼は白雉四年か

ん。実際は、最後の二人、吉士と書いてある二人が行ったのではないかと思いますが、次に見える天智五年

発の場所を見ますと、東都から出発して倭国、新羅、百済、 天智五年になりますと、『冊府元亀』と『旧唐書』に記載が見えます。天智五年の正月には、 高句麗等の諸蕃酋長がそれに従ったとあります。 国名とか出

耽羅 東都から出発したと書いてあるんですが、もう一つの『旧唐書』のほうは、 倭国の四国の酋長を連れて来たと書いてあって、微妙に内容が違っています。すなわち、 劉仁軌という人が、 新羅·百 いずれも同

じような内容ですが、

耽羅と高句麗について記載に違いがあります。

と考えられます。従って、この時の使者は、倭国と唐との戦争で捕虜になった人々や留学生らを、唐は正 先ほど出てきました坂合部連石積が東都にいて、彼らを倭国酋長として封禅に参加させて、その後帰 ンにしているものと高句麗をメインにしている資料の二系統があることから、 な使者に仕立て上げたと解釈できます。天智三年以降、 ループと、仁軌が連れて来たグループは別グループの可能性があるのではないかと考えられます。留学生 白村江 考えにくいのではないかと思います。同じような資料がいくつか存在しているのですが、 の戦いの時にも耽羅は関係したことは記載がありますし、 消極的対応から積極的対応に外交方針が転換された おそらく一〇月二九日に東都を出たグ このように考えられます。 耽羅をメイ 加国した

携をすることを阻止する使者として倭国にやって来ます。この時の記載には、

「筑紫都督府」という見慣れ

高句麗と日本が裏で連

前年からの高句麗征討に関係していた百済の鎮将劉仁願が、

次に、天武六年には、

66

間で帰っています。筑紫の大宰府独自の判断により冷淡な対応がなされているのではないかと思います。 がなされたのであり、 づける意図があったと考えられます。都督府同士が対等に外交しているという意味で、 ない名前があり、 これは百済の鎮将が派遣した熊津都督府からの使者と対等な存在として筑紫都督府を位 同等・同格の対外的表記として使われたと推測されます。なお、 この時の使者は あえてこういう記載 四 日 置

というものを倭国は中国の懐柔的な意図とは別に脅威として認識している。外交記事と山城の整備というの に防衛拠点を作っております。 は高句麗から実際に救援要請の使者も来ておりますので、 いたのではないかと考えられます。反対に倭国も、 『日本書紀』には、 白村江の戦いにおいて高句麗が倭国に救援兵を求めたという先例があります。 警戒態勢を維持しているということが言えるわけで、 高安城をはじめとする築城記事があるように、 唐は倭国が高句麗に援軍を送った先例を警戒して 対高句麗戦の兵力集結 天智六年 前年に

の協調連携という働きかけを開始するもので、 亡が確実になってきますが、 との外交が再開されます。 は連動している可能性があるのではないかと思います。 る前提として、 天智七年になりますと、新羅使と遣新羅使が見えます。すなわち行く使者と帰ってくる使者ですが、 高句麗の滅亡後における、 御調船を送り和平を受け入れ、 今回の使者は半島の主導権を狙う新羅の思惑により、 唐・新羅による倭国侵攻への恐怖感を緩和するため、 唐に対しては対立的に動くという反唐的立場を両国は共通点 朝貢を求めています。九月一二日には高句 新羅が唐と戦争を開始す 新羅と倭国 麗 新羅 の滅

として持とうとしていたことになります。

な政策への反対論も根強くあったと推測されます。こういう方向に一○○%政府内が一致していたわけでは ります。 しかしながら、新羅使に対する厚遇は『家伝』によると、ある人がこれを諫めたとの注目すべき記載があ すなわち、この時期におそらく外交主導したであろう中臣鎌足とか大海人皇子の親新羅的・反唐的

是歳条というかたちで出てきて、日時が不明な、 れているものです。ただし、郭務悰の記事は、重複だろうといわれております。天智期の外交記事の多くは 次に天智八年になりますと、河内鯨らを唐に遣わす記事があります。通説では第六次遣唐使として評価さ

かなり不正確なものです。

唐と新羅のどちらを支持するかという外交的な対立が存在したことがわかります。

ですが、天智一○年には「唐人の計るところ」ともあるように、前年からの倭国征討の準備を示すのではな いかと考えられます。 『三国史記』を見ますと「国家」、これは唐のことですが、「船舶を修理して、外には倭国を征伐するに託 其の実は新羅を打たんと欲す」という記事が見られます。これは新羅が当時戦争状態に入るのは、 翌年

で、そういう意味では、 天智八・九年には蘇我赤兄が筑紫の率となっていて、すでに大友皇子が近江朝廷方の中心になりつつあるの ら唐に対して急ぎ使者が派遣されています。この時期の政権を見ますと、中臣鎌足が一○月に死んでお 天智九年には、唐による日本侵攻が現実化したこととの関係で、高句麗平定を賀すという名目で、 唐と親しくしようとする遣唐使であったと考えられます。 倭国か

次に天智一○年になりますが、天智一○年には、三年前の六六八年に既に劉仁願というのは排除されてい

ういう意味では対新羅との関係では、旧百済領の維持という観点では一致をしています。 この時期において、百済の遺民と唐というのは、基本的に新羅が旧百済領を併呑しようとしているので、そ るなど極めて消極的な対応だったこととは異なって、外交姿勢が少しずつ変化している様子が分かります。 は四年ぶりの使者です。天智六年に百済の熊津に使者を派遣しているのですが、 て、ここに劉仁願と出てくるのはちょっとおかしいのではないかという議論もありますが、 もしそうならば、 日本の倭国の伝統的な外交的立場であります百済支援というのは、 ただ四日で帰国させたりす 唐と一体的 唐からは、 これ

と新羅、 できるだけ倭国を自分の味方に引き込みたいという時期になります。 百済支援は唐支援というかたちで変質してきたのではないかと考えられます。 および旧百済の残存勢力と唐が、 倭国へ積極的に外交攻勢をかけている時期に当たります。 この頃は旧高句麗の残存勢力 両者が

置いた都督府と百済三部使人というのはある意味一体、同じ方向の外交を働き掛けたのではないかと考えら 求めています。 国に対する交渉を有利に運ぶため送り込まれてきたのではないかと考えられます。 る五部制、 この時には百済の三部使人を名乗る使者がやって来ますが、三部というのは百済の基本的な行政単位であ 唐の支配下あったのは残りの東・南・中の三部しかないので、そこに属する百済人たちが唐の倭 東西南北に真ん中の中、これを入れて五部制というわけですが、そのうち西部・北部で反乱が起 唐と百済三部使人が一緒に帰国していることからすれば、 この時期、 百済三部は、 唐が熊津という場所 軍事援助

きな国と戦っていて、そっちに力を取られていて、悪いことに吐蕃の戦いに大負けをします。従って、 ではなく都督府との直接な交渉であって、なぜ懐柔策が行われているかというと、当時、 しも威圧ではなく懐柔策をとります。対新羅外交への牽制という意味があったと思います。 倭国の支持を取り付けようとします。唐の意向としては、 自分の側に味方になってほしいため、 唐は吐蕃という大 ただし、 唐本国 必ず

二,○○○人以上の人がやって来てるので、冒頭で申し上げましたように、 が『三国史記』に出てきますが、この時の軍の一部が倭国へやって来たのではないかと考えられ いかと考えられます。 ただ、それでも若干の援軍が来て、薛仁貴を将軍とする援軍が新羅に派遣されたこと 防人は倭国に唐軍が攻めて来た います。

なか大軍をこちらに援軍として回せない時期に、倭国が敵に回らないように、懐柔的な政策をしたのではな

のではないかと驚いたと書いてあります。そういう意味では緊張状態が続いていると考えられます。

さらに、天智一○年になりますと、新羅王に天智七年の使者よりも多くの賜物が与えられたということが

ではないかと思いますが、高句麗滅亡後の唐・新羅の対立以降、 出てきます。これは旧百済領を新羅が支配するということを倭国に黙認してもらおうという意向があったの この時期までは倭国は唐よりも新羅寄りの

り、 の側近は旧百済人だらけという状況で、そういう意味では大友皇子の外交政策が親百済、すなわち新羅勢力 百済の亡命貴族を大量に官僚として登用しております。学者や軍事顧問に大量採用しており、大友皇子 立場が出ております。

しかし、

このあと、

倭国は、

先ほど申し上げましたように、

大友皇子が太政大臣にな

から旧百済領を守るという意味では、 親唐的な立場を取ったことが推測されます。

の時期であり、このあと外交方針が変わっていくということになると思います。すなわち政権中枢部 これに対して、既に中臣鎌足は死んでしまい、 大海人皇子も吉野に去ってしまうという状況が、まさにこ

によって外交方針が微妙に唐寄りになっていく時期なのではないかと思います。

を与えています。これは、かなり中国に肩入れをした政策として認められます。唐との、いわば軍事的 す。この時には二通の国書がもたらされ、おそらく二度目の国書が、天智が死んだあとに親唐的な立場を取 た天智朝前半の外交方針とはかなり変わっています。天武元年には、郭務悰に対して甲冑、弓矢などの武器 る大友皇子に与えられたということが想定されます。筑紫大津の客館に安置して、あくまで入朝を認めなか 天武元年になりますと、新羅を討つため倭国との軍事同盟を迫ってきた中国の高宗による国書が届きま 同

が急速に力を失ったためと考えられます。しかしこの間、 唐の出先機関である熊津都督府の滅亡や、壬申の乱の敗北による大友皇子の失脚により、 の証として与えられたと解釈できます。 したことが推測されます。 りに変わるということが指摘でき、亡命百済人たちに囲まれていた大友皇子が親百済=親唐的な立場 そういう意味では、 新羅寄りに傾いていたものが、天智朝の末年、すなわち大友皇子の執政期には中国寄 ただし、これ以降七〇一年の大宝の遣唐使まで唐との交渉は跡絶えます。 大宰・総領制および山城体制は存続します。 親百済 ・唐的勢力 これ に転換 再び

親新羅派が台頭することにより、唐に対する緊張関係は天武期にも継続したと考えられます。

たが、 な緊張関係は大宝の遣唐使あたりまでは続くのではないかと考えられます。 唐に対して緊張を持つのか、新羅に対して緊張を持つのかは微妙に揺れ動くのですが、全体としては対外的 な関係とはやや異なる対応が両国でなされます。この転換は無視できないもので、やはり外交的な緊張関係 朝貢の船が一隻だけであったことを非難して、献上物を返還しているように、 使者の地位を巡って争い、その役目を果たさず帰国したとか、新羅からの使者の地位が低いことや、 持統期に入ると天武期の密接

【大宰総領と国宰】

がまずあります。 して大宰総領制が本格化したと考えます。持統五年の段階で、二九年前に筑紫の大宰府典がいたという記載 時に派遣されるんですが、本格化するのは白村江の敗戦後に、おそらくは全国的規模で、軍事動員を前提と でお話をしたいと思います。大宰・総領制ですが、私見では臨時使者的な東国総領が、いわゆる大化改新 それでは最後に、 さらには、 大宰・総領の話をしたいと思いますが、もう時間がなくなってきましたのでかいつまん 熊津都督府と筑紫都督府が対等な関係で記載されています。そして、筑紫の大

倉庫のカギや駅鈴・印を取り上げる。すなわち権限を剥奪したという記載が出てきますが、 壬申の乱の時に出てくる記載で、大海人皇子が勝利したあとに難波の小郡宮で西国諸国 の国司たちから、 これは西日本の

宰という用語や、

吉備の国守という表現も見えています。

ŋ 権を有していたことが確認されます。 河内の国境に置かれて大宝期まで存続した高安城について、畿内の田税を一括して集めたと書いてあった れる人がこういうものを管理しているという、そういう流れが見て取れるかと思います。たとえば、 平定を、 〔国宰〕が必ずしも屯倉(みやけ)とか、正倉の管理権を有しておらず、むしろ上位の大宰とか総領と呼ば あるいは周防や筑紫の大宰には軍事物資を集めたとあるように、大宰総領は一貫して大きな軍事・財政 彼らの帰服により確認するためにおこなったセレモニーではないかと思います。律令成立期 大倭と の国 司

うものが確認され、制度的に整備されてくると考えられます。 ように、この時期から交代の期限とか昇進方法などが定まって、持統朝になると大宰総領と国司の併存とい 天武朝後半期になると、 周防とか伊予にも新たに総領が見えます。そして、「大宰・国司皆遷任」とある

けれども、 しては畿内とか東国などにも同じようなシステムが試行された可能性があると考えます。 にはこうしたものが置かれたことが分かるかと思います。最後のほうに総括をした表を掲載しておきました 大宝令の直前になると、筑紫の総領とか吉備の総領、周防の総領などの名前が見えて、少なくとも西日本 筑紫・周防 ・伊予・吉備辺りは確実で、、その配下に山城が含まれています。そして、可能性と

道諸国の稲を管理していることが見えています。 この山城と大宰総領の関係を示すものとしては、 大宰府が三つの城を管轄したとか、大宰府の役人が西海

【おわりに】

の四地区における大宰総領制の施行は山城の存続と関連して確実ではないかと思います。畿内と東国 と同じように、 このように、 大宰の帯国制度が機能していたと考えられます。 七世紀後半には広域行政組織として大宰総領の存在が確認され、 西日本において、筑紫・周防・ 大宰府が筑前の国を帯した 伊予 にお

動して、広域行政の単位が存在した可能性は高いと思います。 大宰総領が対外防衛において大きな意味を持っていたことについては、『日本書紀』によれば、

ても正式な用語は見られませんが、高安城などとの関係において、天武天皇の信濃への遷都計画などとも連

防ぐために城を造るということが述べられており、まさに大宰の設置目的がここに端的に表現されていると の時に筑紫の大宰の兵を出せという募兵の使者に対して、募兵を拒絶した総領の回答に、 筑紫の国は外敵を

最後早口になりましたが、以上でございます。ご静聴ありがとうございました。

思います。

74

壬申の乱

朝鮮式山城の特徴

主に兵站と備蓄について一

岡県教育庁総務部副理事兼文化財保護課長を経て、現在、大野城心のふるさと館 明治大学文学部卒業。福岡県教育委員会、九州歴史資料館、九州国立博物館、 講演者紹介 善彦(あかし よしひこ)

館長。大宰府跡の発掘調査に長年携わる。専門は日本考古学。

福

講演②「朝鮮式山城の特徴-主に兵站と備蓄について―」

大野城心のふるさと館館長 赤司

ましたが、大野城市のマスコットキャラクターは「大野ジョー」君と言います。大変人気がありまして、現 さと館からやって参りました。先ほど鞠智城のマスコットキャラクターである「ころう君」が舞台に出てい みなさんこんにちは。著名な古代山城である大野城跡のある大野城市に今年開館しました大野城心のふる



す。皆さんお座りの椅子の右袖の下からテーブルを引き出せますので、資料集 在行われている「ゆるキャラグランプリ」では、今日の段階で暫定六位に付け ているようです。大野ジョー君にも投票よろしくお願いします。 私の話は本日の資料編の二十三頁からです。これに沿ってお話しいたしま

はじめに

り、古代の朝鮮半島に源のある山城ですが、研究者の多くは一般的には用いま さて、私に与えられましたテーマは朝鮮式山城です。朝鮮式山城とは文字通

せん。あくまで学史的な用語として使っています。 対をなす神籠石式山城と併せて実体としては古代山城と

いう言葉で統一しています。

どの史料に城の名称が記してあるもののことです。これに対して神籠石式山城は史料に名称が登場しない城 朝鮮式山城という用語を用いる際には、もう一つ『日本書紀』などの古代の出来事を記した日本の正史な

朝鮮式山城からは除外しています。このうち現地で確認され一般的に認定されているのは僅かに六城だけで 怡土城や博多湾岸にあったとみられる大津城なども史料に名称が記載されているのですが、 朝鮮式山城は『日本書紀』・『続日本紀』に十一城の名称が記載されています。この他にも福岡県糸島市 狭義の意味での

一・ 朝鮮式山城とは

す。

は六六三年に白村江で大敗してしまいます。その後、唐や新羅と戦争状態に入っていることから、次は我が す。友好国に援軍を出すというのは、まさしく我が国初の集団的自衛権の行使に他ならないのですが、 始まります。 さてこれらの築城の契機は、 百済滅亡の方を受けて救援軍を百済の遺臣から要請を受けて、 先ほどからお話に出ている六六○年に唐と新羅によって百済が滅んだことに 倭国(日本)は援軍を出 結局 しま

国が攻められるかもしれないために、防衛戦を構築することになります。(図35)

間に、 廃城記事になります。七一九年まで廃城記事です。 などの修理など修理の記事が六九八年まで続き、七○一年からは今度は 山城の築城記事が続いています。 水城を筑紫に築きます。 白村江敗戦の翌年に防人を配備したり烽火を配置したりして、さらに 築城・修理・廃城の時期が凝縮されています。非常に短命だとい それ以降六六七年あたりまで大野城などの古代 それからは、 鞠智城· わずかに五十年間の 大野城・ 基肄城

朝鮮式山城の特徴

うことが史料から見えてくる特徴です。

立地

して大和に設置されるのですが、今日は皆さん、 さて文献史料が語る古代山城の姿は、これまでにお話がありましたの 実際の遺跡についてみたいと思います。山城は九州北部と瀬戸内そ 朝鮮式山城は初めて名

で、

ツアーでどんどん写真を紹介しますので、皆さん写真ツアーに参加して下さい。

まずこれは九州北部の福岡市の南側に入ったところに太宰府天満宮もありますが、

古代の大宰府政庁が



図35 白村江海戦の図

庁の北側に大野城が築かれて 真です。(写真33) 大宰府政 あった場所です。その航空写

たら、 新羅の軍隊が攻めてくるとし 当然海から船でやって

います。ところで、仮に唐

きて上陸してきます。 対馬

から上陸するのですが、どこ

崖が多くて湾のようなところ からでも上陸できません。断

壱岐を経由して玄界灘の沿岸

写真33 太宰府上空より博多湾を望む



写真34 水城跡と大野城跡

すが、 ます。 博多湾を目指して上陸することが想定されます。 これは大野城と水城です。(写真34)博多湾から内陸の福岡平野の一番奥のところに狭い平野があるので 幅一.三キロほどの地峡帯がありまして、そこを水城という土塁を築いて遮断してしまうのです。こ だいたい博多湾あたりに上陸するのはまちがいないと思い

でないと上陸できません。鎌倉時代のモンゴル軍が侵攻してきた時と同じで実際には航路がありますので、



図37 大野城跡レーザー計測図

こは現在でも九州の高速道路や鉄道などの交通路が狭い場所を通過する交通の要衝です。ここを完全に塞ぐ

ために水城を築くということにしたのです。

あるところなのでどのように溜めたのか判明していないこともあって、この考え方は確定してはいません。 外濠を設けて、ここに背後から水を流して貯えたと考えています。 を貯えたかというと、調査の結果、水城の土塁の前面 それからもう一つ、次は大野城です。水城に隣接した山、 『日本書紀』には「水を貯えしむ 名付けて水城という」と記されていますが、ではどこにどのように水 (博多湾側)で幅六○メートルの濠が発見されました、 四王寺山といいますが、この山中に大野城が築 しかし、 濠がない部分があり、 高低差の

かれます。 いう山城は非常に規模が大きい 写真のように朝鮮式山城と

ますけど、ここまで城壁は明瞭なもの 城壁が万里の長城のように描かれてい す。(写真33)この図の城壁はイラス トでデフォルメしていますが 図 38

あり、 内部にはいろんな倉のような建物が また城壁には城門があります。

ではありません。

古代山城を構成する要素には、このよ ので 写真35 大野城百閒石垣



図38 大野城太宰府口城門建物イラスト

れていたと考えられます。ただし、古代山城では建物がよく確認されている例は実は少ないのです。 うな城壁が最も重要ですが、土塁や石塁があります。そして建物としては城門があり、 た城壁です。 八〇メートルあります。おそらく偶然ではなく当初から百間という長さでの設計があったと思われます。 大野城の代表的な城壁を紹介します、 (**写真34**)名前の通り百間の長さがあります。 百間石垣という大野城の北側に設けられた石積みを主体に 古代の尺度では一 間が一・ 八メートルですので、 各種の建物が造営さ

規格に厳しい律令社会ならではだなと感心します。高さは七メートル在ります。



写真36 大野城跡八つ波礎石群

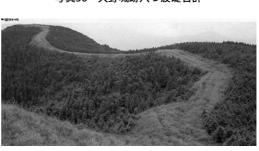


写真37 基肄城跡土塁

次は、

大野城の南方の佐賀県と県境にあります

配置されている状況です。(**写真36**)

高床式の倉庫群が整然と建物の棟方位を合わせて

です。

(写真35) 次に城内にはこの写真のような

の城門が設けられています。

この写真は復元建物

それから、

大野城には内外の出入りをするため

の太宰府市と筑紫野市所在する小平野といいます

の間は七~八キロ離れています。

その間には現在

大野城と同じ年に築かれた朝鮮式山城です。

両者

基山に築城されているのが基肄城です。こちらも

か盆地状の地形がありまして、古代に大宰府政庁や大宰府の都市が形成された場所ですが、これを挟んで北

ます。 に大野城、 この写真は基肄城の土塁線です。(**写真37**)草が茂っていますが明確な土塁遺構を現地で見ることができ 城壁の土塁線の規模が大きく周囲が五キロあります。 南に基肄城があるということになります。大宰府を守護する山城です。 大野城も六キロ以上ありまして、 大野城の場合

大きいということがお分かりになると思います。

ですと、現代人は足が弱いので私でもおよそ一日はかかります。ですから戦国時代の山城とは規模が違って



三直38 基肄城跡で新しく発見された水門



写真39 高安城跡から大阪方面を望む

城は山の地形を利用してい

の水門があります。

古代山

ますので、

梅雨や台風など

そこには水を外に流すため

ところは石塁を築きます。

基肄城の城壁は谷を渡る

に石塁で強固にして水の通重要になります。そのため

ろしいために、

水の処理が

の大雨で土砂崩れが最も恐

三つ発見されました。写真の人が立っているので大きさが分ると思います。 りました。人が中を通れます。今も水が流れています。 り道である水路を内部につくりますが、これを水門と呼んでいます。 数年前にこの石塁の解体修理をされた折に、 基肄城の場合には大きな水門が一つあ (写真38) この三つと先ほどの 水門が

基肄城の築城に続いて六六七年に対馬の金田城・讃岐の屋島城とともに「大倭高安城」が築かれています。 さて、次の写真は大和の高安城です。(写真39)先ほどのお話にもありましたが『日本書紀』では、大野城 大きな水門は作った時期が異なり、次期差があると考えています。

ともあり高安城の城壁線はまだ確定していません。大正時代以来さまざまな復元案があります。 で知られています信貴山と、 の大阪方面、 そしてこれが西側の飛鳥方面を眺めたところです。(写真40) 写真40 高安城から飛鳥地域を望む 写真41 高安城内の土塁



高安山をめぐるようにして築城されているとみられます。写真はこちらが東側

地図をご覧になるとお分かりのように、現在の大阪府と奈良県の県境にありまして、国宝『信貴山縁起絵巻』

の城内にはこのように大野城の倉庫建物と同じような建物の礎石があります。(写真4)文献史料では高安 この写真は木立の中に残る土塁です。(**写真4**)土塁が大変低いので明瞭ではありません。そのようなこ 高安山付近



城は八世紀初めには廃止されたことになっていますが、ここから出土した土器は八世紀後半の土器でした。

ブル状の台地のことですけども、そのような独立した山です。断崖絶壁の地形です。今は陸続きですが、 の高い山にあります。空撮した写真ですが、(写真4)ここはメサ地形というのですが、周囲が侵食されたテー 奈良時代を通じて高安城は存続していたと考えられます。 次は、高安城と同じ年に築城された讃岐の屋島城です。香川県高松市に所在します。瀬戸内海を望む海辺

ともとは独立した島だったのです。そのため屋根のような島という意味で屋島と呼ばれていたようです。

ŧ



屋島城跡遠景



写真44 屋島城跡遠景

見されています。 真4) 拡大するとお分かりのよ の山の頂上に城壁が部分益に発 このような写真になります。(写 下から見ると

うに、絶壁が自然の要害になっ 壁ですね。たぶん敵が攻めてき る必要がありません。 ていますので、あえて城壁を作 自然の城

す。そのような場所に屋島城は

てもここを登ることは不可能で



写真45 屋島城跡の整備された城門



写真46 対馬浅茅湾

す。

亀田さんの話にもあり

ましたが、

韓国では懸門と

面は、

高い段差がありま

内部に登って入れないというものでして、非常に防御性の高いものです。大野城や金田城などでも採用され

すね。はしごを懸けないと

梯子を懸けるので、懸門で

いう漢字をつけています。

島と下島からなりますが、その間ぐらいに浅茅湾という多島海といいますかおぼれ谷のような複雑な地形を した湾があります。本来は浅い湾という意味かもしれません。この浅茅湾ですが天然の良港となっています。 それからこちらは、 長崎県対馬市の金田城です。 地図にありますように対馬は南北に約六十キロと長く上

86

築かれています。

の様子です。この城門の前真45)ちょうど開幕式の時

整備された城門でして、(写

この写真は三年前に復元



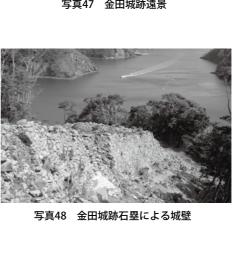




写真49 金田城跡三ノ城戸城門

塁が多いのですが、ここは石積みでして、あまり土がなかったからではないかと思います。

ならずしも土塁にこだわっているのではないのです。

山に金田城があります。湾を回り込んでこの山の背後に行きますと、こちらの写真のように城壁線が見えま

一年前に金田城へ海からカヌーで行く機会がありました。この写真がそうですが、(写真47)

黒潮や日本海の荒波の影響を受けない穏やかな内海です。(写真4)

す。

(写真48) 金田城の城壁は海に面しています。

海の背後の

しかもほとんどが石積みです。他の古代山城の城壁は土

現地の状況でか

O) 江戸時代の寛政年間に外国船出没に対する防備のために、 すが、上の方は加工した平板な砂岩を整層積みしています。 は城壁の外壁に設けられた角形の突出部です。 後世に積まれたところがはっきりわかるところがあります。 点は石積みにもあらわれていまして、写真のように自然石を割 鮮式山城に採用されているという共通点があるといえます。 の特徴的な構造ともいわれていますが、このような門の構造が朝 り正面から見ると、 こも先ほどの屋島城と同じ懸門構造の城門です。 て大きさをそろえた割石を積み上げています。金田城の石積みで 石積みという加工をあまり施さない石英斑岩の石材を積み上げま 部が再利用された時の石積みです。突出部は防御性を高めた 城門の石垣が凹形になるものです。 (写真50) 下は乱 前面に段差があ 新羅 金田! 写真 上は 共通 Ш 城



写真50 金田城跡一ノ城戸突出部

は割愛します。 次は、 熊本県の鞠智城です。 説明については、 先ほどビデオで調査成果を皆さんご覧になったのでここで

城壁構造ですが、

明確なものはお大野城にはありません。

これからの話はこれまで個別に紹介してきた朝鮮式山城の全体的な共通店性や特徴は何かということを考

達率というのは百済の貴族階級のことです。つまり、すべて百済の築城技術でつくられたという解釈がある が、多くの一般書籍で語られているのが、『日本書紀』に百済の達率を遣わして築城したという記述です。 えたいと思います。最も重要なことは築城技術です。どのように築城したのかということを知りたいのです

意味ステレオタイプ的になされています。

門建物や倉庫などを建てたり、瓦を焼いたりする建築技術があるのです。 ために土塁構築や石を積み上げたり、あるいは地形を掘削して整えたりする土木技術があります。さらに城 に巡らせるか、あるいはさまざまなしかけの配置を設計企画する軍事技術があります。次に城壁などを築く しかし、そこはよく考えないといけないわけです。築城技術と一口に言っても、軍略的に城壁をどのよう

たと考えるとストーリーとしてとても分かりやすいと思うのですが、考古学的には日本古来や在来の技術と ことではないのです。たしかに百済人が関与したと史料から読み取れるのだから、古代山城は百済人が作っ これら軍事技術・土木技術・建築技術すべてがほんとうに百済の技術であるのかというと、そんな単純な

の関わりは考える必要があるのです。

し、大阪の七世紀初めに築かれた狭山池の堤防でも用いられているのです。つまり山城築城以前にこうした をかませるというような工法は、弥生時代の壱岐で発見された原の辻遺跡の船着き場で確認されています ました、敷粗朶工法や敷葉工法という要するに軟弱地盤の上に枝葉を敷くことや、土塁になかに葉っぱの層 土木技術は弥生時代に海外の新しい技術が持ち込まれて発達しています。先ほど亀田さんのお話にもあり

でに六世紀代に技術的には知られているのです。 の終わりごろに仏教の寺院建築がもたらされた時に、寺院の基壇つまり建物の土台をつくる技術として、 が朝鮮半島を通じて日本列島に入ってきたなかで、少しずつ変容したのは間違いないと思います。古墳時代 どを黄土の粒子の細かな土を搗いて作ろうとした発想が始まりです。しかし、非常に硬いのです。その技術 た土を木の棒などで搗いて固く締める工法でした、本来は中国の黄土地帯の樹木がない地域で、 それから土塁を築く版築工法ですが、版築の版は板のことで築は土を突くという意味です。つまり板で囲 建物の壁な

かどうか、つまり百済人の言うままに自分の技術は使わずに従順に働いたのかどうか考えることも想像力と 古墳の石室を積み上げた人たちもたくさんいたはずです。彼らが果たして百済の技術を簡単に受け入れたの して大事です。歴史とはいえ生きていた人たちのことを考えなきゃいけないということです。 まずは軍事技術からみていきたいと思います。朝鮮式山城の特徴はとにかく、城壁の範囲が広いというこ 今日は触れませんが、 七世紀の日本列島にも匠 **(たくみ)の人たち、職人さんですね。石工の人たちとか**

とです。規模が大きいのです。

せん。 次に山の高い位置に築城しているということです。ところで、『日本書紀』には山城という名称はありま 平野でなく山を選択しています。どうして山を選んだのか。これはたぶん軍略というか軍事技術に関 音読みでキと書いてあるだけなので山城という名称も適当でないかもしれません。 た

わる事だろうと思います。それはなんといても山の上につくる山城にはメリットがあるということです。

の人たちはなかなか見えません。城壁から覗いている人を下からは見ることができません。それに平地の敵 ることができるのがメリットです。そしてその敵の動向に合わせて兵を動かせます。下の平地からは山の上 ます。これは高ければ高いほど遠くが見えますし、高所の一番のメリットだと思います。敵の動向を観察す らっしゃるかもしれませんが、やっぱりまずは眺めですね。周囲だけでなく眼下の眺望を確認されると思い 皆さんは山に登った時にまず何をなさいますか。高い山の山頂に到着したら、お弁当を開くという方もい

矢です。下から上の兵を狙って矢を飛ばしてもなかなか当たらないでしょが、上の兵士だったら、前面のい ふう言いながら登ってきて、そこに山城側の兵が待ち構えているのですから。さらには当時武器の主力は弓 また、山を守るというのも戦では攻めるよりもメリットがあります。下から登てくる兵は大変です。ふう 兵は道を通りますので、視認しやすいのです。

このように高所を陣取ると大変メリットがあり、敵の人数より少なくても大丈夫だというのが山城の利点

る兵士だけでなく後方の兵士にも当たりますし、重力で威力も増します。

た。時には略奪するしかないわけでして、近代も含めて戦争では戦闘で死ぬより餓死者の方が多いという話 のです。食べ物がなければ餓死するわけで、戦乱に明け暮れた戦国時代の場合にも食べ物の確保が大変でし ただし、デメリットもあります。高ければ高いほどいいかというと、食料や武器などの補給が困難になる

もあります。 しよう。 いかに補給路を確保して前線に物資を届けられるかが戦の勝敗を握っていると言ってもいいで

か。 軍隊が上陸してきて、 ていけばいいじゃないかという人がいます。実はそんなことをやっても意味がないのです。仮に新羅や唐の いてもどうやって物資や進むルートを確保できないと思いますし、 少し話が脱線しますが、高い山に山城を構えて陣取っても、 近畿を目指す道をして居るのでしょうか。そもそも近畿がどこかも知らないと思います。 福岡平野の奥にある大野城をスルーしても、では彼らはどこに行けばいいのでしょう 兵士に背後を突かれたら大混乱です。 平地の敵兵はその山をスルーして、横を通っ 道を進んでも夜に大野城から降りてきた 戦では兵力と兵力を 手引する人が



図39 基肄城跡可視領域

るくない海外の兵団が、九州北部の山城や軍団のいる拠点 をスルーすることはないと思います。 机上のゲームではないのでスルーするという発想がないと思います。 山城の眺望分析について紹介します。 このスライドは大野山城の土塁線のいくつかの地点を選んで GIS (地理情報) システム) の手法で眺望分析したものです。 机上のゲームではな

使って相手の兵力をつぶさなければなりません。地勢に明

たところが眺望できる範囲です。山の頂上に登っても、

実

野城 土塁線からも確認できます。 際には樹木に覆われていて下界は何も見えません。デジタル地形図を作成して地図に示したものですが、 の場合には北の福岡平野それから博多湾の方角が可視可能範囲です。 これが邪魔して眺望がよくありません。 北側の一部分は視認できません。ここには海の向かって延びる山稜があるから 南の基肄城はよく視認できます。こちら側は実際に大野城 東南に阿志岐城という山城がある 大

形成された筑後平野をにらんで築かれているということがお分かりになると思います。 **原の雲仙普賢岳まで見えることがあります。基肄城の場合には、北側の博多湾側ではなく、** 筑後平野と佐賀平野を合わせた呼び方ですが、この写真のように遠くまで見通せます。天気がいい時には島 しかし、部分的にしか見えません。やはり眺望が開けているのは東と南です。筑紫平野と呼んでいますが、 も一部を見ることが実は可能なのです。見えないと思っている研究者が多いのですがそうではありません。 眺望はできません。 このスライドは基肄城の眺望分析です。 特に北側は見えないのですが、デジタル地形図で可視範囲をこのように示すと、 図 39 基肄城も樹木が高くて実際にはすべての山頂稜線 筑後川によって 博多湾 からの

の間に位置していまして、天武朝の軍が高安城を占拠している時に、河内方面の近江朝の軍勢の動向を把握 世紀の同時代の事例として壬申の乱というのがあげられます。先述した大和の高安城は大阪平野と奈良盆地 望ということを意識した選地だということです。 戦における眺望との関わりで、『日本書紀』によると、

このように結論的に言いますと、古代山城の立地は共通する特徴として高所に位置することで、それは眺

して、近江朝軍の迎撃に降りていったという話が掲載されています。

の要害という好条件を兼ね備えているので、眺望第一で選ばれた場所 はり他と同じように周辺への眺望の確保に加えて、断崖のような自然 る標高が低いです。けれども平地との比高差は結構ありますので、 鮮式山城はそういうよく似た立地の特徴があります。 した場所を封鎖するなどして、迎え撃つことが戦術的に重要です。 戦闘では高いところを陣取り、 敵の動向を把握し峠などの攻撃に適 鞠智城は立地す

半島の三国時代でも百済時代末期から採用されたもので、どちらかと こうした眺望のために高所に位置し、 規模が大きいというのは朝鮮

いうと百済の後ではないかという見方もあるようです。

だったと思います。

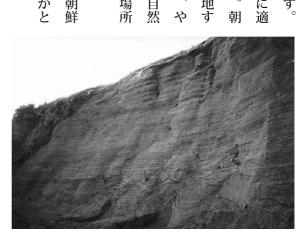


写真51 大野城跡土塁

土 塁

の土塁は、

万里の長城のような城壁の両側が壁ではなく、

外壁を作りますが、

内側は丘陵斜面にもたせ掛け

るようにして土塁を築く片壁式ですね。上部は両壁式になります。この盛り土して突き固めるというやり方

次に土木技術を見てみたいと思います。このスライドは大野城の土塁の版築の状況です。(写真51) 多く

です。この大野城で確認できた版築技法の堰板を紐や棒でひっぱって留める方法は、 まちがいなく百済の扶

韓国の研究者にも確認してもらいました。

蘇山城で調査の際に発見された技法で、

それから先ほどの亀田さんの話にありました版築でなく、土を上から棒で搗くだけの土塁構築の技法が

あったのではないかということですが、これは重要な指摘で、同感です。 盛り土はお墓作りにみられますが、すでに弥生時代の佐賀県吉野ケ里遺跡の墳丘墓は大変有名ですが、

そ

ね こもがちがちに締った盛り土です。それからさんご存知の古墳です 前方後円墳と呼ばれる古墳も非常に高い墳丘が構築されていま

ば、どのう積みといのがあります。版築の堰板の代りにどのうのよう す。 す。 なものを積み上げて一定の高さにしたら、その内側に土を盛り上げて く必要があります。すべてがその時代に伝えられた渡来の新技術だと いく方法です。在来工法でも高い盛り土は可能だというのは知ってお 版築技法ではなくとも土木的に高い盛り土が可能なのです。 特に六世紀以降の古墳の墳丘は高くなることが指摘されていま 例え

考えるのは間違いだというご指摘だったと思いました。

次に石積みや石垣があります。

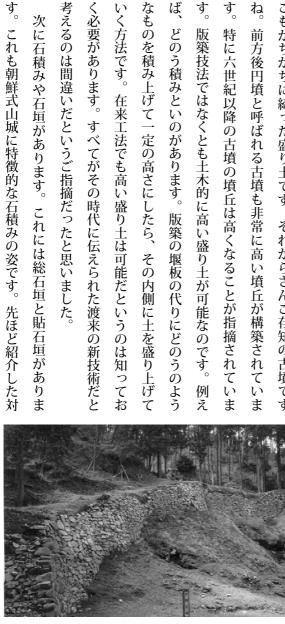


写真52 大野城跡百閒石垣石塁

95

さくておわかりにくいのですが、背後の控えがほとんどないのでグリ石も入れられていない事例もあります。 写真にありますように岩盤に石垣を築き、 馬の金田城は総石垣です。大野城の百閒石垣も総石垣の場所と上に行くほど貼り石垣が用いられています。 控えの少ない内部にグリ石を充てんします。(写真52)写真が小

には石材を加工した切石を使いう事例も多いのですが、朝鮮式山城では割石で、しかも大人二人が持ち上げ また石積みでは石材の加工、ほとんど行わず、割った状態の割石を用いることが多いです。 神籠石式山城

られる程度の大きさが多いですね。

城壁の上部になるほど石材が小さくな



大野城跡增長天地区礎石建物跡

める大野城市の新しい博物館には、この百閒石垣をレプリカで再現し、その ます。 るという魂胆かもしれません。 さて、この大野城の百閒石垣というとても豪壮な石垣があります。 これは戦闘の折りには、落とし石や投石に使うために軽い石を使用 私の勤

もに大人気です。 地上からの高さをクライミングで体験してもらうコーナーがあります。 お城の石垣は砂利石を持ちることが多いですが、朝鮮式山城では人頭大のグ 石積みで付け加えますと、 石垣の内部を充てんするグリ石ですが、 近世の こど

大野城-衛智城 礎石-銀立柱併用建物 高安城礎石-銀立柱併用建物

図40 礎石・掘立柱併用建物模式図



図41 大野城跡増長天地区復元イラスト

です。

特別な事例を紹介します。

この

次は朝鮮式山城に特徴的な建築技術

興味深いのは礎石の周 囲に掘立柱式の柱穴が巡っています。 整然と並んでいます。

と呼び、

高床の倉庫だったと考えられ

盤

の目のように立てたものを総柱建物

うな建物の床を支える柱をくまなく碁

れた礎石建物です。

(写真53)

このよ

写真は大野城跡の増長天地区で確認さ

ます。

調査で判明した痕跡や礎石と柱穴のあり方から、

この図のような変わった建物が復元できます。

にの 石にお注目すると、 瓦葺きの屋根からなる木造の高床倉庫です。 み存在しています。 礎石・掘立柱併用建物と呼んでいます。 大野城だけでなく鞠智城にありますし、 重の屋根だったと考えられます。 非常に特殊ですがこのタイプのものが古代山 さらに遠く離れた大和の高安城にもありま こういう珍しい 建物 の礎 城

す。

ただし、

高安城の掘立柱穴はすこし並びが異なります。

リ石を用いることが特徴です。

施設

図 40

は が分かりました。つまり、屋根がかかっていたということになります。以上、 この外側の屋根はある段階で取り払われてしまいます。 大野城の増長天地区の復元イラストがこれです。 (図4) 私は倉庫を取り巻く板塀と考えていましたが、 最近の調査で、 臨時的な屋根だったのです。 瓦屋根の外側にさらに二重に屋根があります。 柱穴の外側に雨落ち溝が伴っていること このような特殊な建物も朝鮮 礎石の周囲を巡る柱穴

式山城の建築に共通する様式です。



図42 唐津市中原遺跡出土木簡

三・ 古代山城の兵士

戊人に関する内容です。戊人とは防人のことでりますが、中央政権は、白村江敗戦後にそれまでりますが、中央政権は、白村江敗戦後にそれまで動かれていくのですが、そういう人たちが古代山敷かれていくのですが、そういう人たちが古代山敷が、佐賀県唐津市で出土した木簡です。甲斐国のが、佐賀県唐津市で出土した木簡です。足人とは防人のことで戊人に関する内容です。戊人とは防人のことで

す。今の山梨あたりから徴兵された防人が、任期

が終わった後も今の唐津あたりにそのまま帰らずに残ったことを示すのだと思います。(図4)

できる貴重な文字資料です。古代の大宰府では、この軍団制と海浜部を守護する防人制の二本立てでした。 各地の豪族の寄せ集め軍隊ではなく、統制の取れた軍団制という軍事制度に移行していたことを遺物で確認 成についてですが、徴兵していることが分かる資料です。つまりこの七世紀後半になると、先述したように 嶋評という地名が記載されています。嶋というのは今の福岡市の西隣の糸島市の地名です。そこの戸籍の作 この写真は七世紀末頃の木簡です。太宰府市の松本遺跡から出土しました。「兵士」という文字があります。

四・ 朝鮮式山城の兵站

軍団は今の県に当たる各国に置かれていました。

していたのかどうかお話ししたいと思います。 できるのでしょうか。兵站機能が重要と言いましたが、実際に武器や武具あるいは食糧などを大野城に備蓄 ところで、このような軍事機能というものが、本当に朝鮮式山城の中で遺構や遺物として確認することが

を支える柱を礎石の上に据えるのではなく、地面に穴を掘りそこに柱を埋め込む縄文時代以来の建築です ました。基本的に建物というのはそれほど建て替えられません。掘立柱建物という建物の場合、 場所があります。ここでは建物が長期間にわたって何度も造営されていますので、その前後関係が把握でき 大野城の建物跡の変遷をみますと、主城原地区という大野城の北側にあって、見晴らしも良く比較的広い これは屋根

が、 区はかなり頻繁に建て替えられています。 いますが。 ないのです。 考古学的には二五年ぐらいで柱が朽ちるので、建て替えるとよく言われているのですが、そんなことは なので、 奈良の正倉院は千年以上、今日までその姿を保っています。もちろん数十年ごとに補修され 火災などの災害にあっただとか、よほどの理由がないと建て替えられません。 その原因はよく分かりません。しかし、この地区の建替が発掘 主城原

査で分かったことで、大野城の建物の変遷が明らかにできました。

物と呼んでいます。重量のある床を支えるために、何本も柱があるのですが、これが高床の倉庫です。 形に柱が並んでいて、 ランは長方形に成ることが多いのですが、 を示すのに間数 いものが建てられます。 七世紀後半の築城期の建物は、 (けんすう)を用います。 内部に柱がありません、これに対して内部に碁盤の目のように柱があるものを総柱 次に掘立柱建物の高床建物に変更されます。 掘立柱建物の側柱建物です。内部が土間構造の建物、 の短辺を梁間、 一間、 二間、 三間というふうに言います。 長辺を桁行といいます。 ところで、今日の発表では建物 それから側柱建物は長方 それから建物の 要するに高床ではな 平 0) 規模 面

の名称が出てきますので、存在していたのはまちがいないのですが、出土しません。 認できたのは鞠智城で弓矢の鉄鏃が一点だけです。 日本の古代山城では全く出土しないのです。もちろん、 と思っていたら、全く出土しません。 実は日本の古代山城からは武器・武具が出土しません。これまでに確 韓国の山城では武器や武具が見つかっているのですが 文献史料には大野城に城庫の名称や、 鞠智城に兵庫

これらの建物のある場所からは、先ほど申しましたように軍事施設なので弓矢の矢や武具などが出土する

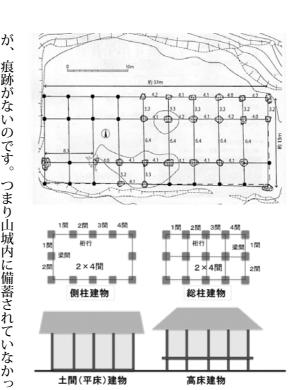


図43 蔵司地区礎石建物及び建物模式図

まず別の場所で台帳などの管理がなされ

に管理されていて、日頃は山城に持ち込

さらに考えられることは武器類が徹底的

た。または、廃城時に全て持ち去られた。

庫に

は武器武具が備蓄されて

()

な

か

何が考えられるかというと、

Щ

城

Ő

っ倉

いうのも考えにくいです。となると、 痕跡がないのです。 つまり山城内に備蓄されていなかったと考えられます。また、 戦闘時以外は別の場所で管理されていたと思われるのです。 廃城時に持ち去ると

つしか地面に埋もれるとおもうのです

した矢がどこかに飛んでいってそれがい

士が大規模な戦闘訓練していたら、

使用

ていた。

ということが考えられます。

兵

に ドにみられるような梁行三間、 司を九州歴史資料館によって計画的な発掘調査が行われています。 ではどこから出土するかというと、 蔵司 と呼ばれている丘陵があり、 桁行九間という内部に柱も備えた格式のある建物が確認されました。(図43 平地です。 昔から蔵を司っていた役所があったと言われていました。近年、 大野城では南のすぐふもとに大宰府政庁がありました。 大変大きな礎石群があったのですが、 スライ その その横 蔵

す。物資の収納と関係のある地区だということが分ってきました。さらに隣接して、礎石総柱式の高床倉庫が数棟発見されていま

かったのです。結局唐や新羅との戦争が、日本では幸いにもなかっことになります。 大野城のような山城には武器は備蓄していたです。 ですので、大量の武器がこの蔵司地区に備蓄されていたこ状態で発見されました。(写真54)弓矢の弓に用いる金具や鉄鏃います。 ほとんど弓矢でして、スライドのように束に成っている大規模な建物の地面から火熱を帯びた武器が大量に発見されて大規模な建物の地面から火熱を帯びた武器が大量に発見されて

たので、有事がおこらなかったので武器は備蓄されなかったとみることができます。 兵士もそうで、平時に

は軍団が常駐する場所ではなかったということがいえます。



写真54 大宰府蔵司跡出土鉄器

五・ 筑紫城の存続と備畜

す。 称が文献史料に見えます。この大宰府が管轄した筑紫城は八世紀以降、 では倉庫には何を貯えていたのでしょうか。 たくさんの倉庫が継続的に管理されていました。側柱の倉庫ではなく、全て総柱の礎石建物です。瓦葺 九州の朝鮮式山城を包括した用語として「筑紫城」という名 つまり奈良時代以降も存続していま

きの立派な高床倉庫です。

す。規模は梁間三間、桁行五間です。写真のように鞠智城もたくさんの礎石式高床倉庫が建ち並んでいました。 こちらは基肄城の地形図と倉庫の分布図です。大野城の倉庫の数に近い三二棟がこれまでに確認されていま 成り立っていますが、大野城の尾根はこのように狭いのです。この尾根のあらゆる所に倉庫を建てています。 この八世紀以降もたくさんの倉庫が造営されていたことが筑紫城に共通する特徴といえるのですが、もう このスライドの写真は、 レーザー計測による大野城の地形を示したものです。 図 44) 山は尾根と谷から

いうことです。 つ、この筑紫城の三つの山城に共通するのが、 規模は梁間三間、 桁行八間から一○間です。この長倉というのはどういう姿かと言えば、 倉庫群の一つに規模の大きな長倉が必ず造営されていると 良の正倉院の建物が類似しています。正倉院は実は

奈

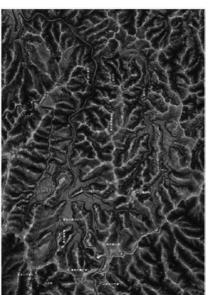


図44

·計測図

このような長倉が一棟あるのです。 北倉・中倉・南倉と三つに内部が仕切られています。

が建ち並んだ景観でした。いずれも奈良時代に建て られたこの倉庫は、 城の場合ですと数が多いのは三間・五間の倉でこれ さきほどの繰り返しになりますが、 柱間寸法もきっちり同じです。 大野城と基肄

規格性が高いのです。おそらく材料の木材も長さな

103 講演② 朝鮮式山城の特徴

及んでいる気がします。 寸分の違いも許さないような時代の空気が、 うのが世の中を制度できっちりと縛ろうとする試みですが、 どの寸法や規格を等しくしていたと思います。奈良時代の律令制とい 建築の設計や材料にまで まさしく

数の倉庫群に何を収納していたのでしょうか。それは稲穀です。 ない玄米ですね。玄米でも何年も保存できません。籾米ですと一○年 白米の状態で買い求めて蓄えています。少し前までは糠をのぞいてい 脱穀して籾米の状態にしたものです。タネの状態です。 ち並んでいる様子はさぞや壮観だったことでしょうか。では、この多 比べたら大変大きな構造物で、威圧感があったと思われます。 ところでこれらの倉はとても規模が大きい建物です。当時の住居に 現代では通常 倉が建 稲を

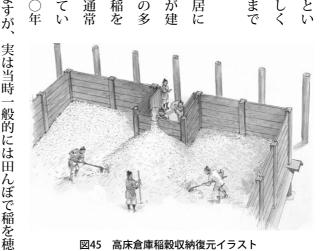


図45

刈りして、これをまとまった量の束にしていました。貨幣がわりに長いこと使用していました。 部にこの籾米をどんどん溜め込みます。イラストのように入り口に堰板を積み上げていきます。(図4)そし かったのです。というか脱穀の必要はなく、 近くは保存できるのです。というと別に普通じゃないかと思われますが、 一手間必要なわけです。ところが、倉庫に貯蔵する時には穂の部分を外して籾米にしたのです。 食べる時に穂と籾を一緒に落として玄米にすればいい 脱穀していな いわけで、 倉庫の内 脱

穀は

の命令がなければ誰も勝手に開けられないようになっていました。 て最後は塞ぎます。扉を閉めて封をして錠をします。 鍵はおそらく大宰府の役所か都に保管されていて、

中央

通に配置されていたと思われます。合計七十棟の米倉を計画的に造営しそして稲穀を貯蔵したと思います。 そうした厳重に管理された米倉が奈良時代の初めに大野城では三十五棟、 基肄城もおそらく三十五棟が共

それは何を目的としたのか。実は大宰府政庁の前面にある奈良時代の天平年間に使われていた溝から木簡

す。 が出土していて、そこに書かれていたのが、基肄城の稲穀を筑前・筑後・肥の国等に遣わして貸し与えよと いう大宰府の役人の命令書です。大規模な災害が起こったことに対しての救済と復興事業だと考えられま つまり戦争のような有事に備えているだけでなく、地域のための備蓄基地であったことが分かります。

せん。おそらく警備の兵士も野営していたようなそういうものだったかもしれないですね 士が常駐しているわけではないということです。兵士がたくさん生活していたような遺構や遺物も出土しま すが、平時には門番や敵兵の来襲の連絡を受ける見張りのような警備の兵士が詰めているだけで、城内に兵 そろそろ時間がきましたので、まとめに入ります。朝鮮式山城の特徴ですが、古代山城は軍事拠点なので

用までが完結することはないようです。あくまでも国家管理されており、特に九州は大宰府の役所が一括し 外で生産されたものが有事の際に持ち込まれたと考えられます。中世や近世の山城のように城内で生産 それから武器・武具も城内で生産していません。また、 武器類は全く出土していません。 このことから城 一使

て生産から保管まで管理していたと考えられます。

六・ 大宰府と古代山城(筑紫城)の関わり

しています。このような変遷を辿っています。基肄城は表面調査だけで建物の発掘調査が実施されていませ と今度は梁間四間、桁行五間の少し小さな礎石式高床倉庫を建築し始めます。これは建て替えではなく増や た梁間三間、 の朝鮮式山城は七世紀末に長倉という規模の大きな倉庫が造営されます。そして奈良時代に入ると定型化 んが、八世紀の奈良時代は同じ歩調で歩んでいます。鞠智城は少し異なりますが、しかしほぼ同じような歩 次に建物ですが、掘立柱建物から礎石建物へと変化します。筑紫城と呼ぶ大野城・基肄城・鞠智城の九州 桁行五間の礎石高床倉庫が建築され始めて、数を増やしていきます。さらに九世紀前後になる

おわりに-筑紫城の倉庫群の意義-

調で倉庫群を造営し拡張しています。

す。 盗難などで平地よりも安心安全のためだというほかないですね。あえて標高三○○メートル以上の場所に運 く似ています。しかし、古代山城は有事の際の備えということで、災害に備える必要がある現代と一緒です。 つまり有事を想定してはいますが、やはり地域の安定のためには災害時には供出することがあったと言えま それから倉庫群のあり方というのは、実は各国に置かれた稲穀などの正税を蓄える正倉の規模や構成とよ 管轄は奈良時代には大宰府です。 それにしてもなぜ山城に倉庫をたくさん作ったのかと言えば、 災害や

び入れたのです。しかも大野城・基肄城合わせると奈良時代の終わりまでに七○棟が建てられていました。

計算すると一棟の倉庫に約四千石収納できます。一石は一人が一年間食べる平均量です。四千人×七○棟な

ので二十八万人を一年間養える膨大な稲穀を蓄えていたことになります。

古代山城が軍事機能から地方支配といった行政的な機能に変化したという点もあるかもしれませんが、

事的な機能は揺るぎなかったのではないかと思います。 まり強調すると古代山城の役割がぼやけてくる気がします。宗教的な側面や行政的な側面もありますが、

軍

あ

釜山を写したものです。今でもこの海のどこかに国境があるという事になります。以上で終わります。 最後にこの古代山城が築かれた時代は国境を強く意識した時代でした。この写真は対馬の北端から韓国

講演3

神籠石系山城の捉え方

築城年代・築城主体論の克服

講演者紹介

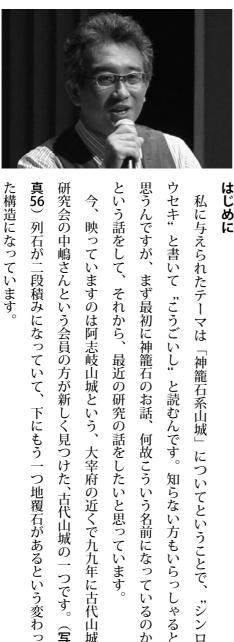
雄(むかい かずお)

務める。専門は日本考古学。 ットワーク機関として古代山城研究会を組織し、現在、古代山城研究会・代表を 日本及び韓国、中国東北部に遺る古代朝鮮式山城を研究・調査する研究者間のネ 関西大学経済学部卒業。関西大学考古学研究室で考古学を学ぶ。1991年から

講演①「神籠石系山城の捉え方~築城年代・築城主体論の克服_

古代山城研究会代表 向井一雄

りましたので、多分、発表された先生方の中では明治大学に一番近いんじゃないかと思います。 こんにちは。古代山城研究会代表の向井です。私は、東京に住んでおり、今日は多摩ニュータウンから参



はじめに

ウセキ:と書いて、こうごいし:と読むんです。知らない方もいらっしゃると 私に与えられたテーマは「神籠石系山城」についてということで、,シンロ

思うんですが、まず最初に神籠石のお話、何故こういう名前になっているのか

という話をして、それから、最近の研究の話をしたいと思っています。 研究会の中嶋さんという会員の方が新しく見つけた、古代山城の一つです。(写 今、映っていますのは阿志岐山城という、大宰府の近くで九九年に古代山城

た構造になっています。

一.神籠石とは何か

神籠石論争

す。まず研究史の方なんですが、 前だなと思われると思いますが、 今日のお話は研究史の話と最新の研究の話ということになっていま こういう名前に決まった経緯、 神籠石という、 山城としては変な名 それ

をご説明したいと思います。

ですが、 史学会で論争が行われました。古代山城の遺跡がその頃発見されたの 神籠石論争という言葉が今までの発表の中で出てきてたかと思うん 明治の終わりぐらいから大正にかけて、 日本の考古学とか歴



写真56 阿志岐山城の列石・土塁

益軒も古代山城の遺跡について本に書いております。矢野一貞は磐井の反乱を起こした、筑紫の君磐井が造っ

ですが、実は江戸時代の久留米藩士である矢野一貞や、

たものだと、そういうことを書いております。

る 争の一○年くらい前に久米邦武や、何人もの学者が知っていたようです。これは高良山という久留米市にあ が九州の調査旅行の中で高良山の列石遺構を見て、それを報告したことから始まったんですが、もう既に論 神籠石論争のきっかけになったのは小林庄次郎さんという、東京大学の学生さんだったんですが、 今、高良大社という大きな神社がありますが、そこの江戸時代の絵図です。赤丸の所に神籠石があるん この方

岩があったんですが、手前には古代山城の列石が転がっています。 ですが、ちょっと拡大してみましょう。神籠石という字が見えると思います。 祠みたいになってる所にその

争の焦点になっていたようです。ただ、当時発掘調査も行われなかったので、 る遺跡だという認識はお互いに共有していたようです。最終的に列石の上に何があるのかというところが論 間違いでして、平面プランを見ますと、朝鮮の城郭と非常に似ているということで、朝鮮の山城と関係があ 論争というと相対立して全く相手の意見を聞かないという感じだったと思われるかもしれませんが、それは ました。大論争になりまして、最終的には山城説の方が若干有利というところで論争が終わっています。今、 神籠石論争は、 山を巡る列石の遺跡を霊域説だという人と、山城説だという二手に分かれて論争が行われ この点が解明できなかったと

神籠石遺跡の発掘調査

先生も「城塞の一種なる事疑うべからず」ということで、この当時の見解を後に本に書いておられます。し の段階でされています。 こが列石です。 これは福岡県で行われたり、 論争のその後なんですが、 列石の上に何か土盛のようなものが書いてあるんですが、これが土塁だという指摘が既にこ それから、國學院大学の大場磐雄先生、祭祀考古学の第一人者の先生ですが、 佐賀県で行われたりしてます。その中で、ここに図面を載せてありますが、 昭和の初め頃に高良山とか、女山とか、次々に史跡の調査が行われています。 大場

かし、 昭和七年から神籠石遺跡の史跡指定が始まって、史跡の名称として、○○神籠石という名称が付けら

れてしまいました。

これが列石になるんですが、版築土塁が確認されて、やっぱり山城だろうということになりました。 に土塁のようなものがあるということはある程度予想されていて、発掘調査をしてみると、これが土塁です。 もう一つは石城山です。山口県の光市になりますが、神籠石の遺跡が初めて発掘調査されました。列石の上 市、武雄温泉という大きな温泉がある所ですが、ここで、おつぼ山という遺跡が見つかりました。それから、 それからだいぶ経った戦後一九六○年代、発掘調査がいよいよ行われることになって、九州の佐賀県武雄

間隔で、これは一体何だろうということで、当初「逆茂木説」というのが唱えられました。亀田先生のお話 築には支柱が必要なんですが、この版築工法に対する技術的な認識がどうも当時はまだ不足していたようで の中で版築工法というお話がありましたが、その中で堰板や堰板の支柱というお話があったと思います。版

ただ、このように列石の前から妙な柱穴が出てきました。柱の間隔は三メートル間隔や、一一八メートル

柳田國男の神籠石批判

す。

最終的に、この柱は版築に関わるものだと現在考えられています。

男が実は喜田貞吉の霊域説に大反対してるんです。『石神問答』という本があります。今では柳田國男全集 さて、神籠石についてなんですが、柳田國男、皆さん、ご存じですよね、日本民俗学の泰斗です。柳田

國

うのは大きな石もありますし、小さな石もあるんですが、石単体の名称であると。「磐座」と書いて なり厳しく書かれています。当時は「かうご石」と書いて'こうご石'と読んでいるんですが、神籠石とい に入っていますので簡単に読めますが、この中で、神籠石という言葉は列石のことじゃないということをか と読みますが、岩石を信仰の対象にすることをご存じだと思います。そういう磐座や石神の名称であ

として使用を止めようとせず、最終的に史跡の名称になってしまったという、こういう経緯があります。 ことを柳田國男が明治・大正の時点で、既に指摘していました。ただ、喜田貞吉は霊域説を主張しています **今、古代山城と思われている列石遺構について、神籠石という呼称を使うべきではないという、こういう** 神籠石という言葉は「神が籠もる石」と書くので非常にロマンチックというか、霊域説を支える言葉

磐座・石神としての神籠石

数を調べ上げています。 らいしか見つからなかったんです。柳田國男は一五カ所ぐらい、 私が調べだしたのが、二○○六年に九州国立博物館でシンポジウムがあった時で、その時はまだ五○カ所ぐ この地図は磐座や石神としての神籠石の分布図ですが(図45)、全国で一四○カ所ぐらい見つかりました。 北は、 不確かなものを入れると岩手県まで、宮城県のは確実です。南は大隅半島で 明治時代ですが、もう全国でそれぐらいの

すから鹿児島まであります。



図45 磐座・石神としての神籠石の分布

月見とはちょっと違うんですけれども、

そういう月待ちのお祭



写真57 賀茂神社の神籠石



写真58 皮籠石

ようなものが建っていて、 町 が こちらの方は「皮籠石」と書いて "こうごいし" と読むんです す。この岩に神が降臨したという伝承があるんです。それから、 茂神社という、 に神籠石があります です。 関東地方にもありまして、 (写真58)、 小野町のこの神籠石については、 福島県の小野町、 かなり古い神社ですが、 (写真57)。三メートル四方の巨大な岩で 「二十三夜塔」という、 左の方のは群馬県桐生市にある賀 リカちゃんキャッスルがある 神社から少し入った山 ここに小さな石碑 十五夜 のお 0)

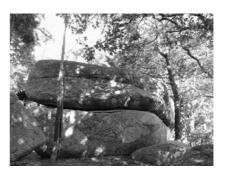


香合石 写真60

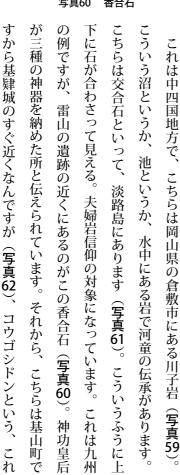
りをしていた場所だと分かります。



写真59 川子石



交合石 写真61





コウゴシドン 写真62

とをいう言葉で、古代山城のことではないということを今日は覚えて帰ってください。 は現在でもお祀りを集落の人々がされています。ということで、とにかく神籠石というのはこういう岩のこ

神籠石系山城という学術用語の変遷

は、 称について見直そうという動きもあったんですが、結局そのまま使い続けることになります。 城の分布が瀬戸内海の方にもたくさんあるということが分かってきたわけです。この時期、 れは八○年代の終わり頃ですが兵庫県のたつの市で城山城が見つかって、それまで九州が中心だった古代山 あるということは分かっていました。それが七○年代末以降、鬼ノ城、 朝鮮式山城とか、古代山城とか、神籠石系山城とかいろんな名称が今日出てきて、皆さん一体どうなって その後、七○年代末に瀬戸内海沿いで山城の遺跡が次々発見され始めました。それまでも瀬戸内海沿いに 高安城、 屋嶋城、 香川県の坂出に城山城、それから山口県の石城山の遺跡があって。古代山城の遺跡 大廻小廻山、 永納山、 神籠石という名 それから、

籠石系山城」という呼称が出てきます。最近は、これらを全部ひっくるめて「古代山城」と呼ぼうと、 山猛先生が「朝鮮式山城」という用語を作って、そのあと瀬戸内海でもたくさん見つかり始めたので、 しかありませんでした。それに対して列石を巡らせた遺跡を「神籠石」と呼んでいました。それを戦後、 るんだとお思いだと思うんですが、一応変遷がありますので説明します。戦前は、「古代城柵」という言葉 神 鏡

いうことですから、いつの間にか神籠石の名前を消そうとしてるわけではなくて、こういう学問的な研究の

進展で名称が変わってきたとご理解ください。

部ひっくるめて神籠石系と呼ぼうと、こんな話なので、非常に細かい話ですが、それほど意味はありません。 を区別しようということで、九州の方を神籠石型ということに。最終的に、九州のものも瀬戸内海の方も全 は朝鮮式山城に対する用語です。 いるといろいろ出てくるんですが、それぞれちょっとずつ微妙にニュアンスが違います。神籠石式というの 「神籠石系」と覚えていただければいいです。 もっと細かい話なんですが、神籠石式とか、 神籠石型というのは瀬戸内でいっぱい見つかりだしたので、 神籠石型とか、神籠石系とか、古代山城に関する本を読んで 瀬戸内と九州

神籠石系山城に関する諸説

た時に造ったという説です。 から九○年代にかけて根強かったのですが、斉明天皇が白村江の戦いの前に百済を助けるために九州に行っ 城塞を造って戦争をしたというような反乱伝承に結び付けて捉える考え方です。次は、八○年代の終わり頃 があります。五~六世紀ぐらいに造ったんだろうということです。地方の豪族が大和朝廷に対抗するために 八○年代以降の研究の動向なんですが、地方豪族築造説とか、渡来系氏族説とか、非常に盛んだった時期 それから、三番目は二〇一〇年以降主流の説ですが、大野城などより新しいと

神籠石系山城というのは文献に記録がない山城のことをいうとよく書いてあります。じゃあ、 本当にない

考える説です。

私もこの説です。

鞠智城の繕治の時期の少し前なんですが、ここに「新城を監せしむ」という記事があります。これは の新城」ということで昔から問題にはなっているんですが、これを普通に読むと、この時期に九州で何か築 のかというと、実をいうと、文献史料に興味深いものがあります。これは持統三年(六八九年)、ちょうど 「筑紫

城というものがあるということ、文献にも記録があるんだよということを強調しておきます。 この三野城を久留米市の耳納山のことだと解釈して、高良山城のことじゃないかと考えています。 もう一つ、六九九年には「三野城と稲積城を修らしむ」という記事があります。足利健亮先生や、私は、 筑紫の新

城されているということになるので、今まで無視されてきたんです。

二.城郭研究からみた古代山城

ちらかというと、お城の研究から攻めてみたいと思います。 城の倉庫の話とか、少し私とかぶりますけれども、軍事技術だとか、築造技術のお話もありました。私はど たいと思います。亀田さんから版築のお話もありましたし、土器のお話もありました。赤司さんからは大野 さて、最新研究に移りましょう。どちらかというと、今日は考古学の方よりも城郭研究の方からお話しし

神籠石系山城の捉え方

古代山城にアプローチする方法

古代山城を攻める方法というか、研究する方法としてはいろいろあります。一つは、亀田先生がお話になっ

それからもう一つは、 今日、主にお話ししようと思っているのは、立地とかプランのお話、 たものから総合的に山城を捉えていこうという考え方もあります。 があって、分布論ですとか、交通路ですとか、港ですとか、そういっ チしていく方法です。それに対してもう一つ、歴史地理学というの た出土土器から研究する方法。それから、 ことをお話ししてみたいと思います。 城壁の造り方とか城門の形とか、そういった 韓国 の山城からアプロー

分布からみた古代山城

賀地方とか、こちらの方にはたくさんあります。ここは磐井の反乱 側に全然ないんです。島根や鳥取など、大陸に近いですし、 でも有名な所ですが、 しかるべきだなと思うんですが、 よということは今日お話を聞かれて分かると思うんですが、 まず分布論なんですが 九州の方は、 特に有明海沿岸といわれている筑後地方とか、 筑紫君磐井だとか、そういう九州勢力に関連 (図46)、北九州から瀬戸内海沿い 一城も見つかってません。それか あって 日本海 にある 佐

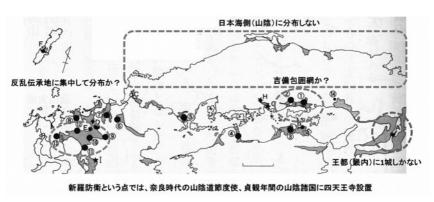


図46 古代山城の分布にみる問題点

してるのではないかという説は、 この辺から来ています。それからもう一つ、近畿地方ですね。 高安城一 城

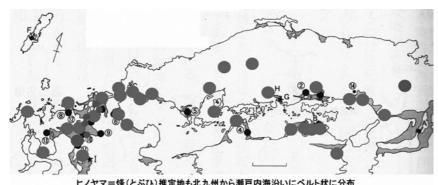
しかありません。これも何か奇妙な感じを受けます。

を取り囲むようなかたちで山城や古墳があるので、吉備包囲網ではないかという説もあります。 すね、それから備後の常城と茨城、それから、岡山県の北部にも終末期の古墳があって、ちょうど吉備中央 もう一つ、これは「吉備包囲網か」と書いたんですが、播磨の城山城、香川県の屋嶋城と城山城、 讃岐で

山陰諸国に四天王寺を各地に置いたりして、新羅を調伏したりしています。ですから、 軍備強化と国内の動揺を抑える目的で、節度使が置かれますし、貞観年間というのは平安時代に入りますが 新羅に対する防衛という観点では、山陰側なんですが、奈良時代には山陰道節度使という、 山陰側にお城がない 新羅に対する

というのは対外的な防衛という面ではちょっと腑に落ちない点です。

のがあるので、ご存じの方もいるかもしれませんが、烽があった所です。水城と一緒に設置された烽です。 表した「ヒノヤマ」地名の分布を持ってきました(図47)。ヒノヤマというのは、下関に火の山公園という 狼煙について研究会をやりました。一二〇人ぐらい集まって頂き活発な議論があったんですが、 じゃあ、 ・大宰総領制・山陽道 一つは烽(とぶひ)、狼煙ですね。先日といっても9月の初めですが、大阪で古代山城研究会が、 北九州から瀬戸内海側沿いにずっと分布しているということは、どういう意味を持つのかという その中で発



/ヤマ=煇(とふひ)推定地も北九州から瀬戸内海沿いにヘルト状に方

写真47 ヒノヤマ地名の分布

が、周防、吉備、伊予。こういった地域というのは、伊予には永が、周防、吉備、伊予。こういった地域というのは、伊予には石城があるというかたちで分布が重なることは、はっきりしています。

れます。

のラインを守るというか、押さえるという意味が強いのだと思わ

ていました。ですから、やっぱり近畿地方と北九州地方を結ぶこ

す。ちょうどその分布が瀬戸内側沿いなんです。他の地域にはあが、ヒノヤマというのが烽のあった所ではないかといわれていま北九州から近畿の都までずっと烽があったといわれてるんです

です。大宰・総領が置かれた所というのは、筑紫はもちろんです

もう一つ、これは仁藤先生のお話にあった大宰総領制との関係

国郡境や軍団との関係

れていて、これが二〇キロメートル間隔という、計画的な配置をしてます。これは、 七世紀後半の地域の再編成ということも考えています。古代山城の占地している山をいろいろ調べます 国郡境に沿って、 国とか郡の境ですね、そういった所に占地してます。 それから、 あまり防衛的ではな 駅路に沿って配置さ

と思われます。

の関係があるんじゃないかという、示唆的、蓋然的な情報です。 も二つあると。それから筑後の国も二個、 あったかということが記録に残ってます。この数が、例えば豊前ですと二軍団なんですが、 それから、 これは西海道についていえることなんですが、 肥前の国も三個と山城と軍団の数が合うんですね。これも何らか 西海道の軍団制について、各国別に軍 神籠石系の山 団 が何個 城

占地と縄張り

ら、どちらかというと、構造研究の方ばかりが重視されていますが、縄張り研究と構造研究というのは車の 占地やプランということを研究していかないといけないと思うんです。研究しているのが考古学者ですか ているんですが、古代山城ではあまり研究されていない。古代山城もお城ですから、やっぱり縄張りとか、 張り研究ということがあまり重視されていません。 次は、占地とか縄張りについて、赤司さんのお話とちょっとだぶってしまうんですが、 お城の研究では縄張りの研究というのは非常に重視され 最近の研究では縄

両輪 なのだと思ってい 、ます。

立地する地形は低い低いと言われて、 占地について、 山の高低だけでは防御的かどうかは分からないということをご説明しましょう。 一○回ぐらいのシンポジウムでもずっと言われ続けていますが、 鞠智城 詳 0)

崖があります。 48)。なかなか攻めにくい。一つは、 と山地が巡っていて、 としてこれだけの面積があります。 るようなんですね。鞠智城の、 ここなんですが、 たいへん要害といえる地形なのです 日中かかって鞠智城の周辺を歩いてみます ここにもあります。 南の菊池市の方にはここに断 まるで鞠智城を守ってい 内部には平 北側はずっ 鞠智城は 坦 。 図

女山城は平野側にむき出しの状態なんです。で いんです (図4)。ですから、 同じように低い地形に立地する女山城なんで これだけ内部 面というのはこれだけしかな 0) 同じ低い 面 積も違うし、 所 に

すが、

内部の平坦

るといっても、

500

1000

1500

図48 鞠智城平面図

ーンは迫地を意味する。



地だと籠城戦で強いんです。こういう例は、 戦国時代の戦史を見ていればあちこちにあります。

から防御的に強いとか、低いから弱いとか、

違いがあります。

だから山の高低だけで、

山が高

そうい

こういう

すから、全然防衛的な占地をしていない。

うことではないといえます。 関東地方だと、良い例で、忍城の戦いを描いた『の

ぼうの城』という映画があったと思いますが、 というのは行田市にあるんですが、 平地の沼地 忍城 の中

にある城です。ああいう低い所にあっても周りが沼 ということ

水際防御と縦深防御

占地が重要だという話でした。

という言葉と「縦深防御」という言葉。これは元寇防塁の配置図なんですが、 の方が好きなんです。水際で侵略軍を守って戦うという。ただ、 それから防御戦術というか思想について、これも、日本人にはなじみがないかもしれませんが、「水際防御 水際防御は、 このラインで守れたらいいん 日本人は防衛というとこっち

ですが、どこか破られたら次がないんです。古代山城は博多湾からずっと引いて、二日市地峡帯に大野城

水城、 ということは明らかです。何といっても唐とか隋の大軍を破った高句麗はこの戦法を取っているからです。 て守るという布陣です。これを縦深防御といいます。百済の達卒たち、将軍たちは縦深防御の戦法を取った 基肄城というふうに配置されています。もちろん博多湾でも戦うんでしょうが、いったん引き下が

横矢がかり

城門の防御ということで、「横矢がかり」という言葉をご存 がの北門の写真です(写真63)。研究会の会員でドローンを使 がれる方が空撮したものなんですが、ここが城門です。この部 分が飛び出しているでしょう。敵がこちらから入っています です。これは非常に有効です。北門では左側から入っています けど、本当は右側から入らせて、右側から叩く方がいいんです。 同故かというと、盾は左手で持ちます。右手に刀ですから、右 のから攻撃される方が弱い訳です。この横矢がかりというん



写真63 韓国 丹陽・赤城 北門

にも使えますので覚えて帰ってください。日本の古代山城は、最初は防御的な城門を造ってるんですが、だ 御所ヶ谷もそうですが、大野城にもあります。横矢がかりを意識した城門の防御、 古代山城を見る時

んだんと防御性の低い城門になっていきます。

築城にかかった日数

か二日間というのもあります。これはソウルの漢陽です。ハミャンと読むんですが、ソウルの外郭城を、 国期の城館、これは竹井英文さんの研究なんですが、群馬の金山城で七○日間とか、肥後の花山城だとわず 何といっても築城は土木です。近世城郭だと秀吉の石垣山一夜城の八〇日間、名護屋城だと八カ月です。戦 んなに長くはかかっていないと思います。築城には土木工事(普請)と建築工事(作事)があるんですが 年かかったから一○年ぐらいかかるだろうとか、四年ぐらいだろうとか、いろいろ議論されていますが、そ 八キロあるんですが、九八日間で造ったという記録があります。 土木量と築城期間について、どれぐらい築城に時間がかかったかということで、よく怡土城が一二

とか建物というものは建築技術を持っている工人がいないと出来ない、そんなふうに考えています。

土木工事というのはあっという間にやらないといけないんですね。人数をかければ出来ます。

結局、

野城だとか基肄城の築造にかかった土木量がどれだけ大きかったかということが分かります。 間。 が巡っていなかったという話もありますから、もっと土木量は少なくなると思います。このことからも、 部集めた数と、金田城、大野城、基肄城、 こから一人徴発すると一二五日かかります。また、 土木量です。のベニ七万人なので、当時の周防国の人口で計算しますと、一戸から三~二人徴発して六三日 立方メーターとなりほぼ同じです。ただし、神籠石系山城は土塁をちゃんと造っていなかったり、全部列石 一戸というのは、 国 郡、 里 (郷)の最後の単位で郷というのがあるんですが、一郷が五○戸です。 鞠智城、この四城を足した量と比べてみますと、両方とも三○万 一○カ所ある九州の神籠石系山城といわれている所を全 大

できると思いますが う労働力の面から考えると、地方豪族のレベルで築造できるしろものではありません。もっと小さな城なら いです。それから、群集墳という小さな古墳と比較すると六○○基分になります。結局、 古墳と比較してみると、山口県の能毛地域にある前方後円墳三基の土木量は合計しても石城山の半分ぐら 古代山城をこうい

れは明活山城の作城碑で、これも慶州の山城ですが、高さ一五メートル、長さ二五メートルの城壁を三五日 均一九メートル)を辛亥年(五九一年)二月二六日に完成したということが書かれています。 新城碑ですが(写真4)、現在まで一〇基発見され、三年以内に崩壊すれば罰せられる誓約や受作した工区 韓国には、こういう築城の記録を記した「刻字城石」という石碑も見つかっています。これは慶州の南山 それから、 爭

間で完成したということが書いてあります。三五日ですから、そんなに長い期間ではありません。長さ二〇

⑤△△知介利上干匠尺阿良村末丁次干奴合村次 ④喙△△倪知大舍郡上村主阿良村今知撰干柒吐 ⑧△門捉上知礼次深捉上首介次小石捉上辱テ次 ⑦△△尺阿九△次干文尺竹生次一伐面捉上珎 印 ⑥△△礼干文尺△文知阿尺城使上阿良沒奈生上 7 80 9 使沙喙合親大舍營沽道 城 法以作後三 使沙

城壁の構造

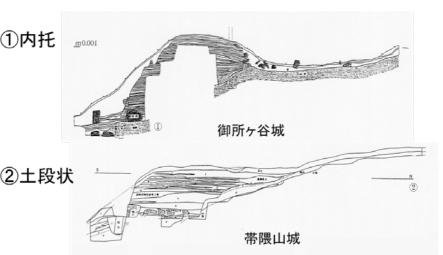
城壁構造については、「型式学」が重要です。型式学って何だ

(第1碑) 写真64 南山新城碑 **" でちょっと説明してみたいと思います。これはくまモンの移り** やるくまモンです。もう一つ、最近こういうのが出てきました。 色になっていますし、頭もなんか変ですよね。これを「型式の崩 中国のくまモンです。。偽モン:といわれてます。色が微妙に茶 変わりで、最初の細いのが初期型です。これがⅡ型。ちょっとか ということですが、考古学の話でよく出てくるので、。くまモン れ」といいます。九州の神籠石系の山城は中国のくまモンに似て わいらしくなります。これがⅢ型です。一番いろいろいたずらを

いるという感じがします。

でもこういう「内托」と呼ぶ内側に低い壁のあるものが多いんですね。それに対して日本の古代山城は「土 城壁の形を見てみましょう (図50)。朝鮮半島ではこういう外と内に壁を持つ城壁が多いんです。その中

①内托



日本の古代山城の版築土塁断面図

ります。

結局、

築城地でどういう石材が利用できるかという

が新しいんですが、新しい時代にも自然石や割石の城壁はあ れだけバラエティーがあります。どちらかというと切石積み

ことが一番大きいのです。

図50 たが、 さい。 げられているんです(**写真66**)。先ほど大野城の石塁内部の て韓国のお城はこういうふうに内部まで大きな石材で積み上 ています。 こういう、 外から見ると似ていますが、 日本の石垣と韓国の石塁の違い。 これは姫路城の石垣の断面です(写真65)。石垣って 赤司さんのお話で栗石(グリ石)という言葉が出まし 玉石というか、 この石垣内部の小さな石が栗石です。 川原石が充塡 日本の近世のお城の石垣の中は これも覚えて帰ってくだ (じゅうてん) され それに対

段 形です。 状の城壁が多い。これは簡略化された城壁で日本独自 韓国の研究者に聞いてみましたが、こういう形 Ď

これは韓国の山城ですが、乱積み、

割石積み、

切石積み。こ

よる分類だとか、石材による分類とかいろいろありますが、

壁はないそうです。

それから石塁については、

石の積み方に

城

 σ



写真65



写真66 韓国 忠州山城 石塁断面

丸亀城の石垣が大きく壊れたニュースが流れましたが、 原因は今年七月の西日本豪雨とその後の台

です。

せて排水するということを考えているよう

何回も来ましたが、これらが影響しています。持ちこたえられなくなって、どこか外側の石がずれると

風

先日、

などいろいろあります。 中の栗石が全部出てしまうんです。韓国の石塁の工法には、 た構造になっています。 日本の古代山城では背面版築だとか、 版築土塁についても、 これは扶余・東羅城の断面図なんですが 打塁法や井桁積み、 基礎版築というものはありません。やはり簡 内部を版築で造る月坪洞式 (図51)、すごく凝っ

以降に普及する工法です。そういう意味では日本の列石というのは、韓国で出始めた頃に導入されて、その

列石についてですが、韓国では7世紀に登場して、

九世紀

略化されているとみるべきでしょう。それから、

写真が出ましたが、

いせいでしょう、 いようにしているのですが、 韓国の城壁というのは城壁内に水を入れな こともありますが、やっぱり排水ですね の気候に影響していて、 近いと思います。 ある程度城壁内に浸透さ 栗石仕様というのは日本 大野城は韓国の城壁に 土圧の低減という 日本は雨が多

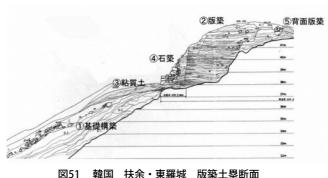


図51 韓国 東羅城

新しい土木技術や建築技術と古代山城

この時代の新しい土木技術として、花崗岩に対する切石加工の技術ですと

す。もしかしたら教えてくれなかったのかもしれません。版築の技術なども 飛鳥寺が五八七年造営で、近畿地方には早くから入ってくるんですが、 か、それから、 いろあります。当時入ってきた技術もあれば入ってこなかった技術もありま 韓国から導入されなかった技術として矢穴の技術など、 地方

が長方形のものが百済系で、方形のものが高句麗系のようです。 まとめになりますが、縄張りや構造を見ていきますと、日本の古代山城は

こういう丸い柱を添えるタイプと四角い柱を添えるタイプがあります。方立

レベルで広がっていくのは古代山城の築城の頃からなんです。

最後に門礎石の話をしましょう。

唐居敷(からいじき)というんですが、

たちですから、城壁の造り方などは百済型を基調としつつ、日本に住んでいた渡来系の人たちの技術、 高句麗みたいな強い城を造ってくれというふうに頼んだんでしょうが、 頼まれたのは百済の将軍 縄張り的には、

高句麗を志向してるようです。

倭国の政権首脳部、

天智天皇や中臣鎌足たち、

クライアント

だとか高句麗の技術も使っています。ただ、その後急速に日本化していく。これが日本の古代山城のあり方

なんだと思います。

ŧ ٨ お願いします。ありがとうございました。 ということで、あまり写真などいろいろとお見せできなくて申し訳なかったんですが、駆け足ですみませ お城として古代山城を見ていただきたいなと思って今日のお話をしました。神籠石という名称について ああいう祭祀の対象となった石や岩がいっぱいあるんだということを覚えて帰ってください。よろしく

パネルディスカッション

コーディネーター



佐藤 信(人間文化研究機構理事) 史。博士(文学)。 大学院人文社会系研究科教授を経て、現在、大学共同利用機関法 員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学 士課程修了。奈良国立文化財研究所(平城宮跡発掘調査部)研究 東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修 人人間文化研究機構理事。東京大学名誉教授。専門は日本古代

パネラー

亀田 修一(岡山理科大学教授)

赤司 善彦(大野城心のふるさと館館長)仁藤 敦史(国立歴史民俗博物館教授)

矢野 裕介(熊本県教育委員会職員) 五十嵐 基善(明治大学兼任講師) 中 村 井

友

(明治大学准教授)

雄

(古代山城研究会代表)



司 会: 皆さま、大変お待たせいたしました。それでは、ただいまより、

パネルディスカッションを開催いたします。まず初めに、パネ

リストの方々をご紹介いたしましょう。

岡山理科大学教授、亀田修一さま。

国立歴史民俗博物館教授

仁藤敦史さま。

大野城心のふるさと館館長、 赤司善彦さま。

古代山城研究会代表、 向井一雄さま。

明治大学兼任講師、五十嵐基善さま。 明治大学准教授、 中村友一さま。

それでは、パネリストの方々を簡単にご紹介させていただき 熊本県教育委員会、矢野裕介。

明治大学大学院文学研究科博士課程修了。 を経て、現在、明治大学文学部准教授をされています。 明治大学文学部助教 専門は

ます。明治大学准教授、中村さまは、明治大学文学部を卒業後、

明治大学兼任講師、五十嵐さまは、明治大学文学部卒業後

日本古代史です。

大学文学部兼任講師をされています。専門は日本古代史です。

分館・歴史公園鞠智城温故創生館を経て、現在、熊本県教育長教育総務局文化科文化財調査班参事を 熊本県教育委員会、矢野さまは、 同志社大学文学部を卒業、 熊本県教育委員会熊本県立装飾古墳館

されています。

鞠智城跡の発掘調査に長年携わっています。

関法人人間文学研究機構理事、東京大学名誉教授でいらっしゃいます。本日はコーディネーターの佐 藤さまと、そして七名のパネリストの皆さまによりまして、「古代山城の成立と変容」というテーマ 文学部助教授、 でパネルディスカッションを行っていただきます。 人文科学研究科修士課程修了後、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、 そして、コーディネーターの佐藤信さまは、東京大学文学部国史学科を卒業され、東京大学大学院 東京大学文学部教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、大学共同利用機 聖心女子大学

それでは、このあとはどうぞよろしくお願いいたします。佐藤先生、よろしくお願いいたします。

佐藤:

して、本当にわくわくするような思いで、古代山城の研究が今どういうところまで来ているのか、最 の成立と変容について議論をしていきたいと思っています。私も今日の四人の先生方の講演を聞きま それでは、今から約一時間五○分ほど、今日の四人の先生方の講演を踏まえたかたちで、古代山城

近の研究状況を知ることが出来ました。それぞれのお話の中では、これまでとちょっと違う考え方が れ指摘があったように思います。そうしたテーマをまとめて議論して、これからの研究に資するよう あるいは、これからどういう調査や研究が必要であるかというテーマについて、それぞ

なパネルディスカッションになればいいと思っています。

どういう技術などで古代山城が営まれたかということを、もう一度確認していきたい。例えば、長い めていきたいと思っています。大きく分けて三つのテーマに分けて話をしたいと思います。第一の こと朝鮮式山城とか神籠石系山城という言葉が使われてきて、今日もそういう言葉を使いましたが、 テーマは、「成立と変容」ということです。特に成立を巡って、どういう時代に、どういう状況の下で、 ただ、今日は講演の先生方の他に、コメント頂く先生も三名お願いしていますので、てきぱきと進

があるということだと思います。また、朝鮮半島といっても百済、新羅、 あるということですので、それをどう見ていくかということも課題になろうかと思います。 また、成立を巡る技術については、土木技術や建築技術だけではなく軍事技術も比較していく必要 高句麗、それぞれの特徴も

今日の段階ではそれらを分けて考えなくてもいいのかなと思いました。

明治大学の中村友一です。よろしくお願いします。私の専門は日本古代史で文献史学をやっており

日

番最初に、

コメントをお願いしております日本古代史ご専攻の明治大学の中村友一さんから、

の講演を聞いた上でのコメントをお願いいたします。

は阿蘇君など、そういったものが有力な氏族として捉えられるかと思います。 そういったお話が出てきて私の専門とも重なるところがあるんですが、残念ながら、鞠智城が所在す のですが、火君というものが『日本書紀』とか、あとは浄水寺の碑の中にも出てきたりする。あるい なかなか私の専門としている分野も含めて申し上げることは難しいのですが、皆さんご存じだと思う る肥後国というのは日本古代史の文献、出土文字資料というのがかなり少ない地域です。ですので、 ないんじゃないのかなというふうに今回コメンテーターをお受けしたんですけど、時々渡来系の氏族、 も勉強させていただきました。私自身は氏族や律令法をメインに研究しておりますので、 まして、今日は考古学の先生方を中心に、四人の皆さまに有意義なご報告をいただいて、 あまり絡ま 私自身とて

て今日の技術論とか、そういったものにも絡められるんではないかと思います。 折があって殺されてしまうんですけど、そういった人たちが行って帰ってくる、そういった面も含め 人が日本の人なんですけど、百済で二番目の位をもらってる。それが帰って来る時にいろいろ紆余曲 つ注目したいのが、『日本書紀』の敏達天皇のところに書かれている火葦北君、 達率日羅という

く鞠智城でも出土文字資料ということで一号木簡が見つかってるんですけど、こちらに秦人という氏 こまで分かった鞠智城」というものが入っているかと思います。こちらの九ページのほうに、ようや はございません。そして、ちょうどいいなと思ったんですが、今日、封筒の中に皆さまお手元に、「こ 氏族の分布という面からいきますと築城技術、そういったものが知られるようなもの

結び付くかというと、普通でいうところの、某部というのと同じで農民レベルの人です。ですので、 名と目されるものが見つかっております。ただ、秦人、渡来系ですけど、それがすぐ築城技術などに おそらく築城自体の技術を持っている人というよりは、それを間接的に勉強したり、見たりしている 人、そういったようなレベルですので、先ほど来築城の技術、版築の技術、そういったものが少し日

本的になってくるというものになってくるんではないかと思います。

石なんですけど、火の守る、もしくは火の安ともいわれるんですけど、八木充さんの報告書では火の でいうと肥前ということで、佐賀と長崎を含めて火の国に本来は入っております。そして、火の守と と考えがございまして、火君というのは肥後の国に主に分布してますけど、基本的には、 いうのろしの道のお話をされたんですが、熊本市の古城横穴群、横穴に閉塞石という、横穴をふさぐ さらに、向井さんのお話にも出てきました烽、のろしの道ですね、それにつきましては私もちょっ 律令制の国

守のほうがいいだろうということで、おそらくは火守ということで、その火守が何を意味するのかと ふうに考えが至りました。 た所に火君などが、そういう氏名をもらうような氏族が分布するようになったのではないかなという いうと、今日の向井さんのお話を聞いて烽関係、対外的にまず情報をいち早く仕入れるためにああいっ

くまモンがあったかと思うんですけど、そういうレベルの人たちがいろいろな所でつくる、ただ、お もう少し出てくればというところもあるんですけど、私としては、氏族の面からいうと、最後、偽

と優秀な人材とかが行ったりとかするのかなと思います。

ろいろな面で勉強させていただいたので、また討論を踏まえて、より勉強させていただきたいと思っ うな勉強をするものとか、仏教経典に比べるとどうも軍事技術というのはなあなあでやり取りをして 半の吉備真備が兵学を習ってくるということで、四書五経というような重要な論語とか、そういうよ いるんではないかなというふうに文献史学の上からは考えております。今日はそういった意味で、い いった所で築城に関する技術を伝習するということは文献上は見つかっておりませんし、奈良時代後 あとは、重要なことについて、日本人にも通訳とか、朝鮮語とか習わせたりするんですけど、そう

紀の初め大宝年間の戸籍を見ると、福岡県の博多湾に面した志摩郡の郡司が肥君猪手という人で、奴 葦北君という、肥後の国、今でいうと熊本県の地方豪族の有力な人が、百済の国の高官にまでなって、 で行ったり来たりして、大活躍をしているということだと思います。これは例えば、 また外交顧問として日本でも迎え入れられようとした記事がある。肥後の地方豪族が朝鮮半島との間 という字ですけれども、その前は「火」も使っています。お話にあったように、『日本書紀』には火 ありがとうございました。火君は、古くは肥前・肥後を合わせて火の国といいまして、今は 同じ火君が八世 肥

婢を含む一○○人ぐらいの戸口を抱える戸主として出てくる。つまり、志摩郡というのは、弥生時代

していたということもある。そこで中村さんに伺いたいのは、 でいえば伊都国が相当すると思いますけれども、大陸半島との最前線に火君が郡の代表者として存在 一応肥後の国にある鞠智城が、そうい

う対外関係とどうつながるのでしょうか。

中村: 族もだいぶん朝鮮外交に関わっている。今までの先生方は結構そういうところを、和歌山の紀氏とか、 りますし、向こうで混血になっている人で物部の朝鮮語の麻奇牟や用奇多といった名前の人もたくさ ああいうものが外政に特に関わるとか言うんですけど、特にそんな縛りはないというふうに考えてお な、代わりに類するものをもらって主に参加してるんですけど、そうじゃない、それ以外の普通の氏 いうふうに考えております。 ん出てきておりますので、氏族によって特に朝鮮半島によく行くとか、そういうものはあまりないと 先ほどの仁藤さんの資料に吉士岐彌とか、吉士がいくつか出てきて、渡来系氏族が紀氏というよう

分かりました。どうもありがとうございました。それでは、続いてもう一方、明治大学の五十嵐さ

城の研究をしていただいたことが二度あったと思います。そういう意味で、鞠智城の研究を前に進め ていただいた研究者の方ですけれども、今日は鞠智城に限らず古代山城についてご専門の軍事的な研 ん。五十嵐さんは、熊本県教育委員会が主催する鞠智城の若手研究者のための研究助成を得て、 鞠智

明治大学兼任講師の五十嵐です。若輩ではございますが、本日はよろしくお願いいたします。私

究のお立場からでもコメントを頂きたいと思います。

律令制国家ができるその前段階でもありますので、古代史的にも非常に重要な時期であると思います。 研究にとっても重要な時期、また研究対象であります。また、日本古代史の観点からすれば、律令体制 八~九世紀の軍事に関心を持っております。古代山城が築城されたのは、本日のご講演の中にもござ の専門は古代の軍事制度でありまして、一般的に律令体制が本格的に成立・機能しました時期、 いましたように七世紀後期といわれておりますので、私の研究の前段階に位置付けられますが、 私の 概ね

らの検討が必要になります。私はこの観点からコメントを申し上げたいと思います。 古代山城を考える際には、本日の先生方のご講演でも触れられていましたように、長期的な視野か

智城の性格、この三段階に分けられるのかなと思います。 城が進む、取捨選択がされる時期と、あとは長期的には維持された古代山城― 大野城、 大きく分けて三つにコメントでは整理した次第でございます。まず起点となる築城期と、あとは廃 基肄城 鞠

度の衝撃があって百済復興作戦、 ことももう少し考えてもいいのかなと思います。まだ百済復興の可能性がありますので、 トに比べれば白村江敗戦のほうが圧倒的に大きいわけですけれども、 ことになります。一般的に、白村江敗戦で考えていいのかなと思いますが、百済滅亡の時のインパク まず起点となります築城期を見てみますと、白村江敗戦(六六三年)が発生した七世紀後期という 最終的には失敗してしまいますが、六六〇年をどう捉えるかという そのあと百済復興という一定程 白村江敗戦

に比べれば軍事危機としては低いため、そんな大きな問題にはならないかなと思いますが、ひとつ付

け加えておきます。

みがえる古代山城』でも「見せる城」ということで関連して述べられておりますけれども、古代山城 ご講演で明確になったと思います。特に亀田さんがご指摘され、向井さんもそれに関連しまして、『よ 築城時の基礎的事項ですけども、 築城時期・築城主体・施設構造については亀田さんと向井さんの

が未完成か否かという論点はかなり重要かなと思います。

得ないような情報も入ってきたのか否かということで、そういった対外情勢が変化を与えたのかとい 智朝・天武朝等々、長距離の話をしていただきましたが、そういった中で得られる情報の中で防衛体 構想していたものであるのかということと関連する問題であります。 うことをお聞きしたいと。すなわち、現在知られている対外防衛体制というものは、天智天皇が当時 たいと思います。すなわち、唐・新羅の戦争であるとか、唐がチベット方面との戦いに専念せざるを 制構築に何か変化があるような情報があったのかということと、連関するのかということをお聞きし この点は、仁藤さんが検討されました国際関係も踏まえますと、外交から得られる情報、 一つ目につきまして、 築城期の防衛体制に関しての話ですけれども、 これは私の個人的関心となり 本日は天

大事ですが、海上での迎撃という点は軍事的に見れば結構大事で、白村江敗戦で全水軍が無くなった それとは別に水軍というものも考えてもいいのかなと私は思っております。陸上で戦うことも 一般的に天智朝に構築された防衛体制は古代山城、あとは烽・防人・水城が出てきますけれ

文献のほうで仕事しなくてはならないと思います。瀬戸内の迎撃なども含めて、水軍はもう少し考え

てもいいのではないのかと考えております。

江の敗戦の前後では軍事的環境は大きく変化したと思います。それ以前は、ご批判はあるかもしれま のかなと。分かることがあったら教えていただきたいなと思っております。 からちょっと分かりづらいところがあるので、考古学の面から何か、倉庫施設の関係で何か言えない れておりますけれども、白村江敗戦後の軍粮備蓄はどのようになったのかということは、 に置いておくと奪われてしまいますので、おそらく那津官家はなくなったんだろうと一般的にはいわ せんけれども、 白村江敗戦前は博多湾に近い那津官家が重要な役割を果たしていたと考えられますが、 あと築城期の三点目としましては、赤司さんから兵站機能から検討を加えられておりますが、 その際に兵糧をどのように確保するのかについても変化があったのではないかと思います。 対外的に進出する外征型の軍事形態だったものが、防衛型にシフトするわけですけれ 文献のほう 敗戦後そこ 白村

亀田さんも、八世紀初期までには古代山城の大部分が廃城とされ、いうなれば国家・王権による取捨

次に、ミドルレンジの中期的な視点では、大部分の古代山城が廃城となったことが論点となります。

になりますけども、仁藤さんは大宰総領制との関係から検討しておられるところでございます。 ころではございました。古代山城の廃城は天智朝の防衛体制が継承されなかったことを意味すること 選択があったことを述べております。宗教施設に転換した事例があるということも非常に興味深いと

城をどう評価するのか、どう位置付けるのかということは重要であると思います。 ものであったのか否かということも気になるところです。国際関係以外で律令体制構築の中で古代山 中で支配体制が再編・強化されていきますが、その律令体制において古代山城というものは不可欠な **江敗戦後の軍事危機の潜在化、これは国際関係に依拠するところですけれども、律令体制を構築する** 制の面から見たら、断続性をいかにして求めるのかというものが論点になるのかなと思います。 あと、最後に長期的な視点から見ますと、維持された古代山城をどのように理解するのかが論点と この点に関して、天智朝と天武朝以降には連続性と断続性があるといわれたりもしますが、防衛体

れていたと思いますが、そういった観点から米穀の備蓄に適していたと指摘しておられます。 さんは古代山城の機能は兵站から備蓄に転換。以前、 にもあったかと思います。亀田さんも地方支配の機能を持つようになると指摘しておりますし、 なります。すなわち大宰府近傍の大野城・基肄城と肥後国の鞠智城が該当します。これはご報告の中 ここからは私の関心ですけれども、大宰府の独自財源として、軍事的用途だけではなく様々な用途、 リスクマネジメントという言葉もお使いになら 赤司

災害とか天変地異に対して支給されることもあったとは思いますが、色々な目的に変化していったと

いうのは、私も鞠智城を研究する中で感じたことであります。

れてきたお米で理解できるのかなと思うのですが、私も鞠智城の特別研究で採用していただいた中で、 いった形態で徴収されていたのかということでありまして、大野城・基肄城の場合は大宰府に貢進さ 問題となるのは備蓄された米穀はどこから来たのか。どこから来たって言葉は軽いですね。どう

雑駁で長くなりましたけれども、古代山城の成立と変容という観点からコメントを述べさせていただ ディスカッションの中での検討主題としていただければ、私としても嬉しい次第でございます。以上、 鞠智城の場合はどういう形態でお米を徴収しているのかは要検討であるかなと思いますので、本日

佐藤: ありご

大変ありがとうございます。亀田さんが言われた古代山城の完成・未完成といったことが、どういう ありがとうございました。今日のこれからのパネルディスカッションの課題を整理して頂きまして、

もいたしますし、あるいは兵糧、山城に蓄積される稲穀がどういうかたちで徴収されたかということ 歴史的な状況変化の中であり得たか。あるいは、未完成でも機能したということもあるかなという気

ですね。

るのではなく少し奥の地でそういうことになるのか。これは向井さんの話にありました、 に近い所に貯積されていたかと思いますが、それがどうなるかということですね。最前線の水際で守 おそらく斉明天皇の時代に百済の復興支援を行って派遣した白村江戦への過程では、 那の津の屯倉 縦深防御と

城にあるほうがいいということになろうかと思います。それも大きな課題になるかなと思います。 いうかたちになると、博多湾に面した屯倉よりは少し奥の、 大野城とか、基肄城とか、 あるいは鞠智

告書をまとめられた目から、今日のそれぞれの講演をどう受け止められたのか、コメントをお願いし 県教育委員会の矢野さんは、長いこと発掘調査を担当されてきたわけですけれども、鞠智城の総括報 もう一人コメントの方がおられるので、それを伺ったあとで、その話に移りたいと思います。

矢野: こんにちは。 熊本県教育委員会文化科の矢野と申します。 私のほうからは、 佐藤さんのほうからも

お話がありましたように、まずは本日、鞠智城、古代山城シンポジウムというということで、

鞠智城

について、少しその概要を述べさせていただきたいと思います。

和三〇年代に山鹿のほうと菊池のほうに分かれてしまったということになっております。 ります。古代の律令制下といいますか、古代の段階ではどうも菊池郡のほうに入ってたらしくて、 るんですけれども、その北岸のほう、山鹿市、それから菊池市のちょうど市境に位置している城にな まず鞠智城の位置ですが、熊本県の北部、菊池川という川が阿蘇北外輪山から有明海へと流れてい 昭

れども、それの中でも大きな方の城になります。東京ドームに換算しますと一二個分という広さを持っ の範囲です。城は外周が三,五キロありまして、現在、古代山城が全国で二二確認されておりますけ 九六七(昭和四二)年から発掘調査を実施しておりまして、現在分かっていますことは、 まず城

矢野

てる城でございます。

側で、三〇キロ南に離れた熊本市のほうも一望できるような、非常に開けた所に鞠智城が所在をして う展望台を置いている箇所がありますけれども、そこからは三六○度の景観が楽しめますし、特に南 た非常に低い立地なんですが、眺望は非常に開けておりまして、標高一六五メートルほどの灰塚とい うことで、山城というよりも、どちらかといいますと丘城のような所に立地をしております。 そういっ るのが特徴として挙げられます。一番低い所で標高九○メートル。一番高い所で一七一メートルとい 先ほど、赤司さんのほうからもお話がありましたけれども、標高が非常に低いところに立地してい

ろ確認されておりません。ですが、向井さんのおっしゃいました、土塁の前面に柱が並んでおりまし も、今のところ、亀田さんがおっしゃるような側面に板を設けるような、そういった痕跡は今のとこ が三カ所となります。それから土塁のほうですけれども、版築工法で造られた土塁になりますけれど されておりますことから、版築による土塁だろうというふうに判断をしております。 て、この柱は土をせき止める板を支えるための柱といわれてるんですけども、 おります。 イプがあるという話がありましたけれども、円形のタイプということで、百済系の門礎石を持つ城門 んのお話にありましたけれども、円形の繰り込みを持つタイプです。先ほど四角いタイプと円形のタ 発掘調査で見つかってるのが現在、城門三カ所ございます。門の形態で言いますと、先ほど向井さ その前面の柱列が確認

いかというふうに考えられております。それから、北側の谷のほうには五,三○○平米という非常に た建物跡が見つかっております。この八角形の建物に関しては朝鮮半島の方と関連のある施設ではな それから、七二棟の建物が見つかっておりまして、その中には、 上から見て平面が八角形の形をし

広い池があったことも調査で分かっております。

てる姿、百済の方で流行する宝珠捧持形菩薩、「百済観音」なんかにもありますけれども、玉を持っ ておりまして、 た菩薩像と類似するということで、百済系の銅造菩薩立像ということで位置付けております。 用する建築材、 建物遺構と合わせて遺物も出ておりますけれども、土器、瓦、貯水池の方からは建築に使 これは、 今日お配りしている資料の中にもありますけれども、 それから、七世紀の中頃と考えられておりますけれども、 国内産ではなく、朝鮮半島の方で作られたものであろうというふうに考えられ おなかの前で持物をささげ持っ 銅製の菩薩立像が見つかっ

Ⅲ期になるんですが、そこで初めて鞠智城に礎石建物が建つ。それまでは掘立柱の建物なんですが、 で五つの各期に分かれておりまして、Ⅰ期が創建期、 ほどから先生方のお話の中でも繕治に触れられてましたけども、繕治される。 Ⅱ期が繕治期。 八世紀の第1四半期の後半から これが七世紀末。 全部 く大野城・基肄城と同じぐらいの頃に築城されただろうと考えられております。七世紀末に繕治、

それから、鞠智城は実は約三○○年間存続したというふうに考えておりまして、その創建はおそら

Ⅲ期で礎石建物が建つというふうに考えております。それから八世紀の第4四半期、時代でいいます

先

を考えております。

と、いうようなことを考えております。ちょっととりとめなくなりましたけど、鞠智城の概要という も大宰総領制。そういった広域行政組織の中で、大野城、基肄城と鞠智城は修理をしたんではないか ましたけども、 ことでひとまずお話をさせていただきました。 その変遷の中でも特に鞠智城Ⅰ期からⅢ期の前半ぐらいまでは、本日も赤司さんの方から話があり 大宰府関連史跡とほぼ変遷が同じということで、仁藤さんのお話にもありましたけど

佐藤・

智城はこれまで長いこと調査された成果がまとめられている。色々なかたちで全国の古代山城の研究 スを入れるというのが、今日のシンポジウムです。 を今日ではリードしてる面があると私は思っています。そうした全てを踏まえて全体の古代山城にメ ありがとうございました。最初に拝見したビデオと絡めてご理解頂ければと思いますけれども、

威であったということです。そうした外交的な環境の変化の中で、古代山城の築城を考えるとどうな 紀でも半ばぐらいの話からあったし、白村江の敗戦の直後が一番大きいインパクトがあるとも。 味では成立時期をどう見るかということです。講演の中では酒船石遺跡のようなちょっと古い、 それでは、続いて、古代山城の成立を巡るテーマに移りたいと思います。成立を巡って、細かい意 五十嵐さんの話でも、六六三年の白村江の敗戦の前に、六六○年の百済滅亡も一つの外交上の脅

るか。細かなことを見ると、様々なことが考えられると思います。

垣の積み方もそうだと思います。そういった工法が半島系の技術というのですが、具体的にどれが百 の瓦かという話もありました。また、土木技術もあります。版築とか敷粗朶工法とか、あるいは、石 れたと一般的にはいわれてきました。その技術が具体的にはどうかということになると、どこの系統 の貴族や将軍たちが渡ってきた、その人たちの軍事的なノウハウも含めて、古代の朝鮮式山城が築か というので、一般的には百済系の技術とみています。ちょうど白村江で破れて日本列島に大量に百済 ことも、成立時期の中で見ていきたいと思います。 最初に成立の時期の問題については、古代史の立場から仁藤さん、詳しくはどのように見たらよろ またその際に、『日本書紀』によれば、大野城や基肄城が百済の亡命将軍の指導の下で築城された あるいは高句麗の影響や、新羅の影響もあるかもしれない。そのことをどう見ていくかという

先ほどからいろいろなお話があって、六六○年の百済の滅亡のあと斉明が朝倉宮に来て、

l li

なものは外向きに置かれていた可能性が私は高いのではないかなと思います。むしろ負けてから内に れより前は那津屯倉の設置もそうですが、外に出て行くことを前提に考えると、物資の集積所のよう めるという話と両様のご指摘があったと思います。先ほどの五十嵐さんのお話にもありましたが、 に何かあったかもしれないという議論が一つと、もう一つは六六三年の白村江の敗戦以降、 守りを固

その時期

方が辻褄が合うように思いますが、いかがでしょうか。

佐藤・ う意見もありました。あるいは、斉明天皇が百済の救援のために出兵してる頃に朝倉宮を守るために その点については、 向井さんいかがですか。時期の問題。 かつては神籠石系山城はもっと古いとい

築城したのではないかという意見もありますが、その点についていかがでしょうか。

向井: 城が見つかって、最初は百済の城だといわれていたんですが、だんだん調査が進むともう少し新しい おかしいと言っていました。一つは、韓国でも列石のある版築土塁の城は八○年代に木川土城という というか、八木論文が出たら即座に転向してしまって知らん顔してます。私は以前から斉明天皇説は 本歴史』七二二号に八木充先生の反対論文が発表されてから、九州の考古学者の人たちは節操がな 斉明天皇築城説ですが、二○○○年代の初め頃までは九州では根強いものでした。二○○八年の『日

時代の城だということが分かってきました。

は、 件じゃないですが、日本だけ古くから列石を持った版築土塁の城があって、韓国では新しいというの 伝わってくる頃に韓国でも始まるということが分かってきたんです。もう一つは、ああいう大きな切 石を使った列石の城は韓国にはないということで、こういうことが分かってくると、旧石器ねつ造事 韓国で列石が始まるのは、せいぜい早くみても七世紀の中頃、だから、ちょうど日本に古代山城が これはあり得ない話でして、そういう点からも私は斉明天皇というのはちょっと厳しいかなと思

うんですね。

どうも何か違うものになっているという中途半端な感じは受けます。これは甘樫丘の蘇我氏の邸宅跡 時にちょっと出た、亀田先生の意見でしたか、山城みたいなものを造ろうとはしているんだけれども、 といわれている遺跡についても、同じような印象を受けます。こんなところでいいでしょうか。 それと酒船石の遺跡、 私も興味深く、発掘状況も見たことがありますが、先ほどのミーティングの

なというイメージが私もございました。今の成立時代観については、亀田さん、いかがでしょうか。 に言われたという石積みなので、やはり大野城の百間石垣などと比べるとかなり違うものではないか 確かに、酒船石の石積みには裏込めもない。『日本書紀』にも、造るからに崩れてしまうだろうと人々

亀田: 古代山城の成立?、神籠石系山城の成立?。

佐藤: それがもし違うのであれば、どう違うか。

亀田: まず、朝鮮式山城に関しましては、大野城や基肄城などから六六五年が一つの定点です。酒船石遺

跡に関しましては、僕はどのように扱かえばいいのかよく分からないと申し上げました。今、佐藤さ なり立派に行っています。そのあたりをどのように理解するのか。それで、先ほど中村さんがおっ んがおっしゃったように、 しゃったように、上から、こういうものを造りましょうとなった場合、現場監督や実際に施工する人 積み方はあまり上手ではないのかもしれません。ただ、一方で、版築はか

たちはどのような人たちなのか、気になるところです。

思います。 なると、 先ほど版築のお話をしました。堰板を使っていなくても、 ある程度の知識がないとできないと思います。つまり、 ただ、 赤司さんや向井さんからお話があった、 縄張の話、どこにどう造るのかという話に 作業自体は素人さんでもできるのかなと 酒船石遺跡の実際の施工には少なく

花崗岩製の石造物があります。この石造物に関しましては、推古天皇の時百済からやって来た路子工 為的に平らにしたものであるならば、技術面で気になります。飛鳥地域には、猿石などと呼んでいる あの石垣の下、基礎部分には花崗岩の石を敷いていました。上の石は砂岩です。花崗岩の上面が人 飛鳥にいた渡来系の人たちは関わっていてもいいのかなと思っております。

という人物が須弥山や呉橋を造ったという記録があり、飛鳥の花崗岩製の石造物作りに彼が関わって

いたと考えられています。

技術、 まり六世紀の終わり頃から花崗岩の加工技術が本格的に入ってくるようです。石の硬さも含めて加 手ではなさそうです。そして飛鳥時代を代表する飛鳥寺の造営などで花崗岩が使用されています。 日本国内で花崗岩の加工がいつから始まるのかということに関しましては、一部例外はありますが、 滋賀県の六世紀の終わり頃の刳り抜き式石棺が古いグループに入ります。ただ、まだあまり上 道具であるたがねの問題などを考えると、やはり渡来系の人が関わっている可能性はゼロでは

そうしますと、少なくとも酒船石遺跡の造営といいますか、あの周辺の遺跡に関しましては渡来系

ないと思います。

中の状況が全然分かっていませんので、もう少し調査を期待したいなと思っております。 であったのかという点に関しましては、よくわかりません。酒船石遺跡につきましては、 の人たちが何らかのかたちで関与している可能性はあると思います。ただし責任者がどのような人物 その遺跡の

連れて来て造らせたのではないかとおっしゃっています。 秦廃寺の礎石が花崗岩を加工したものであることから、秦廃寺関連の花崗岩加工技術を持った人間を しましては、以前から、 鬼ノ城も、時期的には7世紀の半ば、六六○年代の築城を考えていますが、ここの花崗岩加工に関 地元におられた葛原克人さんという方が、備中で一番古いお寺の一つである、

内系の渡来人の名前がかなり出てきます。西漢人(かわちのあやひと)など、いくつか出てきます。 鬼ノ城の麓の人々で、税金を納めずになくなった人たちの七三九年の記録です。その記録の中に、 や)郡です。あの地域に関しましては「備中国大税負死亡人帳」という『正倉院文書』があります。 それから、鬼ノ城を実際に造ったのは誰かいうことについてです。鬼ノ城のある所は旧の賀夜 か 畿

うな地元の人たちも使って築いたのかなと思っています。 がありますので、そのような情報なり技術を今お話しした渡来系の人たちが持っていれば、彼らのよ 性はないのかなとちょっと期待しています。 思っています。 (おしぬみのあやべ)も出てきます。その人たちは、畿内経由で入って来た渡来人たちだと 例えば築城技術に関わるようなものを何か、 理由は、 鬼ノ城はよその古代山城とちょっと異なる部分 直接的ではないにしても持っている可能

縄張を行うのは無理だと思いますので、そういう縄張をする人から実際の現場監督と施工する人たち

嶋城を造って吉備側に造らないというのは、交通路の重要性を考えても厳しいのかなと思っておりま そこまで分けて考えたら、鬼ノ城築城の実態にもう少し接近できるのかなと思っております。 しては、僕は六六七年でもいいのかなと個人的には思っています。理由は、備讃瀬戸の香川県側に屋 年代に関してはちょっとまだ詳細はわかりません。ただ、これは危ない話ですが、鬼ノ城に関しま

す。可能性ですが、ひとまずそのように考えております。

ありがとうございます。渡来人研究の第一人者の亀田さんのご意見ですので、渡来系の技術につい

佐藤・

縄張りは、例えば亡命してきた百済の将軍の縄張りかもしれないけど、実際の工事をやる時には、人々 しれないし、地元の肥後の国の人も鞠智城の場合には行くかも。地方豪族が、それまでの支配下の民 を動員して築城する時にはやはり地元である倭の、あるいは律令でいえば大宰府からの人も行くかも 今のご指摘はお聞きするほかないと思います。ただ、技術のところでは今お話にあったように、

在地の豪族が部民を動員して門を造ったと考えています。しかも、その豪族がその門を守ってもいる れに刻書で3文字が書いてあった、それが、「浮石部」と読めるのではないかと思っていますが、私は、 大野城の太宰府口城門では、 最初に築城した六六○年代の時の最初の堀立柱の根が残っていて、そ 衆を動員して築くということもあるかなと思っております。

と思っています。これは藤原宮とか平城宮にも門号氏族というのがありまして、大伴氏が大伴門を守 佐伯氏が佐伯門を守り、的氏が的門を守るというふうに、部民を引率する中央の豪族が宮城の門

をそれぞれ守ってきたという伝統があります。

織がどういう指揮命令系統にあるかについては、少し考えなくてはいけないと思いますけれども。 あと、今のお話を聞いていて気になったのは、堅い花崗岩を加工する技術だとか、あるいは版築技 つまり、地域の豪族の方も、やはり山城の城門の造営や守衛に関わるのではないか。ただ、 軍事組

いる。 これは蘇我馬子が建てた日本で初めての伽藍寺院ですけれども、その時には百済からたくさん

法というと、日本で初めて版築や花崗岩の礎石を造る技術は、飛鳥寺の造営で六世紀の末に行われて

の工人の指導者を呼んできてやっている。

仏像を造る時は渡来系の鞍作止利が造るということで、渡来系の技術を使いながら初めて寺院とい

なことをしてる例もあることが分かってきました。築城技術としての版築の場合は、どうなのでしょ 本列島に渡ってくるものとかつて思っていたのですけども、 そうすると、基壇を築く時に見事な版築をしている訳ですけれども、 うものを建てた。三重の塔も、いわば高層ビルも建てるし、礎石建ちで瓦葺きの伽藍の建物を造った。 うか。それも含めて、今の成立の話について、赤司さん、話をしていただけないでしょうか。 最近だと古墳の石室の下層に版築みたい 私は版築技術は寺院建設から日

まず版築の技術からお話します。日本には百済の版築の技術が六世紀後半に仏教と一緒に入ってき

版築する際には、堰板をひっぱるようです。中国では縄ではなく髪の毛を用いる場合もあるそうです。 つかり、 機会ができました。崩落した土塁の外側断面を掃除して観察しましたら、径五センチぐらいの孔が見 たので土層断面が見えていたのですが、小さな孔がいくつも並んでいました。先輩たちはこれをカワ 初めて確実な百済の版築技術を確認できました。きっかけは、もともと土塁の内側は道路になってい 扶蘇山城の土塁にその棒や縄の痕跡が孔になって残っていました。「横木孔」という名称で報告され ありますが、この山城の土塁版築の技術に、土塁の外側の堰板を、棒や縄で背後に引っ張って留める に百済の版築技術が使われていたかということは間違いないです。 たと考えられています。先ほどの古墳ですが、高い盛土の古墳が古墳時代中頃に出現しますが、 している忠北大学校の車先生がご覧になる機会がありました。扶蘇山城の横木孔と同じもので間違い セミが開けた孔だろうとか言っていたのですが、本当に孔がランダムに空いていたのです。 ていたと思います。この横木孔を探したいと思っていたら、大野城の土塁の調査で検出できました。 方法が見つかっています。版築には堰板で四角く囲むという方法もありますが、土塁の高いところで に近いと考えられています。版築は堰板で挟まれた土を突き棒で締め固める技術です。 ある時、水害で大野城の一部、土塁の外側が崩落したことがありました。そこで簡単な調査を行う 随分と中の方まで孔が通っていました。 ちょうどその調査の時に、 百済最後の都の泗沘に扶蘇 韓国の百済山城を専門と 大野城 山城が の土 版築

ないとおっしゃいました。

いうことが言えると思います。飛鳥寺などの寺院基壇の版築技術の流れではなく、百済山城の技術だ ということで大野城に関しては百済の版築技術が、少なくとも一部に入っているのは間違いないと

と確実に言える例だということです。

す。大野城は六六五年に築城と記されています。 それから築城時期ですが、さきほどから『日本書紀』の斉明四年(六五八)の記事の話が出ていま

兆しであるということでした。これは朝鮮式山城築城の六六五年以前なので、神籠石築城のことと解 釈する説です。九州の皆さんは支持しているということですが、私はそうは思いません。 に百済が滅亡したことで、国家が西北の畔に陣を構え、城柵を築いて山川を断ち塞ごうとしたことの 斉明四年(六五八)の記事は、たしか出雲の海岸に雀魚が大量に揚がったということで、それは後 もっと後の

ことだと思っています。

り始めていたと考えられるのではないかと思っています。 かかっています。大野城に適用すると六六五年以前のさらに古く、白村江海戦よりももっと前から造 が一般的な解釈と思いますが、 築き始めた年で、完成はもっと後だという方もいらっしゃいます。私は六六五年に完成したというの ところで、六六五年にお大野城を築くとあるのは、完成した年だと理解しているのですが、これは 山城の築城期間で分かっているのは怡土城のケースでで、一三年ほど

今日のお話の中にもありましたが、山城は簡単にできるという見方もあると思います。ただそれは

うと思えば一年で造れるのでしょうが、怡土城の例を当てはめれば十年以上さかのぼることになると

考えています。

平城京に用いられていたコウヤマキの年輪年代データと一致するので、奈良近郊のあたりから運び込 定をされた奈良文化財研究所の光谷さんと検討したら、木材は伐採された時の年輪を残しているとい キャナーで断層写真を分析したら、削られていないことが分りました。そこで、再度、年輪年代測 まれたのではないかということです。国家的事業として用材は奈良からは運んだものと推測されます。 いられた材木は六五○年に伐採されたということでした。さらにこの樹木はコウヤマキでして奈良の う結論が得られました。結論的に言いますと、六四八年+二年ということでして、大野城の城門に用 という年代が出ました。三○年前のことでして、その時、外側は削られているので、数値上の年代で しかないということでした。しかし、私が九州国立博物館に勤務しているときにレントゲンCTス 存していまして、そのうちの一本を取り上げました。これの年輪年代測定をお願いしたら、六四八年 この築城年代についてはもうひとつ、大野城の太宰府口城門の築城期の門の建物を支えた木柱が残

私は考古学ですので、史料では六六五年ですが、出土遺物を無視はできません。

府政庁の第一期の下層の建物で真北方位の中枢建物が確認されていて、これが朝倉宮ではないかとい が飛鳥から九州にきて入った宮殿を朝倉橘広庭宮といいますが、その遺跡は大野城の南麓にある大宰 のです。比定地と近くで奈良時代の官衙と寺院は確認できているのですが……。 をそこで実施していました。市の方でもいろんな個所を発掘調査していますが、何も手掛かりがな 官衙が成立するというという考え方もあるのですが、そうではなくまず、中心的な施設があったから う考え方です。大野城・基肄城・水城を築きますが、まず、これらを築いた後に、大宰府政庁の前身 大宰府や大野城を築いたと考えるのが普通ではないかということです。朝倉宮は仮宮という方もいま この朝倉宮は現在の朝倉市朝倉町にあったという説があります。私もそう考えてかつては発掘調査 さらにもう一つ、私が考えている説がありますがこちらはあまり評判が良くありません。斉明天皇 遷都と記されていますし、一族郎党引き連れてやってきていますので、都だったと思います。

外にはどのような性格のものかということも大事です。先輩方は那津官家が太宰府の地に移設された かと考えた次第です。 そういうことがあって、大宰府政庁の七世紀後半の下層の建物遺構の方が、ふさわしいのではない あくまでも一つの可能性です。 ただし、大宰府政庁の下層の建物が、 朝倉宮以

と言われてきました

朝倉市内説は江戸時代の終わりごろに地元の庄屋さんが書き記したものに書いてあり、これを福岡

藩の学者が取り上げて、その流れの中で朝倉説が続いています。もういちど見直してみないかという ことです。そのようなことで大野城の築城も併せてもっと古くなる可能性もあるのではないかと考え

ています。

佐藤: 向井さん。

赤司:

大野城の太宰府口城門の年輪年代、赤司さんは非常に重視されてるんですが、法隆寺の心柱の年輪

年代は五九四年でしたか。あれはどう考えられますか。法隆寺非再建論なんですか、赤司さんは。

年輪年代測定で、古い時代の年輪年代は大丈夫かというお話は分かるのですが、現代から遡って七

世紀あたりまでは、物差しのスケールとしては大丈夫だと言われています。それより以前、 うかよくわかっていないということだと思います。 確実かど

向井: いろ出ていて同じような年代が出たら認めるんですが、ちょっと柱だけだと築城年代にはできないな と新しい、七世紀末から八世紀。だから、太宰府口城門については私はもうちょっと他の部材がいろ 法隆寺の場合は、心柱は非常に古い年代が出てるんですが、ほかの部材が見つかって、それはもっ

と。

佐藤: の幅が狭いというのをグラフにしていくと、確実に、 かるのですね。これはスギとかヒノキ、コウヤマキなどで確認されています。今の赤司さんのお話だ 年輪年代学は、天候の良い年は年輪の幅が、 木が成長するので広くあって、 木の皮があれば何年に切ったかということが分 天候の悪い年には年輪

と、 が出た。ただ、 ことに時間がかかるのではないかというお話をされた訳です。気になりましたのは、コウヤマキは九 ことがあります。赤司さんも、それを理解するために、奈良から運んできたのではないか、そういう の木を使っていたという例がありまして、例えば木を貯木したり、乾燥させてから使ったのかという 六五○年頃に切った木が大野城の太宰府口城門の最初に建てた門の柱に使われていたという結果 向井さんがおっしゃったように、法隆寺では建てた年よりも一○○年ぐらい古い時代

州でも生えてたいそうですが、七世紀代はあまり九州ではなかったのではないでしょうか。

赤司: こに根拠があるのか確実にはわからないです。 九州にもコウヤマキはあるといわれています。 宮崎にコウヤマキが自生しているとうのは、 一体ど

前 まれたという伝承もあります。その島は、佐賀県にあります。その島で生まれたのでシマ王という名 のです。これは、日本列島から持って行ったひつぎでして、武寧王は北部九州の加唐島という島で生 百済の武寧王という、桓武天皇の母方のずっと先祖である百済の王様のひつぎの材がコウヤマキな の王なのですけれども、 あれは、 九州から持っていったのか、大和から持っていったのか。

んでいたのではないかということですが、仁藤さん、そうなってくると何が契機になるかという点で 今のお話では、六五○年ぐらいから、赤司説によれば六六五年以前から大野城の築城の段取りが進

コウヤマキはあるといわれてるんですが、それがどこなのかは

はいかがでしょうか。

赤司

分かりません。

すぐには思い浮かばないところがありますけど、隋や唐が高句麗を攻めるという、 そうなると、やっぱり孝徳朝の渟足(ぬたり)柵とか、磐舟柵とか、との連動ですかね。なかなか 対外的な危機をか

なり過敏に受け止めればそういうこともあるのかなと思います。

隋は高句麗を攻めに行って三回失敗して、自分の国が瓦解してしまったのでした。唐は、 皇帝の

倭国の諸国には激震が走るわけです。それで何とか国家的な統一を図らなくてはというので、いろい ろ事件が起きる。倭では、蘇我の本宗家を滅ぼす事件が起きるし、高句麗でも、百済や新羅でもそれ 親征で、高句麗への遠征を始めるのが六四○年代半ばぐらいです。そうすると、高句麗・百済・新羅

ぞれ大きな事件が起きて、 そういう中で六四〇年代後半には、斉明天皇の時、北では能登半島から阿倍比羅夫が日本海側に遠 国家的な集中を図ろうという動きが起きる。

北方の蝦夷と交流して帰ってくるということがあった。あれはやはり、唐の東アジア遠征を受けた一 征して、新潟県の新潟市に渟足柵という城柵、新潟県の村上市に磐舟柵という城柵を立てて、さらに つの北周りの動きだと、私たち古代史では考えています。そういうことが南の方であったのかどうか。

それはまた今後の研究ということになろうかと思います。この点についてはいかがでしょうか。 五十嵐さん何かありませんでしょうか。五十嵐さん、 いかがですか。 中村

五十嵐: 難しいかなと思います。 **渟足・磐舟は七世紀中期となりますが、城柵と古代山城が同じ時期に連動してるかどうかは少し** 以前、 岡田茂弘先生が鞠智城のことで、斉明朝との関係でおっしゃっており

ましたが、施設の構造に共通点があるのかどうかということもひとつ考えてもいいのかなと思います。

城柵タイプなのか、山城タイプなのかは、もう少し慎重に見てもいいのではないかと考えております。

佐 藤 : 五十嵐さんは、 先ほど、日本の国防体制が外征型から防衛型に変わるとされ、その大きな変化は白

城をあっという間に造るということはあったかと思うのですが、なかなかそれ以前の段階でそれだけ の危機感があるかということはちょっと問題かもしれないですね。色々なことを考える必要があるか 村江の戦いではないかということをお考えでした。唐・新羅が攻めてくるかという危機感の下では水

今のお話は、いろいろまだまだ広がるのですが、次のテーマにそろそろ……。では、

亀

亀田・・ 仁藤先生か佐藤先生に教えてほしいんですが。八木充先生の論文に関して、 堀江潔さんは違った考

えを出されています。どちらの可能性が高いのか。いかがでしょうか?

仁藤さん、どうでしょう。

八木論文については、堀江さんによる反批判の論文もあるのは承知しております。史料に見える「国

ます。先ほども紹介があったように、もともとは怪異的な記事ですが、それを後知恵でどう解釈して いるかということで、少なくとも『日本書紀』は七二○年にできてますから、 いうのが論点で、 家」という用語が何を指すかというのが一つ焦点になっていて、百済を指すのか、 堀江さんは国家というのが自分の国を指す場合もあるということで批判をされてい 斉明朝以降の歴史の道 倭国を指すのかと

筋を編者は知ってるわけで、そういう意味では、あれが倭国ものであるとしても、いわゆる白村江の

敗戦以降、 ないかと思います。だから、 は全然問題ないと思います。逆に、 たとえあれが百済ではなく倭国と解釈しても、あの年に山城を造り始めたとか、そういう話 山城を建てたということの前兆、兆しであるというふうに後知恵で解釈したとしても、 堀江説に乗っかっても否定的なスタンスで解釈できるのではないかと思 あの記事によって造営を斉明朝だと決め付けるのは逆に危険では 私

ではなくて、ということだと思います。

たか。そしてまた鞠智城については、大野城と基肄城と鞠智城という三つの山城だけが、 を選択したかということともつながります。それについてはどうでしょう。順番に行きましょうか。 に。そうなった背景をどう捉えるかという問題、それは三つの城をどう捉えるか、なぜその三つの城 いったのか。それ以外の山城は八世紀の前半ぐらいでもう早く機能を失って、廃城する山城も多いの テーマで言いますと、成立とも関連して、どういう国際関係、歴史的背景の下で古代の山城が築かれ いっぱいあると思っております。よろしいでしょうか、亀田さん。それでは次の、最初にお示しした 「繕治」、すなわち修理されて、そのあとその三つの城だけが九世紀、一○世紀まで続いて機能して 『日本書紀』のこの時代の百済関係の記事は、 やはり色々と検討して挑まなくてはならない記事が 六九八年に

亀田さん、いかがでしょうか。

佐藤: それも含めて、お願いします。

亀田・ もうすぐ『大宰府の研究』という、大宰府発掘五○周年記念の論文集が出ます。そのなかでこれら

の三つのお城が繕治された理由について少し述べました。答えは「これらが大事なお城だったから」

です。ただ、これら三つの中で大野城・基肄城と鞠智城はちょっと違いがあるのかなと思いました。

先ほどの未完成の話にも通じるんですが、大多数のお城は、少なくとも国家は是が非でも造りたい

理的に重要だということです。 とか、何とかさせたいとかいうことまでは考えていなかったのではないか。やはりこの三つの城は地 対朝鮮半島、 対中国もそうですし、九州という地域を押さえる意味で

も大野城、 基肄城、鞠智城は大事だったから繕治もされたと、素直に思っています。

14藤: 仁藤さん、いかがでしょう。

代以降にオーバーランして、いわゆる大宰・総領的なシステムが残るのは、この西海道地域だけです。 やはり大宰府がこの三城の繕治を命じていることが、私は大変重要ではないかと思います。奈良時

それより前は、 て、それぞれに山城が維持されている時期が七世紀後半だったということで、そういう意味ではシス 数え方はいろいろありますけど、いくつかの大宰の管轄地域、 軍管区的なものがあっ

テムが変わりつつある。

れば、上に乗っかる機構は必ずしも要らないという前提で整備がされてくると、吉備などの場合は要 だから、大宰総領を介さなくても一般の国は支配できる。いわゆる国司制というものが浸透してく

解釈せざるを得ないのかなと思います。

持統が後見した文武期までは、対唐だけでなく、対新羅関係の緊張も続いているので、山城体制は維 天武の路線を引き継いで、持統は天智系の親唐路線をとり、 皇子を擁立しようというクーデターがあって、それが失敗したりとか、 はそれなりに和解をするですが、逆に今度は新羅との関係が、天武朝はかなり蜜月だったんですけど なぜ文武二年なのか、これもなかなか難しいのですけど、大宝の遣唐使の段階になれば唐との関係 持統朝になるとだんだん悪化してきて、代替わりごとの賀騰極使が、天武の時には来ているので 持統の時にはこうした使者が来なかったとか、天武の死んだ時に新羅の僧侶行心によって大津 新羅とはちょっと距離を置いています。 路線論争でいえば大津皇子が

強調されています。『帝紀』『旧辞』の編纂をしている途上に、 いるというような解釈も可能と思います。以上です。 ころが天武の段階とかなり違うだろうといえます。そういう意味では新羅を意識して修理・修繕して 面白いのは持統三年に新羅からの貢ぎ物が不足していることが問題となった時に、 神功皇后伝承を新羅に強制 神功皇后伝承が 持されたと考えられます。

大宰府において三つの城を選んだ時に、 例えば最前線は対馬の金田城ですよね。それは選んでない

ということについてはいかがでしょうか。

所で、そういう意味で兵站基地として山城体制というのは必要であったのではないかと思います。 は賄えない地域です。 は筑豊肥六国はいわゆる兵站基地的な役割で辺要国に入っています。北と南は律令財政的には単独で 以前、辺要国について論文を書いたことがありますが、律令国家にとって、大宰府全体が辺要国と して意識される時期と、本当に大隅・薩摩と対馬・壱岐だけを意識する時期があって、前者の時期に 絶えずそこに食料なり、兵士なり、何なりを送り込まないと維持管理できない

鳥栖に所領を持っていて、そこで米の収入を得ていた。古代にも、それに似たようなことがあったの 江戸時代も、対馬の宗氏という大名は、対馬には水田はたくさんありません。ですから、佐賀県の

赤司: 文武二年(六九八)の大宰府による九州の三つの山城を繕い治めるということに、大野城・基肄

でしょうか。赤司さん、次お願いいたします。

ことです。大宰府が備蓄機能を強化しようとした時期といえます。時期的な決め手は土器や百済系の の段階で掘立柱式から礎石式へと変化し、さらにそれは長倉という大規模な倉庫を建てているという

鞠智城がなぜ選ばれたのかということですね。私が六九八年をターニングポイントだと思うのは、

城

単弁瓦があります。それらは7世紀後半段階のものですが、 は八世紀に入ってからですので、そうなると七世紀でも末ごろであれば屋根に葺かれていたと考えて 繕治の年に行われたと理解するのがいいと思っています。亀田さんも同じ考え方だと思います。 瓦を屋根に葺くというのは、 他の地域で

体制が整備される中で、大宰府の地域支配体制を強化しようとした側面もあったのではないかなと思 州北部の国境警備機能や有事の備えということで、兵站としての備蓄を必要としますし、あとは、 のように迎え撃つのかという戦術も関係しますけれども、長倉の在り方からすると、七世紀末に律令 ではなぜ選ばれたのかというと、それは先ほどのお話のように大宰府の役割だろうと思います。 . بخ 九

います。

す。 が三十五棟ずつと一緒なのです。計画的で、規格性が高いのです。ただし、鞠智城の場合は、 は九世紀遺構が現在のところ倉庫は造営されていないかもしれません。大野城と鞠智城のみになりま に一時期停滞期があるように少し違いますが、倉庫を多く築造するところの動きは同じです。 ただし、ご指摘のように大野城と基肄城の二つの城については、 奈良時代にはそれぞれ礎石式倉庫 八世紀 基肄城

佐藤 倉庫 の大規模礎石化は、 大野城のほうは七世紀で古いわけですよね。 鞠智城の場合はちょっと遅れ

赤司: 熊本県の公式的な発掘調査報告書の見解では、そのようになっていますが、 私はちょっと見直して

大野城の動きに合わせて建物の変遷を理解した方がいいのではないかと思います。

佐藤 鞠智城もさかのぼると。

鞠智城の出土瓦に大野城と同じ系譜にある百済系単弁瓦がありますので、瓦を礎石建物に用いたな

らば同じ時期に合わせていいのではないでしょうか。

鞠智城も同時期ということでしょうか。大野城、基肄城と並んで。

と解釈した方が、この年に三城を繕治と記し大規模改修が共通の画期になっていたと考えられるの

ではないでしょうか。

うか、に築城して三三年経っていますよね。だんだん修理が必要になってきたという切実な問題もあっ 私も、六九八年になって繕治が必要だということは、やはり、白村江の戦いの後の六六五年頃でしょ

再開することも含めて、あるいは新羅との関係という国際関係の下で理解できるのではないかと思い たのではないか。そういう必要もあったし、さらに積極的な大宰府の機能強化も図る。唐との国交を

ました。向井さん、お願いします。

向井: 九州の筑紫大宰を残すか残さないかという、議論はあったと思うんですよ。最終的に大宰府として残っ う記事が残っています。仁藤さんもおっしゃっていた大宰総領制がどうなったかということに関して、 なくなってることは確かだと思うんです。記録的には高安城の廃城、それから常城、 九州の例を皆さんがお話しになったので、 瀬戸内の方の話をしましょう。 八世紀初めの頃、 茨城の廃城とい 一斉に

かなと思います。

状況だったと思われます。ただ、天武朝から持統朝にかけての段階でどんな地方支配を考えていたの に石上麻呂を筑紫に派遣しています。 かなというのはあります。一つは持統三年(六八九年)の、先ほど私が新城というのを紹介した記事 し、遣新羅使が行き来して情報も入ってきてますから、日本の方もどうにかしないといけないという 当時、 新羅も九州五京制を敷いて、着々と朝鮮半島を統一して地方支配の体制を進めていってます

ちょっとその辺は私は不勉強なのですが、瀬戸内の大宰総領制の変動が始まっているのかなと思って に思ってます。 いるんですが。 この人は二年後に伊予国司になってるんです。これは仁藤さんに教えていただきたいんですが、こ の人は降格になって国司になっちゃったのか、それとも同じ人が兼務していると考えるべきなのか、 えられていますが、同じ時期に何が起こっているかというと、持統三年の伊予総領の田中朝臣法麻呂、 この時期が筑紫大宰が大宰府的になっていく画期だというふうに古代史の研究者の方々は皆さん考 西海道地域と瀬戸内地域の分かれ目みたいなのがこの時期にあったのかなというふう

残されているんです。石城山や播磨城山城もそうですし、讃岐の城山城もそうですが、途中まで運んで、 考古学的には、 コの字型の門礎石ですね、私が最後に紹介した。あれはほとんどが未完成の状態で

の石造物のモアイみたいに工事を中止した様子なんですね。そういうふうに、瀬戸内の山城は急に終 これからという時にみんなほったらかしで工事止めちゃったみたいな感じです。まるでイースター島

わってしまったって感じが私はしています。

佐藤: 今の瀬戸内の総領制について、仁藤さん。

先ほどもちょっとお話をしたと思いますが、摂津職が津国を帯国し、大宰府が筑前国を帯国してい

伊予国司と出てきたり、 るように、総領が国司を兼ねるということで、大宰総領と国司の併任という関係から解釈できます。 伊予総領と出てきたりというのは、他国に対して命令する時、 すなわち讃岐

に命令する時は伊予総領と出てきますが、自国に対しては伊予国司というふうに出てくる。その使い

分けではないかと思います。

それでは、今までの議論で、中村さん、何かありませんでしょうか。

文献史学から言いますと、結局、あまり文字にのっとり過ぎるとというのもあるんですけど、例え

ば全然お話変わるんですけど、斉明五年に出雲大社の杵築の大社を造りよそおしむ、集合するってい

えると思いますので、まず考古のほうに結論をかっちり出していただいて、『日本書紀』のずさんを うことで、実際それより前に杵築の大社がなかったか、意宇の熊野から移転しているのかどうか、 こが造り始めてのとか、いろんな議論があるんですけど、今回の山城の話を聞いてても同じことが言

論じたいなというふうに思ってるんですけど。もしかしたら、こういう所に「等」という字があって

これ以上生産的な議論って難しいなとは思っております。

佐藤・ 造ったといっても、造り始めたのか、完成したのかというのでも違う、というお話が今日ありまし

国家的に整えられた記事ですので、それをどう読み取るかという古代史の側も、これからさらに研究 た。そうした古代の文献史料の限界みたいなものもあるけれども、史料批判を行って、考古学ともタ イアップして事実に近づく努力が必要でしょう。『日本書紀』は、七二○年にあとから編さんされて

しなくてはいけない問題だと思います。五十嵐さんはいかがですか。

五十嵐: 張感というものは残っていた時期なのかなとは思っております。この三城に関して、南九州の隼人と の関係を論じる人もいますが、時期的に若干早いので、もっと対外防衛のほうを重視するべきである 大野城・基肄城・鞠智城三城の繕治についてですが、軍事的脅威が潜在化しているとはいえ、 緊

三城のうち鞠智城に注目してみますと、城内施設も充実したということでありますので、米穀の備

と私は考えております。

らフルパワーで兵站能力が構築されていたのかどうかは要検討でありますので、米穀の収蔵能力と発 う意味では、この六九八年の記事は前線の北部九州の軍事を考える上で、結構大事なことかなと考え 揮される兵站能力については、もっと時期的な差異を踏まえて考えていけばいいと思います。そうい 蓄という意味では能力が高くなったと言えなくもありません。鞠智城を考える時、第一期の築城時か

ております。

佐藤 ありがとうございました。 肥前·肥後、 豊前・豊後の中で圧倒的に生産力の高い国が肥後国なのです。 鞠智城に関しては、 律令制下の八~九世紀には、 大宰管内で。ですから、 後の史料でも筑前・筑

そうした生産力を基盤にしたかたちで兵站(へいたん)に稲穀を貯積したということであれば、

肥後

国の鞠智城というものの機能が説明できるような気もします。矢野さん、鞠智城の調査をされたお立

場から、 今までの議論にコメントしていただけませんでしょうか。

矢野 現在、 鞠智城を五つに画期に分けているんですけれども、 繕治の時期というのが、 そのうちの鞠智

城Ⅱ期に当たる部分になります。実は鞠智城、今、建物七二棟確認されておりますけれども、 七二棟が全部同じ時期にあったわけじゃなくて、変遷しながら総数で七二棟が現在発見されてるとい その

う状況になります。

建物が すけれども、 いわゆる繕治の時期ですけれども、 ありまして、 鞠智城I期の方なんですけれども、創建されてすぐの建物ですが、 L 字形に建物が配置されるというふうな区画が出現します。それが鞠智城のⅡ期になってお L 字形の建物の南に掘立柱の総柱の建物が、その軸線に合わせて配置されるというのを それの西側ぐらいに展開している建物群が鞠智城Ⅰ期の建物群になります。 建物自体が比較的小型になっております。城内に長者原地区という非常に広い平坦 その建物群が少し場所を変えて東側に移って、さらに三間 総柱の建物はあるのはあるんで 鞠智城 七間 Ⅲ 期、 面

先ほどから話題になっております瓦の年代なんですけれども、通常やはり瓦というのは非常に重い重 とになります。ただ、瓦は再利用される部分もございますので、その後礎石建物でも利用されたと考 のですが、熊本県内における現在の鞠智城から出土している瓦の年代は、鞠智城の創建に近い年代 ことで、礎石建物が出現したと同時に瓦が葺(ふ)かれるというのが恐らく自然な流れなんだと思う えてもおかしくはないのかなというふうに思っております。 七世紀の第3四半期というようなことが研究者の中で言われておりまして、 量物ですので、やはり土台石の上に建物の柱が乗らないとなかなか支えられないんではないかという いうことで鞠智城Ⅱ期を位置付けさせてもらっております。 先ほど赤司さんがおっしゃられた、礎石に変遷したのではなくて、城内の施設をやり替えた時期と ただ、少し問題がありまして、一つは 掘立柱建物の瓦というこ

間とか、 倉庫が建てられるということですけども、 ぐらいになると思うのですが、礎石建物が出現します。大野城、 それから、繕治以降のことですけれども、その次の鞠智城第Ⅲ期、いわゆる奈良時代に入ってから あまり規格性を伴わない礎石建物が建てられます。 鞠智城の礎石建物は、 礎石も小型の礎石を利用しています。 基肄城では三間五間という規格的 建物の規模が考えられるのが四間

という状況になってきます。先ほど赤司さんのお話にもありましたけれども、

鞠智城Ⅳ期に三間四間

その後の鞠智城Ⅳ期の三間四間の整然とした礎石建物と重複してるので、全体の様子が分からない

鞠智城・古代山城シンポジウム 2018 **178**

の建物が建てられだしてようやく大野城と同じような役割を付加されたんではないかなというふうに

思っております。ただ、奈良時代には、礎石建物も少し違う様相を示しているということで、大野城、

基肄城とは少し違う役割があったのではないかなという風に考えているところです。

佐藤: これは、編年観を含めて、まだこれから考古学的にも検討が必要かなと思えてきました。さて、だ ら六年ほど継続して調査されるということです。本日会場の一階でパネル展示として、各山城の城門 ですので、最後に鞠智城に絞ったかたちで進めたい。熊本県教育委員会では、 いぶ時間がたってしまったので、最後のテーマに。今日は、鞠智城古代山城シンポジウムということ 鞠智城の城門をこれか

けないという指摘もございました。これからの鞠智城調査に対する注目とか、あるいは期待みたいな 版築の場合でも、こういうところに今までは目を向けていなかったけれども、今後注意しなくてはい ものを、お一人ずつお話しいただきたいと思います。亀田さんからお願いします。 についてのパネルを並べて頂いておりました。今日の話の中で、同じ工法技術を見る場合、たとえば

亀田 : りの年数になります。 今日はいろんな好き勝手なことを話させていただきました。鞠智城もお邪魔するようになってかな 矢野さんにもいろんな所に連れて行っていただき、いろいろ見せていただきま

のは大野城と鞠智城です。これは、こういう場では言わない方が良いのかもしれませんが、大野城 した。今回のお話の中で大野城、基肄城、 鞠智城の順番で呼んでおりますが、発掘調査が進んでいる

頑張っていい報告書を作っていただいているんですが、土器などの数量的なまとめと検討がこれから

佐藤

ありがとうございます。確かに、

の課題かと思っています。

そして、古代山城の報告書の一つのモデルが『鞠智城跡Ⅱ』だと思いますと、関連する方々に言っ

ています。

進めるようにしていただいていることは、とてもすばらしいことだと思います。このような研究助成 それとともに、ここに、佐藤さんがおられるんですが、若い方に研究費用を出してあげて、 研究を

は今後も続けていただきたいと思っています。

れば大きなポイントになります。それはやはり池の中を掘るっていうのが一番手っ取り早いと思って ないっておっしゃっていましたが、まさにそのとおりだと思います。鞠智城を共通の話題にするため 探すことがかなり重要な意味を持っています。先ほど中村さんが、文献のほうではこれ以上手が出せ だ、もう一つお願いしたいのは、やはり池の中が掘れるんだったら掘っていただきたい。文字資料を には、そのような調査……土器でもいいし、木でもいいし、何でも構わないんですが、字が書いてあ それから、現場に関してですが、今回門を掘られるということもすばらしいことだと思います。

が必要かなと思います。ぜひとも、 文化庁がどのように言うかわかりませんが、やはりそのような調査を念頭に置いて進めていくこと 門の後の調査で結構ですからお願いしたいと思っています。

門で出土する遺物を考えると、土器が少しあって、瓦が少しある

の人は捨てた物かもしれませんけど、さまざまな遺物が出土する可能性はあるかなと言えましょう。 かということになりそうです。一方、池のほうだといろいろ、私たちにとってはお宝というか、当時

先ほど途中で申し上げましたけども、熊本県教育委員会では、公募して、若手の研究者の鞠智城

係の研究に対して研究助成を行ってきました。これは、今の蒲島郁夫知事さんの指示で予算が増えて、

と思います。では、仁藤さん、お願いします。 で公表して、誰でも若手の論文を見られるかたちになっておりますので、ぜひ一度見ていただければ こともありました。これは毎年、『鞠智城と古代社会』という冊子にもしていますし、 く広がるといいましょうか、新しい新鮮な視点からの、私たちも気が付かないような指摘が出てくる 一人五〇万円の研究助成を今年は四人の若手の方に、出して頂くということです。研究の裾野がすご ホームページ

仁藤: 今日は天武・持統期の鞠智城、および山城体制は、どのように外在的条件により位置付けられるの 例えば兵舎とか、八角堂とか、そういうものも今日の議論の中でも微妙に評価が変わってくるのでは うに見えるのかという、そういう報告をしたつもりです。報告書なども拝見しましたが、建物 かというところを、大宰総領制とか外交関係の変化、たとえるならば外堀から見たら本丸はどんなふ の評価、

ないかとも思いますし、さらには、今日全然議論にはなりませんでしたけど、奈良時代の在り方、

んまり遺物が出てない、生活感がないということを、どのように評価していくのかも気になりました。

これまでの議論で、平安期の史料として四つぐらい史料が残っているんですが、私が少し気になっ

パネルディスカッション

存在になってるのかもしれないとか、いろいろ考える余地がありまして、特に奈良時代以降の鞠智城 みたいなものを呼び起こすような対象として、新羅の海賊とかということがあるんですが、白か黒か の評価っていうのはまだまだ議論の余地があるのかなと思いました。以上です。 というつもりはないんですけども、例えば兵庫が鳴るというのも、ある意味レガシーとしてそういう にシフトしているのか、それとも、 ションかもしれませんが、お米を貯蔵しておく地区のようなニュアンスも強くあって。そういうふう てるのは、「何々城院」と書いてあって、お城のままではないことが気になりました。表現のバリエー 兵庫が鳴るというような軍事的な危機といいますか、 対外的危機

倉の屋根の茅を鳥がついばんで行ったという話もありましたね。赤司さん、お願いいたします。 して受け止められて、六国史の、『日本三代実録』等に記載されているということですね。また、 九世紀の史料に鞠智城の兵庫の鼓が自動的になった、それは対外的な危機に警鐘を鳴らすサインと 米

赤司:

とに敬意を表したいと思っています。これからのことでのアドバイスということですが、まず経験と

まず、熊本県がお話しになった鞠智城の特別研究事業等で、古代山城そのものの裾野が広がったこ

北側は一 の報告では、土塁線は不確定でした。ところが、その後のある段階から二重という解釈が流布しまし それは大野城の土塁線のことですが、 一重ではないのです。戦後に土塁線を調査された九州大学の鏡山先生が出版された昭和 南北が二重の土塁になっていることが定説になっていますが、

曖昧だったところも土塁として認定したのです。そうなるとこれ以降は地図に土塁線が実戦で明確 せて来ました。そこで、大野城全体を保護するために指定範囲を拡張したのですが、その根拠として、 た。そこはしょうがない事情もありました。実は昭和四○年代に大野城の山麓にも開発の波が押し寄

引かれますので、誰も疑わなくなるのです。

だと思います。今日の話でも土塁の完成と未完成という、つまり全周していたかどうかも含めて新し **塁の内側に三か所確認されていますが、外側は皆無です。ではどのようにして城内に入ることができ** い知見が得られると思います。 チ調査という土塁の一部を掘り下げる手法ではなく、表土を除去して長い範囲で検討することが大切 るのかという摩訶不思議なことになるのですが、誰も疑っていません。このようにかつて解釈された 保護のためにはやむを得ない面もあるのですが、やはりおかしなところがあります。城門は二重土 調査研究の進展に合わせて常に見直すことも大事だと思います。また、 土塁の調査はトレン

創生館とで学術研究交流協定を結んで、力を結集して古代山城の研究を進めるというのも、これから 国立公州大学校博物館と学術交流協定を締結しました。それはやはり単独では調査研究も進まないで それから最後にお願いなのですが、実は一昨日まで韓国に行っていて、百済山城の研究で知られる 資料の相互貸借の点でもメリットが多いと思います。 是非とも、私どもの博物館と鞠智城温故

の一つの手ではないかと思い提案したいと思います。

佐藤 ぜひ交流協定、 前向きに進めていただけるとありがたいと私も思います。向井さん、お願いします。

向井 く分からなくて困ってらっしゃるかなと思うので、是非、城門や外郭線の調査・整備を進めていって した。それで城門の調査が開始されるということで、特に外郭線などは、見学に行かれた方も多分よ 私も鞠智城の調査が、一〇年ぐらい前になりますか、ちょっとストップしてしまい心配しておりま

呼んでいただいて、特に八角形の建物などをテーマにやったら面白いんじゃないかと私は思っており それともう一つは、鞠智城のシンポジウム、長年の夢だと思いますが、韓国などの海外の研究者を

いただけたらなと思います。

以上です。

ありがとうございました。では、中村さん、お願いします。

府から大野城を抜けて反対側の宇美まで、十数キロ歩いたことがあるんですけど、日本の山城という と休憩中に向井さんと『アンゴルモア』という漫画の話をしていたのですが、守りに堅くて、今日赤 のは鞠智城も含めてどうも広い。守りに堅いなというふうにはずっと思っていたんですけど、ちょっ 今日もいろいろと勉強させていただいたんですけども、私自身も鞠智城に複数回行かせていただい 韓国の扶蘇山城とか、公山城とか、ああいう所も見てはいるんですけど、学生時代に歩きで大宰

今日話題には出なかったんですけど、肥前国の国府が、平安時代にあった建物のレベルは悪くなる

司さんのお話を聞いて、備蓄とかも需要だということを伺って、確かにそうだなと思いました。

銅鑼(どら)っていうのは軍団を動かすのに必要なので国が管理するんですけど、そういったものと かったということなので、終わったあとは、使わなくなったあとは持ち去ったんだろうなというふう かも含めて管理する場所として機能するものだったのかなと思うんですが、実物は一つしか残ってな とか持って行かなきゃいけないんですけど、武器と、あとは鼓が鞠智城で、名前出ますけど、鐘とか、 **ういう意味で、五十嵐さんが専門なんですけど、軍防令なんかでも、基本的な武器は百姓が自分で冑** よくなってくるようなものもあるので、同様に国府が広がるのかなとちょっと考えたんですけど、そ んですけど、規模自体は大きくなるっていうのも、おそらく備蓄する場所がわざわざ山じゃなくても

きてるので、鞠智城もぜひ。これはほんと天に任せるしかないんですけど、木簡とか出土文字資料が 州ではだいぶ出てきましたけど、国分松本だったり、佐賀の中原遺跡もそうですし、出る所には出 一つ、やはり注文というわけじゃないんですが、これは運でしかないと思いますので、最近、

に思うんですが。

ませんけど、出てくればいいなというふうに願って、また次年度以降頑張っていただければと思います。 けでもすごいうれしいなと思いますので、発掘される方にはぜひ祈りながら、祈れば出るかは分かり 私もここの古代学研究所の仕事で文字瓦を数年やらせていただいたので、瓦に文字が刻んであるだ

確かに、出ると思って掘らないと出ないんですよね。では、五十嵐さん、お願いします。

五十嵐

ので、

熊本県をはじめ関係者の皆さまにお礼申し上げます。

かったですし、 私は鞠智城跡の特別研究に採用していただいて、それがなかったら鞠智城に関心を持つことはな 古代山城も勉強してなかったと思いますし、 今日ここに座っていないということです

す。 す。 うことで、今後の発掘に期待したと思います。あとは、第Ⅳ期の機能再開の時期ですね。 収形態については明確にいわれておらず、私はずっと疑問に思っていますが、それも先ほどの貯水池 能が低下していますが、その第Ⅳ期どうしてまた機能を再開したのかも結構重要な論点としてありま の発掘ではないですが、木簡なり出土文字資料、色々な遺物が出てきて分かることもあるのかなとい ていたのかは結構大事な問題であって、鞠智城の兵站機能・倉庫機能は広くいわれておりますが、 ますと目に見えないかたちで西海道を軍事的にも非軍事的にも広く支えていた重要な施設だと思いま ではないかと、 鞠智城は本当に史料がなく、ややもすれば検討の俎上に上らないことにもなり、機能していないの 先ほど私のコメントの中でも述べさせていただきましたけども、やはり米穀をどうやって徴収 例えば8世紀末の肥後国の上国から大国への昇格によって、国司の人員も増えますので、 高く評価されないことにされがちなところもあると思います。しかし、色々と見てい 第Ⅲ期は機 鞠智城 徴

ありがとうございます。もちろん肥後国とも関係するし、大宰府とも関係するし、律令国家とも関

司みたいなものも派遣されていたことが想定されるわけですので、そういったものも含めて考古学と

文献史学を連動させて研究が進めばいいかなと思っております。

係するということだと思います。それでは、池は発掘できませんかという質問があったのですけれど

矢野さん、 最後に、鞠智城のこれからについてお話しいただけないでしょうか。

矢野: 五,三○○平米という南北に長い池なんですけれども、最終的にせき止める部分に、 おそらく木簡

が集積してるだろうということで、平成20年頃に調査を実施しております。 結果的に、木簡は出なかっ

そうした技術指導に来た高官が懐にたずさえて現地入りし、最終的に池尻が決壊すると城として機能 で、『日本書紀』に百済の亡命高官の指導により城が造られたという記述から、想像を膨らませれば、 池岸の部分に土砂で覆われたようなかたちで見つかっております。 おおよそ7世紀中頃で、それで朝鮮半島、特に百済地域で制作された可能性が高いということですの たんですけども、そこで出ましたのが、銅製の菩薩立像。これは青灰色の水性粘土層の中ではなくて、 ですが、それに匹敵するほどの仏像が出たということで、非常に喜ばさせて頂きました。 私も当時はほんとに木簡を見つける思いでやってたんですけども、 本来はがっかりすべきだったん 制作年代が

まえて研究していければなと思ってるとこです。 はなくて、もう少し違う見方をしたほうがいいよというご意見をたくさん頂きましたので、それも踏 をしていきたいというふうに思っておりますし、また、本日の議論の中で、やはり県としての見解で を失うということで、あえてそこに埋めたのではないかなという風に当時は思った次第でございます。 先ほど先生方からのお話の中で出ています、城門ですとか、貯水池ですとか、そこはしっかり調査

最近私が意識してるのは、 鞠智城という、当時の中央政府の出先機関が、その地に設置されたこと

出来るのではないかという風に考えているところです。 が地域社会にどういう風に影響を与えていったかなども、 周辺の遺跡を調査する中で、 鞠智城も評価

今 日

こういうシンポジウムの機会を持てるとありがたいと思っております。本日は、午前中から長時間 いろ話が広がって、古代史の謎が一つずつ解けていくということがあると思っています。ぜひ、また わたりお付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。それでは、これで終わらせてい のこの時間だけではとても議論を尽くせませんし、まだまだこれから新しい発見も見つかって、 ありがとうございました。鞠智城や古代山城を巡っては、まだまだ色々な課題がありまして、

ただきます。

いろ

平成二九年度 鞠智城・東京シンポジウム二〇一七 鞠智城跡

その歴史的価値を再考する一

平成二九年度 鞠智城・東京シンポジウム二〇一七

鞠智城跡 その歴史的価値を再考する

、開催日時等

日時:平成三○年一月二八日(日)一三時○○分~一七時三○分

場所:明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール(東京都千代田区神田駿河台 一一一)

主催:熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援:明治大学博物館 明治大学社会連携機構 熊本県文化財保護協会

二、講演等プログラム

・基調講演「古代山城の保存と活用」

佐藤 正知(文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官)

• 講演① 「列島古代史における鞠智城」 吉村 武彦 (明治大学名誉教授)

• 講演② 「文化遺産としての鞠智城」

・パネルディスカッション 舘野 和己(奈良女子大学特任教授)

コーディネーター

佐藤

信(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

パネラー 舘野 吉村 佐藤 武彦氏 和己氏 正知氏

木村 龍生 (熊本県教育委員会)

シンポジウム概要

主催者あいさつ

189

基調講演「古代山城の保存と活用」

神籠石

199

古代山城の保護 史跡指定の歩み

207 204

天智朝の山城

211

明治大学文学部教授・日本古代学研究所長

熊本県教育長 石川

宮尾千加子

佐藤 正知

197

193 190

日出志

古代山城の保存と活用 神籠石系山城の位置づけ

212

218

六 Ŧ<u>.</u> 四

演① 「列島古代史における鞠智城」

はじめに 223 二.古代山城の諸形態 一.これまでの研究を問い直す

224

(1) 朝鮮式山城と神籠石

225

(2) 古代山城の種類 山城の種類 227

(3)「総領」と「大宰」―狩野久説の批判的継承 (4) 山城築城の技術者 「総領」「大宰」とその性格 瀬戸内と大宰府管内の山城 230 「総領」「大宰」と古代山城 239

233 237

243

 \equiv

鞠智城をめぐる諸問題 筑紫大宰と鞠智城 241 大宝令の施行と鞠智城

> 吉村 武彦

221

はじめに 248

一・鞠智城の成立と存続

鞠智城の終焉以後 249 249

鞠智城跡の米原長者伝説 251

平城京との比較

260

鞠智城跡の再発見と調査・研究 260

パネルディスカッション

263

六 <u>Fi.</u> 四

文化遺産としての鞠智城跡

261

講演② 参考資料

付

録

講演① 基調講演 (佐藤 (吉村 (館野

シンポジウム次第

武彦) 和己) 正知)

51 67

75

館野 和己

247

【平成29年度鞠智城・東京シンポジウム 資料編】

まとめました。

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末に

主催者あいさつ

主催者あいさつ①

熊本県教育長 宮尾千加子

シンポジウムの開催にあたりまして、主催者として、ご挨拶をさせていただきます。 皆さん、こんにちは。ようこそお越しくださいました。まだまだ本当に寒い中、ありがとうございます。

にお越しいただいております。ありがとうございます。また、講師の皆様方におかれましても、お忙しい中、

本日は、大変お忙しい中、来賓として、衆議院議員で、財務副大臣の木原稔先生をはじめ、たくさんの方々



ご出席いただきまして、厚く御礼申し上げます。 熊本地震からもうすぐで二年が経とうとしております。これまで、熊本県の

言葉、本当にありがとうございます。皆様方のおかげで一歩一歩、復旧・復興 熊本地震からの復興・復旧に向けて、たくさんのご支援やあたたかい励ましの

ウムをこの明治大学で開催することができました。本当にうれしく思っており 学研究所をはじめ関係者の皆さまのご支援とご尽力のおかげで、このシンポジ に向かっているところでございます。そしてまた、今年度も明治大学日本古代

今年度は、 鞠智城に関しまして、うれしいニュースが二つあります。一つ目

歩、 の代表であることが全国的に認められることとなりました。この二つのことにより、 このことにより鞠智城が優れた文化財、史跡であること、著名な歴史の舞台であること、そして時代、 た。二つ目は、財団法人日本城郭協会により鞠智城が「続日本一〇〇名城」に選定されたことでございます。 菊池川の恵みに育まれた米作りによる豊かな生活が、鞠智城跡を含む三十三の貴重な文化財を生み出しまし 産に認定されたことでございます。この流域は、二千年にわたる、米作りの大地の記憶が受け継がれており、 は菊池川流域が「米作り、二千年にわたる大地の記憶~菊池川流域・今昔『水稲』物語~」として、 高まったものと思います。 鞠智城の価値はまた一 日本遺 、地域

ものと思います。 かにしてきたところでございます。少しづつではございますが、そういった取り組みが実を結んできている はその成果を報告書にまとめ、講座やシンポジウムなど、様々な機会を通じて、鞠智城の歴史的価値を明ら 熊本県では、 情勢のなかで、大和朝廷によって築かれた古代山城で、全国有数の重要遺跡として高く評価されています。 さて、鞠智城は多くの皆様方がご存知のとおり、今から約一三五○年前、 昭和四十二年に始まった発掘調査や研究を通して鞠智城の構造解明を進めるとともに、近年で 七世紀後半の激動する東アジア

って存続した鞠智城について、活発な議論がなされるものと期待しております。今回のシンポジウムを通じ 本日のシンポジウムにおいては、『鞠智城跡~その歴史的価値を再考する~』と題して、約三○○年に亘 **鞠智城に関する理解と研究が進み、さらに歴史的・学術的価値が高まり、多くの皆さまに広く、さらに**

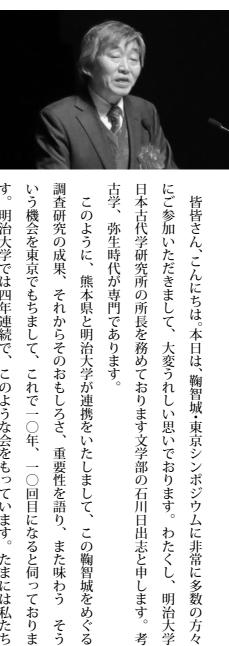
知っていただくくことを願っております。

はどうぞよろしくお願いいたします。

結びに、本日ご参加の皆様方のご健勝・ご活躍を心からお祈り申し上げまして、挨拶といたします。 本日

主催者あいさつ②

明治大学文学部教授・日本古代学研究所 石川日出志



にご参加いただきまして、大変うれしい思いでおります。わたくし、明治大学 皆皆さん、こんにちは。本日は、鞠智城・東京シンポジウムに非常に多数の方々

古学、弥生時代が専門であります。

調査研究の成果、それからそのおもしろさ、重要性を語り、また味わう そう

このように、熊本県と明治大学が連携をいたしまして、この鞠智城をめぐる

す。明治大学では四年連続で、このような会をもっています。たまには私たち いう機会を東京でもちまして、これで一○年、一○回目になると伺っておりま

のほうが熊本県におじゃまして、語りたい、言いたい放題をする、こういう交流も重ねているところであり

の者がいっしょに集まって、古代の日本列島に生きた人々の有様を、姿をより鮮やかに描き出したいという ちは考古学、古代史学、古代文学、それから民族学、二通りのみんぞく学がありますが、いろんな学問分野 私ども明治大学日本古代学研究所はどんなところなのかということを簡単にご紹介させてください。 私た を語る、アジアを語る、世界を語る、その中で日本を知るということであります。 あります。それだけでなくて、空間的にもより広い視野をということを心がけています。常に日本列島全域 さらには海外の文化、歴史の受け止め方がまったく異なる世界で研究を進められた方々との交流も重ねなが ょにやろうという場を作っているわけであります。もちろん、我々、大学だけではダメですので、日本全国 で気づかない。それではいかんということで、違う目で日本の古代世界を探求している者どうしが、いっし まにか周りが見えなくなってしまうということがある。「井の中の蛙」現象が起こるんですね。 より広い視野を確保して研究を進めよう、新しい研究の方角、方法、方策を切り開きたいということで 研究者はどうしてもより深い井戸を掘りたい、井戸をどんどん、どんどん掘ると、いつの しかも自分

の地域の実情にあわせて古代世界、人々をみなければいけない、というふうに考えています。 往来を始めます。そこでもまた大陸とのつながりというのが地域ごとに違うわけです。ですから、それぞれ す。そこに、 が複雑に入り組んでいまして、非常にそれぞれの地域に魅力的な、 日本列島といいますのは、実は狭いというふうに言われますが、南北、東西に非常に長く、そして山、 旧石器、 縄文時代以来の特色ある文化、人々が生活しているわけです。弥生時代以降、大陸と 個性的な生態環境が出来あがっておりま 海

ことで、共同で研究を進めております。

るというふうに思っております。

価値を語るというディスカッションをしていただくことになっています。 東京大学の佐藤信先生に司会進行、コーディネーターとしてお勤めいただいて、存分にこの鞠智城の魅力 す。そのあと、私ども明治大学の吉村名誉教授、そして奈良女子大学の舘野先生にご講演いただき、そして 最先端で、ずーっと長いことご尽力された方であります。そういう眼から鞠智城の魅力を語っていただきま 頭に文化庁の佐藤先生から基調講演をいただきます。日本全国の歴史遺産、 本日は、 「鞠智城跡~その歴史的価値を再考する~」ということで、少し堅いタイトルでありますが、 史跡の調査、 保護、 保存活用 冒

す。私も皆さんといっしょに味わいたいと思います。 七時三○分までの長丁場であります。しかし、おもしろいことがいろいろと展開するであろうと思いま

いただいて、 京から一時間ちょっとで熊本空港に着きます。そこから三○分で鞠智城に参ります。ぜひ鞠智城にもおいで 鞠智城もたぶん非常に寒いと思いますが、暖かくなって春の芽吹きが感じられるようになると思います。東 なお、最後に、今日はとても寒いです。しかしもうすぐ春がきます。春になりますと、暖かくなりまして、 春とともに鞠智城の壮大さを是非満喫する、そのようなことを考えていただけるとありがたい

ちょっと長くなりました。今日は一日、よろしくお願いいたします。

基調講演

「古代山城の保存と活用

た。 佐藤 正知(さとう まさとも) 講演者紹介

静岡大学大学院修士課程を修了。静岡県教育委員会文化課等を経て、文化庁文化 調査官。伝統文化課文化財保護調整官および熊本城復旧総合支援室室員を併任。 財部記念物課文化財調査官として全国の史跡の指定等に従事。現在は同主任文化財

特別史跡熊本城跡の保存活用計画 の策定等にあたる。専門は日本古代史。

基調講演「古代山城の保存と活用」

文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官 佐藤 正知

の保存活用ということを仕事にしております。私のそうした仕事に関わることを紹介しながら話を進めてい 機会を与えていただき、本当にありがとうございます。私は全国を駆け回り、史跡の指定であるとか、史跡 只今、ご紹介にあずかりました文化庁記念物課の佐藤正知と申します。本日は、このような大きな講演の



きたいと思います。 念」には「かたみ」というルビが振ってあります。朽ち果てることを免れ、 向かいます。そこで覆屋に護られた金色堂をみるのです。覆屋によって保護さ 年ぐらいのかたみとして存在するというのです。現在の覆屋は鉄筋コンクリー と古くからありました。江戸時代、松尾芭蕉は松島のあと、石巻を経て平泉に なって使われるようになった言葉です。しかし、「記念」という言葉自身は、もっ ト製ですので、芭蕉がみたのは、その前のもので、金色堂の北側に移設されて れ、「千歳の記念とはなれり」というふうに、『おくのほそ道』に記しています。「記 私は記念物課というところにおりますが、記念物という言葉は明治時代に 千

何を将来に残していくのか、という仕事をしているというふうに思っております。 います。「記念」は「かたみ」であるとか、「思い出」という意味ですから、私はわが国の思い出係として、

は全国を飛び回って、鳥やカモシカなどの保存に奮闘している、ということになります。 おります。芸能界の「いきものがかり」は放牧宣言をして今ちょっと休んでおりますが、こちらの生き物係 とか、動物などを対象にしております。私が思い出係ならば、彼らは生き物係だというふうに、私は言って 記念物課には、史跡・名勝・天然記念物という、各分野の専門家がおります。天然記念物は岩石とか植物

務局の皆さんに大変ご迷惑をおかけしてしまいました。この場をお借りしてお詫びしたいと思います。 本日はレジュメのほかにパワーポイントも用意してまいりました。ただ、原稿の提出が遅れてしまい、

事

一,神籠石

す。ただ、築城時期がみえないので、この鞠智城がいつ築城されたのかということが、学会の大きな問題に ので、百済の亡命官人の指導のもとに造られた大野城、基肄城などとともに朝鮮式山城に分類されておりま 系山城」と呼んでおります。この二つがあるということは有名な話であります。鞠智城は文献に出てきます 『日本書紀』などの文献に登場するものを「朝鮮式山城」と呼んでおり、文献に出てこないものを「神籠石 さて、「こだいさんじょう」とか、「こだいやまじろ」と呼称されているものには、二種類あるんですね。

なっているわけです。

は、 ころに本殿があります。 手前の鳥居をくぐって坂道を上り、 良大社縁起』と呼ばれているものの全体です。 す。これ(写真1)が高良大社が所蔵する『高 りしてきて、皆さんに見ていただいておりま のもとになったところの話を紹介します。 せる名前でありますが、この 大したのが、次の写真(**写真2**)です。ここに 久留米市の教育委員会からスライドをお借 右側の真ん中付近を拡 「神籠石」 番高いと の名前 今日

神籠石」というのは、

何かロマンを感じさ

おります。そこでは、俗に蓮華石と呼ばれているけれども、そうではなく、神籠石なのだというふうに書か ましたから僧侶がいたのです。江戸時代の終わりごろの文献には、 ばった石が並ぶものです。江戸時代の貞享二年(一六八五)に、寂源という僧侶が、 すと、右手が谷になっておりまして、石列が巡っているんです。高良大社にある石列は一mぐらいある、 石列を掘り起こしたのです。 「神籠石」と書いてあります。坂道には参詣する人たちが描かれていて、石が並んでいます。 今は高良大社と言って神社でありますが、 石列のことを神籠石というふうに呼んで 江戸時代においては神仏習合であり それまで埋もれていた 現地に行きま 角



写真 2 高良大社縁起部分(久留米市教育委員会提供)



写真 3 馬蹄石付近現状(久留米市教育委員会提供)

けであります。

だわけです。神籠石系の山城の名前

0)

される遺跡を神籠石というふうに呼ん

列を神籠石とよぶと考え、それに代表

もとは、久留米の高良大社にあったわ

を根拠に、

明治時代の学者たちは、

石

れています。そうした江戸時代の文献

のはどうも別なものだということがわ

ますと、この神籠石と蓮華石というも

ですが、もっと古い文献をみていき

と呼んでいます。どうもこれを神籠石と呼んだのであり、 ているのです。絵の位置から撮った写真が次の写真3です。神籠石は大岩の位置だということがわかります。 かります。この写真(**写真2**)の神籠石は道を横切る石列を指しているのではなく、左手の大きな岩を指し ります。しかし、次第に、神仏習合でありましたけれども、蓮華石という仏教的な要素をできるだけ排除 高良大菩薩が神馬に乗ってやってきたときに、その馬の蹄の跡が大岩の上にある窪みなのだといい、 列石をいう蓮華石とは別のものだということにな 馬蹄

たいという動きが出てきたのです。明治の神仏分離の前に江戸時代の終わりにはすでにそうした動きがあっ

はない、列石が巡っているのは、まさに高良大社がそうであるように、神の領域を示す装置だと、山城説と す。高良山神籠石だけではなくて、各地に列石が巡る遺跡が発見されます。それは山城である、 列石を指すような言葉になったのです。そうして明治時代の学者たちはそれを採用したということになりま 神社信仰にふさわしい名前だということで、馬蹄石が神籠石の本来の名前であったにもかかわらず、 にある仏の都であるとされました。蓮華石も、 たのです。「蓮華八葉」はたとえば高野山の周辺の山々をそう呼び、蓮の華が八つの葉を広げるような場所 方の神域説というものが対峙することになります。これが神籠石論争と呼ばれる論争なのです。 由緒のある神社であることを主張していくわけです。神籠石は神が籠るというわけですから、 蓮華八葉と同じ意味ですが、その言葉を避けて高良玉垂宮と いや山城で それが 神道

ケノウマ」という鹿毛馬神籠石というのがあるんですけれども、その「カケ」というのも、神籠石の「コウ きたんです。「コウゴイシ」と呼んだり、「カワゴ」と呼んだり、「カゴ」とか、それから後で出てきますが、「カ 今日やっている発掘調査やボーリング調査のさきがけではないのか、という論文を書かれます。そして神籠 に石があると探っていってどんどん見つけ、ずーっと掘っていった。それは古賀さんに言わせると、我々が ども、寂源が石一つを見つけ、そして掘ったんです。そして鉄の錫杖をもって、突いて歩くんです。この辺 石が列石の名前ではないということの証明として、神籠石と呼ばれる石を探すんです。するといっぱい出 とを神籠石と呼ぶのは誤りであることを論証されます。寂源という僧侶が、さっき掘ったと言いましたけれ 地元の古賀寿さんという方が、 昭和四二年に神籠石の研究を行います。江戸時代の文献をみて、 列石のこ

ゴ」という言葉に関係あるんではないかと主張するのです。 それはそもそも、「磐座 (いわくら)」という、

神が降臨する岩で、祭祀の跡であることを論証しました。

ぼ決着がついたということであります。 神域説と山城説というものは明治から大正時代に議論がなされますけれども、それは山城ということでほ

ないかなというふうに思っております。 を明らかにしなければならないということを主張しています。私は、こうした観点は非常に大事なことでは の不徹底なため、空しく埋もれていることが多いのである」と言い、足元の資料を大切にして、 たのではないかという主張なのです。彼は、「しかし、これら地方に遺る記録・文献の類いも実は調査」 とであって、もっと早く地元の文献を解き明かしていたならば、神籠石論争の決着にそう時間はかからなかっ に関わるものだと主張した文献なのですが、そういう山城説は、地元の江戸時代の学者たちも述べているこ 績」、つまりこの古い文献をみていると、すでに山城であったことが言われている。実はこれは磐井の反乱 言っているのです。「神籠石の名称を解く鍵」は、実は足元にあったと言っています。「郷土先人の優れた業 れども、「明治以前の記録・文献の中に」、中央の学者たちが見落としているものが地方にはたくさんあると 私は、古賀さんは非常に大事な指摘をしているんじゃないかなと考えています。レジュメに書きましたけ 地域 の歴史 研究

二.史跡指定の歩

三鷹市です。 保護法にかかわるところは、ごくわずかだったような気がしますけれども、そういうことが、三鷹に行くと の人が、昭和二五年の文化財保護法の成立に大きな役割を果たしました。この山本有三が暮らしていたのが 説をご存じだと思うのですが、その山本有三と、 なのです。その論陣の一番先頭に立った人物が山本勇造という議員でした。皆さんは『路傍の石』という小 できるのかということを、衆議院でも、参議院でも議論をして、議員立法として成立したのが文化財保護法 本が文化国家としてやっていくのに、それを護る法律がなくて、どうして世界に名誉ある地位を築くことが 年にできました。その前の年に法隆寺の金堂壁画が失火によって焼けるということが起こって、 私は文化財の保護を仕事にしておりますけれども、私たちが依拠する文化財保護法という法律は昭和二五 三鷹にいくと、 記念館があります。洋風の建物に山本有三の遺品が並べられています。 同じ読みです。同じ読みだけじゃなくて、同じ人です。こ これから日

他この類の遺跡」となっています。ここに神籠石が出ているのです。この「一」により高良山神籠石などが を読みますと、 記念物の中の一つである史跡を指定するには基準があるんです。表1がそれです。 左側の基準が昭和二六年五月一〇日にできます。基準は、「一」から「九」まであります。 「貝塚、 遺物包含地、 住居跡 (竪穴住居跡、 敷石住居跡、 洞穴住居跡等)、 昭和二五年に法律がで 古墳、 基準の 神籠石その

わかります。

指定されていきます。

では読み込めないのではないかということで、基準を、「古戦場」ではなくて、「戦跡」と変えたんです。「そ というと、鎌倉時代や戦国時代の古いものはいいけれども、新しい時代の、近代の戦跡についてはこの基準 戦場その他政治に関する遺跡」とあるんですね。関ヶ原古戦場はこれで指定されています。けれども古戦場 山城であるということがほぼ確定していますので、基準「二」の城跡で指定をすることになるかと思います。 が出てきたとすると、この基準「一」を使って指定することはないだろうと思います。 にしたんですが、ここにも神籠石がありません。要するに、現段階で、神籠石と同じように列石が巡るもの での指定はやっていますから、神籠石というものが無くなったわけではありません。 石は平成七年に消えてしまったんです。もちろんこれまで戦前から戦後の初期にかけて、神籠石という名称 であります。「一」を見ますと、「貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡」となっています。 なぜ平成七年に改正したかといいますと、わかりやすい例でいいますと、基準「二」に「城跡、防塁、古 平成七年にこの基準を見直ししたんです。表1の右側にあります。「神籠石」はどうなったかということ 神域・霊域を示す神域説と山城であるという山城説が対立したわけですけれども、先ほど言ったように 右側の例示も平成七年 神籠石の性格をめぐっ つまり、 神籠

というのは、

が国 これも「医療・福祉施設」となり、例示には病院なんかが挙げられているわけです。このように基準を見直 .の思い出を将来に残すために、どうしたらいいのかということを考えてやってきたわけであります。 原爆ドームなどの指定をやったということです。基準を見直し、より広く、より深くですね、

それが戦後の「一」にかわりましたので、それを対照させたのが、表3ということになります。 うと、「九」の「貝塚、遺物包含地、神籠石其ノ他人類学及考古学上重要ナル遺蹟」ということで、九番目だっ 名前を使わないで、 神籠石というのまでは、 石は昭和二○年に「九」での指定がなされ、戦後は、昭和二六年から二八年、それから四七年ですね、 ります。ですので、表3をみていただきますと、神籠石と名前がつくのは、「九」の基準でやってきたんです。 たんです。それが、日本の敗戦によってですね、第一の「皇室ニ関係深キ史蹟」は、 しましたけれども、これを見ますと、一番目は「皇室二関係深キ史蹟」でした。神籠石がどこにあるかとい 法」という法律が制定されています。その時の基準がこれです。さっき神籠石は一番目にあったという話を ども、実は記念物の保護に関しては、今から一○○年前、大正八年にその前身の「史蹟名勝天然紀念物保存 いうことで、先ほどの基準「二」の「都城跡」へと移行し、一番目には、さっき九番目にあったものが、移 神籠石というものは、今となっては古代の山城ということになりましたから、城跡で指定すればいいと私 表2は「史蹟名勝天然紀念物保存要目」です。昭和二五年に文化財保護法ができたとお話ししましたけれ 何々城跡という、基準の「二」を適用して指定していることが読み取れると思います。 新しい基準の「一」で指定されたということであります。 その後は、 政治に関する遺跡だと 神籠石という 鹿毛馬神籠

進んでいった。あるいはそういう論争によって注目を浴び、文化財の保護が進んできたということが言える があって今保護されているということがいえるのではないかなと。論争はあったけれども、文化財の保護は 学や考古学の研究が進めば、その性格が明らかになるだろうということで、神籠石という名前をつけて保護 特徴を捉えて、石が並んでいるものを神籠石と呼ぼうということで、「九」に入れたんですね。今後、人類 たら「二」でもよかったことになります。しかし、性格がよくわからなかったので、「神籠石」という形で 戦前の「史蹟名勝天然紀念物保存要目」の「四」で指定してもよかったですし、あるいは祭祀であるんだっ 遺跡かもしれない。一方で山城であるかもしれないということだったわけですね。ですから、山城だったら、 たちは考えますけれども、でも当時はですよ、これが神社に関わる遺跡かもしれない。つまり祭祀に関わる してきたんです。これは、私の感じですけれども、非常に賢明であったと思うんですね。神籠石という指定

三.古代山城の保護

のかもしれません。

昔の人たちは、しっかり実測図を作って、これを保護しているのです。神籠石と呼ばれているほとんどの遺 次(図1)のような図面になっています。石がはっきりしないところは点線で描いているんですけれども、 馬神籠石はやはり石が並んでいるんです。指定は、並んでいる石の両側五メートルづつです。当時の図 一面は、

これまで古代の神籠石であるとか、古代の山城が保護されてきたわけでありますけれども、

飯塚市の鹿毛

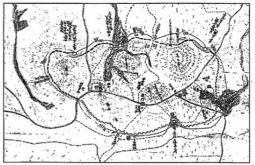
第 10 年 7 月 15 日に、熊毛郡塩田村(現光市)が管理団体に指定されている。

指定された史跡の範囲は、列石や士塁、門や水門など地表に露出している遺情をつないだ城壁外郭

呈していた。その後、昭和38・39年度には、 当時の文化財保護委員会(現文化庁)を主体 城壁外郭線の明確化と各水門所在笛 と目的とした発掘調査が行われている。また、 昭和30年代の末頃には、県道石城山公園線の を受けている。さらに、旧光市と旧大和町が する直前の平成16年6月には、豪西によ て東水門の石塁の一部が崩落したため、平 成17・18年度に国席補助事業として保存権



図1 史跡指定申請時に用いられた地図



鹿毛馬神籠石の指定時の図面

ある時期に内側も指定しようというこ

追加指定がなされます。大半は

図 1 香 フ場の開発の際に、 真中がゴルフ場になっています。 |川県坂出市にある城山という遺跡は 立派な石積みの城 ゴル

真ん中まで指定されているんですが、

劣らないものを持った遺跡であります。ここでは、現在は列石だけではなく、その内側も保護するようにな 見たことがないのではないかなと思うんですが、これはすごい遺跡です。その山城としての風格は鞠智城 うじゃないと、ボールが飛んできますからね。 あります。ですから、そのゴルフ場の許可を得て、あるいは教育委員会と連絡を取って案内してもらう。そ 門や土塁・石塁がしっかりと残っているので、それを測量して、ゴルフ場の開発と併せて指定をしたもので 顔を出すと、 ボールがぴゅーっと飛んでくる、そういうようなところなんです。ほとんどの方は 私が案内してもらったときは、「しばし、ストップ」といっ

た感じで、

戦後、

から、

列石が指定されたのち、

けれども列石の真ん中にこそ本来保護

すべきものがあるはずですよね。

です

跡はこういう形で指定したんです。

だ

てきているということを少し記憶にとどめておいていただければというふうに思います。

城とどういう関係にあったのか、というのは明らかにしないといけないんですが、なかなか難しい問題です。

神籠石系山城は、何年に造ったという文献に記載がないので、これがいったいいつできたのか、

朝鮮式山

ずーっとみていくと、平成二四年に一例あります。これが長崎県の大浦天主堂境内です。教会はこの一例だ けです。では、神社はどうなのかということですね。お寺と神社を比べると、圧倒的にお寺の指定が多いと るものを全部抜き出したものです。たとえば、 た。この表は寺跡と神社、それから教会、それから経塚とか、先ほどの基準でいう、「三」の信仰にかかわ ちょうど一○○年目となりますから、この一○○年の歴史を表にまとめるとなると、大変なことでありまし いうことがわかります。なぜこんなに神社の指定が少ないのか、と思いませんか。 現在の状況を説明しておきます。表4は縦の表にまとめたかったんですが、一九一九年に法律ができて、 わかりやすい教会をみてみます。真ん中あたりの教会の欄を

宮でした。それから四六年には宗像大社境内。先ごろ、世界文化遺産に登録されましたね。それから四八年 **うに著名な寺院が指定されていきます。国分寺なんかはたくさん指定されています。けれども神社境内、** から大正一一年には、 大正一○年が一番最初の指定です。寺院境内で指定されたのは大安寺旧境内という、奈良のお寺です。それ るいは神社の跡なんかは無いんです。神社境内で一番最初に指定されたのは、昭和四二年の鎌倉の鶴岡八幡 大正八年に法律ができて、一番最初の史跡指定が行われたのは、大正一〇年なんです。ここの一九二一年、 毛越寺境内、これは平泉ですね。それから称名寺境内、 これは鎌倉ですね。というよ あ

ども。日本の文化を世界に紹介しようとすると、寺院はもちろん重要ですけれども、 籠石は、高良大社の境内地全域を指定はしていますが、筑後国の一宮である高良大社の神社としての価値を いうことで、史跡指定が進められてきたということになります。最初に話題として取り上げた高良大社 境内は、「武家の古都、鎌倉」に関係する神社です。鎌倉の世界遺産登録はうまくいっていないんですけれ の丹生都比売神社境内は「紀伊山地の霊場と参詣道」に関わる神社でありますし、平成一七年の荏柄天神社 が関係しています。 の指定が多いことがわかります。神社の指定がなされるようになったのは、 には日吉神社という、 史跡の指定を受けていることが、世界遺産登録の要件なのです。たとえば、 比叡山の山麓にある神社が指定されています。お寺と神社を比べると、圧倒的にお寺 一つには、世界文化遺産 神社もまた、大事だと 平成 の登録 あ
神 四年

うことはあるんですが、 でした。私は史跡指定の歴史をたどるなかでこのような問題が存在することをずっと考えてきたのです。神 ありますが、 というものの展開はもう少し別のものになっていた可能性があるのではないかと思うんです。当時、 いうものは官有地でしたから、法で保護する必要はなかったんです。しかも、お寺には瓦があるし、 しようとしたんですね。当時、神社ということの指定をやるということがもしあったとすれば、 明治から大正にかけて、祭祀というものが大事だと考えた人たちは、 神社にはそれがない。瓦の研究は非常に進んでいました。伝承としてずいぶん古い神社だとい 官有地で、 かつ遺物がないということが作用して法による保護がなされてきません 神域説を唱えて、 これを保護 礎石が

きちんと考えるべきじゃないかと思っています。

籠石論争というものもそうした観点から捉え直す必要があるのではないか、 と考えています。

天智朝の山城

鞠智城はいつ造ったかという記録がありません。

などの文献には、白村江で捕虜になって、何年かして戻ってきたというような記録があるので、応援部隊が 江の戦いが行われて、倭が負けてしまいます。応援に行くんですが、負けてしまうんです。『日本霊異記 連れて、そして途中の西日本でも、どんどん軍を集めて、一万余の人間が海を渡っていったわけです。 あるんです。そこの廬原郡というところを支配していた一族だろうと考えられています。静岡からも水軍を 大日本国救将廬原君臣という人物でありました。これは私の第二の故郷である静岡に、庵原というところが 百済復興を支援するために倭は何回かにわたって軍隊を送るんですね。そして、最後送り込まれたのが、

全国どこの出身かということがだいたいわかるわけです。もちろん西日本が中心でありましたけれども、陸

たんです。天智三年に大宰府の近くの水城を造って、その翌年に大野城と基肄城を造りました。なぜ一番の 所から造るんではないか。なぜ造らなかったんだと。最初に、防人と烽を置いて、そうして筑紫に水城を造っ 対馬の金田城が一番最初でもいいだろうというんですね。向こうから攻めてくるんだったら、いちばん近い わけです。そして日本が攻められるということで、城を築いていくわけです。小田富士雄先生は、だったら 奥国からも行っていますので、これは国を挙げての百済救援であったんですが、唐と新羅の連合軍に敗ける 基調講演 古代山城保存と活用 線である大宰府を守り、高安城を造ってその連関のなかで、全体として都・国土を守るというのが、この一 ちろん大宰府が一番の前線ですから、そこを整備するということが重要であるのはまちがいありません。 という防衛線が築かれるのであって、高安城というのが重要なのではないかなというふうに思うんです。 高安城が第二次だというのは、果たしてどうでしょうか。都を守るために、 生は大宰府の都城制の形成という観点で説明されています。大宰府を防衛するのが第一で、都の近くである 防衛網がそれよりも遠い対馬の金田、それから瀬戸内の屋嶋、そして高安城だったとするわけです。 た。だからその年に水城を造ったということがわかったんです。それで第一次防衛網をつくります。 たんです。それによると、レジュメに書きましたけれども、晩春から夏、五月中・下旬から七月中旬頃でし 盛りをしている様子がわかったんです。その枯れ枝を調べたら、それがいつ伐られたかということもわかっ 発掘をやったんですが、大正時代に描かれた絵のとおり、 わけです。それで第一次防衛網は、大宰府を守る事だと。第一次防衛網という言葉を使うわけです。 前線に城を築かずに大宰府の中心に近いところ、北に大野城、南に基肄城を造ったのかということを考えた 敷粗朶といって、枯葉なんかを敷いて、そして土 小田先生がいう第一次、 小田! 第二次 第二次 前

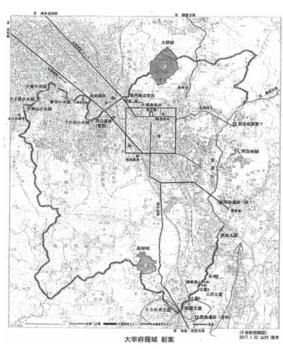
五.神籠石系山城の位置づけ

連の記事なのではないかなというふうに考えているわけであります。

おもしろいのは、屋嶋城です。皆さんにも是非行ってもらいたいんですけれども、屋島の周囲はかつて海

新の成果によると、西辺の土塁ははっきりしないんですが、北側の土塁と東側の土塁ははっきり認定され 百済の都・泗沘とを比較すると扶蘇山城にちょうど相当します。上図ではずーっと土塁が回っています。 ない。だから考古学などで調べていかないといけないということです。 す。最大の問題は、神籠石系山城がいつできたかということでありますが、それについて文献は黙して語ら て一歩前進したんだけれども、次の疑問が出てくるということです。そういう解釈でいいのかということで 決着がつくかというとそう簡単ではない。これがまたおもしろいところですね。一行を読み解くことによっ 研究者もいます。このように、文献に出てこない山城が、朝鮮式山城よりも早くできたんだということで、 けれども、さっき言った、ゴルフ場の城山がまさにそれなんです。そこは山田郡ではなくて、阿野郡になる **う一つの山城があるのではないかというわけです。事実もう一つあるんですよ。文献にはあらわれないんだ** 問題にしました。これおもしろいですよね。たった一文でですよ。山田郡ってあるのは、讃岐国には他にも んです。坂出市です。屋嶋城を造るという時に、すでに城山という坂出の城が出来上がっているんだという 次に示す(図2)下図が大宰府です。北に大野城、南に基肄城が造られます。 田 まさに島だったんです。近年、高松市教育委員会が城門跡を整備したんです。『日本書紀』に讃岐国 .郡の屋嶋城を造ると出てくるんです。研究者は、讃岐国山田郡屋嶋城と、なんで山田郡と付けたんだと 錦江も防御線として利用しています。百済の都市構想のなかで大宰府が造られていくんではないか 大野城は、大宰府と上図 最

ということが言われています。水城の西方ではこれまでも小水城と呼ばれている、谷を塞ぐ土塁が確認され



MES BM

man.

図3 大宰府羅城についての最新説

問題だけではなくて、

いつそれが造られたの

図2 泗泚と大宰府

です。 ら 志岐山城という文献にあらわれない山城があ されています。 認されたものです。 れに関連して、 かということになります。 ないか、 全体を取り巻く防衛線を造ろうとしたのでは ります。大野城や基肄城、 を歩いてその痕跡を探しています。 を張るように造っているんではないかと推定 いる部分がそれで、 んではないかという研究もあったんです。 ていました。さらに全体に土塁が回ってい 阿志岐山城は、 次の図 ということがいえるわけです。 (図3)で筑紫土塁と書かれ 現在、 最近発見された遺跡があるん 筑紫野市の前畑遺跡で確 宝満川も使って、 大野城よりも後じゃな 九州 これは前後関係 阿志岐山城などで の仲間たちが、 ここに阿 防御 だか Ö 山 線 る

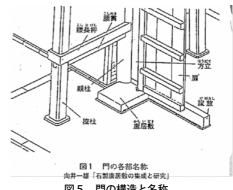


図4 古代山城の分布

があったんですね。 取り組んでいることを紹介しますと、 たのではないかということが言われています。 れるのですが、 次(図4)のように、 づらかったので、みんな石に着目してきたん ですので、それが土塁であるかどうか分か けがあったわけではなくて、そこの上に土 土塁で囲まれるわけで、 大宰とか、 とが指摘されています。 ものの支配領域に対応するように分布するこ の総領とか、筑紫の総領とか、 かというのが今議論されているのです。 これらを考えるうえで、研究者の皆さんが .城を地図におとしていくと、示している 総領と呼ば 彼らが・ ただ、土塁というのは 吉備の総領とか、 山 れる広域行政官 列石というのも石だ 城 七世紀の後半には、 の経営をやって 大宰とかいう 城跡 が置 周 かか ŋ 塁 防

合には、この図(図6)のように石でできてい ちゃったんですけれども、 合と石の上に乗る場合があります。 るわけですが、これは地下に埋もれる掘立の場 遺構・遺物が注目されています。次の図 は門の図です。右が扉。 各地のお寺にあるんですが、 現在は唐居敷という 真ん中に柱を立て 古代山城の場 現在は木製

図



門の構造と名称 図 5

ずーっと掘り

石を探して、

ように地下の

です。寂源の

遺 です。その結 出してきたの う列 跡 神籠石と に 石 な 0)

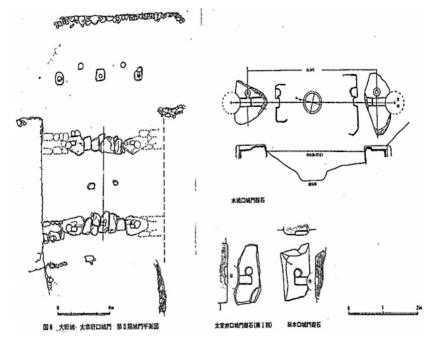


図6 城門と門礎石(唐居敷)

石に少しくぼみをつくり石に柱を立てるようになるということが大野城の事例から言えることになります。 掘立ですね。丸い柱の掘立。礎石立ちのほうがこの場合は新しいことになります。新しい時期になると、 て、ここに方立がある。これが軸摺穴という扉が据えられるところ。これは礎石立ちなんです。さっきのは と回るので、軸の部分は穴を掘って、据えつけなきゃいけないんですね。左図の礎石をみると、ここに柱があっ すよね。また、その柱と扉との間に隙間が出来ないように方立という板を立てるんです。さらに扉がくるーっ るんです。真ん中部分を拡大してきますと、右下のように、柱を立てるところに半円の刳込みができていま 基础城东北州改石 図 7 門礎石 (唐居敷) 言った方立の穴はないので、大野 円形にちょっとくぼんでいる、 に、これが軸摺穴です。扉が立 形の礎石になっています。二・八 鞠智城は次の図 こにくぼみがあるので、ここに柱 分かりづらいのですが、やっぱり た場所です。石の両端はちょっと m を立てている。だけれでもさっき あるんですかね、三m弱 (図7) のような の間

す。 ています。 城よりも新しいのだという意見と、それはバラエティーの問題であって時期差ではないという意見が分かれ が大野城と基肄城と同じ時期にやられるので、同じころ造られたのではないかというふうな研究がありま いずれこういう研究により謎に迫ろうとしているのが現状だということになります。 瓦も基肄城や大野城と同じような古さの瓦が出るので、やっぱり単に記録が漏れただけで、 修理

六.古代山城の保存と活用

この史料(史料1)は基山町にある基肄城に関

うのです。喪の儀式が終わると、 に、 官人たちが基肄城に登って望遊したというんです の歌は、大宰帥である旅人の妻が亡くなった時 つつ、考えていくべきであろうと思うんです。こ ていません。でも、私はこういうものも参考にし 残念ながら、 にという、和歌が『万葉集』に出てくるんです。 わる史料です。「記夷の城」に登って望遊する日 勅使が都からやってきて、喪を弔い、 鞠智城は『万葉集』にとりあげられ 勅使と大宰府の 物を賜

顕

今もかも大城の山にほととぎす鳴き響むらむ我れなけれども

の花散る里のほととぎす片恋しつつ鳴く白しぞ多き

大伴坂上郎女、筑紫の大城の山を思ふ歌一首

翼 ほととぎす来鳴き響もす卯の花の伴にや来しと問はましもの式部大輔石、上堅魚 朝臣が歌一首 を 大宰帥大伴卿が和ふる歌一首 件 郎女、病に遇ひて長 逝す。その時に、勅使式部大右は、神亀五年 戊 辰に、大 宰帥大伴、鄭が妻大右は、神亀五年 戊 辰に、大 宰帥大伴、鄭が妻大 物を賜ふ。その事すでに擧りて、駅。使と府の諸輔石上朝臣堅魚を大宰府に遺はして、喪を祀の辞せて すなはちこの歌を作る。 卿大夫等と、ともに記夷の城に登りて望遊する日に、

万葉集にみえる古代山城

史料 1

ね。 こに腰かけてやり取りをしたと考えるよりも、そこには、建物があったと考えた方がいいんじゃないかなと 望遊するということは眺めが良いということです。こういう歌のやりとりをする時に、ゴザを敷いてそ

いうふうに思っています。

の場は体制側にあることが多かったが、性格としては在野的な傾向が強かった」と書いています。『国史大 ぐれた明敏な頭脳と頑強な身体とによって生まれた。性質は一面豪放であるとともに一面細心であり、 坂本太郎先生という古代史の先生は、黒板先生のことを次のように評しています。「多方面の活躍は人にす けではなくて、古文書の類を含めて、そういうものを研究していかないといけないというふうに思います。 んです。だから、私は古賀寿さんのことを冒頭で紹介したように、地域で埋もれている、それは土器や瓦だ です。ここで言う遺物は、建造物、古文書、古記録、そういうものを全部ひっくるめて遺物だと言っている というと私たちは土器や瓦をイメージしますけれども、この先生はそんなちっぽけなことを考えていないん のに、一番中心になった人物は黒板勝美という人物です。この人は長崎県波佐見町の出身です。これは吉村 ているかというと、「史跡と遺物というのはいっしょに保存しないといけない」と言っているんです。 私の話はいよいよ最後になりますけれども、あの史蹟名勝天然紀念物保存法という大正八年の法律を作る のなかの文章ですが、黒板先生も、また坂本先生もすごく人間味のある感じがしませんか。坂本太郎 佐藤信先生の先生の先生の先生くらいにあたる方ですけれども、この方がですね、どんなことを言っ 遺物 活動

先生は私の第二の故郷である静岡県の出身であります。

です。戦前の「保存要目」という指定の基準には軍事という言葉があったんですけれども、戦後は軍事とい られています。私はそういった活動も応援していきたいと考えています。 古代山城は軍事的な記念物だと考えています。唐がいつ攻めてくるかわからないというなかで、造ったん

う言葉が消えてしまうんです。なぜかっていうと、平和国家にはふさわしくなかったんじゃないかとも思う いうことを深く考えて、これからの平和国家を築いていく材料にしていかなくてはいけないというふうに んですね。だけれども、私たちはやっぱり日本の歴史において軍事というものがどういうものであったかと

思っております。ご清聴ありがとうございました。

「列島古代史における鞠智城

講演者紹介

文学部長・大学院長を歴任。現在、 東京大学助手、千葉大学専任講師・助教授・教授を経て、明治大学文学部教授・ 東京大学文学部国史学科卒業後、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。 吉村 武彦(よしむら)たけひこ)(明治大学名誉教授) 明治大学部名誉教授。専門は日本列島の古代

「列島古代史における鞠智城」

明治大学名誉教授 吉村 武彦

たかどうか、そういう問題もあります。そのため日本という国号を避けて、列島古代史という言い方にこだ と申します。今日は、鞠智城のシンポジウムということですが、七世紀後半の時期に、日本という国号があっ 皆さん、こんにちは。今、ご紹介にあずかりました、明治大学を退職して二年目になっています吉村武彦



時間的に余裕がなく、文章レジュメは書けなかったものですから、箇条書きの きます。お手元には、鞠智城の東京シンポジウムという史料があるはずです。 が、最後に関係事項の年表を記しています。 わっていますので、「列島古代史における鞠智城」ということにしています。 レジュメと若干の図面、この図面はパワーポイントでも使わしてもらいます 実はこのシンポジウムでの報告は二回目になりますが、報告をさせていただ

ただし、レジュメをあわてて作成しましたので、Ⅰ、Ⅱ、ⅢのところがⅠ、Ⅱ、 Ⅱになっていたりします。そうした間違いもありますので、ご注意下さい。 今回の年表には、前回と違って月まで入れて、年月の年表に作り直しました。

報告は、 パワーポイントを使用しながら話をさせていただこうと思っています。

はじめに

ついて一言話します。 最初に「はじめに」なのですが、サブタイトルにあります「その歴史的価値を再考する」というテーマに 僕が担当するテーマも難しいのですが、歴史的価値を再考する、そして遺産として保

存するということは、 日本国民の課題としてもなかなか難しい内容であります。

実は、こういう時に私がよく話すことは、井上ひさしさんが言う言葉で、「難しいことを易しく、易しい

言って、史・資料が少ないので、面白くするのは難しいですね。ですから、いろんな説がでてくるわけです 葉のようです。実際、古代史を面白くするということは、歴史研究者にとっても重要だと思いますが、正直 ことを深く、深いことを面白く」ということです。彼が戯曲とか、小説を書くときに、念頭に置いている言

が、

結局はその研究者の力量が問われることになります。

最近では、特にメディア関係に多く見られますが、 たとえば志賀島で見つかった金印の問題では、これは本物と言われているが、そんなはずはない。 面白いことになっているようです。僕は、そういう「面白さ」とは違った歴史の面白さを考 通説のアンチテーゼを言えば面白いという風潮があり

えていかなければならないと思っています。

一.これまでの研究を問い直す

今回、 最初お話しをいただいた時に、 やはりもう一度、 これまでの研究をふりかえろうということで、 ま

ず自分で問いをたててみました。

- (1)古代山城の築城意図・形態は同じなのか?
- (2)「朝鮮式山城」と「神籠石」は同じであるのか、設置意図が違うのか?
- (3)百済系技術者が築城すれば、百済系の山城になるのか?
- (4)九州・瀬戸内の古代山城の運営は、 国衙なのか総領(大宰)なのか?
- (5)廃止される山城と、継続する山城があるのはなぜか?

者が築城するというのが、『日本書紀』には九州や長門の山城で記されています。もし彼らが造ったとすれば それから、鞠智城の場合は明白な証拠があるかといえばないかもしれませんが、渡来系、特に百済系の技術 けようとする傾向もあるようですが―と神籠石とは同じなのかどうか。あるいは違うとすれば、なぜなのか。 古代山城を造ったのは、同じ意図から出ているのかどうか。また、 朝鮮式山城―朝鮮式という言い方は避

するのは国なのか、あるいは総領ないし大宰なのか。古代史の研究の中では、総領とは何か、大宰とは何か、 ましたが、彼が強く主張することなのですが、九州あるいは瀬戸内海周辺に造られる古代山城、 それから、 もう一つ、最近は特に狩野久さん、かつて奈良文化財研究所から、文化庁・岡山大学に移られ これを管轄

本当に百済系の山城ができるのかどうか。

うように「大宰」の用法が正しいと思います。 この問題も再検討が必要です。なお、今は点を入れて「太宰府」と言っていますが、古代では筑紫大宰とい 山城を管理するのは、 国なのか、 あるいは国を超えた総領な

のか、という問題もあります。

継続する場合と、廃止される場合がでてくるのか、その理由は何なのかという問題です。 いのです。また九州には神籠石も多いのですが、廃止される場合と継続される場合とがあります。どうして それから八世紀初頭には廃止される山城があります。特に瀬戸内海周辺では、どうも廃止される山城が多

井一雄さんがやっておられますが、新たに鞠智城に限定した文献目録と研究史の整理をお願いしたいと思い ています。研究史も随分あります。こうした研究史の整理は、熊本の方にぜひやって欲しいと思います。 およそこういう五つの問いをだして、これまでの論争を整理するとわかりやすいのではなかろうかと思っ

向

今日は、こういう問いを頭に入れながら、話をさせていただきたいと思っています。

ます。僕も関係する研究論文を全部読んでいるわけでは必ずしもありません。

古代山城の諸形態

1 朝鮮式山城と神籠石

れていますね。こういう図も作成されたということで、時代的背景を理解しておいて下さい。図面では、赤 西日本の古代山城の分布ですが、パワーポイントで図示しましたが、この鞠智城の位置は少しず

が神籠石系で、 ります。 『日本書紀』 に書かれている山城が紫の 钔

にな

式山城とはどこがどう違うのか、という疑問です。 神籠石系と言われている山城ですが、この鬼ノ城と他 岡山大に勤めておられ、 な問題意識をずっと持っておられたようです。 先ほど紹介した狩野久さんですが、特に鬼 鋭い質問を発しておられます。 津山市に住んでおられる関係もあっ 鬼ノ城という、 ノ城については、 い このよう わゆる ヮ 朝鮮

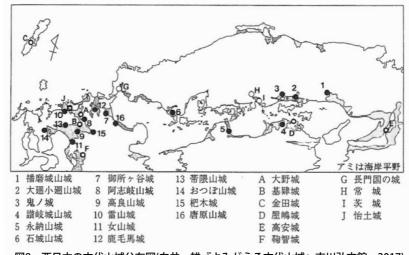
裏の関係は、 洋側を裏日本というのですが、古代では九州島が朝鮮半島な いし中国大陸と応接する表玄関です。そのため、 に ご承知のように、 たの 対外関係では西日本が重要になるわけです。これを図 が、 古代と近・現代では逆になるわけですね。 向井さんが作成した図になりますが、 日本の古代を考える場合、 現在では太平 日本の表と 皆さん 古代

2,

面

のお手元の史料に紹介させていただきました。ここでは、1、

3、4という数字が神籠石系で、A、B、C、Dというア



西日本の古代山城分布図(向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017) 図8

ルファベットの方が、『日本書紀』ないし『続日本紀』に書かれている山城という具合になります。

(2) 古代山城の種類

山城の種類

味になります。それから「瀬戸内の山城」という、西日本には二つの地域的な山城に区別できます。 に限って言いますと、大宰府、大宰府都城というのは、いわゆる九州をさす「大宰府管内の山城」という意 **先ほども言いましたが、今日は時間の関係で、最初に結論的な話をさせていただこうと思います。西日本**

岸にある三尾城を入れてもいいのですが、三尾城の全貌はまったくわかっていません。 なると畿内という概念を使っても差し支えないと思います。大和にある高安城、それから滋賀県の琵琶湖沿 る時代に畿内があれば、 古学では、いわゆる邪馬台国論争と関係して、畿内か九州かという言い方をする人がいます。邪馬台国があ 違いはありません。七世紀に入れば、畿内という用語を使用してもいいように思っていますが、この国の考 実としては。七世紀の半ばの大化の改新詔に、畿内国、ウチツクニがでてきますので、そこから使っても間 次に畿内といいますと、厳密にいえば畿内という言葉をいつから使うかという難しい問題もあります。 近畿地方ないし近畿中央部というべきです。そうしますと近畿地方の山城でもいいのですが、 当然、 邪馬台国は畿内にあることになります。こうした場合は畿内の言葉は使わず 七世紀に 事

そして、広い意味の城では、東北地方にある城柵があります。これは山城だけではありませんが、なかに

があるかと思います。

る山城と、 内海を船で行って、筑紫に着きます。そして筑紫から半島に向かいます。そうしますと、 があります。 このように山城を地域別にわけますと、大宰府 白村江の戦い、 九州にある山城。どうしても朝鮮半島を意識して造られますから、白村江の戦いと山城を一 白村江の戦いをみていきますと、のちの防人のルートと同じですが、 この戦いに敗戦するわけですが、 (九州)、西日本、近畿地方の三種類になるかと思います。 白村江の戦いを含む図面と山城が書かれている図 難波、 瀬戸内の周辺にあ 今の大阪から瀬戸

も提出されています。 今一つはっきりしません。 大宰府都城周辺の山城といいますと、 僕は通説的な朝倉宮でいいという考えなのですが、通説は間違いだという考え方 北部九州の分布図となります。 斉明天皇が構えた朝倉宮の所 在が、 図面化しますと、比較的わかりやすい図ができるかと思います。

瀬戸内の山城は、比較的明らかになってきました。鬼ノ城には数回行っています。 四国側では、今は復元

されました屋島城、 かつて探しに行ったことがありましたが、 その時はわかりませんでした。 永納山では石

おり、また立派な門が復元されています。鬼ノ城には、確か長くかかる時間コースと、短いコースの二つの の列を見ました。 岡 山にもどりますと、大廻小廻山城はまだ行っていません。鬼ノ城につきましては、総社市から本がでて

辺であるとか、 現在では、 四国地方もはっきりしてきたわけですので、どのようなところに山城ができたのか、 あるいは郡衙の周辺であるとか、そういう立地のことを考察できる条件が整っています。 国府 の周

古代山城をめぐるコースがありました。

ました。そのため見ていません。図は山田隆文さんが書いたものですが、まだ外郭ラインというのがはっき 城を探る会の会員だったのですが、まだ踏査できる道というようなものがわからない段階で、途中で断念し 高安城につきましては、僕は千葉大時代に学生諸君と一度踏破を試みたことがありました。 その頃、 高安 れはまさに瀬戸内ルートをどう防衛するかという問題と、関係しているふうに考えています。

ています。 りしない図ですね。これも時期によって、前期と後期の二つあるようです。こういう礎石建ちの建物が見え

す。 今回の山城とは直接の関係はありませんが、東北に城柵というものがあります。日本海側と太平洋側とい 壬申の乱の時には高安城をめぐる戦いがありまして、比較的都との関係で重要な場所ということになりま

うことになります。 これは対蝦夷策ということで問題ないように思います。 律令制(の時期を考える場合、

東

瀬戸内と大宰府管内の山城

北の城柵はおさえておく必要があります。

瀬戸内と九州にもどって、考えてみましょう。 瀬戸内の場合は、 体系的な防御ラインを築いたということ

で、基本的にはいいでしょう。

と思いますが、 細かい意図、 それから広い意味での大宰府管内の場合、 機能とか、 基肄城は大宰府周辺の 役割は違うだろう Ш 大宰府都城 0) 山城と都城を外れる山城があることになります。 203

距離で六二キロメートルといわれていますその大宰府と鞠智城ですけれども、直線

いだろうと考えています。

体的に造ったとみて、

それ

は間違

1

なければなりませんので、もっと時間はかが、実際は古代の場合、古代の交通路を経

大宰府の方では、阿志岐城が地元の熱心

かるだろうと思います。



図9 大宰府管内の山城(小田富士雄『古代九州と 東アジア』 II、同成社、2013)

も関係して、 な方が探されました。 大宰府にも羅城のような外郭を想定されていました。図は、 最近、 大宰府を囲む土塁が見つかりました。 瀬戸内の方では、 長門の山城が、 まだわからないということがあります。 かつて国立歴史民俗博物館におられた阿部義平さ 小田富士雄さんが補訂を加えられた図 阿志岐城と

律令制で整備され、その後に造られたのか。これが一つの大きな問題かと思います。 気にかかるのは、この前畑遺跡がいつできたか。つまり当初、大宰府をつくった時に造ったのか、あるいは このあと土塁を探そうという動きが、 りました。阿部さんが考えた羅城のラインとは、ちょっと東寄りになっています。新聞報道によりますと、 ところが、 前畑遺跡と言われている遺跡で、土塁が造られたことがわかりました。 九州歴史資料館の人たちによって行なわれているとのことです。 図は、 現説資料からと 一番

う問いかけが必要かと思っています。大宰府にこうした羅城が巡っているということになりますと、 造られたのか、大宰府都城を考えるうえで、大きな問題になるのではないでしょうか。 たのか、 に反対の意見もあるなかで、先ずは事実かどうかを確かめることから始まります。ついで当初から築造され ら造られたかどうかも気になります。つまり内陸側の土塁が遅れることがあるのか、そうではなく最初から たとえば、七世紀後半に土塁が造られたと仮定しますと、その時、基肄城はどうなっていたのか。 あるいは後になるのか、 きっちり評価する必要があります。 博多湾に面している場所では、 こうい 羅城説

皆さん、ご承知のことと思いますけれど、復習の意味をこめて話をいたします。図のこの箇所が水城にな

ります。 これが都府楼であります。発掘調査が行なわれ、 したが、蛇がいっぱい出てきて怖かった思い出もあります。立ち入り禁止と書いてあったかもしれません。 したが、 私が研究を始めた頃は、 水城駅で降りて、この近くに行きまして見学したことがあります。季節はおそらく夏前だと思いま 古代の水城かどうか、まだ意見が分かれていました。当時は国鉄の時代で 報告書もでています。

それから、ここが大野城で、南が基肄城になります。基肄城は比較的行きにくい場所ですが、この水門の

跡までは行くことが容易です。ただし、ここから登っていくのは少し大変かと思います。

て、亡くなられた倉住靖彦さんに案内してもらいました。本当は歩いて実感をつかむ必要がありますが、 彼

の車で移動し、 必要な場所は歩きました。

海と八代海に面していまして、南が薩摩国になります。薩摩国高来郡には、 そして問題の鞠智城ですが、ここは肥後国ということになります。「大国」として扱われています。 かなり肥後国から人が移ってい

ます。送り出した肥後は、やはり古代の大国ということでしょうか。

が可能かと思います。 れても、三〇分では見学は無理かと思いますが、 その鞠智城ですが、 低い丘陵地に造られていますので、大野城とか、基肄城とはまったく違います。 お手元の袋にパンフレットが入っているかと思いますので、見て下さい。 確か一時間半ぐらいあれば、 だいたい重要箇所は回ること 現地に行か

現地に行くには、バスの本数が少ないですから、これから交通問題が課題になるかと思います。

3 「総領」と「大宰」― 狩野久説の批判的継承

「総領」「大宰」とその性格

きたのか、という問題です。

るいは古代山城(こだいさんじょう)というのは、誰がどういう形で設置して、どういう整備体制を築いて 次の話題は、ある程度、学術的な話として進めていかねばなりません。古代山城(こだいやまじろ)、あ

完成していない時期ですね。とりあえずヤマト王権とさせていただきます。九州、 国に令制国を建設した。これは事実ですね。難しいのは、この時期における地域行政組織の在り方で、 基本的にいえば、 七世紀後半は大和朝廷という言葉を使ってもいいかもしれませんが、まだ律令制国家が 瀬戸内周辺をはじめ、 まだ 全

う、 学界でも必ずしも確定した見解にはなっていないことがあります。 しないのは、 最初に、大化改新の問題です。僕は、元になる改新詔があったという立場です。七世紀半ばには立評とい 後に「郡」にあたる地方の行政体ができます。最近では、かなり有力な見解です。なかなか意見が一致 というのは民衆を単位に支配する段階といわれます。領域支配になると「郡」になるのですが、そう 政治的な、 「評」というのと「郡」とが、 あるいは行政的な組織の内容が、どのようになっているのか。 単なる名称変更だけにはとどまらない問題が、 わかりやすくいいますと、 あるのかどうか

簡単に言えるのかどうかですね。

ただし、吉備国はあってもいいのですが、吉備国が前・中・後に分かれて備前・備中・備後になる。

ます。遅れましたが、律令制下の国のことを、学界では「令制国」と言っています。

いは筑紫国ですと、筑前と筑後。肥国ですと、肥前・肥後というように、前・後の国に分かれる国の成立は ある

国とは同じではありません。 うです。ですから、カッコを付けておきましたが、令制国ができたからといっても、 また関東で言えば、 下毛野・上毛野国、 房総半島では下総・上総国に分かれるのは、 必ずしも律令制下の諸 時期が少しずれるよ

ば、これに対応する「初期国衙」というのが、いつできたのか。こういう問題もあります。また、国 埼玉の東の上遺跡になります。考古学の研究者のなかでも、意見が一致しているわけではありません。 早く認める研究者は、七世紀第3四半期、つまり大化の改新以降にできたと言います。 **|評」は早く立てられますが、「初期評家」というのが、いつから確かめられるのか、という問題もあります。** 問題になるのは、古代山城が建設された時期です。朝鮮式山城というのは、『日本書紀』あるいは『続日本紀』 それともう一つ、七世紀後半には「初期国宰」が派遣されたということになっています。考古学的に言え その根拠となるのが、 |の下の

神籠石系の山城を含め、どのような場所に設置され、誰が管轄しているのか、確かめようにも史料がかなり ニノミコトモチ」には、 の「文武天皇紀」に出てきます。 「総領」とか「大宰」という言葉が出てきます。そして、『書紀』に記されていない 事実として認めていいかと思いますが、その時期に中央から派遣される「ク

筑紫国に大野、基肄の二城を築くという筑紫は、狭義の筑紫でいいかと思います。 筑紫の場合、そして後の筑前、筑後を指す場合の筑紫です。この時には、長門国に城を築くとありますので、 に大野城、 ここであらためて年表をみてみましょう。六六三年の白村江の戦いが終わった後、六六五年に筑紫国に大 基肄城を、その二年後に、大和国に高安城、讃岐国に屋島城、対馬国に金田城が築かれます。筑紫国 基肄城という時、 筑紫というのは、『書紀』には二つの用法があります。 一つは九州全体をさす

のですが、筑紫が、後の筑前、筑後でいいのかどうかという問題も残るかもしれません。 そうしますと、基肄城は肥国(肥前 ・ 肥後)ですから、入らなくなります。これはこれで説明しやすい

令が作成されたのかどうかです。僕は単行法令の一群と解釈しています。たとえ単行法令としましても、 別もあつたと言われています。 康午年籍というのができます。全国的な戸籍で、国ごとに作成された。また男・女、 基本的にはそれで良いと思っています。さらに、いわゆる「近江令」という 戸

籍が作られる。戸籍を作るというのは、各地域に行政組織が整備されていないとできないですね また、体系的な法典がいつできたのか。これも現在、論争中ですが、これまでは浄御原令だといわれてき 良・践の区 235 講演①

国的な康寅年籍も作られています。各地域にしっかりした行政組織がないと、やはり戸籍は作成できないで 意見も出てきました。こうした見解をどのように解釈するのかも考えなければなりません。この間には、 ました。最近では、どうもそうじゃないのではないか、大宝律令が初めての体系的法典ではないか、という

すね

織はいったいどうなっているのか、もう少し実態的に考える必要があるかと思っています。 **令になって初めてできるとは考えづらい。やはり康午、康寅年籍があるからできる。そうした場合の行政組** 年籍も残っていませんが、大宝律令以降の戸籍をみると、かなりしっかりした戸籍ができています。 ります。史料の上だけで考察しますと、机上の空論のような考え方になってしまいます。康午年籍も、 古代史研究者、特に若手研究者の場合、戸籍作成の労力というものをどのように考えているのか、 大宝律

が役所で、総領というのが官人だという意見がでてきます。ただし、それだけでは、『書紀』の解釈はでき 所」が存在したことになります。筑紫大宰の場合も、役所みたいな施設として考える。そうしますと、 と「筑紫大宰」の語句がでてきます。この史料だけをみますと、周防には総令(総領)が政事を執る「総令 それと、一番問題かと思われる『日本書紀』の天武一四年十一月条があります。ここに、「周芳(周防)総令所」

として行なうわけですね。当初から令制国との関係を意識しているのかどうかも問題になります。設置場所 あらためて考えるまでもないのですが、古代山城を造る時、防衛体制を造るということは、 国家的な行事

ないように思います。

がい は いのではないかと思います。周防総領は、 かなり地域的な特質が考慮されていますよね。やはり国レベルではなくて、国家的なレベルで考えた方 周防しか対象にしないのか、 問題になります。

「総領」「大宰」と古代山城

吉備・周防・伊予の総領 官職名も厳密に考える必要があります。とりあえず総領・大宰を、筑紫大宰(大宰は総領と両用)、東国総領、 (総領は大宰と両用)という3種類に区分した方がいいと思います。東国総領の位

置づけですが、これも地域が限定されています。

えば外交)がありますが、東国総領とは異なっています。 に大宰・総領は三種類あって、筑紫大宰と吉備・周防・伊予の総領は、同じような役割と違った役割(たと とは対応します。東国は、東国総領が派遣された地域で、朝鮮式山城などは見つかっていません。このよう これらの官職と、山城、 城柵との関係はどうでしょうか。筑紫関係と吉備・周防・伊予総領と、古代山城

周防・伊予も、 か結論がでてこないのですが、とりあえず三種類の大宰 ・ 総領に区分して考察を進める必要があります。 に書かれている「大宰」「総領」の史料を前提にして、考えてみる必要があります。再検討しても、 りませんが、 ただし、史料上はそう簡単ではありません。大宰は、総領の語も使われます。筑紫総領ですね、また、吉備 解釈に合わないから勝手に史料の読みを変更することはやめた方がいい。『書紀』『続日本紀』 大宰とも言われています。これらの文字表記は、 『書紀』編者のミスの可能性も皆無ではあ なかな

大宰)が政治力をもっています。伊予もそういう史料があります。古代史学界でも、 防の総領は長門に関係していますし、 配置と山城は無関係ではありません。 吉備は前・中・後に分かれていても、 播磨に対しても総領 総領・大宰と山城を関 (あるいは

連づける時期にきているように思います。

るという考え方をとっています。そんなことはないだろうと思っていたのですが、この報告を準備する過程 思っていました。ところが、 次に、筑紫では、大宰と総領の官職は、どうなっているかの問題です。僕は、大宰と総領は最初同じだと あらためて論文を読んでみますと、どうも大宰と総領を区別した方がよさそうだと思うようになりまし 大宰の場合には、 那津官家の関係とか、朝鮮半島あるいは中国大陸の外交施設との関係で、 九州の研究者は、九州大学や九州歴史資料館の研究者が、大宰と総領を区別す

があります。

より辺賊の難を戍る。 が出てきます。 大宰と古代山城の関係ということになります。ただし、大宰府関係でも稲積城の場所につきましては、 と書かれていまして、 白村江の戦いから少し時間がたっていますが、壬申の乱において、『書紀』 には 「吉備国守」 と 「筑紫大宰」 それだけ吉備と筑紫が重要な位置を占めていました。筑紫大宰の栗隈王は、 これは大宰府の施設があったから、こういう表現になるかと思います。 其れ城を峻くして濠を深くして、 海に臨みて守らするは、 豊内賊の為ならむや」云々 「筑紫国は、 そういう筑紫 元

討が必要かと思っています。

す。小田さんも白村江以降で考えておられて、 士雄さんが作成された関連年表が参考になりま なお、 大宰府の成立につきましては、 小 油富

説に則って説明していくのが、 降が政庁Ⅱ期になります。この小田さんの区分 妥当かと考えて

それが大宰府政庁Ⅰ期、七○一年の大宝律令以

います。

4 山城築城の技術者

『書紀』 次の問題は、 天智四年八月条によりますと、 山城建設の技術者の 問題で 長

門に達率答
体春初、

す。

大幸府I期 古段階 (a)	(小田富士雄『古代九州と東アジア』 II、同成社、2013 536 (宣化元) 那津官家修造 609 (推古17) 筑紫大宰初見 663 (天智 2) 白村江戦に大敗 664 (天智 3) 対馬・壱岐・筑紫に防人・烽をおき 水城大堤を築く 665 (天智 4) 大野・椽二城を築く 689 (持統 3) 6月飛鳥浄御原令制定 9月位配伝達使者筑紫に到る 690 (持統 4) 7月大宰・国司遷任 694 (持統 8) 12月藤原京遷都 698 (文武 2) 5月大野・基肄・鞠智 3 城を修築	(小田富士雄『古代九州と東アジア』 II、同成社、2013 536 (宣化元) 那津官家修造 609 (推古17) 筑紫大宰初見 663 (天智 2) 白村江戦に大敗 市 表現 では、1 を終し、 京本に防人・烽をおき、水城大堤を築く 3 建 665 (天智 4) 大野・椽二城を築く 689 (持統 3) 6月飛鳥浄御原令制定 9月位配伝達使者筑紫に到る 690 (持統 4) 7月大宰・国司遷任 694 (持統 8) 12月藤原京遷都 698 (文武 2) 5月大野・基肄・鞠智 3 城を修築
609 (推古17) 筑紫大宰初見 663 (天智 2) 白村江戦に大敗 前期 664 (天智 3) 対馬・壱岐・筑紫に防人・烽をおき 水城大堤を築く 665 (天智 4) 大野・椽二城を築く 689 (持統 3) 6月飛鳥浄御原令制定 9月位記伝達使者筑紫に到る 690 (持統 4) 7月大宰・国司遷任 694 (持統 8) 12月藤原京遷都 698 (文武 2) 5月大野・基肄・鞠智 3 城を修築 日本 100 10	Top 1	1
1	1	1
大幸府	大字府	本の
本 本 本 本 本 本 本 本 本 本	文 政 下 I 期 689 (持統3) 6月飛鳥浄御原令制定 9月位記伝達使者筑紫に到る 690 (持統4) 7月大宰・国司遷任 694 (持統8) 12月藤原京遷都 698 (文武2) 5月大野・基肄・鞠智3城を修築 11 同 701 (大宝元) 8月大宝律令制定	本
1	Pa 690 (持統4) 7月大宰・国司遷任 694 (持統8) 12月藤原京遷都 698 (文武2) 5月大野・基肄・鞠智3城を修築 1 同 701 (大宝元) 8月大宝律令制定	1
TI STATE OF LAW ASIA	同 701 (大宝元) 8月大宝律令制定	I
	同一一同一位(人工儿)6万人工作节时足	大

城はどうでしょうか。 六品の二番目の位です。 さて、もう一つ気になっているのが、 筑紫に遣わされた二人が、大野城と基肄城に来たことは史料上明白ですが、 百済人や百済系の技術者が山城を造ったら、 本国タイプの山城とな

基肄

南朝との関係です。

かと思っています。 検討するのが難しいのですが、木簡や墨書土器は南朝から百済、そして倭というルートも考える必要がある 期の墨書土器が中国の南朝から出土していますが、木簡も出土しています。木簡の数は多くないので、 小 田富士雄さんをはじめ中国の南朝と百済との結びつきを考える研究者は多くいます。 非常に重要な関係です。今、明治大学で墨書土器データベースの集成の作業をやっています。 小田富士雄さんも同じくらい重要だと考えておられるようです。 南朝と百済との関 古い時 比較

す。 係が重要です。基本的には高句麗系の伽藍配置ではないかと思います。飛鳥寺を造る時、厩戸皇子の先生だっ 鳥寺に結びつける考え方は、成り立ちません。現在のところ、やはり高句麗の清岩里廃寺の伽藍配置との関 には2回行ってきましたが、三金堂とはなりませんので、系譜的にまったく関係がありません。 こうした疑問を持つのは、 しかし、 伽藍配置は高句麗系です。近年、 飛鳥寺の問題があるからです。飛鳥寺は、明白に百済系の技術者が造った寺で 飛鳥寺と韓国の王興寺との関係が話題になりました。王興寺 王興寺を飛

の郡) 宝令で「郡」になりますが、この郡は秦・漢の地方行政組織の単位です。秦の郡県制、そして漢の郡国制と それから、 が立てられます。 大化の改新で、いわゆる部民が廃止されまして、公民制が実施されます。そして立評で、 考えてみますと、 「部」は半島の制度ですが、「評」というのも半島の制度です。 **(後** 大

高句麗僧の慧慈ですね

なります。こうした秦・漢時代の国制を参照して作られているのが、 日本の国郡制です。

なわれた国評制には、意外と高句麗の影響も考慮する必要があるのではと思います。 能性が高いですね。一方の「部」は、百済の影響が一番強いかと。朝鮮半島には三国ありますが、 しかし、その前段階の国評制は、 朝鮮半島の影響が強い。その「評」という組織は、 高句麗から学んだ可 日本で行

百済と高句麗は扶余系なので、 が、高句麗も扶余系の民族集団です。三韓ということで、百済、新羅、高句麗のことを考えがちなのですが、 このように考えていきますと、百済都城と高句麗都城の比較研究も必要になります。、百済は扶余系です 両者の関係性を考える必要もあるかと思います。

百済や新羅ではなく、 最近出された向井一雄さんの『よみがえる古代山城』では、日本の朝鮮式山城の規模と形態から考えると、 高句麗との比較を強調されています。このように、百済系の技術者が築城したとして

高句麗や中国南朝との影響も考慮していく必要があるのではないでしょうか。

三.鞠智城をめぐる諸問題

筑紫大宰と鞠智城

城が入りますから、鞠智城を「筑紫国」のなかで考えても差し支えありません。「繕治」というのはやはり の文武二年五月条です。先ほどの「筑紫」の理解と関係しますが、筑紫大宰の管轄に大野城・基肄城と鞠智 いよいよ時間がおしてきましたので、これからはポイントだけを話していきます。まずは、『続日本紀』

基肄 修繕 ん 間違っています)。 城 これが狭義の筑紫国 でいいだろうと思います(レジュメの文字「修治」 の二城 の築城記事です。 天智四年八月条は、 (筑前 · 筑後) 鞠智城は記載 筑紫国で大野城 であれば、 があ りま 肥後国 は 廿 ح

大宰府の成立につきましては、 小田富士雄説をとると、 の鞠智城がなくても特に問題はありません。

期の間、 すれば、 なってきます。 白村江の戦い以降になります。 つまり七世紀末で一部に変化があるようです。 繕治も三○余年経っていますから当然のことに 鞠智城跡の変遷をみますと、 鞠智城の築城も同じ頃だと 第Ⅰ期と第

形の配列とかですね、

律令制的な官衙的な性格をもってき

なりますと、

七世紀末が若干ひっ

かかりますが、「コ」

字

いえば、

鞠智城も天智朝でい

いように思います。

第 Ⅱ

期

に

きます。

そうしますと、大野城

ろ百済系といわれていますが、

百済系工人の関与と推測

で

基肄城の築城との関係

で

鞠智城の第I期につきましては、仏像がでて、今のとこ

鞠智城跡の変還(『鞠智城跡 Ⅱ』 熊本県教育委員会、2012) 表2



大野城や大宰府との関係でも、 それなりに合うのではないでしょうか。

大宝令の施行と鞠智城

す。 れて、その後、 次が、一番問題になる大宝令の施行と古代山城ということです。七〇一年(大宝元)に、高安城が廃止さ 律令法で軍団が組織されますが、どのように関係しているのか、非常に気にかかる事柄です。 大宝律令が施行されます。大宝律令には軍防令がありますので、古代山城とも関係してきま

山城の防衛体制とがどのように関連しているのか、今後の史・資料の増加に期待したいと思います。 の記事がすべて書かれていませんので、各山城の盛衰は考古学から確認しなければなりません。 それから七一九年には、 備後国で茨城と常城が停止されます。『日本書紀』や『続日本紀』には古代山城 軍団 体制

律令法と城の関係では、衛禁律(養老律)の越垣及城条に「筑紫城」と「陸奥・越後・出羽柵」の名前が 瀬戸内地方の城は書いてありません。筑紫城ですから、大野城・基肄城のほかに、『続日本紀』

文武二年条を参照すれば、 肥後の鞠智城が入っていてもかまわないかと思います。東北では、 陸奥・越後

出羽柵が対象ですから。

また、軍防令城隍条には、 「城の隍 (堀)」が崩れた時には、兵士で修理することが規定されています。 残

されている日本の律令では、ここまでしかわかりません。 古代山城の盛衰につきましては、考古学の研究に頼らざるをえません。赤司善彦さんが「出土土器からみ

すと、だいたい八世紀第1四半期で消えていく山城が多いのですね。 た古代山城の時期消長表」を作っておられます。この盛衰表をみますと、大野城・基肄城・鞠智城を除きま

山城があることは明 古代山城と消失する つまり、継続する

ンにかかわる山城の

戦い以降の防衛ライ

釈すれば、白村江の らかです。普通に解

機能が付加されてい

るように思います。

山城は新たな役割と

すと、継続する古代

です。そういたしま

て終わっているよう

役割は、九州を除い

学史的	.1. 14 4	時 期				
な分類	山城名	7世紀	8世紀	9世紀	10 世紀	
	大野城				mi :	
朝	基肄城			,,,		
朝鮮式山城	金田城		1111			
	屋嶋城					
	高安城		111			
	鞠智城					
	播磨城山城	mackage				
(神戸	大廻小廻山城	311				
(神籠)	鬼ノ城					
夕の	讃岐城山城	page page	Policina			
光 山城	永納山城					
7%	石城山神籠石			300000		
	御所ヶ谷神籠	111	1111			
	阿志岐山城					
	高良山神籠石					
神九	雷山神籠石					
籠 州	女山神籠石					
石製の山	鹿毛馬神籠石					
至 山城	帯隈山神籠石					
	おつぼ山神籠石					
	杷木神籠石					
	唐原山城					
		■出土遺物	勿などから。	みて確実		
	備考	Ⅲ可能性がある				
		■出土遺物	勿はあるが、	ごく少量であ	らるなど	
		不確実				

それはいったいどういうことなのか。 付加されたという中身に、 住居や倉などの建物があったのかどうか。

これは考古学の発掘調査によって確認せざるをえません。

ては、考古学の発掘調査の進展をまちたいと思います。 います。八世紀半ばにも新しい動きがあったことになります。文献史料が少ないので、その実態につきまし わけです。そして七六五年には怡土城建設の専門官が設けられると同時に、水城修理の専門官も任命されて さらにもう一つの出来事として、七五六年に筑前国に怡土城が築かれます。当然、 設置される理由がある

怡土城の設置がありますので、大野城・基肄城と鞠智城には新たな役割が付加されます。こうした動向につ て、律令制支配にふさわしい新しい役割・機能が与えられるようになります。そして、八世紀半ばになると、 はなく、たとえば有明海や南方への対策を考える必要があります。 第Ⅱ段階としては、大宝律令の施行に伴っ いては、文献史料が少ないので、考古学の研究成果によって解明していかなければなりません。 して鞠智城ができる。ただし、大宰府の都城関係の施設と鞠智城とは別ですので、大宰府都城の防衛だけで ちょっと時間が延長しましたが、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。 こうした動向を見ていきますと、第1段階としては、 白村江の敗戦以降の大宰府を防衛する体制の 一環と

「文化遺産としての鞠智城

講演者紹介

査部主任研究官・史料調査室長、奈良女子大学文学部教授を経て、現在、 良国立文化財研究所、奈良市教育委員会、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調 京都大学文学部史学科卒業後、京都大学大学院博士後期課程を単位取得退学。奈 和己(たての かずみ)

子大学特任教授。専門は日本古代史。

247

奈良女

「文化遺産としての鞠智城」

奈良女子大学特任教授 舘野 和己

とか、そういったことが、こういうシンポジウムで話題になってきたかと思うのですが、私の場合は、文化 ということです。これまでは、生きている時代の鞠智城が、いつ成立したかとか、どんな機能を果たしたか ただいま、ご紹介いただきました舘野です。わたくしに与えられたテーマは、「文化遺産としての鞠智城



遺産としての鞠智城ということです。文化遺産とは、人間の文化的活動の結果 が鞠智城としての機能が終わった後のことについてお話をするということが、 もいいかと思います。遺跡ということになると、すでに生きていない、鞠智城 生まれたものの現在の姿のことでありまして、この場合ですと、遺跡といって わたくしの今日のお話の中心となります。

はじめに

をたどっていきたいと思います。そうすると、まず七世紀の後半に鞠智城が成 鞠智城が成立して以後、文化遺産となるまでの歩み、つまり現在までの歩み

時代、 に至り、整備も進んでいくと。このような、過程を鞠智城は辿ったと思います。 たある時点から、伝説の成立、これは後で詳しく申しますが、というような形で回想される。 立し、そしてそれが一○世紀まで、存続する。そして機能を終えて終わりを迎える。 あるいは明治ぐらいから、今度は鞠智城跡として再発見され、調査・研究が加えられて、そして現在 その後、 さらには江戸 忘却され、

一. 鞠智城の成立と存続

ります。

そこで、 具体的にそれを見ていきたいと思いますが、 まず、第一章は鞠智城の概要をまとめたところであ

されているかということなどを、挙げたところですので、ご覧頂きたいと思います。 史料があるとか、さらに、これまでの発掘調査の成果で、どんな施設があり、あるいは、どんな時期区分が 今の吉村さんの話にも出てきたところであります。どういうところに立地する、あるいは、どのような文献 智城は成立した訳です。これは大地に人間が働きかけて生まれたわけですが、その成立の要因については 鞠智城は、 米原台地に所在し、そこには縄文、弥生、古墳時代の遺跡が残っている。そういうところに鞠

一 鞠智城の終焉以後

ここから中心的なお話をしていきたいと思います。

その米原台地の上にかつて何かがあった、あるいは誰かがいたというようなことが、のちの時代になって、 の北の方に、 うのは、後ろのほうに、 でありますが、こういったものが生まれてくることになります。これらの関係地名がどこにあったのかとい 智城が生きている時代から、あった地名かもしれませんが、それが残っていくということになります。 なると思いますが、一方ではですね、これがまたいつのことからなのかということは大変難しいわけですが、 回想されていきます。そういうなかで、関係地名といったものが成立し、あるいは、 そして、生きている施設としての鞠智城というものがなくなるので、次第に忘却されていくということに あるいは長者井戸。この長者井戸というものは、これはまた次に申します長者伝説に関わってくる地名 そこに挙げましたように、涼みヶ御所とか、佐官(しゃかん)どん、少監どん、紀(まつり)屋敷と こういったものが残っているということです。 地図を挙げておきましたので、ご覧いただきたいと思います。米原台地の鞠智城跡 これはもしかしたら鞠

そして、もう一つ、今日特に注目したいのが、米原長者の伝説が成立してくるということであります。

三.鞠智城跡の米原長者伝説

後国誌』 おりますから、そのもとになったものは江戸時代のものではないかと思います。江戸時代につくられた というものがあって、その後、補訂されていったが、すでに絶版になっているので、この書を作ると言って 是山という人が編纂したものでありますが、それの序文などをみていきますと、江戸時代にも『肥後国誌』 本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』)にも、掲載されております。『肥後国誌』という、これは大正年間に、 次、第三章にいきますが、鞠智城跡にある米原長者の伝説というもの。 これは大部な鞠智城跡の報告書 の現物にあたって、記載を確認できていないので、ここでは、大正五年の『肥後国誌』をひいてお 肥肥 (熊

きました。

大きい石が多かったけれども、近世になって耕作の妨げだとして、半ばは地中に埋めた。またある石には 床などという旧跡あり」とあります。「蔵床」には、四方に土居、中に礎石があると。近辺に礎石だとして らく第二章に関係地名としてあげた「涼みヶ御所」にあたるのだろうと思いますが、「月見櫓、 いう。そして長者の名前とか時代とかはわからないと。「仮名は孫三郎」というと。「涼ノ殿」、 のですね。「長者屋敷」というのは、米原村の米原長者の住んでいた旧跡である。「烏(からす)ノ城」とも 頭部に、「長者屋敷は」と書いておりますが、鞠智城跡のある所は、かつては米原(よなばる)村と言った この長者伝説、『鞠智城跡Ⅱ』に、詳しく引用されておりますが、長いので、概要を示しておきます。冒 玉屋敷、 これはおそ 蔵

長者の姫の足跡が残っている。たぶん石に窪みがあったのをそういうふうに言っているのだと思います。ま

というのでしょうか、これは「兎余糧(うよりょう)」であると。それから「焦米(こげごめ)」の砂ありと。 た、長者の鐘掛松というのがあったが、近年大風で砕けた。 それからまたこの辺りには団粉土(だんごつち)

炭化米(たんかまい)でしょうか、そういうものがあったということであります。

が、 うことなのですね。彼女が参籠して祈ると、その観音が夢にでて、汝の、夫は肥後国菊池郡の賤夫(しずの で籠を作って生計をたてていた孫三郎に出会う。そして、夫婦の約束をしてここに移って、ここは米原村で たのです。それを聞いて、本当は都の誰々と結婚せよとのお告げがあるというふうに思っていたのでしょう お)の、貧しい男ということでしょうが、孫三郎である。早く、その菊池に下れというように、お告げがあっ それに任せたいと言ったわけです。父母が結婚を勧めるわけですが、私はいつも観音様を信仰している。 まりなにかお願いをすると、必ずその観音様からの反応があるというので、七日間を限って仏意を聞いて、 は大悲尊、これは女性の信仰を集めていた長谷の観音様ですが、それを信じ、求めると必ず感応がある、 長谷寺の観音を信仰して、参詣していた。その娘が一六歳になったので、父母は結婚先を探すのですが、 しく、当然、貴族の娘ですから京都に住んでいるんですね。そして、泊瀬(はせ)の観音、奈良県桜井市 このように、長者屋敷の現状を述べた後で、里俗にいうには、昔あるお公家さん、公卿の娘さんが大変美 肥後国に行けと言われて、 とにかく待ってください。そうするときっと観音様が、良いお応えを与えてくれるでしょうからとい 父母の許しを得て、婢女、召使の女一○余人を連れて、都を出て菊池郡に来て、 これは前世の行いがよくなかったかと悲しむのですが、これもお告げだとい 出 田 村のあたり 娘

すね、そこに移って富有の身となって米原長者と号したと。こういう話です。

大量に出てきた。そこで二人は夫婦になって家は冨み栄えた。その跡は、 そこにたくさんある礫、つまり小石であると答えるわけですね。そこで、鍬で家の裏の土を掘ると、黄金が ならば、わが屋布(やしき)、この屋布というのは大きな屋敷ではなく、自分の敷地内にという意味ですが、 ます。娘は驚いて、いったいどうするつもりだ、そんな大金を捨ててしまってというと、小三郎はこんな金 と、下の谷まで行って、川にいた鷺をとろうと思って、その金二両を、投げたが、逃がしてしまったと答え くださいと頼むわけです。小三郎は買いに出かけたのですが、すぐに戻ってきてしまいます。 なたを迎えるようなものではないと。すると、娘は懐から金二両を出して、これで今晩の食事を買ってきて 小三郎に事の由を語り、夫婦となるように求めます。小三郎は驚いて、自分の貧しさを語ります。とてもあ である。これに嫁げば、 たのでしょうか。夢で観音が、汝の夫婿は肥後国菊池郡の四丁分にいる薦編(こもあみ)小三郎というもの 一説には、こんどは長谷の観音ではなくて、清水寺の観世音を信じていた一六歳の娘が清水寺に通 夢に観音が出てきます。本当だったら一晩中起きて仏に祈るのでしょうが、途中寝てしまっ 福寿は意のままになろう、というお告げを下した。そこで娘は四丁分に到り貧しい 今、 四町分村の長者屋布というと 訳を聞きます

である。出田村の辺りにも一時住んでいた屋布跡というのがあると。このようにでてきます。

る車石という石は、長者の財宝を車に積んで岩本に移る時に、路傍の石に車を引っかけて軸が折れたところ

岩本村に移り住んだ所を屋布の谷という。その後、さらに米原村に移った。河原にあ

ころである。その後、

また、彼が耕作に通った道は踏切という切通しであって、その昼飯を運んだ婢女一○余人の像が踏切の崖に それから、蔵に蓄えていた米は焼けて砂のようになって今にある。これは炭化米、焼け米のことであります。 なった、その時昼飯にした団粉(だんご)は焼土となった。これは兎余糧であるという注釈がついています。 以来、火ノ岡山、 田植えを終えたところ、その天罰で、その夜、火の輪が出て、家、倉庫はことごとく焼けてしまった。 を出して、山鹿郡の日ノ岡山にそれを注いで火をつけて、いわば人工的に山火事を起こして、その明かりで いたので、長者は金の扇で太陽を招き返したが、なお田植えは終わらなかった。そこで長者は油樽三○○○ た。そして毎年一日で田植えを終えていたけれども、ある年、ようやく半分終わったところで、日は西に傾 から長者号を賜って、 田底三〇〇〇町を耕作した。三〇〇〇町は、三〇〇〇へクタールくらいですね、広大な土地を持ってい 前には日ノ岡山となっていましたが、 火ノ岡山は焦土となり、山の石は黒く木は茂らなく それ

子供だけを連れてきた長者が宝くらべをしているわけですが、米原長者には一人の男子もなく、 一四人の息子を連れてきただけであった。そして二人の長者は坂口で出会った。黄金を敷き並べた長者と、 そして、さらには、 田底三里に黄金の蹈石を敷いた。 かつて長者は山本郡の駄ノ原長者と財宝比べ、宝くらべをしようとして、米原から茂 一方の駄ノ原長者はそういった贅沢なことはしないで、

残っている。このように里老の説を紹介しています。

たのですが、米原長者が羨ましいと言ったので、そこを浦山口というようになったと。こういうような話に 男子が多いことが羨ましいと言った。要するに、 子供が宝だということになって、駄ノ原長者が勝ちとなっ

ます、信用はしていないけれども、こんな話が残っているよというように結んでいるところです。 最後に、これらの俚説は一笑に堪えないが、遍く老農の伝える話なので、記して万笑に備えると言ってい

説に前田千町、奥永、これに註がついておりまして、今の玉名郡の庄嶋・土用月・川崎辺りをいうとありま たものでありますが、 また、別に、『菊池風土記』というものがあります。寛政六年(一七九四)に渋江公正によってつくられ 鳥の城ともいったと。これは先にもありました。長者の姓氏や時代は分からず、名は孫三郎という。 そこにも長者屋敷の伝説がでてきます。それは、米村村に有り、米原長者の遺跡とい 俗

す。 床というのは、俗に不動倉の跡を長者に付会するものだ。ここでは、歴史書にみえている菊池郡の不動倉と いうものを知っていて、それを蔵床というのに比定するのはこじつけだと指摘しています。 その次に*印をつけておきましたけれども、上に出てきた庄嶋ですとか、 前田千町から奥永千町を所有していたという。涼殿・玉屋敷・月見櫓・蔵床は、今もその跡がある。 土用月、 川崎というのはいずれ 蔵

して頂いてバス停を確認してきたところです。つまり、今でもそういう地名がバス停の名前として残ってい 山鹿市鹿本町の、中川というところのバス停の名前になっています。これは一一月でしたか、

るのです。ちなみに『菊池風土記』はその下に書きましたように、熊本県立大学の鈴木元さんが『菊池風土

講演① 文化遺産としての鞠智城

記

Щ すが、 九州の中でも同工異曲の長者伝説というのがあるわけであります。 ります(稲田浩二・小沢俊夫責任編集『日本昔話通観 が観音のお告げでやってきて、夫婦になり長者になったが、これが米原長者の起こりであるという伝説があ たところの大分県豊後大野市にも炭焼小五郎の伝説があります。あるいは、 でしています。こういう長者伝説というのは例えば、この鞠智城跡から東の阿蘇山を越えて、もっと東に行 るようになった。そういう人は炭焼きをやっていたという話が多いという解説を、「炭焼長者」という項目 あちこちに同種の伝説があります。敷地内を掘ったら、黄金がたくさん出てきたのでなんとか長者と呼ばれ 焼長者」とか、「寶競べ」とかですね、全国にある、そういう伝説の解説を書いている訳ですが、それを見ても て、この地で生まれたものではないということになります。 .鹿市古閑の十三部というところで、穂掛け孫六という落穂ひろいをして生計を立てていた男の所に京の姫 さて、このように米原長者という、長者の伝説が、この鞠智城跡には成立しているということになるので 実はこの話は、 有名な民俗学者である柳田國男によると、日本各地に残る長者伝説と同工異曲であっ 第二四巻 長崎·熊本·宮崎』同朋舎 一九八〇年)。 柳田國男がいろいろな辞書で「長者屋敷」、「炭 米原長者に関係してはですね

てきて、それがここに定着するにあたって、鞠智城跡に残っていた遺構とか、近辺の地名といったものが取 だと考察を加えているのですが、この米原長者というものに注目するならば、 ですから、 柳田國男は、 長者伝説というのが全国各地にあるので、 誰かの手によって伝わっていったもの そういう話がよそから伝わっ

わけであります。 伝説もあった。」と「浦山」「浦山口」というところがあるわけですが、それを「羨まし」とかけて、「寶競べ」 寂寞を感じたという風に語って居り、肥後では口碑を受け入れ易くするために、浦山という地名を援用した れて出て来た。これより以上の寶は、この世の中にはあるまいと、一方の子を持たぬ長者が、初めて人生の 米原長者がそうだった訳ですが、「それを踏みながら出会したところが、他の一方はただ十二人の男を引連 した。「通例の形は二人の長者が地を接して住み、一方は米俵を堤に築き、又は金銀を路に布いて」、これは り入れられていったということになります。やはり柳田國男が寶競べの中で述べている一説を引いておきま 米原長者が負けて、駄ノ原長者に「羨まし」といったというですね。こういう地名と結び付けていった

うが、蔵床とか、玉屋敷も、礎石が残っているような形で、なにかそういうようなものがあった跡とみられ きた。そういったものが、かつてここに誰かが住んでいた。しかも建物がいっぱいあるから、 たのでしょうか、涼みヶ御所ですとか、あるいは蔵の跡が残っていたから、そういう名前が付いたのでしょ いというようになってですね、よそから伝わってきた長者伝説を受け入れる。 お話しした米原長者の中ではですね、例えば遺構として、なにかの跡が残っていた。それが地名にもなっ あるいは米原台地から、 団粉土とか、焦米の砂と書いてありましたけれども、炭化米、焼けた米が出 長者に違いな

出田村、米原、あるいは四町分村、岩本村とかですね、これらの地名にあたるところは地図でも見つけるこ さらに、次に、地名・地物と書きましたけれども、今まで紹介してきた中の、地名等をみていきますと、 文化遺産としての鞠智城 鹿央町千田に奥永というところがあります。このように、地名を辿っていくことができます。 前田という地名があって、そのいずれかと思いますし、また奥永というのは、 川崎はバス停の名前にあるといいましたけれども、 ています。奥永千町は、先ほども、『菊地風土記』に今のどこどこにあたると註が付いていた、庄嶋や土用月 ころがそれだということで、現地に行きますと、豊前街道の横ですかね、そこに「うらやま坂」との標柱もたっ もしかしたら、それを婢女の像と言ったのではないかと思います。浦山口というのも山鹿市の岩原というと 北方の山でありますし、 ていたというのがありましたが、 とができます。あるいは、茂賀ノ浦、これは菊池川流域の低湿地をいうようですが、田底に、三千町の田を持っ しょうか。これは古墳時代の横穴墓ですが、その、入口のところに人間の姿などが浮き彫りにされており、 踏切の崖のところに婢女の像があったとありますが、これは鍋田横穴群ではないで 田底も熊本市植木町の田底にあたります。 前田千日というのは、 山鹿市の石と山鹿に、 日ノ岡山というのは鞠智城 先程の庄嶋等から近い山 その状況を最 どちらにも の西

それに付会して解釈してくる。「羨まし」というのが典型であります。さらには、そういった伝説が定着し になって、その長者伝説を受け入れ、米原長者伝説が成立する。それに伴って現にある地名などもですね と考えているところに、 あるとかといったことが、誰か昔、ここに住んでいた。しかもたくさん米を持っていた人がいたに違いない あまり時間がないので、急がなければいけません。こういうように、米原から焼け米がでたとか、礎石が 他所から長者伝説が伝わってくると、ここにもそういう長者がいたのだということ

後の地図に示しました

きの地図で示したような地名は、米原長者伝説の受容範囲を物語るものかなと思います。 ういう人たちがいたのだというようになっていったと思います。したがって、上記の地名というのは、さっ ではないかなというように考えます。こうなってくると、ますます伝説はより確かなものとなり、本当にそ 屋布とか、屋布の谷や屋谷跡というような地名はおそらく長者伝説を受け入れてから、新たに成立した地名 かですね、 て周辺に拡大して、最初は米原だけが舞台だったのが、どんどん広がっていって、米原長者の田 あるいは隣の長者と出会ったところだとかというようになった。それから各地に残っている長者 んぼ)の跡 نح

の那賀郡衙のところは長者山地区と言います。このように、郡衙の跡には、長者という地名が付いていると という、郡の役所遺跡を集めました本等を見ますと、例えば、一つだけ言いますと、 実は、こういう長者伝説というのは、全国にあると言いましたけれども、『日本古代の郡衙遺跡』 水戸市にある、 雄 常陸国 Щ 閣

ころが多くあります。

り、 ところが、長者原とか長者屋敷とか、そういう地名になっているのが多くあるということが分かります。 同じようにみていきますと、奈良文化財研究所が公開している古代地方官衙関係遺跡データベースによ 長者という地名をみていきますと、やっぱり駅家だとか、郡衙だとか、かつてそういったものがあった 全

国各地で同じような動きがあったということがわかるわけです。

四.平城京との比較

歌で知られます。よく知られている百人一首にもあります、「いにしへの 奈良の都の 岡京に遷って、都としての歴史に一応のピリオドを打つのですが、その後も、ここでは伝説というよりも和 奈良の都の 次に進みますと、ここは時間の関係でさっと飛ばしますが、平城京と比較します。 にほひぬるかな」ですとか、一二世紀に出来た『為忠家初度百首』という歌集の中でも、「すみれ咲く 跡とては
いしずゑのみぞ
かたみなりける」という、建物の礎石が、都を偲ぶものとして 平城京は七八四年に長 八重桜 けふ 九重

残り、現在まで引き継がれているものが多いですね。今の道路からも、平城京を偲ぶことが出来る訳です。 京 きていますが、こうしたものが地名として残っており、これは鞠智城跡と同じかと思います。 それから、 奈良の都の跡では、その条坊地割、 遺存地名ですが、平城宮跡の中に、「大宮」とか、「大り宮」、「大黒の芝」、これは大極殿 つまり、 都の道路が平城京が都でなくなった後も、ずっとそのまま ちなみに平城 から

歌われるというようなことがあります。

五.鞠智城跡の再発見と調査・研究

て、二〇世紀になると本格化する。発掘調査も開始されていくわけでありまして、現在では文献史料、 かという検討が進みます。これは焼け米だとか、礎石だとか、地名だとか、こういったものの検討から始まっ 次に、 鞠智城跡の再発見と調査・研究に移ります。江戸時代くらいから、 鞠智城がどこにあった 地理

究成果の蓄積をもとに、 的な資料あるいは大宰府との関係など、発掘調査の成果も絡んで、 整備、 復元といったものも進められているところであります。 様々な分野から研究が進められ、 その研

六.文化遺産としての鞠智城跡

定する。それが文化遺産としての価値を高める、鞠智城跡の価値を高めることになると思います。 掘調査を継続し、その成果と、文献史料、地理資料等、すべてを総合して、それによって学術的な意義を確 れは当たり前のことであって、これまでさまざまに検討されてきたことであります。それからさらには、 をみるときには、まずは、それを米原台地の中で見る必要があります。さらには菊池郡、 つまり九州、そして東アジアというように、拡大する視野の中で鞠智城を見ていく必要があります。 そして、最後、 しめくくりになります。文化遺産としての鞠智城跡ということです。 われわれが鞠智城跡 肥後国、 西海道、 まあこ 発

らには全国の長者伝説の範囲という中での鞠智城というものを語るということが出来ないでしょうか。これ と思います。それからさらには、今日紹介したことからいいますと、米原長者伝説が広がっている範囲、 なくても、もう少し人々がそこに行って、場を楽しめるというような手段を作っていただけたらありがたい れども、やはり車がないと行けないということは、人々がそこに行くことを難しくしていますね。 はり公共交通機関をなんとかしていただけないかなと思います。大変むつかしいことはよくわかるのですけ 最後に、今後の文化遺産、鞠智城跡ということですが、感じたことを率直に言わせていただきますと、 毎日では

は活用の方になってきますが、米原を越えて、全国的な交流が、そういった中で出てきたらいいのかなとい

うように思った次第であります。

いました。

それでは少し長くなりましたけれども、 わたくしの話を終えさせていただきます。ご清聴ありがとうござ

パネルディスカッション





東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は日本古代史。

聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、現在、 課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、 東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士

パネラー

佐藤 正知(文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官)

舘野 和己(奈良女子大学特任教授) 吉村 武彦(明治大学名誉教授)

木村 龍生(熊本県教育委員会)

佐藤 信(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

鞠智城・東京シンポジウム 2017

司 会 · お待たせいたしました。それでは、パネルディスカッションを開始させていただきます。まず初め

に、パネリストの方々をご紹介いたしましょう。

文化庁文化財部記念物課(主任文化財調査官、佐藤正知さま。

明治大学名誉教授、吉村武彦さま。

奈良女子大学特任教授、舘野和己さま。

熊本県教育委員会、木村龍生。

そして、コーディネーターは佐藤信さまです。

部教授を経て、現在は東京大学大学院人文社会系研究科教授でいらっしゃいます。今日はコーディネ 後、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学

佐藤信さまは、東京大学文学部国史学科を卒業され、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了

ーターを、佐藤信さまにお願いいたします。

その歴史的価値を再考する-」というテーマでパネルディスカッションを進行していただきます。そ 本日このあとはコーディネーターの佐藤さまと、 四人のパネリストの皆さまにより、「鞠智城跡

れでは、壇上の皆さま、このあとどうぞよろしくお願いいたします。

今日これまでに、佐藤正知さんはじめ、吉村さん、舘野さんのお話がありまして大変興味深く、 それでは、約一時間二〇分ですけれども、ディスカッションさせていただきたいと思います。 幅の

掘調査を担当されてきて、報告書の作成にも中心的に関わられた方であります。まず最初に、 の調査・研究の成果について簡単にまとめていただきたい。そのあと、今日の三人の先生のお話を伺 カッションに加わっていただいた木村龍生さんは、熊本県教育委員会の職員で、これまで鞠智城 うかと考えておりました。これらのお話を踏まえて、これから議論したいと思います。パネルディス た上での感想も伺いたいと思います。最初に木村さん、どうぞよろしくお願いします。 色々な視角から鞠智城が理解できるというお話を伺ってきました。これをどうやってまとめよ 鞠智城 の発

木村: 失礼します。熊本県教育委員会の木村と申します。よろしくお願いいたします。まず、 鞠智城跡

発掘調査成果についてご説明したいと思うんですけれども、今日同封しておりますこちらのパンフレ

ットに沿って簡単にではございますけれども、説明させていただきます。

まず表紙を見ていただきますと、鞠智城が写っております。古代山城というお城は、本当は山の中

城というのはかなり平坦な部分に造ってるという点が、古代山城の中でも特徴的なものとして挙げら 腹から上に造るというのが多いんですけれども、この写真を見ていただくと分かりますように、

次に2ページをご覧ください。こちらには古代山城が造られる経緯等が書いてあるんですけれども、

れます。

で考えられています。真ん中に「古代山城の分布」という地図があると思いますけれども、九州のち 鞠智城につきましても、白村江の戦いのあとに日本を防衛するために造られたお城の一つということ

のは、 ょうど真ん中ぐらいに鞠智城がございます。地図を見ていただきますと分かるとおり、 古代山城の中で一番南に造られたお城になります。 鞠智城という

代官道を使いますと八十数キロの距離がございます。ですので、大宰府を直接的に守るお城、例えば、 大宰府が攻撃されたから鞠智城から援軍を早期に派遣するということは厳しいところがございますの で、今、熊本県教育委員会としましては大宰府の後方支援基地という位置付けで捉えているところで 先ほど吉村先生のご発表の中でもありましたけれども、大宰府から直線距離で六二キロ、当時の古

記事が出てまいります。そのあと百数十年間が空くんですけれども、 ご発表の中でも、朝鮮式山城と神籠石系山城という二つ、古代山城の種類があるとありましたけれど のにまた登場しますけれども、その時に一つ特徴的なことが、菊池城院という表記に変わってるんで に『続日本紀』というものに六九八年、大宰府に大野城・基肄城・鞠智城の三城を修繕させたという 続きまして3ページをご覧ください。上のほうに「文献に見る鞠智城」とございますが、先ほどの **鞠智城につきましては文献に記載がありますので、朝鮮式山城の一つと捉えられます。まず最初** そのあと『文徳実録』というも

ども、それが、『文徳実録』に登場する段階になりますと、現在の市の名前であります「菊池」とい 最初に出てきた時は、難しい字の「鞠智」、「くくち」とも読みますが、そういう文字なんですけれ

すね。

思われます。

炭化米が今でも大量に出てまいります。ですので、この記事自体が発掘調査でも裏付けられる事実で 伝説につながった一つの要因になってるとも思われますし、実際発掘調査しますと、米倉の周辺では、 ってしまったという記事が出てきます。これが先ほど、舘野先生のご発表にもありました、米原長者 『文徳実録』に登場する段階では、 菊池城院の不動倉--米倉ですけれども、これが一一棟火災に遭

あるということが確認できます。

点を守るような、そういう位置取りをしてる、交通の要所に配置されてるということも重要かと思わ 蘇方面と熊本市方面に分岐するという道になっております。 ぐ南側に古代官道、車路と呼ばれるものが通っております。左上のほうに延びておりますのをたどっ て行きますと大宰府まで行きます。それが左上から右下のほうに下りていきますけれども、途中で阿 それと、その下の「鞠智城の位置」という、右下のほうに地図がございますけれども、 鞠智城は古代官道のちょうど分岐する地 鞠智城のす

この七二の建物は同一時期に全て建っていたというものではありませんで、鞠智城が三○○年存続し 広さがございます。この五五ヘクタールの中に現在七二の建物跡が発見されてるところです。ただ、 続きまして4ページからが発掘調査の成果になりますけれども、 鞠智城跡は現在五五へクタールの

現在鞠智城は大きく五つの時期に分かれておりますが、だいたい一つの時期に十数棟ずつ建物が建っ ていた中で七二の建物があったということになります。ですので、後ほど説明いたしますけれども、

ていたということが分かっております。

と五、三○○平米ございまして、この中から大量の瓦、 がありますが、こちらが貯水池跡という、 それと南側の三カ所に深迫門・堀切門・池ノ尾門という三つの城門跡が検出されております。それと、 いうものが出てきております。 この地図でいきますと赤い数字が建物の配置になるんですけれども、 このほか南側と西側には、版築という工法を使った土塁が築かれているのが確認されております。 池があった跡になります。この池の跡が、 土器、木簡、 木製品、それと仏像とか、そう その北側に青く囲ってある部分 広さで言います

たか何かして壊れたあとに、もう一回同じ場所に造り直されてるということで、合計四棟―二棟が一 は二軒がだいたい南北に五○メートル離れて存在しておりまして、それが一度どちらもいったん倒れ 配置をした建物跡が検出されております。こちらが、写真は一軒だけ載せておりますけれども、

あと、建物で特に注目すべきものが、4ページの真ん中に写真がございますけれども、八角形の柱

土しました遺物で一番重要なものが、真ん中にございます銅造菩薩立像という仏像になります。写真 続きまして出土遺物をご紹介します。5ページをご覧いただきたいんですけれども、 四棟、八角形の建物跡があったということが分かっております。 鞠智城跡で出

回で、

を見ると大きそうに見えますけれども、実際の大きさは一二.七センチという非常に小型の仏像にな らく百済で作られたか、百済の人が作った仏像であろうということがいわれております。 ります。いろんな仏像の先生方に見ていただきましたところ、その特徴から、 当時の朝鮮半島、 おそ

本にやって来て、最終的に鞠智城に来て、そこで埋められたか廃棄されたか、そういう結果で、 時にお守りとして自分の身に付けて持ち歩く、そういう仏像だということで、百済が滅亡したあとに、 こういうものを持てるのは貴族、そういう階級の人たちだと思いますので、そのような人が持って日 その小ささから、念持仏といいまして、携帯型の仏像ですね。おそらく、例えば戦争か何かに行く

城で出土したものではないかというふうに考えております。

非常に貴重な木簡ということで紹介しております。 古代の木簡ですけれども、実は熊本県では二例しかまだ発見例がございませんで、そういう意味でも 忍□五斗」と墨書がございまして、お米を鞠智城に納めたということを証明する荷札木簡になります。 続きまして真ん中の、仏像の右側にありますのが一号木簡というものになります。こちらが「秦人

いただきたいんですが、こちらが鞠智城から出土しました土器の数量の変化をグラフ化したものです。 須恵器と土師 ますと、やはり百済か、 続きまして、もう一つ右側に行きますと、軒丸瓦が載せてありますけれども、こちらの文様から見 (はじ)器を載せておりますけれども、これにつきましては右上のグラフも併せてご覧 朝鮮半島の影響を受けた瓦ということがいわれております。その下に土器が、

その次の段階、 七世紀第3四半期というのがだいたい鞠智城が造られたであろうと考えてる時期になりますけれども、 七世紀第4四半期から八世紀の第1四半期、この時期が急激に土器の量が増えてるの

が分かると思います。

数がゼロになるんです。これにつきましてはいろんな解釈があるんですけれども、一つは、その時期 じゃないかということを、 基肄・鞠智の三城を修繕させたという記事があったと紹介しましたけれども、ちょうどその時期に当 に鞠智城に人が常駐はしていないと。おそらく城外に人が住んでて、何かあるときだけ鞠智城内に入 たりまして、おそらく修繕の段階で、鞠智城にはたくさん人がやって来て何らかの活動をしていたん ただ、その次の段階がまた面白いんですけれども、八世紀の第2・3四半期になりますと、 この時期がどういう時期かといいますと、先ほど、文献の記載に、六九八年に大宰府をして大野 土器の数量からも見て取れるんではないかというふうに考えております。

う理由で土器が出ない状況になっているのかはまだはっきり分からない状況です。そのあともまた新 いうことが言えると思います。 たに土器が出土するようになって、最終的に一○世紀の第3四半期頃までは鞠智城は存続していたと ん廃城になっていたんじゃないかということを考える方もいらっしゃいますけれども、 っていたんじゃないかと考える方もいらっしゃいますし、もしかしたら、この段階で鞠智城はいった 実際、どうい

続きまして6ページをご覧ください。発掘されました遺物、それと、検出されました遺構から見ま

鞠智城は大きく五つの段階に分かれると考えております。まず鞠智城I期としますのが、

兵舎と倉庫など、 鞠智城が造られた段階になります。この時期は一番お城として重要な外郭線、 中の施設、そういうものが造られております。お城として最低限の機能を持たせる、 土塁跡と城門、

そういうものだったと考えられています。

す。それに加えまして、八角形の建物の北側に細長い建物が、片仮名の「コ」の形に配置するという いう機能もあるんですけれども、 コの字型配置という、よく当時の役所で見られる配置が登場します。ですので、この時期にはお城と 鞠智城Ⅱ期の段階になりますと、写真にもありますとおり八角形の建物跡が登場しま お役所的な機能も鞠智城に追加されたんではないかというふうに考

ことはまだこれから検討していく必要があります。 この時期ないんですね。ですので、この段階で鞠智城をどういうふうに管理・維持していたかという その次のⅢ期ですけれども、一応、建物跡は存在するんですが、先ほど申しましたように、土器が

えております。

建物跡やコの字型の役所的な配置の建物、そういうものが既になくなっておりまして、米倉が建ち並 ほうに、先ほど文献にも載っていたと言いました火災が発生しまして、鞠智城V期というのは、新し んでいるような状態、 続きまして第Ⅳ期、 基本的には倉庫群が中心になってる状況になっております。この段階の最後の 八世紀第4四半期からですけれども、この時期になりますと、先ほどの八角形

く新たに建て直して、また倉庫がたくさんある状況になるんですけれども、その段階を鞠智城V期と いいます。最終的に一○世紀第3四半期頃に、物も出なくなりますし建物もなくなっている、そうい

う状況になって鞠智城は廃城するという流れになります。以上です。

佐藤(信): ありがとうございました。鞠智城の発掘調査・研究がこれまでもたらしてくれた成果を非常 とめていただいたということでもあります。また、今日行っているシンポジウムも、 すごい努力の成果だということでありますし、そのためには、発掘調査を長年やってきて、それをま に的確に、まとめてお話ししていただきました。こういったことが分かってきたということ自身が、

たように一○回目だということで、調査や研究の成果を学術的に議論する場、

あるいは発信する場を

お話にありまし

手の研究者に研究助成金を出して鞠智城に関する最先端の研究を若い人たちにやっていただき、 研究の報告会というものもあります。これまで五名とか、今年は一人少ないみたいですけれども、若 これまで作っていただきまして、熊本県には感謝したいと思います。 また、先ほど途中でご案内がありましたが、今度、熊本市で開かれる若手研究者の研究助成の特別 、それ

究です。これらの論文は、ホームページ、インターネットでも誰でも見ることができる. この『鞠智城と古代社会』のこれまでの論文は、若手による大変興味深い、いずれもすごく面白い研 を発表していただく。その論文も『鞠智城と古代社会』という、研究紀要に載せて毎年刊行している。

また、鞠智城の発掘調査報告書も、これまでのものは全部ホームページで誰でも見ることができま

ういう努力をしていただいたおかげで、今日の古代山城の研究は鞠智城がけん引していると言ってい すし、これまでのシンポジウムの成果の冊子も、ホームページでどなたでもいつでも見られます。こ

いのではないかと思っています。

究を積み重ねていく必要がある。その上に、鞠智城の価値というものがより明らかになっていくとい や課題が残っていますし、テーマに尽きないところがある。まだまだこれからも、多方面に調査 これまで一○回もこうしたシンポジウムをやっても、まだ鞠智城という研究テーマには色々な疑問 一研研

うことだと思います。

が鞠智城の価値だと思われるものを、ご講演の先生方にそれぞれ話していただきたい、というのが第 す。これからのパネルディスカッションでは、三つの章に分けてお話をしていきたいと思っています。 った鞠智城の歴史的な価値、あるいは本質的な価値をどこに見るか。鞠智城の価値として、これこそ 第一章は、いずれの先生のお話もそうだったわけですが、学術的な調査・研究によって明らかにな そうした歴史的な価値に沿ったかたちで、整備や活用が行われるという方向になっていくと思いま

それを踏まえた上で、現地に行ったときに、 鞠智城の魅力はどういうところにあるかと

いうことをお話しいただこうと考えています。

第三章は、鞠智城のこれからの活用とか発信に向けた課題。これから鞠智城を整備したり、活用し

歴史的な価値をどこに見るかということについて、今日ご報告の順番で、最初に佐藤正知さんからお こういう点に力を入れたらいいのではないかということを、お話しいただきたい。以上の三章立てで、 たりする時に、どういうことが求められているかということです。 これからディスカッションしたいと思っております。まず第一のテーマで、鞠智城の学術的な価値 あるいは、 鞠智城の場合は特別に

話いただきたいと思います。よろしくお願いします。

<u>E</u> 郡家のほうでは、大鳥が飛び、屋根の葺き草を抜くということがあるんですが、それはカラスだった に、 に鞠智城の軍事的な本質故にそういうような現象が起こるのではないかなと考えます。また、 思います。これは当たり前の話で、何だ、そんなことかと思われるかもしれませんが、 んでしょうか。烏の城というのはそういうことかなと思いました。 さらに、河原にあった車石というのは、まさに私がスライドで説明した軸摺穴のある門礎石のこと 先ほど木村さんがおっしゃったように、兵庫が鳴動するということが起こりますが、それもまさ 鞠智城は、 白村江の敗戦を契機に造られた軍事的な記念物だというところに本質があるかと 九世紀の半ば

姫さまの足跡ということでしたけれども、まさにそういう軍事的な記念物が別なかたちで人々の記憶 の中に再生されていく、あるいは変容しつつ、記憶として語られていくといったところかなと思いま ではないかなと思います。あれをまさに車軸のように見ていたんじゃないでしょうか。 軍事的な記念物だということであります。 別の伝承には

す。

信 : 軍事的な古代の山城としての在り方という際に、何のためのという点は、いかがでしょうか。

<u>ਛ</u> .. してきますので、大野城や基肄城と違う別な性格のものではないかという意見も結構強いんですけれ て大野城、 それは、 基肄城、鞠智城の修理が実施されています。先ほど官衙的な役割というのが第Ⅱ期に登場 敵が攻めてくるという状況のなかで造られたものだと思います。のちに大宰府をし

対外戦に備えたものではないかなと考えています。

私は大宰府にこの三つを繕治させた、修理させたということの意味が大きくて、これはやはり

それは国土防衛の政策の転換の中で造られていくという、そういうイメージを持っております。 役割を担うことになるということで、繕治記事は非常に大きな意味を持っているんじゃないかなと。 **衛政策が大きく変わるわけですね。高安城をやめちゃうわけですから。それに前後して鞠智城の繕治** る、 記事が現れるというのは、大きく鞠智城の持つ意味というか、大宰府を防衛するという意味で大きな また、高安城が大事だとお話しをしましたけれども、これは山城をたくさん築いて国土の中央を守 そのために大宰府が一番の前進基地ですから、そこを整備するわけですけれども、 今度は国家防

は対外的なということで、隼人政策などはあんまり重くないということですね うことがあるわけですが、その背景として対外的な軍事が重いということですね。軍事の対象として ほとんどの山城が八世紀の前半ぐらいで機能を失うのに、その三つだけは後々まで機能しているとい たくさんある古代の山城の中でも、大野城と基肄城と鞠智城だけが六九八年に修造されて、

佐藤(正): そういうふうに考えてます。

(信) ·· 分かりました。ありがとうございます。それでは、鞠智城の歴史的な価値、 本質的な価値を

どう見るかということについて、今日も大変幅広いお話をいただいた吉村さん、お願いいたします。

日本の古代国家がどういうかたちでできたのかを考える場合、特に白村江の戦いで、当時は倭国で

すが、倭国と百済連合軍が新羅・唐連合軍に敗れるわけですね。この敗戦は、日本の古代国家をどう つくるかという点では、非常に大きな出来事だと思うのです。

負ける。それから、壬申の乱で国内的な争いがあったということになります。そのあとは律令制 戦いですが、日本列島内における内乱なのです。つまり、七世紀の後半に、国際的な白村江の戦いで 国づくりが進んでいくと思いますね の形成ということで、特に兵士制と関係する戸籍を造ったり、兵士を徴発したりということで急速に 白村江の戦いで敗戦して、次に壬申の乱という戦い、これは大海人皇子と天智の息子の大友皇子の

立して、 たのか、 今回の鞠智城というのは、先ほど木村さんが言われましたように、 北朝鮮の金正恩委員長が何かを述べたとか、すぐに伝わります。しかし、古代では対外的な 考えなければなりません。今ですと、朝起きたらアメリカのトランプ大統領があれこれ言っ 展開していく様子を示すのだろうと思うのです。ここに国際的な影響がどういう意味であっ 第Ⅰ期、 第Ⅱ期で、 鞠智城が成

影響がどのように出てくるのか、なかなか難しい問題です。鞠智城の遺跡の場合、対外的な契機の影

響は見やすいはずではないでしょうか。そうした視点から、歴史的な価値をどのように見ていけるで

これだけだと歴史的価値はなかなか理解できないかもしれません。今日のパンフレットの一番後ろを た菊池川流域は、米作り二千年といわれ、穀倉だともいわれています。 今では常識だと思いますが、稲作農耕はおそらく朝鮮半島を経由して入ってくる。日本遺産となっ 鞠智城も関係していますが、

三点しかありません。そのうちの一つが、江田船山古墳から出た、 ワカタケル(雄略天皇)を銘記した大刀がでています。そもそも五世紀における金石文というのは、 見ていただければ、和水町に江田船山古墳という古墳があります。この古墳からは、五世紀における 銀錯銘大刀(ぎんさくめいたち)

なのです。貴重な文字が刻まれている大刀が出土しています。

船が描かれ、馬がいるという絵があります。青銅器や鉄器が入ってくるのも、 陰などにもちょっとありますが、公開されている装飾古墳も少なくありません。装飾古墳の中には しょう。そして、 言葉を使いますが、日本の文明化に対する国際的な影響を考えるうえで、非常に分かりやすい材料で その後になりますと、装飾古墳館も建てられていますが、装飾古墳です。これは九州のほかには山 日本古代の国づくりにおいて、国際的な契機…学術的用語では国際的契機という難しい 白村江の戦いに敗北した結果、鞠智城が造られるわけです。 船を使って入ってくる

大宰府というのは、外交施設その他があった所で、大宰府都府楼とか、大野城、基肄城、あるいは

城は比較的低い丘陵地帯にあります。そうしますと、大宰府の大野城、基肄城とはちょっと別の役割 阿志岐山城などがあります。しかし、その周辺でも、 をもたされていたとなりますね。やはり日本の古代国家の形成という問題を考える場合、 ことです。当時の七世紀後半の日本を考える上で、遺跡の持つ意味を、 しかも、 朝鮮式山城の中では、大野城と基肄城は歩いて回るのがかなり大変なのですが、 朝鮮式山城といわれていた山城があったという 最大限に考えられると思いま 鞠智城が造 鞠

す。だって教科書を見ると、中央のことしか出てこないでしょう。 これはいったいどういう意味なのか。 を見ているようじゃ分からないわけです。大宰府だけではなくて、肥後国に鞠智城という施設がある。 われわれの歴史の見方は、 日本の教科書も悪いのですが、ついつい大和中心史観になってしまいま 九州でも同じことで、 大宰府だけ

られたことは、

一つの大きなことではないでしょうか。

たのか。こういう歴史を理解していくには、非常にいい遺跡ではなかろうかと考えています。 国家の形成とか、 らく稲積城と三野城なども七世紀後半から八世紀初めにかけて造られ、修理されます。 さらに稲積城と三野城は、木村さんが言うように南に位置するという説を支持していますが、 白村江の大敗を、 当時の日本がどのような危機感を持って、 国づくりに励んでいっ やはり律令制 おそ

置付けるというお話だったと思います。ちょっと補足させていただくと、『日本書紀』には、有名な ありがとうございます。今日の吉村さんのご講演も、 律令国家の確立過程の中で鞠智城を位

の中で、 その人を倭国の政府が自分の所に招請したいという話で出てくるのです。肥後の豪族が半島との関係 日羅という人物が出てきますが、この人は肥後国の地方豪族でありながら、百済の行政顧問になって、 石材が、これは木村さんに聞いたらいいと思いますが、吉備の古墳で使われていたり、 外交的に古くからすごく活躍してるということは文献的にも出てくる。また、 結構広い地域 肥後の古墳の

木村: 熊本で採れます石材が、例えば五世紀代ですと、岡山の千足古墳に天草で採れる砂岩ではないかと

まで行っていますよね。よろしいでしょうか、それは、木村さん。

円とか三角とかを表現するのがあるんですけども、それとほぼ同じような文様まで入ってるというこ いう石材が運ばれて、石室の石材として使われています。しかも、それには熊本の装飾文様、彫って

とで、非常に注目されています。

という奈良の古墳、こちらは推古天皇の娘さんでしたか、のお墓にもその石材が使われてるというこ われる所に運ばれて石棺として使われていることもありますし、もう少し時代が下りますと植山古墳 いわれるものがございますけども、これも、例えば大阪府高槻市の今城塚古墳、継体天皇のお墓とい それと、六世紀の後半ぐらいになりますと、宇土半島という所で採れます馬門石、通称ピンク石と 海上を経由した運搬が熊本から岡山とか近畿のほうに行われてるという事例がございます。

吉村: 今、日羅のことを言われましたけれど、これも朝鮮半島と日本列島との関係の一つですね。 今は、「帰

信 :

吉村さん、どうぞ。

行き来です。もう少し広げて、「交流」という言葉もありますが、むしろ「往来」という考え方を取 化」という言葉を避けて、「渡来」という客観的な言葉を使っていますが、これは半島から列島 ったほうがいい。つまり、特定の政治的センター同士が結びあうのは「交流」ですが、必ずしもそう への

でない場合は「往来」です。

関係があります。 も使われています。実は、九州から近畿中央部に色々なものが運ばれています。 特に九州の肥国の肥君氏の活躍を、もう少し考えなくてはいけません。日羅の場合は、大伴氏との 中央とも関係がある。古墳時代には、さっき言われた阿蘇のピンク石が近畿地方で

それから、朝鮮半島では、豪族が棺おけとして、コウヤマキを使用しています。どうもそれが好きら に来ただけではなくて、実は、物も人もかなり半島に出ていると。 また、 かなり日本列島から半島にいっています。ヒスイもいっていますが、一方的に半島から列島 九州地方から朝鮮半島に影響しているものでは、南島ですとゴホウラという貝があります。

といって夫を励ますという記事です。そういう意味から言うと、九州島と朝鮮半島との往来みたいな またま『日本書紀』に出てくるのは、夫がひ弱だったので、奥さんのほうが、「あなた頑張りなさい」 『日本書紀』にも、そのように記されています。夫が将軍として行ったら、奥さんもついていく。 そもそも、六世紀・七世紀の戦い、戦争には、将軍クラスの参戦は夫婦での従軍だと思っています。

ものもあります。

あり、 すね。 れた「秦人」は、向こうから来た移住民だと思いますが、出土した仏像も、向こうから来たものです。 肥国でいいますと、さっき言った阿蘇のピンク石は、おそらく有明海経由で近畿中央部に行くので 往来的な観点を持てばいいのではないでしょうか。国家が形成される際、単に一方的な影響を受け 大変なのであまり使っていないといわれますが、そうでもないだろうと思います。 海としては、玄界灘だけじゃなくて有明海も重要です。有明海というと潮の満ち引きがかなり 木簡に書か

ただけではないことが、わかると思いますが。 肥後の勢力が半島とも交流しているし、畿内の王権とも交流していたということですね。

う一つ補うと、

が高かった地域である。そういう所に鞠智城も置かれているということかなと思います。次に舘野さ λ です。圧倒的に肥後がトップです。ですから、九州の米どころとしては、古代では肥後が最も生産力 お願いいたします。

どを見ると、古代の西海道諸国の中で米の生産力が一番高いのは筑前・筑後ではなくて、

肥後国なの

菊池川流域の米作りの伝統が日本遺産になっているわけですけれども、『和名抄』な

思います。そういう危機感の中で鞠智城も出来てきたということだと思うのですが、鞠智城の歴史的 価値ということに話を戻すと、なかなか難しいのですけれども、ほかの山城と違うのは、 先ほどの白村江の戦い以降の急激な政治改革というのですか、国づくりを何とかしなきゃいけない 戸籍やら律令体制というのができあがったというのは吉村さんのおっしゃるとおりだと 非常に広い

平坦地を中に抱え込んでる。そして、そこに多数の、七二棟でしたか、もちろん時期は何百年かにわ たるわけですが、そういう多くの建物が見つかって長期間存続しているという、このあたりが特に違

うなというように思います。

建物を造ったりする時も、 今風に言えばスコップなんですね。鋤とか、鍬とか、斧の柄などが保管されていたということになっ われるわけです。 ていたわけですけれども、兵士というのは戦うだけじゃなくて、平時にはほかのことにもいろいろ使 て、これらは建築材を使う際に最終的な加工を施して、工具として使用する予定だったという。 ット『鞠智城』の5ページの一番右下でも、貯水池跡から木製品が出ていて、鋤や鍬などがある。 そういう広い平坦地ということですと、これはやや妄想的なところもあるのですが、このパンフレ **鞠智城の中は平坦地が広がっていて、谷の地形の所も多い。それから、そこに当然兵士が詰め** 土を掘り返すことが必要なので、そういうことに使われたのかもしれませ 何か 鋤は、

ければいけないということで、彼らが必要とするものか、あるいは蓄えるためのものなのか、先ほど 智城というのは米の貯蓄、そこに米を蓄えるという役割も持っていたことと、兵士ももちろん食べな 関係する史料には、兵士がとにかく使われる。やたらに使われてしんどいんだというような記事があ 戦わない時には兵士をほかの用途に振り向けるということがあるのですね。そうすると、

平城宮の中で木簡から兵士が池の掃除などに使われていたことが知られます。平安時代の大野城

と、今までの発掘調査で田畑の遺構は見つかっていないと思いますが、今後そうしたものも期待した もご紹介がありました、米の荷札がありましたけれども、もしかしたら、鞠智城内でも田畑を作って いるということがないのかなと。自給自足みたいなこと、そんなことも考えられないのかなというこ

いなというように思うところです。

うことで、警備を強化したりということがありますが、当然、太鼓が勝手に鳴ったり、戸が勝手に鳴 が鳴ったとかいうことがあちこちにあって、占いをすると対外的な危険が迫ってるのではないかとい ちこちに出てきます。特に兵庫が多いような気がします。兵庫の戸が自然に鳴ったとか、兵庫の太鼓 ういう怪しげな記事が出てきます。当時の歴史書『三代実録』を見ていきますと、そういう記事はあ るということはない訳で、誰かがやっぱり仕組んでいるんだと思うのですよね。 例えば鞠智城だったら、まずは肥後の国府でしょうか、そこから大宰府へ報告するということにな それから、もう一つ分からないのは、九世紀後半の記事では、兵庫の鼓や戸が自然になったと、そ

城側で何か上に訴えたいことがあって、そういうことを演出するということになったのかなと思いま るのでしょうが、誰かが仕組むということは、要するに、何か自己主張してるのではないかと。 こういった記事を見てみるということも、何か一つの突破口になるのかなと思います。以上です。 それが何なのかというのは、私、分かりませんけれども、そういうような意味合いで、もう一遍

佐藤(信):

ありがとうございます。ほかの古代山城にはない鞠智城ならではのものに注目するというこ

建物がどういう機能を果たしたかということも、まだ完全に解決しているわけではありません。そう いうことを考えることでも、鞠智城の特徴を追及することになると言えるのかなと思います。次に、 山城などにあると思います。日本では、山城ではここだけですね。鞠智城を考えていく時に、八角形 とだと思います。 ソウルの近くの二聖山城にあると思います。また、八角形の建物も、 貯木場のような貯水池があるのも、 日本では他に見つかっていない。 朝鮮半島では高句麗とか、二聖 朝鮮半島では

木村: 鞠智城の歴史的な価値について、木村さん、最後にお願いいたします。 私もまず、 一番重要なのは古代山城であるということだと思います。 これはもう佐藤主任調査官と

されてますように、平坦面が広いという、建物をたくさん造ったり、活動ができる広いスペースがあ 本全国で二二しかないという時点で、もう既に貴重な文化財であるということが言えます。それに加 同じで軍事的な記念物という、そういう本質がまず重要だと思います。 鞠智城だけが持つ特徴というのもやはりありまして、例えば、先ほどから何度も皆さんお話 しかも、それが今のところ日

それが、鞠智城が造られる前身の施設といいますか、あったんではないかというふうに考えてるとこ 造られるその直前まで、古墳時代から続く竪穴住居跡が十数軒見つかっております。私なんかはもう 墳時代から集落があるんですね。古墳時代の後期後半、だいたい六世紀の後半ぐらいから、鞠智城が これにつきましては、一つ重要な指摘があるんですけれども、実は鞠智城の建物がある部分には古

るというのが一つ重要だと思います。

智城につながるような建物、そういう施設があるということがまず、 ろがあります。そういうお城って、古代山城は二二城ありますけれども、 鞠智城がほかの古代山城と違う . 鞠智城だけなんですね。

唯一の特徴かなというふうに思っております。

ちょっとほかの古代山城とは違う特徴ということで、 例えばすぐ近くに国府という役所が別にできるんですけれども、鞠智城に関しては、 期に鞠智城に役所的な施設が、先ほども言いましたけど、できると言いましたけれども、こういうふ くに国府というのはできないで、鞠智城自身が役所的な機能を追加されてると。そういうところが うな役所的な機能を持たせる古代山城というのも鞠智城だけなんです。ですから、ほかの古代山城は、 あともう一つが、七世紀の終わり頃に、鞠智城の繕治という時期になりますけれども、 価値があるといいますか、差別化できるところ 鞠智城のすぐ近 私はこの時

佐藤(信): ありがとうございました。それぞれ、基本的な歴史的な価値、それから、古代山城の中で鞠 たらこういうところを推すという話を、次にしていただこうと思います。これもまた順番で、 知さん、お願いいたします。 ということに移りたいと思います。それぞれの方に、 ての学術的な検討であります。これから第二章では、どういうところが鞠智城の魅力、 智城だけが持つ価値について話していただきました。以上が第一章の、 鞠智城の魅力はこういうところにある、 鞠智城の歴史的な価値につい 売りになるか

私だっ

佐藤正

ではないかなというふうに考えているところです。

佐藤 (正): 鞠智城は古代山城の中では長く維持されるということや、不動倉とか兵庫といったものの存在

地元の古文書であるとか、あらゆるものを集めて研究しないといけない。黒板勝美さんが、史跡と遺 史料はもちろん、発掘の成果も集めて分析しなければいけないし、地元に伝わる伝承も、それから、 が確認されるということで、重要なのでありますけれども、私は、それでも資料は少ないので、

物は同時に保存されなければならないと言っていますが、それは、史蹟名勝天然紀念物保存法ができ る、今から一○○年前に話したことが、今、鞠智城において、文化財保護の真価が問われている。

らゆるものを総合して研究していくという点で、とても魅力あるテーマなのではないかなと思います。 これは明治大学が進めている古代学研究所、この古代学という枠組みも、吉村先生はそういうこと

を意図されてこの研究所を立ち上げられているんじゃないかなと思うんですが、まさにその古代学の

最大のテーマなのではないかなというふうに思いますが、いかがでしょうか。

佐藤(信): ありがとうございます。今日、舘野さんから長者伝説の話もありましたし、あるいは地名の

話もありました。黒板勝美さんが考えた、文献史料だけから語るのではなくて、遺跡や遺物も含めた ある意味では、そういうことが鞠智城の場合できるのではないか、ということだと思います。今の話 かたちで総合的に、今日に残るさまざまな文化遺産全部から歴史を考えるべきだということですね

吉村: 今日、冒頭で紹介しましたが、井上ひさしの言葉ですね。「難しいことを易しく、易しいことを深く、

も踏まえて、吉村さん、お願いします。

の街

世の文字資料はほとんどない。駅は国分寺ですが、小金井の隣が国分寺です。その隣が府中市で、 深いことを面白く」。結局、こうしたことをどう具体化していくか、ということになります。 地域に根ざしてやるということを考える場合、たとえば僕が住んでいるは小金井ですが、古代・中 古

代の国府があります。国分寺と国府に近接している場所に住んでいます。古代では、「都市型」

といえましょうか。

政治的拠点というのは市川ではありません。別の所にありまして、おそらく拠点から離れた場所に国 府が造られた。下総地域には三国造がいたのですが、どうも国造の拠点から離れた場所に、 ったのではないかと考えています。市川の場合も都市型なのです。 鞠智城の場合は都市型ではなくして、「田舎型」といったら怒られるかもしれませんが、田舎型の 具体的に言えば、文字資料は多くの墨書土器が出ています。ただし、下総国の場合、旧国造の 市川市史の編さんを手伝っていますが、市川には国府と国分寺があります。古代の政事の中心 国府を造

魅力をどのように醸し出すのか。最近ではいろいろ工夫されているかと思います。

特色が描かれなかった時期がありましたね。最近では、それでは駄目だということで、 たものから日本の歴史を見ればどうなるのか。こうしたプレゼンが意外と難しいのですね かつては市町村の通史とか、地域の博物館の地方史を考えますと、日本の歴史を重視して、 地域に残され 地域

鞠智城の跡は二つの市にまたがっています。ただし、アクセスを見ていただければ分かります

ます。 が、今一つです。皆さん、旅に出ようとすると、温泉があることに注目しますよね。これは悪くはな 山古墳だと思います。こういう場所と何とかつなぎ合わせれば、鞠智城の魅力もさらに増してくるの るんじゃないかと思います。しかも、鞠智城は二時間もあればだいたい回れますし、自然も満喫でき ではないでしょうか。つまり、学術的な価値だけではなく、もう少し歴史と自然との魅力を引き出せ ほかの基肄城なども、実はアクセスが悪いのですが、一般的に山城というのはアクセスが難し **鞠智城周辺にも温泉があります。古代史ファンですと、最初に見たいのは、装飾古墳や江田**

ます。ですから、魅力はいっぱいあるように思います。これを教育委員会の人も含めて議論し、どう 番いい。できましたら温泉に泊まってもらって、温泉に浸りながら疲れを癒やすのがいいように思い 面白く、どう古代を追体験できるようにしていくか、というところに尽きるかなと思います。 鞠智城の場合は、確かに舘野さんも言われましたが、熊本空港からレンタカーを借りて回るのが一

いのですね

主体的に学ぶ条件にできるのですよね。それをどう地元の方が導いてくれるのか、ということです。 たとえば東京から、どうして訪れるのか、もう少し工夫してくれればいいかな、と思います。 鞠智城の場合には、熊本県立装飾古墳館の分館扱いなのですが、温故創生館という施設があ 近くに装飾古墳館があって、ここもなかなか面白い場所ですし、 温故創生館を通じて、

熊本交通センターから菊池温泉行きバスで約六○分と言われても、熊本交通センターがどこにある

親切さがほしいですね。終わったら、温泉に泊まって美味しい幸をほおばるとか、こういうかたちに うことがあるので、アクセスの方法とか、あるいは鞠智城だけではなく、一日かけてどこを回るのか、 かよく分かりません。熊本駅前だと約七五分と書かれていますが、遠くてがっかりしますよね。とい

してもらうと、歴史的な魅力が増しますね……。

少し歴史的な魅力を交えたストーリーを作って、一日ここで過ごしてもらうプランがあればと思いま やはり、ある程度ストーリーを作って魅力を感じてもらわないと駄目みたいです、そういう、もう

す。

かな、 なるんじゃないかと思います。ですから、周辺地を含めて歴史的魅力を語っていくストーリーがいる てほしいですね、どうして行くかが難しいものですから、歴史的魅力を作っていけば、訪問者も多く 鞠智城には、温故創生館のような学習施設もありますので、もう少しこれを生かして、魅力作りをし を借りて回った方もおられましたが、その辺をちょっと掘り起こすようなことはできないでしょうか。 と思っています。 われわれの若い時代には、新婚旅行というと阿蘇とか別府とかに行きましたよね。 レンタカー

佐藤 (信 :: 付けられます。アジアとの関係があるし、大和王権との関係もあるし、大宰府とももちろん関係ある わけです。あともう一つ。東北の多賀城という古代の城柵に行くと、多賀城駅前に地元のまんじゅう これまでの話でも、 鞠智城が色々な交通の要所であったり、様々なネットワークの中で位置

吉村・・ のだと。今、吉村さんの話が第三章の領域にも入っていましたが、古代の山城、あるいは鞠智城でス うのです。こういうものが古代の城であり、古代の城は近世の城郭と違って、こういうものであった やはり古代の城を訪れる方には、古代の城はこういうものだということを知っていただきたいなと思 守閣はありません。天守閣は近世になってからのもので、熊本城にはあるわけですけれども。ですから、 めざしたかということですし、そこでどういうインパクトが多かったのか。 屋さんの看板があって、それに天守閣が描いてあるんです。多賀城まんじゅうに。古代のお城には天 の一生に例えると、日本の青春時代ではないかと思っています。そうしますと、どういう国づくりを トーリーを作るとしたら、どういうストーリーになるかという点では、吉村さん、いかがでしょうか。 急に言われてもなかなか難しいのですが、この時期、具体的には七世紀後半から八世紀初めは、 直接には関係しませんが、皆さんは当然戸籍に入っています。学生時代に、最初に籍帳を考えた時、

戸籍なんかどこの国にもあるように思っていました。しかし、戸籍がある国は、古代とも関係します

が、 日本では古代から伝わっている。そして、太宰府市の国分松本遺跡からは、戸籍に関係する木簡が出 朝鮮、 日本ぐらいでしょうか。確か、中国の周辺諸国しかないのですね。こういう戸籍が、

夜は温泉に入って、また鞠智城のことを思い出してもらう。これがいいのではありませんか。 ちょっと難しいのですが、日本の国づくりと関係させて鞠智城のストーリーを作って、来てもらう。

あと、おいしい料理もないと駄目かもしれません。次に舘野さん、お願いします。 鞠智城の

歴史的な魅力について。

舘野: あとでどうしようかと思ってたんですけど。鞠智城の魅力としては、先ほど歴史的価値のところでも、 もう今、吉村さんが、私が三番目に活用でしゃべろうと思ってたことをほとんど言われてしまって、

の表紙にもありますように、見渡せるというこの景観自体が魅力じゃないかなと思っています。一部

非常に広い平坦地が広がってると言いましたけど、こういうふうに見渡せる、パンフレット『鞠智城

復元もされてますので復元建物、 あるいは礎石が並んでる所、土塁線、あるいは貯水池の跡とか、

ういうものが見渡せる。

鞠智城内が見えますし、それから、西のほうを見ますと、今度は裏表紙の、鞠智城のマークから左斜 頂上になってまして、ここに行くと非常に眺めがいいです。東側を見れば長者山とか、長者原とかの め上のほうに四~五センチ行った所に、不動岩展望所というのがある。不動岩という、高さ八○メー れている所の真ん中辺りに、灰塚と呼ぶ所があります。これはちょっと独立した丘陵というか、 トルもある大きな岩が、そそり立っている景色も見える。灰塚からの眺望というのは大変な魅力では 例えば4ページの鞠智城跡全体図というのをご覧いただきますと、西側土塁線という赤い線が書か Щ

ちょっと思い出しましたが、ソウルから南のほうへ行った所の南漢山城という、ソウル近郊の山城

ないかと思うところです。

り、ある程度のアップダウンもありということで、そのようなことにも使えるのではないかなと思い ッキングとか、そういう聖地になって大勢来られているのですね。ですから、 へ行ったら、大勢の人がいるんですね。山城ですから山の中なのですが、そこは結構歩くとか、 鞠智城も、 平坦 地もあ トレ

ます。そのためにもまたアクセスが大事になってくるのですけど。

るということ自体、一つの魅力だと思いますので、その活用ということも魅力アップにつながるので それからまた、私がちょっとご紹介しました米原長者伝説といったもの、これもそういうものがあ

佐藤(信): ありがとうございます。 はないかと思います。以上です。

味とプラスして大きな価値を構成すると言ってもいいかもしれないと思います。それでは木村さん、 ような古代の官道の跡も一応推定されている。そういった景観的な魅力みたいなものは、 いる。ふもとの平坦地には条里制の水田の遺構も結構残っていますし、車路という名前が残っている らく当時の人も灰塚に登って同じような景観を眺めたと思います。そういう歴史的景観が今も残って ありがとうございます。確かに、鞠智城で灰塚に登れば、誰でも感激すると思います。 歴史的な意 おそ

木村: 写真に載ってますけども、長崎県の雲仙・普賢岳がはっきり見えたり、三六○度すごい見晴らせる地 四番目だともうだいたい皆さんに言い尽くされてるところがあるんですが、ちょっとかぶるんです 私も一つは灰塚という地点をお勧めします。こちらに登ると、天気がいい時、3ページの下の

歴史的な魅力についてお願いします。

います。ただ、発掘調査したところ、特に何も出なかったというふうに聞いてます。 ます。そののろしを上げる時に出る灰がたまって塚になったので灰塚じゃないかといういわれがござ ちなみに灰塚という地名の由来ですけども、ここがのろし台だったんじゃないかという説がござい

代の山城には天守閣というのはないんですよとちゃんと説明しますが、その辺の工夫は今後していく 思います。特に八角形の建物等は、実際こういう建物だったかという問題はちょっとあるんですけれ 来る方の大半は、これが天守閣かと言って見て帰られる方が多いので、 あと鞠智城の魅力といいましたら、やっぱり建物等を若干ですけど復元してるというのがあるかと やはり実際現地に来ていただいて見ていただくとかなり迫力があるものになってます。ただ、 われわれが外にいる時は、 古

佐藤(信): ありがとうございました。多賀城と同じようなことがあったのかとちょっと思いました。そ 必要があるかと思っております。以上です。

れでは、最後の第三章で活用に向けてのご意見をいただこうと思います。すでに第二章の中で踏み込

番最初に木村さんにお尋ねしたいと思います。鞠智城は、写真にありますように若干の復元建物があ ということについてご紹介いただきますとともに、普段考えておられる課題がありましたら、お話し ったり、 んでお話しいただきましたが、簡潔にお話ししていただいて、締めたいと思っております。今度は 園路も整備してあるわけですが、現在どういう整備がされていて、どういう活用をしてるか

いただきたいのです。

木村: おります。そのほか城内くまなく散策できるように園路を設定したり、あと、部分部分に椅子やベン ただくと白い四角になってたりすると思いますけども、建物があった場所を表現してるとこになって 建物跡につきましては四棟を復元しております。そのほかの建物につきましても、この写真を見てい 現在、平坦面の部分、長者原という地区になりますけど、こちらにつきまして芝生広場にしており、

チ、あと休憩所とかを設置するというかたちで整備を進めさせていただいてるところです。

く報告書を作る段階であらためて精査しましたところ、この三つの建物が同じ時期のものではないと 課題がございます。一つは復元した建物です。2ページの下に、こちらに三つ建物が建ってる写真が までの間には、この三つの建物は同じ時期のものだと考えて復元してるんですけれども、 あると思います。八角形の建物と米倉と兵舎三つなんですけれども、実はこれを復元した平成一一年 いう結論になっております。 今後も整備を続けていく予定で計画を立てているんですけれども、新しく作った計画で大きく二つ 現在、

見学に来られた方に説明して見せていくかという、そういうことが今、整備の課題として一つ挙げて 八角形の建物、 とは同じ時期にあってはならない状況になってるので、こういうものを今後どういうふうに整備して、 これで言いますと一番左の長屋風の兵舎が一番最初の時期に建ってまして、その次が奥にあります 手前にあります米倉につきましては鞠智城Ⅳ期という時期の建物ということで、 ほん

車を置いて歩いて二○分とかでようやく到達するんですけれども、まだ実はその辺りの整備が進んで ら建物を見て、資料館を見て、隣に物産館もありますので、そこに寄ってそのまま帰るという方が多 いんですけども、やっぱり山城ですので、ほんとは土塁ですとか城門跡、その辺もじっくり回りたい っていう方もいらっしゃるんです。ただ、そこの城門や土塁にアクセスするためには、この駐車場に レンタカーを使っていただくと、一番最初にお城の中核の部分に来ることができるんですね。来てか もう一つが、これは鞠智城のメリットでもあるけどデメリットにもなるんですけども、

実は外郭の石垣を一周三時間とかで歩いたり、そういうふうにできますので、その辺の鞠智城の整備 を今後進めていく必要があるところかなということで考えております。

おりませんので、あまりじっくり見ることが出来ないということがあります。

それに比べてほかの山城ですと、例えば先ほどから名前が挙がっております岡山県の鬼ノ城ですと、

佐藤(信): ありがとうございます。あと、三人のご講演の方も現地に行かれていると思いますが、今後 の活用についてのご意見を順番に、今度は佐藤正知さんから、お願いいたします。

先ほどの、舘野先生がご紹介された長者伝説に関連して申し述べれば、 ない話です。今、男女共同参画社会ですから男も女も分け隔てなくやってるわけですけども、そこで しまうわけです。金をたくさん集めたけれども、男子がいなかったと。その話は今じゃとても通用し 活用ということで言えば、古代山城サミットというのが毎年やられており、注目しています。 あそこでは米原長者は負けて

大事な伝承は、 ここを中心にいかに人づくりをしていくかということが大事なんじゃないかなと。それをすれば米原 人だということだと思うんですよね。つまり、山鹿、 菊池、 それから熊本県の方々が

あるいは○○長者にも負けない遺跡になるのではないかなということを思いました。

じゃないかなと思いますので、そういう点でも非常に面白いものではないかというふうに思っており が文化的なんだっていうものじゃなくて、山城っていうのは自然と文化が一緒になった記念物なん 産と文化遺産って大きく二つに分けるんですけれども、われわれは幸いそれを一つの法律でやってい 文化を相手にする仲間が一緒の法律でやってるんです。これは世界にはないんです。世界では自然遺 それがこの古代山城の魅力でもあるわけです。どこからどこまでが自然で、どこからどこまで わが国の思い出係でありますから、一言付け加えると、生き物係と思い出係という、 自然と

(信) :: 立地としての菊池川との関係もあると思います。ありがとうございます。吉村さん、お願い

(july) o

どういうかたちで行くのか。特に関東圏なんかから行くのは、近くの国府や国分寺に行くのとは違い ればいいのではありませんかね 熊本の方は小学校、 舘野さんも言われましたが、トレッキングっというか、歩くことを意識したストーリーも作 中学校の遠足で鞠智城に来られるかもしれません。しかし、それ以外の人が、

れていますし、 東京の方では、たとえば東海道だけではなく、いろいろな所を歩くというのが盛んなようです。僕 神奈川の長柄桜山古墳を見に、逗子市にある丘陵を歩いてきました。道がかなり整備さ 帰りに逗子市郷土資料館になっている、実業家の別邸を見学してきました。そういう

ですね。周辺には古墳もみられますし、歴史を体験できる展示があればいいですね。 りづらいと思いますね。考古学研究者ではありませんが、城門を造るなど具体的に分かるものが必要 さきほど木村さんが言われましたが、歩くコースみたいなのも整備していかないと、見学には分か

それと大宰府、あるいは全国の古代山城と提携する。すでに山城サミットをやっておられるかもし

場所には、写真も展示してありました。

思います。 ても、すぐ行って見られるということではありませんよね。公開日というのが春とか秋とかになって あちこち訪問するのも楽しいですが、鞠智城としても何年に一回かはサミットのような催しを誘致さ いるかと思いますが、そういうイベントを含めて見学できるようにすれば、いいのではなかろうかと れて、鞠智城周辺とタイアップしていく。相乗効果が出るように思うのですが。装飾古墳の見学といっ れませんが。国府サミットとか、国分寺サミットというのがありますが、それなりに盛んなようです。

泊二日とか、二泊三日で鞠智城と熊本を回っていけるのではないでしょうか。 もう少し大きな話をすれば、JAL とか ANA とかと提携して、 鞠智城ツァーとかやっていけば、

初ば、東京20/42%は、2017 200

かえない装飾古墳をガラス越しに見られようにしていただければ、いいのではなかろうかと思ったり いは装飾古墳を回るツァーをやっていただく。そういう時には、公開日じゃなくても、 ですから、もう少し気楽に行けるツァーがいいですね。JAL・ANA を利用する、 **九州だと JR 九州が列車観光を行なっていますね。高額なので、** われわれ年金生活になると無理 見てもさしつ 鞠智城、 ある

ありがとうございました。舘野さん、お願いいたします。

かりませんが、米原長者もいれば、その近くに駄の原長者もいるし、結構近くにいろんな長者がいた は、私のお話の中でさせていただきましたように、長者伝説を使う。どうしたらいいかはすぐには分 そういうものと一体となった活用というか、回るというようなルートを作っていただくとか、あるい ようでありますから、熊本県内長者サミットも出来るのではないかと。あるいはもう少し広げて九州 しゃったような装飾古墳だとか、江田船山古墳だとか、魅力的な遺跡がいっぱいあるわけですから、 ダブるところもあると思いますが、アクセスをよくしていただくということと、近辺に、今おっ

そうなのかという、そういう意見は今もあるかと思います。ですから、復元するということはもちろ の範囲とか、いろんな部分でできるのかなと思います。 ん一つの、遺跡を知ってもらう方策ではありますけれども、それ以外にもいろんな方策はあるのでは それから復元ですが、なかなか難しいです。今、八角形の鼓楼として復元していますが、ほんとに

はなく違う形で復元できる可能性も、何十%かはあるのですね。ですから、こういうような復元案も が、一○○%そうではないのです。何十%かは今復元したような姿だったかもしれないけど、そうで **雲大社をどう復元するか。遺構として見つかった大社の建物をどう復元するかという問題で、出雲歴** ないかと思います。最近だと CG を使ったようなものがあったりとか、福岡県古賀市の鹿部田淵遺 の大極殿でもそうですが、ああいうものだったと皆さん当然思ってしまうのではないかと思うのです もお金がかかることでありますけれども、そういうような手もある。一つ復元建物を造ると、平城宮 史博物館へ行くと、人によって復元案が違うので、五つぐらい模型が作られているのですよね。これ 向こうには掘立柱の建物があることが実感できるなどという例もあります。あるいは、 アクリル板でしょうか、透明の板があって、そこに絵を描いており、 板の前に立って見ると、 出雲では、

佐藤(信): ありがとうございました。鞠智城には温故創生館という大変立派なガイダンス施設があります。 そこに活躍していただいて、訪れた方が、古代の山城とはこういうものだということを理解していた

思います。以上です。

あるというような、そういうバリエーションを理解できるような工夫というのも、必要ではないかと

それで、 ほかにも日本列島には古代の山城がありますけれども、鞠智城はわりと条件がいいと思ってい 八角形の「復元」した鼓楼を見て、これが天守閣かということがないようになると大

変ありがたい。他にも、体験学習などもやっていただいて、古代の戦いはこういうものだったという

ことも含めて、理解してもらえるようになるといいですね。

も分かるようになるといいなと思います。もう一つ、今はボランティアガイドの方はいらっしゃるん 今伺うと、サインだとか説明板が圧倒的に少ないのではないのかなと思います。一人で歩いて

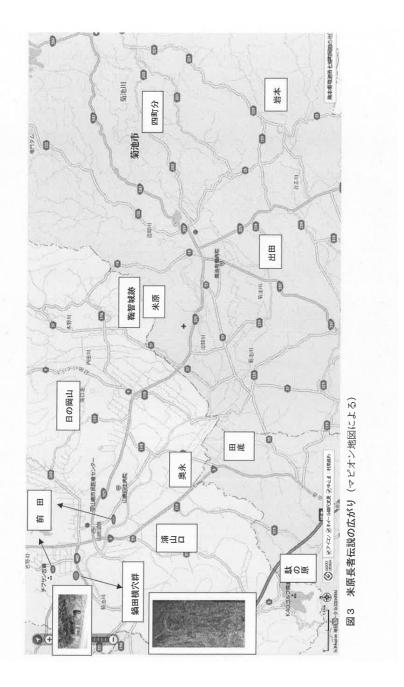
でしょうか。木村さん。

木村:はい。

(信): そういう地元の市民の方の協力も得ながら、 進め方の不備についてはおわび申し上げますが、これで今日の「鞠智城・東京シンポジウム かるようなかたちで伝わるようになるといいなと思います。もうここで時間が来てしまいましたので、 鞠智城の歴史的な意義というものが市民にも分 鞠智城

跡-その歴史的価値を再考する-」を閉じさせていただきたいと思います。どうもありがとうござい

ました。



江戸時代の森本一瑞『肥後国誌』(明和9(1772)年)、渋江公正『菊池風土記』(寛政 6(1794)年)などに始まり、20世紀に本格化(坂本経寺「鞠智城址に擬せらる米 原遺跡に就て」(1937年、『肥後上代文化の研究』1979年に所収)など)

発掘調査の開始以後

1967~1970年の熊本県教育委員会による学術調査が嚆矢

→72棟の建物跡、3ヵ所の門跡、貯水池跡、土塁線など検出 1959年、県指定史跡「伝鞠智城跡」→1976年「鞠智城跡」→2004年、国指定史跡に

文献史料や地形・交通路、大宰府との関係など、多岐にわたる論点からの研究蓄積 遺跡の整備、建物の復元など進む

6 文化遺産としての鞠智城跡

鞠智城を見る視覚

米原台地周辺 →菊池郡 →肥後国 →西海道 →東アジア、の中での鞠智城 発掘調査の継続と、文献史料・地理資料などの総合研究

→学術的な意義の確定 →文化遺産としての価値を高める →整備もそれに基礎を

今後の鞠智城跡

公共交通機関の整備 →アクセスを容易に →近辺の遺跡との連携 米原長者伝説の範囲、さらには全国の長者伝説の中での鞠智城を語る →米原を越え、全国的な交流も





(奈良女子大学古代学学術研究センター

4 平城京との比較

和銅3(710)年3月 藤原京から平城京へ遷都

天平12(740)年12月 恭仁京へ遷都

天平17(745)年5月 甲賀宮(紫香楽宮)から平城京へ還都

延暦3(784)年11月 平城京から長岡京へ遷都

延暦13(794)年10月 長岡京から平安京へ遷都

大同4(809)年12月 平城上皇が平城宮に移る ←遷都後も施設の一部は残る

天長元(824)年7月 平城上皇死去 →平城京の歴史にピリオド。以後、水田化進む

和歌に詠まれる

『詞花集』春・29

ー条院の御時、奈良の八重桜を、人のたてまつりて侍りけるを、そのおり、御前に侍りければ、その花をたまひて歌よめと仰せられければ詠める 伊勢大輔 いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな

「伊勢大輔の歌以降、その影響のもとに、(中略) 奈良の八重桜をとりあげる 歌が多く詠まれるようになった」

*一条天皇:在位986~1011、1011没、伊勢大輔(~1060年)

『為忠家初度百首』(藤原為忠主催の百首歌、長承3(1134)年頃成立)

古砌菫菜 (源)仲正

すみれ咲く奈良の都の跡とてはいしずゑのみぞかたみなりける(110)

「すみれが咲く奈良の都の跡としては、礎石だけが旧都をしのぶよすがなのであるよ、の意」「平安後期に至ると、類型を打ち破った目新しい表現を模索する気運が生じ、それまで和歌に詠まれてこなかった語句や題材を取りこんで歌を詠むことが盛行する」

岡崎真紀子「旧都の礎-平安後期和歌に見る平城京」奈良女子大学古代学 学術研究センター『都城制研究(10)』(2016年)

平城宮跡の遺存地名(図3)

「大宮」「東大宮」「大り宮」

「大黒の芝」 ←「大極殿」(関野貞『平城京及大内裏考』(1907年)

遺存地割

平城京の条坊地割は、廃都後も存続 →現存地割に平城京の痕跡

5 鞠智城跡の再発見と調査・研究

浦山口: 山鹿市鹿央町岩原

前田千町:山鹿市石と山鹿市山鹿に前田地名あり

奥永千町:山鹿市鹿央町千田奥永

庄嶋・土用月・川崎はいずれも奥永の東、山鹿市鹿本町中川のバス停名にあり

焼米の出土・礎石の存在 →口碑情報の伝来 →焼米・礎石などと結びついて受容 →米原長者伝説の成立 →地名などの付会的解釈 →伝説の定着 →周辺への拡大 新たな地名の誕生も(長者原・長者山・長者屋布など)→伝説はより確かに 上記の地名は、米原長者伝説の受容範囲を物語るか

長者伝説の広がり

板橋源「高山掃部長者伝説焼米出土遺跡」『岩手大学学芸学部研究年報』第16巻第1 部(1960年)によると、当時の焼米の出土事例は21件、うち5例は長者屋敷跡

条里制・古代都市研究会編『日本古代の郡衙遺跡』(雄山閣 2009年)によると、

台渡里廃寺跡長者山地区(茨城県水戸市):常陸国那賀郡衙

長者ヶ平遺跡 (那須烏山市:下野国芳賀郡衙 焼米出土、八幡太郎義家の長者屋敷 焼き討ち伝説の地

長者原遺跡 (横浜市青葉区): 武蔵国都筑郡衙 荏田村に長者が住んだ長者丸地名

奈良文化財研究所古代地方官衙関係遺跡データベースによると、

避翼駅家推定地(山形県最上郡舟形町長者原):避翼駅家

清水台遺跡(郡山市):陸奥国安積郡衙 虎丸長者伝説あり

郡山台遺跡(二本松市杉田字郡山台・長者宮): 陸奥国安達郡衙

長者山遺跡 (日立市): 常陸国藻島駅家カ、別院倉庫

長者屋敷遺跡(常陸太田市):寺院.集落.駅家か久慈郡衙

今池遺跡(上越市): 越後国府か国司館 長者原周辺。本長者原廃寺と関連か

長者川遺跡(羽咋市): 能登国羽咋郡衙か

長者屋敷遺跡(磐田市): 豪族居宅か郡衙館別院

伊勢国府(長者屋敷)遺跡(鈴鹿市):伊勢国府

長者原遺跡 (鳥取県西伯郡大山町): 伯耆国汗入郡衙正倉か正倉別院か奈和駅家

長者屋敷遺跡(鳥取県西伯郡伯耆町):伯耆国会見郡衙正倉ヵ

福原長者原遺跡 (行橋市): 官衙

五万長者遺跡(雲仙市):肥前国高来郡衙か高来郡寺

長者屋敷官衙遺跡(中津市大字永添字長者屋敷):豊前国下毛郡衙正倉 などあり

坂口で出会った。米原長者には1人の男子もなく、金銀よりも男子が多いことが浦山し(羨まし)と言ったので、そこを浦山口という、と言う。…④

これらの俚説は一笑に堪えないが、遍く老農の伝える話なので、記して万笑に備える。

『菊池風土記』(渋江公正 寛政6(1794)年)巻1

長者屋敷

- 米原村に有。米原長者の遺跡と云。烏の城と唱へたる由。長者の姓氏時代しれず。 名は孫三郎と云たる由。俗説に前田千町、奥永〈今玉名郡庄嶋・土用月・川崎辺ヲ云〉 千町を有てりと云。凉殿・玉屋殿・月見櫓・蔵床、今其跡有。蔵床と云ハ、俗不動倉 の跡を長者に傅会するなり。
 - * 庄嶋・土用月・川崎: いずれも山鹿市鹿本町中川のバス停名にあり 鈴木元 (熊本県立大学文学部)「『菊池風土記』巻一註釈」(同氏のHP「地 域文化研究の部屋」) による

米原長者伝説は、日本各地に残る長者伝説(「長者屋敷」①③、「炭焼長者」②、「宝競べ」④)と同工異曲 →この地で生まれたものではない

(柳田國男「辞書解説原稿」『定本 柳田國男集 第26巻』(筑摩書房 1964年)) 参照

それが定着するにあたって、鞠智城跡の遺構や近辺の地名などが取り入れられる

「通例の形は二人の長者が地を接して住み、一方は米俵を堤に築き、又は金銀を路に布いて、それを踏みながら出会したところが、他の一方はただ十二人の男を引連れて出て来た。これより以上の寶は、この世の中にはあるまいと、一方の子を持たぬ長者が、初めて人生の寂寞を感じたといふ風に語つて居り、肥後ではその口碑を受け入れ易くするために、浦山といふ地名を援用した伝説もあつた。」(柳田「宝競べ」322頁)

遺構等:涼ノ殿、月見櫓、玉屋敷、蔵床、長者の鐘掛松

出土物: 団粉土 (禹余糧), 焦米の砂

地名・地物 (図2)

出田村:菊池市出田、米原:山鹿市菊鹿町米原(長者原地区)

四町分村(長者屋布): 菊池市四分町

→岩本村(屋布の谷)(菊池市旭志弁利岩本) →米原村へと移動

河原の車石、出田村付近の屋布跡

菊池谷、山鹿郡茂賀ノ浦、田底:熊本市北区植木町田底

山鹿郡日ノ岡山: 鞠智城跡の西北方、山鹿市蒲生と下内田の境界が走る

踏切の崖の婢女像:山鹿市鍋田東の鍋田横穴群の人物像か

仮名は孫三郎。涼ノ殿、月見櫓、玉屋敷、蔵床などという旧跡あり。蔵床は四方に土居あり、中に礎あり。近辺に礎石だとして大石多かったが、近世耕作の妨げとして、半ばは地中に埋めた。一石には長者の姫の足跡あり。また長者の鐘掛松というのがあったが、近年大風で砕けた。この辺りには団粉土あり、禹余糧である。また焦米の砂あり。…①

里俗に言うのは、昔ある公卿の娘は美しく、常に泊瀬の観音を信仰し、参詣していた。娘が16歳になったので、父母は結婚先を探すが、娘は大悲尊(=観音)を信じ求めると必ず感応があるので、7日間を限って仏意を聞き、それに任せたいと言う。参籠して祈ると、観音が夢で「汝の夫婿は肥後国菊池郡の賤夫である孫三郎である。早く下れ」と告げる。娘は過世の拙きを悲しむが、父母の許しを得て、婢女10余人を連れて都を出て菊池郡に来て、出田村の辺りで籃(=籠)を作って生計を立てていた孫三郎に出会い、夫婦の約束をしてここに移り、富有の身となり米原長者と号した。

一説には、清水寺の観世音を信じていた16歳の娘が、清水寺に通夜したところ、夢で観音が「汝の夫婿は肥後国菊池郡四丁分にいる薦編小三郎という者である。これに嫁せば、福寿は意のままになろう」と告げる。娘は四丁分に到り貧しい小三郎に事の由を語り、夫婦の縁を結ぶことを求める。小三郎は驚き、自分の貧しさを語る。娘は懐から金2両を出し、今夕の食事を買って来るように頼む。小三郎は出かけたが、戻ってきてしまう。その理由を聞くと、下の谷まで行って川にいた鷺を捕ろうと金を投げたが、逃がしてしまったと言う。娘は驚き、どうするのかと言うと、小三郎は、これ(金)はわが屋布(やしき)に多くある礫であると答える。そこで鍬で家の裏の土を掘ると、黄金が大量に出てきた。そこで夫婦になり、家は富み栄えた。その跡は、今四町分村の長者屋布である。その後、岩本村に移り住んだ所を屋布の谷と言う。その後米原村に移る。河原にある車石という石は、長者の財宝を車に積んで岩本に移る時に、路傍の石に車を引っかけ軸が折れた所である。出田村の辺りにも屋布跡というのがある。…②

また里老の説に、用明帝の時に富饒の者が朝廷から長者号を賜り、米原長者と号した。 奴婢・牛馬1000余を有し、菊池谷から山鹿郡茂賀ノ浦まで、田底3000町を耕作した。 毎年1日で田植えを植えていたが、ある年漸く半分終わったところで、日は西に傾い た。長者は金の扇で招き返したが、なお終わらなかった。長者は油樽3000を出し、山 鹿郡日ノ岡山に灑いで火を付け、その光で田植えを終えたところ、その天罰でその夜 火輪が出て屋宅・倉廩は尽く焼けた。それ以来、火ノ岡山は焦土となり、山石黒く木 は茂らず。その時昼飯にした団粉は焼土となり(禹余糧である)、蔵に蓄えていた米 穀は焼けて砂のようになって今にある。耕作の道は踏切という切通しである。昼飯を 運んだ婢女10余人の像が踏切の崖に残っている。…③

かつて長者は山本郡の駄ノ原長者と財宝比べをしようと、米原から茂賀浦の坂口まで、 田底3里に黄金の蹈石を敷いた。駄ノ原長者は男子24人を連れて来ただけで、彼らは (前略)大宰府言、去五月一日、大風暴雨、官舎悉破、青苗朽失。九国二嶋尽被損傷。又肥後国菊池城院兵庫皷自鳴。同城不動倉十一宇火。(後略)

『三代実録』貞観17(875)年6月20日辛未条

大宰府言、大鳥二集肥後国玉名郡倉上、向西鳴。群鳥数百。噬抜菊池郡倉舎葺草。 『三代実録』元慶3(879)年3月16日丙午条

(前略) 又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。

発掘調査からみた施設の状況

土塁で囲まれた面積約55%(内城地区)

掘立柱建物・礎石建物・倉庫など72棟、門、貯水池など検出

時期区分:成立→整備・改修・改変…存続→終焉

矢野裕介「鞠智城跡の調査と成果」熊本県教委『鞠智城東京シンポジウム2014 成果報告書』2015年による

I期:7世紀第3四半期~第4四半期

城門・土塁・掘立柱倉庫・兵舎・貯水池

Ⅱ期:7世紀末~8世紀第1四半期前半

コの字型の「管理棟的建物群」・八角形建物・倉庫群 →施設が最も充実

Ⅲ期:8世紀第1四半期後半~第3四半期

小規模な礎石建物出現

土器の空白期間

Ⅳ期:8世紀第4四半期~9世紀第3四半期

「管理棟的建物群」なくなり、貯水池中央部の埋没開始

大型礎石の建物 →食糧などの備蓄機能が主体に

Ⅴ期:9世紀第4四半期~10世紀第3四半期

建物数減少、大型の礎石建物 →食糧の備蓄機能存続

2 鞠智城の終焉以後

10世紀中頃には終焉を迎える

施設の廃棄・破壊 →遺跡化 →忘却

回想

関係地名の成立・遺存(図1)

涼みケ御所・佐官(しゃかん) どん・少監どん・紀(まつり) 屋敷・長者井戸など 米原長者伝説の成立

3 鞠智城跡の米原長者伝説

『肥後国誌』(後藤是山編 1916年)に見える長者伝説(概要)

文化遺産としての鞠智城

舘野 和己(奈良女子大学特任教授)

はじめに

鞠智城が成立して以後、文化遺産となるまでの歩みをたどる 鞠智城の成立→存続→終焉→忘却→伝説の成立→再発見→調査・研究→整備

1 鞠智城の成立と存続

所在地

米原台地

鞠智城前史

縄文時代晩期、弥生時代中期~後期、古墳時代後半に集落営まれる

鞠智城の成立 ←大地への働きかけ

成立の要因

必要性

白村江の敗戦以後の対外的危機 →金田城・基肄城・大野城・水城などと一体 大宰府の後方支援基地(南へ約63⁺。)

有明海・八代海方面への前進基地

南島対策、対隼人 など

立地

低い丘陵上(標高約100~168年の米原台地上)、広い平地

菊池川の河口から直線距離で約27*。

菊池川流域に肥沃な菊鹿盆地(台地との比高差約100〜〜)、県下有数の穀倉地帯

交通路:「車路」「車町」地名 →菊池川・内田川流域を官道が通る

肥後国菊池郡城野郷に比定

文献史料の存在

『続日本紀』文武 2 (698) 年 5 月甲申(25) 条

令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三城。

『文徳実録』天安 2 (858) 年閏 2 月丙辰 (24) 条

肥後国言、菊池城院兵庫皷自鳴。

『文徳実録』天安2(858)年閏2月丁巳(25)条 又鳴。

『文徳実録』天安2(858)年6月己酉(20)条

- 702 大宝 2 8 命に逆らう薩摩・多褹を征討し、戸を校へ吏を置く。[国司・島司] 10 唱更国司ら「国内要害の地に柵を建て、戍を置きて守らむ」と言う。
- 712 和銅 5 1 河内国高安烽を廃す。
- 713 和銅 6 4 大隅国を置く。
- 718 養老 2 養老律令(律10巻、令10巻。施行は757年〈天平宝字1〉)
- 719 養老 3 12 備後国安那郡茨城、蘆田郡常城を停する。
- 756 天平勝宝86 怡土城を築く。
- 765 天平神護13 大宰大弐佐伯宿祢今毛人を築怡土城専知官、少弐采女朝臣浄庭を修理 水城専知官とする。

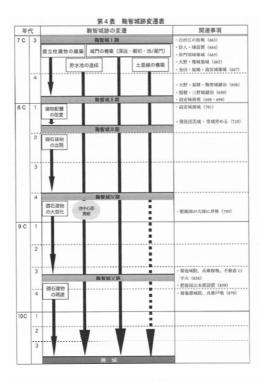
【参考文献】

赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』631, 2016年 小田富士雄『古代九州と東アジアⅡ』同成社、2013年 狩野 久「瀬戸内古代山城の時代」『坪井清足先生卒寿記念論文集』2010年 下向井龍彦「日本律令軍制の形成過程」『史学雑誌』100-6、1991年 鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4、2010年 向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017年 八木 充「百済滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』722、2008年

熊本県教育委員会『鞠智城跡 II』2012年 熊本県教育委員会『鞠智城跡 II』論考編 1・2、2014年 熊本県教育委員会『古代山城 鞠智城を考える』山川出版社、2010年 熊本県教育委員会『古代山城 鞠智城を考える』II、2012年 熊本県教育委員会『鞠智城シンポジウム』2012、2013年 熊本県教育委員会『鞠智城東京シンポジウム』2014~2016年 熊本県教育委員会『ここまでわかった鞠智城』2013年 熊本県教育委員会『鞠智城と古代社会』1~5、2013~2017年

【年表】

- 663 天智 2 8 白村江の戦いで大敗。
- 664 天智 3 5 唐使郭務悰が、表函・献物を進上する。この年、対馬島・壱岐島・筑 紫国等に防と烽とを置き、筑紫に水城を築く。
- 665 天智 4 8 長門国に城、<u>筑紫国に大野・椽(基肄)の二城を築く</u>。9 唐使劉徳高 ・郭務悰と禰軍(旧百済官人)が、表函を進上する。遣唐使派遣。
- 667 天智 6 3 近江に遷都。唐使が、遣唐使を筑紫に送る。11 大和国高安城・讃岐国 屋島城・対馬国金田城を築く。
- 668 天智 7 1 天智天皇即位。9 新羅が調を貢納する。唐が高句麗を滅ぼす。この年、 唐が倭国征伐の船舶を修理するが、新羅攻撃かという(『三国史記』)。
- 669 天智 8 1 蘇我赤兄が筑紫率。8 高安城を造ろうする。冬に、高安城を修り、畿 内の田税を収む。9 新羅が進調。この年、遣唐使を派遣。唐使郭務悰 ら2000人が遣わされる。
- 670 天智 9 2 戸籍(庚午年籍)を造り、盗賊・浮浪を断つ。高安城を修りて、穀と塩とを積む。また長門城一つ・<u>筑紫城二つ</u>を築く。8 新羅が高句麗王を冊立(唐・新羅の対立)。9 遣新羅使。
- 671 天智10 1 冠位・法度を施行(「近江令」の存否)。唐使が上表。天智天皇没。
- 672 天武 1 6 壬申の乱。大海人皇子が近江朝廷軍を破る。
- 673 天武 2 2 大海人皇子が即位 (天武天皇)。
- 675 天武 4 2 天武が高安城に行幸する。3 栗隈王を兵政官長とする(栗隈王は壬申の乱時に筑紫大宰)。10 畿内の諸王・有位者に武装させる。[676,679,684,685,693,699,700]
- 676 2 唐が朝鮮半島支配を放棄する。
- 683 天武12 11 諸国に詔して、陣法を習わせる。
- 685 天武14 11 軍用の楽器・兵器の私家所蔵をやめ、郡家に収める。
- 686 朱鳥 1 9 天武天皇没。持統皇后称制。
- 689 持統 3 6 浄御原令(22巻)施行。戸籍作成(庚寅年籍)。兵士への武事教習。 9 石上朝臣麻呂・石川朝臣蟲名らを<u>筑紫</u>に遣し、位記を給送する。ま 新城を監す。10 天武が高安城に行幸する。
- 690 持統 4 1 持統天皇即位。
- 693 持統 7 12 諸国に陣法博士を遣わし、兵法を教習させる。
- 694 持統 8 12 藤原宮遷都。
- 698 文武 2 4 南島に使を遣わし、国をもとめさせる。5 <u>大宰府に、大野・基肄・鞠</u> 智三城を繕治せしむ。8 高安城を修理する〈天智5年築城〉。
- 699 文武 3 9 天武が高安城に行幸する。11 南島より帰る。12 大宰府に、三野・稲 積二城を修せしむ。
- 700 文武 4 6 筑紫惣領に、寛国使を脅迫した薩末比売、衣評督・助督、肝衝難波を 処罰させる。[寛国使は698年の遺使か、新たな遺使か] 10 筑紫惣領 ・大弐を任ず。
- 701 大宝 1 8 高安城を廃す。 大宝律令(律6巻、令11巻)完成。



(『鞠智城跡 Ⅱ』)

★ 十安広のよう関係軟任表

/			536 (宣化元) 那津官家修造	_	_
,			609 (推古17) 筑紫大率初見 663 (天智 2) 白村江戦に大敗	前期	
-		古段階(a)	664 (天智3) 対馬・壱岐・筑紫に防人・烽をおき 水城大堤を築く 665 (天智4) 大野・椽二城を築く		锁 紫
大宰府Ⅰ期	政庁Ⅰ期	新段階(b)	689 (持統3) 6 月飛鳥浄御原令制定 9 月位記伝達使者筑紫に到る 690 (持統4) 7 月大宰・国司遷任 694 (持統8) 12月藤原京遷都 698 (文武2) 5 月大野・基康・鞠智3城を修築	後期	大幸
大宰府Ⅱ期	II a 期	同上 礎石建瓦葺	701 (大宝元) 8月大宝律令制定 710 (和銅3) 3月平城京遷都 769 (神護景雲3)『此府人物股繁天下之一都会也』 (続日本紀) 941 (天慶4) 6月藤原純友の乱・政庁全境		5 5
大宰府Ⅲ期		同上			É

(小田富士雄図)

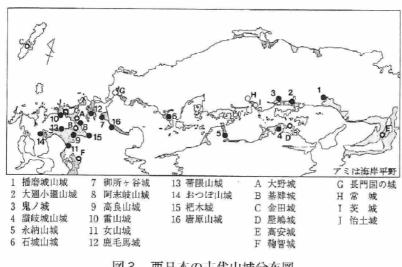


図3 西日本の古代山城分布図

(向井一雄図)

学史的	山城名	時 期					
な分類	山	7世紀	8世紀	9世紀	10 世紀		
	大野城			-	mi		
朝	差肄城			minimin			
朝鲜式山城	金田城		m(
山	屋嶋城	-	_				
城	高安城				111		
	鞠智城			_			
	播磨城山城	and the same of	-				
(神籠石系)	大廻小廻山城	111			111		
籠内	鬼ノ城	-					
有の	讚岐城山城	punctions	3000000				
少量	永納山城	anne de la constante	SERVICE SERVIC				
7704	石城山神籠石			perco			
	御所ヶ谷神籠	111	m				
	阿志岐山城						
	高良山神籠石						
釉 九	雷山神籠石						
神籠石系)	女山神籠石						
复品	鹿毛馬神籠石	person					
①城	带隈山神籠石						
	おつぼ山神籠石	encodescent	man .				
	杷木神籠石						
	唐原山城	sound Jacobson	ment :				
		■出土遺物	勿などからる	なて確実			
	100 -tv.	可能性7	がある				
	傭 考	圖出土遗物	勿はあるがこ	ごく少量であ	あるなど		
		不確実					

(赤司善彦図)

大宰府Ⅱ期

- (2) 鞠智城
 - 第1期 7世紀第3四半期~第4四半期 創建期
 - 第2期 7世紀末~8世紀第1四半期前半 コの字型建物群、八角形建物。土器等の遺物出土量が多く、内部 施設が充実化。
 - 第3期 8世紀第1四半期後半~第3四半期 礎石建物出現
 - 第4期 8世紀第4四半期~9世紀第3四半期 礎石建物の大型化
 - 第5期 9世紀第4四半期~10世紀第3四半期 倉庫機能
- 2 大宝令の施行と鞠智城
 - a 大宝令制下の防衛体制
 - * 律令制的軍団制
 - * 律令法と城柵
 - *大宰府と新たな鞠智城
 - b 大宰府と鞠智城
 - * 鞠智城維持の目的
 - c 山城・鞠智城の諸施設
 - * 舎屋(高安城)、税倉(高安城)、不動倉(鞠智城)、兵庫(鞠智城)、 城庫 (大野城)、穀・塩倉 (大野城)

むすびにかえて

- b 「総領」「大宰」と古代山城
 - (1) 筑紫大宰
 - (2) 東国総領
 - (3) 吉備・周防・伊予の総領
- c 筑紫大宰と古代山城
 - (1) 初期の官衙施設
 - (2) 交通路
- 4 山城築城の技術者
 - a 百済系技術者の築城
 - (1) 大宰府の系譜
 - * 南朝建康城 → 百済泗沘城 → 大宰府都城 (小田富士雄説)
 - (2) 百済系技術者と山城
 - *「遺達率憶礼福留・達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城」 (『書紀』天智4年〈665〉条)
 - b 寺院建設の場合
 - *飛鳥寺の伽藍配置
 - 高句麗 清岩里廃寺の影響
 - c 評制の場合
 - *部民制の廃止と評制の施行
- Ⅱ 鞠智城をめぐる諸問題
 - 1 筑紫大宰と鞠智城
 - a 鞠智城成立に関連する文献史料
 - (1) 『続日本紀』文武2年(698) 5月条
 - *「大宰府をして、大野・基肄・鞠智の三城を繕治はしむ」
 - *「修治」の評価
 - (2)『日本書紀』天智4年8月条
 - *「達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽(基肄)二城を築かしむ」
 - *肥後国の鞠智城はない。
 - b 大宰府と鞠智城
 - (1) 大宰府の成立
 - * 小田富士雄「大宰府の成立関係略年表」

大宰府Ⅰ期

古段階、新段階

列島古代史における鞠智城

吉村武彦

はじめに

- I これまでの研究を問い直す
 - (1) 古代山城の築城意図・形態は同じなのか?
 - (2)「朝鮮式山城」と「神籠石」は同じであるのか、設置意図が違うのか?
 - (3) 百済系技術者が築城すれば、百済系の山城になるのか?
 - (4) 九州・瀬戸内の古代山城の運営は、国衙なのか総領(大宰)なのか?
 - (5) 廃止される山城と、継続する山城があるのはなぜか?
- Ⅱ 古代山城の諸形態
 - 1 朝鮮式山城と神籠石
 - a 『日本書紀』記載の有無と古代山城
 - b 古代山城の名称
 - 2 古代山城の種類 狩野久説の批判的継承
 - a 山城の種類
 - (1) 西日本の山城
 - * 大宰府管内の山城
 - *瀬戸内の山城
 - (2) 畿内の山城
 - * 高安城
 - (3) 東北の城柵
 - *日本海側の城柵
 - * 太平洋側の城柵
 - b 瀬戸内の山城
 - *体系的な防衛シフト
 - c 大宰府管内の山城
 - *大宰府都城(筑前)の山城
 - *大宰府都城外の山城
 - 3 「総領」と「大宰」
 - a 「総領」「大宰」の種類
 - (1) 筑紫大宰
 - (2) 東国総領
 - (3) 吉備・周防・伊予の総領

【表5	1 =	14211	r tett FF	150	年末

西暦	年号	T	関係年表 記 事
4.7.5	斉明	6	唐・新羅により百済滅亡
000	HPA	-	10月、百済王子余豊璋の帰国と救援軍の派遣を要請。天皇、百済救援のための出兵を命じる
001	-	-	
661			5月、朝倉橋広庭宮に遷る。
	天智	2	
664		3	The state of the s
665		4	8月、達率答体春初を遣わし、長門国に築城、達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣わし 大野・禄の二城を築く。
667		6	3月、近江大津宮に遷る。
		<u> </u>	11月、倭国に高安城、讃吉国山田郡に屋嶋城、対馬国に金田城を築く。
668			10月、高句麗滅亡。
669		8	8月、天皇、高安嶺に登る。高安城の工事を中止する。
_		_	是冬、高安城修理、畿内の田税を収む。 羅唐戦争(~676)
070			2日 康年年鋒先浩川 次師。理治夫恭解 實史情故理 動見传太後は、又真明に聞ニへ 如此
670		9	
671		10	
			6月、栗隈王を筑紫率とする。
			11月、対馬国司、使を筑紫大宰府に遣わす。
672	五天	元	6月、壬申の乱始まる。7月、三尾城と高安城が落城(高安城は税倉を焼く)。
675		4	2月、高安城行幸。
676			新羅が朝鮮半島を統一。
678			12月、筑紫大地震。
679			11月、初めて関を龍田山、大坂山に設置。難波に羅城築城。
681		10	2月、浄御原令編纂開始。
-	16.16		3月、日本書紀の編集開始。
689	持統	3	6月、浄御原令完成。
			9月、筑紫に石上麻呂らを遣わし、位記を送る。かつ、新城を視察させる。
			10月、高安城行幸。
694		. 8	12月、藤原宮に遷る。
			4月、肥後国皮石郡壬生諸石に追大弐を授与。久しく唐にあって苦しんだことをねぎらってのこ
698	文武		5月、大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を修理(繕治)させる。
000	AIL.	- 4	
		_	8月、高安城修理(天智天皇5年に築いた城である)。
			渤海国建国。
699		3	9月、高安城修理。
			12月、大宰府に三野・稲積の二城を修(つく)らせる。
700		4	6月、大宝律令完成により、刑部親王、藤原不比等ら19人に賜禄。
			10月、筑紫総領、周防総領、吉備総領らを任命。
701	大宝	元	6月、大宝令施行。
701	八五		
702			8月、高安城廃止。舎屋、維の儲物を大倭、河内二国に移し貯える。衛士を増員。
_			6月、遺唐使再開。
	和銅		3月、平城京遷都。
712		5	正月、河内国高安烽を廃し、高見烽と大倭国春日烽を置き、平城に通じさせる。古事記完成。
	0		古事記完成。
			8月、高安城行幸。
714			2月、紀清人らに国史を撰修させる。
	養老		12月、備後国安那郡の茨城、芦田郡の常城を停廃する。
720	建七		
	44.60		5月、日本書紀完成。
	神亀		渤海国が日本に初の渤海使を派遣。
	天平勝宝		6月、怡土城築城開始。
759	天平宝字		新羅遠征を計画。
764		8	正月、佐伯宿祢今毛人を営城監とする。
765	天平神護		3月、佐伯宿祢今毛人を築怡土城専知官とする。果女朝臣浄庭を修理水城専知官とする。
	神護景雲		2月、筑前国怡土城築城完成。
-	宝亀		11月、筑紫凿大津城監を廃止。
	延暦		
	严 潛		平安京遷都。
799			4月、大宰府管内を除いて烽を廃止。
826	天長	3	11月、大宰府管内諸国の兵士を廃止し、統領・選士を置く。大宰府には統領8人、選士400人を 置。
858	天 安		国2月、肥後国が菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴ると報告。
000	^_		又鳴る。
			6月、肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。同城の不動倉十一宇が焼失する。
869	貞観		新羅海賊が博多津で豊前国の絹綿を略奪。
		4.7	6月、大宰府が、大鳥2羽が肥後国玉名郡の倉の上で西に向かって鳴き、また数百羽が菊池郡
275		17	舎の葺草を噛み抜くことを報じる。
875	一麻		3月、肥後国菊池郡の城院の兵庫の戸が自ら鳴る。
879			a Pi - Lieta de Lieta de COTINIO de 45. Mai 2012 a la 1. CENTRA SER MAI MAI MAI LIE ANTIGE AN
_		元	6月、大宰府、新羅国の徐善行ら48人が肥後国天草郡に来着したことを報告する。
879	仁和		6月、大辛村、新維国の保書行ら48人か肥侯国大早郡に米着したことを報告する。 5月、新羅の賊、肥前国松浦郡を襲う。
879 885	仁和	5	

56

l
2
6
9
2
-
-
- 1
1
1
1
_
1
-
1
-
-

一乗谷朝倉氏遺跡·竹生島 笠置山·船上山行宮跡 金剛山・三徳山・屋島 神泉苑 嵐山·大多羅客宮跡 隼人塚 平等院庭園·頭塔 厳島 離宮院跡·吉野山 その他 熊山遺跡 多田院 久能山 上塔 井川 経塚 | 磨崖仏・供養塔等 | 参詣道・町石 8 教会 神社境内 国分寺・尼寺跡 神社跡 = [表4]祭祀信仰関係史跡の指定の歩み 寺院境内 寺跡·廃寺跡 13 12 14 11 17 18 19 20 21 22 23 23 24 26 25 25 27 27 60= 13 12 西暦 和暦

大野城跡	昭和7年7月23日	2 · 3	大野城阯並四王寺阯
	昭和 28 年 3 月 31 日	(四・二)	特別史跡指定・名称
			変更
	昭和 51 年 12 月 22 日 *		大野城跡附四王寺跡
			追加指定・名称変更
石城山神籠石	昭和 10 年 6 月 7 日	1 (九)	
基肄(椽)城跡	昭和 12 年 12 月 21 日	2 (四)	
	昭和 29 年 3 月 20 日		特別史跡指定
	平成 20 年 7 月 28 日		追加指定
怡土城跡	昭和13年8月8日	2 (四)	
	昭和 19 年 6 月 5 日/昭和 19 年 3 月 23 日		追加指定
鹿毛馬神籠石	昭和 20 年 2 月 22 日	1 (九)	
	平成 14 年 3 月 19 日		追加指定
城山	昭和 26 年 6 月 9 日	1	
帯隈山神籠石	昭和 26 年 6 月 9 日	1	
女山神籠石	昭和 28 年 11 月 14 日	1	
	昭和 52 年 7 月 14 日		追加指定
高良山神籠石	昭和 28 年 11 月 14 日	1	
	昭和 51 年 12 月 25 日/平成元年 10 月 9 日		追加指定
御所ヶ谷神籠石	昭和 28 年 11 月 14 日	1	
	平成 10 年 9 月 11 日		追加指定
おつぼ山神籠石	昭和 41 年 6 月 21 日	1	
	平成 16 年 9 月 30 日		追加指定・一部解除
杷木神籠石	昭和 47 年 12 月 9 日	1	
金田城跡	昭和 57 年 3 月 23 日	2	史跡・特別史跡
鬼城山	昭和 61 年 3 月 25 日	2	
鞠智城跡	平成 16 年 2 月 27 日	2	
大廻小廻山城跡	平成 17 年 3 月 2 日	2	
唐原山城跡	平成 17 年 3 月 2 日	2	
永納山城跡	平成 17 年 7 月 14 日	2	
	平成 19 年 7 月 26 日/平成 29 年 2 月 9 日		追加指定
阿志岐山城跡	平成 23 年 9 月 21 日	2	
	平成 24 年 9 月 19 日		追加指定
	L.	i	1

⁺城山は昭和31年3月9日、帯隈山神籠石は昭和29年10月5日付けの官報で告示。

表 2【史蹟名勝天然紀念物保存要目】

史蹟ニシテ保存スヘシト認ムヘキモノ左ノ如シ

- 一 都城阯、宮阯、行宮阯、其ノ他皇室ニ関係深キ 史蹟
- 二 社寺ノ阯及祭祀信仰ニ関スル史蹟ニシテ重要ナルモノ
- 三 古墳及著明ナル人物ノ墓並碑
- 四 古城阯、城砦、防塁、古戦場、国郡廰阯其ノ他 政治軍事ニ関係深キ史蹟
- 五 聖廟、郷学、藩学、文庫又ハ是等ノ阯其ノ他教 育学芸ニ関係深キ史蹟
- 六 薬園阯、悲田院阯其ノ他社会事業ニ関係アル史 蹟
- 七 古関阯、一里塚、窯阯、市場阯其ノ他産業交通 土木等ニ関スル重要ナル史蹟
- 八 由緒アル旧宅、苑池、井泉、樹石ノ類
- 九 貝塚、遺物包含地、神籠石其ノ他人類学及考古 学上重要ナル遺蹟
- 十 外国及外国人二関係アル重要ナル史蹟
- 十一 重要ナル伝説地

【表3】古代山城の史跡指定の歩み

(太字は特別史跡、*は以降の履歴を省略、指定基準を算用数字で表示〈保存要目は漢数字〉)

名 称	指定履歴	基準 (要目)	備考
水城跡	大正 10 年 3 月 3 日	2 (四)	
	昭和 13 年 12 月 28 日		追加指定
	昭和 28 年 3 月 31 日		特別史跡指定
	昭和 49 年 8 月 10 日 *		追加指定
雷山神籠石	昭和7年3月25日	1 (九)	

表1 【特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準】

	遺跡の例示
左に掲げる - 貝塚、遺物包含地、 - 貝塚、集落跡、古墳もののうち 住居跡、優欠住居跡、殿 その他この類の遺跡 古墳、墓地など サの正しい 理解のため 他この類の遺跡 他この類の遺跡 に欠くこと	(遺物包含地、住居跡等を含む。)、ど
ができず、 且つ、その 遺跡の規 機、遺構、 出土遺跡等 において学 術上価値あ るもの	城、宮殿、官衙など 大宰府、国府、国衙、国庁、郡 , 城館、城郭、防塁、要塞など 庁、議事堂、裁判所、地方自治 場、戦災跡など 関する遺跡・・領事館など外交 政治活動・事象に関する遺跡
内、経塚、磨崖仏その他 祭祀信仰に関する遺跡 遺跡 遺跡 温跡 旧境内地・・チ その他祭祀信仰	寺・神社の堂宇・境域又はその 現存する社寺の本来の境域 仰に関する遺跡・・経塚、磨崖仏、 、霊場、祭祀遺跡、道場、教会、
私塾、文庫その他教育学 芸に関する遺跡	、藩学、郷学、私塾、国公私立 文庫、編纂所、研究所、試験所、 専物館、美術館、劇場など 学術・文化に関する遺跡・・新 、出版社、図書館、スポーツ施
その他社会事業に関する 遺跡	設・・薬園、療養所、病院、慈 ・・・上下水道、公園、集合住宅 生活に関する遺跡・・娯楽施設、 害跡、社会運動に関する遺跡な
 窯跡、市場跡その他産業 交通土木に関する遺跡 その他経済・生産活動に 関する遺跡 単位・治水・施書・ 生産施設・・・・ 工場・グール・・・ 高館、市場・参商館、市場・参商館、市場・参 	設・・関・宿場、一里塚、並木 東道、運河、港湾、燈台、烽火台、 電話施設など 設・・堤防、ダムなど 跳、製塩遺跡、ダムなど 跳、製塩遺跡、鉱山、 条里跡、荘園跡など 生産活動に関する遺跡・・会所・ 金融機関、倉庫、発電所、疎水、 経済的な変動・事象に関する遺
七 墳墓並びに碑 七 墳墓及び碑 墳墓・・墓、 えなど 碑・・古碑、 i	大名家その他著名な人物の墓所 記念碑など
樹石及び特に由緒のある に由緒のある地域の類 関地・・庭園、 地域の類 その他特に由	な人物の生家・居宅など . 公園 緒のある地域の類・・歌枕、著 承地、井泉、樹石など
	人に関する遺跡・・我が国にお 活動に関する遺跡など

く場所であったことを示し、山城の特質の一面を語っている。その時、駅使や府の役人らが休んだであろう施設の存在も想定できよう。筑紫国は「敵まもる おさへの城ぞと きこしをす」とも詠まれている(20-4331)。『万葉集』に詠まれた時期は、古代山城が大野城、基肄城・鞠智城の3つに収れんした時期である。残念ながら、鞠智城を詠んだ歌は収められていない。これら文学のなかの山城もまた、我々が古代山城に向き合う際、大切にすべきものであろう。

史蹟名勝天然紀念物保存法の成立に大きく関わった長崎県波佐見町出身の歴史学者黒板勝美は、史蹟(以下、史跡とする。)と遺物の両者を紀念物(記念物)と呼び、両者の保存を同時に行わなければならないと主張した。黒板の遺物には建築物、彫刻、絵画、古文書等を含むものである。保存すべき史跡の分類を行うなかで、最終的には「保存要目」のなかに位置づけられることはなかったのであるが、彼は、「河床、河岸、海岸線の類から、湖沼及び温泉等」も保存すべきものとして挙げ、「若しこれを史蹟といふことが出来ぬならば、少くとも史蹟と共に保存すべきものの一に数へねばなりません」と主張したのであった。(注 20)高度経済成長を経て、歴史的環境への関心が高まった。景観法も平成16年に制定され、史跡を周辺の環境とともに後世に残すことが可能な条件が整備されてきている。古代山城は軍事的記念物として、東アジアにおける我が国の政治・軍事・外交のあり方を知る重要な遺跡であるとともに、自然と文化との関係を考える好個の材料である。史跡を保存し、それを活用していくことは、とりわけ古代山城のように規模の大きな遺跡においては容易なことではない。また、冒頭でふれた古賀寿が言うように、地域の「埋もれている」ものに光をあてていくことが必要である。

古代山城論は、熊本県等の取り組みの成果でもあるが、近年もっとも活気に満ち、かつ知的好奇心を呼び起こしているテーマであるといってよい。これまでも各種学術的な取り組みや古代山城サミット等が展開されているが、古代山城が本来的に有している広域連携の本質に立ち、関係自治体の連携によってその保存と活用が推進されていくことを期待したい。軍事的記念物を通じて、軍事や外交について考えることはきわめて重要なことである。(注 21)

(注 20) 黒板勝美「史蹟遺物保存に関する研究の概説」『史蹟名勝天然紀念物』1-3・4・5・6、大正4年 1・3・5・7月(黒板勝美『虚心文集』第四、吉川弘文館、昭和15年(に収録)

(注 21) 佐藤信氏が鞠智城の調査研究の課題を列挙している。同「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡Ⅱ― 論者編 1 ―』熊本県教育委員会、2014 年 3 月 欠)」が天平4年(732)頃、大宰少監として赴任した田中朝臣三上である可能性が高く、この班給が天平7年の大宰府管内における疫病患者らに対する賑給と関わるのではないかとの指摘がすでになされている。(注18)一方、大野城については、城の管理についての史料が残されている。天長3年(826)に大宰府管内の軍団兵士制が廃止され、その代わりに統領・選士が置かれた。さらに、これまで兵士らが担っていた兵馬の飼育や貢上染物所・作紙所での雑役、大野城の修理などに充たる衛卒200人が置かれた。また、貞観18年(876)3月13日の太政官符には城司と衛卒がみえる。権帥在原行平が大野城を訪れた際、付近の家屋が壊れ、人々の姿がみえないことの理由を尋ねたところ、城司らは、衛卒が40人おり、月24斛の粮米を城庫に納めていた頃は、百姓らが粮米の交換(売買)の利を求めて集まってきていたが、税庫に納めるようになって去っていったと応えている。官符は従来通り、粮米を城庫に納めることを許可している。大野城には武器や兵粮のほか、衛卒の粮米も収納されていたことがわかる。

鞠智城についてはこれまでも繰り返し述べられてきたように、兵庫と不動倉の存在が確認できることが重要である。特に不動倉については焼失した数量が11字と明示されており、それが発掘調査で検出されたどの建物であるのか知りたいところである。

鞠智城が史料に現れる時期(9世紀後半)は、新羅の海賊が北部九州周辺に現れ、対外的な緊張が高まった時期である。また、貞観8年(866)の記事に明瞭に示されているように、当時脅威として認識されていたものは、新羅の来寇と疫病の流行とであった。(注19)

鞠智城は7世紀の後半、白村江の敗戦を契機とする山城による国土防衛構想のなかで築城された城のひとつであるが、文武2年(698)5月25日条にみえるように、大宰府によって大野城、基肄城とともに修理がなされた。それは大宰府の体制的確立と密接に関わっている。豊かな穀倉地帯である菊池川流域を控えたこの地は大宰府の兵站としての役割を有したと考えられる。

- (16) 『史跡鞠智城跡保存活用計画書』 増補版、熊本県教育委員会、2015 年
- (17) 狩野久 前掲注 14
- 〈18〉松川博一「平安時代の大宰府と古代山城」『鞠智城東京シンポジウム 鞠智城の終焉と平安社会~古 代山城の退場~』2017 年
- (19) 松川博一 前掲注 18

7. 古代山城の保存と活用

古代山城に限らないが、土地と深く結びついた文化財(記念物と呼ぶ)は、自然と深く関わっている。軍事的記念物である山城はとりわけそうした傾向が顕著である。『万葉集』には、大野城(大野山)を詠んだ歌が 4 首あり (5-799、5-823、8-1474、10-2197)、同じく、基肄城に関わる歌は 3 首ある (8-1472・1473、4-576)。いずれの歌からも軍事性は読み取ることはできない。わずかに 8-1472 にみえる「望遊」は、基肄城が展望のき

いる。その点について、石城山神籠石、播磨城山、讃岐城山で確認されている石製唐居敷は興味深い。鬼ノ城と同じ角柱刳込タイプであるが、軸摺穴を有さない。向井氏は地覆に軸摺穴を設ける方式を想定しつつも、讃岐城山では未製品と考えられる門礎があることから、軸摺穴を持たない3つの山城の城門は未完成であったとしている。(注 15)

- (13) 『第9回西海道古代官衙研究会資料集』西海道古代官衙研究会、2017年1月
- (14) 狩野久「瀬戸内古代山城の時代—築造から廃止まで—」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざまで—』下巻、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、平成22年11月、同「西日本の古代山城が語るもの」『岩波講座日本歴史 月報』21(第21巻)、岩波書店、2015年12月、白石成二『永納山城と熟田津—伊予国からみた古代山城論—』ソーシアル・リサーチ研究会、2007年
- (15) 向井一雄「西日本山城の城門構造」『季刊考古学』第 136 号

6. 鞠智城の価値

鞠智城の本質的価値については、次のように整理がなされている。(注 16)

東アジア情勢が緊迫化するなか、西日本各地に構築された古代山城は、7世紀の対外 関係を如実に示す遺跡として、歴史上・学術上の価値は高い。なかでも、大宰府防衛 の拠点として構築された鞠智城跡は、それ以降10世紀の中頃まで存続し、遺構やそ れが立地する地形の保存状況が良好なことから、『続日本紀』等の国史の記述と相俟っ て、古代山城の役割、性格及び構造など、多岐にわたる考察が可能な遺跡である。

大宰府の防衛網も飛鳥を守る国土防衛の一部をなすと考えるものであるが、九州と瀬戸内、畿内に至る防衛ラインは全体として機能したものである。(注17) その点、この防衛構想の放棄(それはそれに代わる新たな軍事的体制の構築を意味するものであるが)にあって重要なのは、大宝元年(701)8月の高安城の廃止記事である。そこでは、城内の建物やそこに貯えられていたものを大倭国と河内国に移している。その後、高安城は和銅5年(712)の記事を最後に史料から見えなくなるので、8世紀の初頭に役割を終えたこととなる。養老3年(719)の茨城、常城もやや時期が遅れるが、山城を主体とする防衛構想の終わりを告げるものといえる。

鞠智城が9世紀の後半にまで史料に登場し、発掘調査による出土遺物からは10世紀中頃までの存続が確認されている。これは、大宰府を防衛するために設けられた大野城や基肄城の存続とも関係するものである。山城による国土防衛構想の放棄ということからすれば、「繕治」は律令体制の成立に伴う軍事体制の再編と評価すべきものであろう。3城の「繕治」以後、まもなくして高安城は廃止されるのであり、「繕治」は山城による国土防衛に代わる、大宰府を中心とする軍事外交体制の確立を目的としたものと考えられる。総領制の止場とも言える軍要な画期となるものである。

基肄城に貯えられていた稲穀を筑前・筑後・肥国等の国に大宰府官人の手で班給されたことを示す木簡が大宰府史跡の不丁地区から出土している。高安城にも備蓄されていた稲穀が8世紀以降も保管・備蓄されていたことがわかる。その木簡にみえる「田中朝臣(名

ったとする解釈が少なくないが、天に漲った炎を映し出して赤くなったのではないだろうか。

- (8) 水城や大野城・基肄城の建設により、それまで那津にあった筑紫大宰とその管掌組織は現在の大宰 府跡の地に移駐したと考えられる(倉住靖彦『古代の大宰府』吉川弘文館、1985年)
- (9)「「天智紀」山城の出現とその背景」『月刊文化財』631号(平成28年4月号)
- (10) 出宮徳尚「古代山城の機能性の検討」『高地性集落と倭国大乱』小野忠熈博士退官記念出版事業会、 昭和59年11月、雄山閣出版
- (11) 向井一雄氏は新規築城説である。『よみがえる古代山城 国際戦争と防衛ライン』吉川弘文館、2017 年
- (12) 稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第34号、稲田氏は城塁を石の加工方法や構築方法により4つの系統に分類し、唐居敷を用いて編年を試みている。鞠智城の唐居敷が大野城より後出するとする見解は方立が省略されることに着目する赤石善彦氏にもみえる(「鞠智城に築城時期と貯水池について」『ここまでわかった鞠智城』鞠智城シンポジウム2012成果報告書、熊本県教育委員会、2013年3月。向井一雄氏は基肄城東北門や鞠智城の方立を省略したタイプは長方形方立タイプのバリエーションであるとしている(「西日本山城の城門構造」『季刊考古学』第136号、2016年8月)

5. 神籠石系山城の位置づけ

従来、朝鮮式山城と神籠石系山城の関係は後者が前者に先行するとの見解が一般的であった。近年はそれとは逆に神籠石系山城が後出するものとする見解が多いようにみえる。

阿志岐山城の発見は従来から指摘のあった大宰府をめぐる羅城の存在を支持する一つの材料として受け止められていたが、先ごろ筑紫野市前畑遺跡において存在が確認された丘陵上の土塁は、大宰府を取り巻く羅城の存在の可能性を強く印象付けるものとなった。(注13)阿志岐山城が大野城や基肄城と同時に存在し、大宰府の防衛を担っていたことは、いわゆる神籠石系山城の時期編年にも影響を与えるものである。下限をいつに求めるかは別にして、天智朝の山城に遅れて、それを補完し、都城を形づくるものとして整備されていった可能性がある。他の九州における神籠石系山城も大宰府から放射状に延びる駅路に沿って配置されていることからすれば、大宰府の防衛という観点を抜いて考えられない。羅城の存否についての検討を行うため、広く残存遺構の調査が進むことを期待したい。

神籠石系山城の築城時期の解明は7世紀史の大きな課題である。出土遺物からは、7世紀前半まではさかのぼらないとする見解が有力であり、先にふれた石製唐居敷の分類・編年などにより、築城時期の解明が進められているという状況にある。言うまでもないことであるが、文献資料、遺構、遺物等を総合的に解釈することが求められている。

古代山城の築城や運営(経営)の主体は、狩野久氏や白石成二氏が指摘するように、筑紫、周防、伊予、吉備に派遣された広域行政官である総領であったと考えられる。また、狩野氏は、瀬戸内の山城について長門と屋嶋の2城以外にも本来は記録があったが、書紀編纂の段階で機能が消失していたものは記載されなかったのではないかと述べている。(注14)文献にみえないことを単に偶発的な出来事と片付けてはならないことを教えてくれて

斉明6年(660)、唐・新羅により百済が滅ぼされると、百済の遺臣鬼室福信らによる百済復興運動がおこる。百済の王子余豊璋の帰国と救援軍の派遣の要請を受けた倭は、その要請に応じ、斉明7年(661)、狭井連檳榔・朴市秦造田来津に五千余の軍を率いさせ、豊璋を本国に送還した。豊璋を百済王に迎えることによって百済復興運動は高揚するが、新羅の反撃により苦戦を強いられ、内部に亀裂が生じるようになる。戦局の不利を察した倭は、天智2年(663)3月、前将軍上毛野稚子・間人連大蓋、中将軍巨勢神前臣訳語・三輪君根麻呂、後将軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄に、二万七千人の兵を率いさせて派遣し、新羅を攻撃した。そうしたなか豊璋が福信を殺害するという事態となり、8月、倭はさらに大日本国救将廬原君臣に万余の兵を率いさせて派遣した。倭は錦江河口部の白村江において唐の水軍と戦い、完敗する。(注7)敗因は、倭軍が基本的に国造軍の域を出ず、唐軍のように、律令にもとづく統一的な指揮命令系統のもとに訓練された軍隊でなかったことに起因する。白村江の戦いに投入された倭の兵士は遠く陸奥国まで及ぶもので、国を挙げての戦争であっただけにその敗北は以後の国づくりに大きな影響を及ぼした。

天智3年(664)に対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等に防人と烽を置き、筑紫には水城を築いた。水城の近年の調査成果によれば、敷粗朶工法に用いられた樹枝類の同定から、晩春から夏(五月中・下旬から七月中旬頃)に伐採され、敷きこまれたものとされている。翌4年には百済の亡命貴族を派遣し、長門国と筑紫国に城を築いている。後者は大野城と椽城である。(注8)これを第一次防衛網とし、天智6年(667)11月の高安城、屋嶋城、金田城の3城を第二次防衛網とする見解がある。小田富士雄氏は前者を大宰府都城の形成とし、後者の金田城について、鞠智城も同時に築城されたものと推定し、両城は百済泗沘羅城周辺の外城に相当する大宰府都城の外城的位置にあたるとしている。(注9)

天智6年の築城は関門海峡を突破し、瀬戸内海を攻めてくるであろう敵国を想定したものである。屋嶋城が郡名(山田郡)を冠することから、同じ讃吉(讃岐)国に所在する城山城(阿野郡)はそれ以前に築城されていたとする見解もある。(注 10) これら天智朝に築城されたことが明らかな山城とは別に文武朝に築城されたとも考えられる三野城・稲積城がある(文武3年12月4日条)。「修」の文字が使われており、「つくる」と訓んでいる。新規に築城されたとする説、修築されたとする説の両者があり、三野城を耳納丘陵に存在する高良山神籠石に当てる説がある(注 11)。

これらとは別に、修理や停廃記事から築城時期の下限がおさえられる城がある。鞠智城は文武2年(698)5月に大野城・基肄城とともに大宰府が修理にあたったことがみえる。先述したように、大野城・基肄城は天智4年に築城記事があるものであるから、それとほぼ同じ時期に築かれた城とする見解が一般的である。

一方で、築城時期については、山城の城門を構成する石製唐居敷の分類・編年研究が進められており、たとえば、鞠智城の石製唐居敷は型式に崩れがみられることから、大野城の築城時期までさかのぼらないとの意見も出されている。(注 12)

(7)『旧唐書』は「其の舟四百艘を焚く。煙焔天に漲る。海水皆赤し」と記す。海水が兵士の血で赤くな

称すべきとの意見もあるが、学問の発展や文化財保護の歴史を考える上で、それ自身に価値があると考え られる。

- (4)「史蹟名勝天然紀念物保存要目中史蹟の解説(続)」『史蹟名勝天然紀念物』4-4(大正10年4月)
- (5) 古代山城が有する歴史的意義の解明やまちづくりへの活用について議論するサミットは平成19年2月の「神籠石サミット」に始まった。4回を重ねたのち、平成22年には「古代山城サミット」として再編・拡大されて今日に至っている(『月刊文化財』631号、平成28年4月特集号「古代山城の世界」を参照のこと)。言うまでもないことであるが、古代山城を考える上で、「大宰府」の存在が重要である。

3. 古代山城の保護

古代山城の史跡指定は外郭線(土塁等の城壁遺構)のみにとどまらず、内部についても保護することが必要であるが、史跡指定されている山城がすべてそのような形で保護がなされているわけではない。たとえば、石城山神籠石(注6)や城山は周囲の列石や水門等を保護しているのみである。表3のうち、鹿毛馬神籠石、女山神籠石、高良山神籠石、御所ヶ谷神籠石は、当初、列石の両側各5mの範囲を指定するものであったが、追加指定によって全域に指定が拡大されている。

神籠石論争は先に古賀寿の論考を引用したように、すでに過去の論争と呼んでよいが、 神域説の根拠となった高良大社や石城神社等の成立時期を究明することは神籠石論争の止 揚という観点からも取り組む必要のある課題である。表4に示すように、わが国の寺院や 神社の史跡指定は前者に著しく偏っていることがわかる。世界文化遺産の登録にあたり、 日本文化を世界に紹介するにあたって神道の役割に光が当てられ、史跡指定が進んだ事例 があるが、神社の史跡指定が進んでいない理由として、戦前において神社が国家による保 護を受けており、文化財として守る必要性がなかったことが最大の理由である(戦前の指 定は寺院境内に附けたり指定された毛越寺境内附鎮守社跡、丹波国分寺跡附八幡神社跡を 除けば(表ではそれぞれ寺院境内、国分寺・尼寺跡に含めている)、唯一、新地貝塚附手長 明神社跡があるのみである。もちろん遺構・遺物として把握しにくいところがあった事情 もあるが (たとえば寺院においては礎石や瓦など)、神社がわが国の信仰史において重要な 意義を有していることは疑いなく、神社について、「わが国の歴史の正しい理解に欠くこと ができ」ない遺跡(「遺跡」の語はこの場合法律用語であって、廃墟を意味するものでは決 してない)として保護していく必要性があると考えるものである。神籠石論争が展開され た時代に、神社境内地を文化財として保護するという発想があったとすれば、異なる論争 の展開もあり得たのではないか、と思う。高良大社は筑後国一宮であり、高良山神籠石と して境内地が保護されているとはいえ、わが国の信仰のあり方を知る上で重要な神社境内 地としての価値づけが必要なのではないだろうか。

(6) 『史跡石城山神籠石保存管理計画策定報告書』平成23年3月、光市教育委員会

4. 天智朝の山城

準は平成7年に一部改正がなされているので、その対照表を表1に示す。さらに文化財保護法の前身にあたる史蹟名勝天然紀念物保存法における指定基準(「保存要目」という)を表2に示す。

平成7年の一部改正は、基準のなかに近代遺跡を読み込めるように、たとえば、史跡基準二の「古戦場」を「戦跡」と表現し直したところに特徴がある。それまで指定基準一にみえた神籠石が消えていることも注目されよう(例示にもみえない)。神籠石をめぐる論争の状況が反映したものととらえることが可能である。こうした点を考慮すると、神籠石という名称を付しての史跡指定は今後行われることはないと思われる。(注3)

表1と表2を比較することで見えてくることは何か。古代山城に限定してその変化をたどれば、保存要目九「貝塚、遺物包含地、神籠石其ノ他人類学及考古学上重要ナル遺蹟」が、指定基準一「貝塚、遺物包含地、住居跡(竪穴住居跡、敷石住居跡、洞穴住居跡等)、古墳、神籠石その他この類の遺跡」に変わったのである。保存要目を解説した当時の文章を参照すると、「人類学とか考古学の上から必要なるもの」とし、「学術上の価値」が述べられている。(注4)「古墳」は保存要目では三に分類されていたが、同様の理由で一に編入されたものと考えられる。神籠石系山城を機能論で分類するとすれば、山城説であれば保存要目の四とすることも可能であったはずであるし、霊域説であれば同じく二であっても良かったことになる。それをあえて神籠石として九に編入したことは、文献に記述がみえないという第一の判断があったにせよ、文化財として保護する上ではある意味賢明な判断であった、と思う。

一方で、今日、朝鮮式山城と神籠石系山城の構造上の相違はかつて考えられていたように隔絶したものではなくなってきている。今後は古代山城として両者の時期差や性格の相違を解明していくことが求められているといえよう。(注5)

古代山城の史跡指定の歩みを表3に示す(鹿毛馬神籠石までは保存要目九による指定である)。神籠石の名称を有する史跡の指定は杷木神籠石までである。昭和26年の城山には神籠石は付されておらず、戦後の鬼城山も指定基準は二であるが「城跡」の名称を付していない。両者は史跡名称そのものに城跡であることが含意されていることになる。

さらに、戦前と戦後の相違点として注意を喚起しておきたいことは、保存要目が「政治 軍事」の語を使用しているのに対し、指定基準が「政治」とそれを縮めている点である。 確かに「軍事」は「政治」に包含される概念ではあろうが、分類のなかから「軍事」の言 葉がみえなくなったことは、「軍事」についての我々の感覚に何らか影響を与えているとい うことはないであろうか。あるいは、それは逆で、我々の「軍事」に対する感覚が、こう した分類を生んだ根源であるという言い方のほうがふさわしいかもしれない。

私は古代山城の本質を軍事的記念物であると考えている。白村江敗戦を契機として、唐・新羅が攻めてくるという国際的危機に対応して作られたものが古代山城であったと考えるのである。

(3)縄文時代の集落遺跡である「尖石石器時代遺跡」などと同様、歴史的な名称となった遺跡名称を改

古代山城の保存と活用

佐藤正知

1. 神籠石

古代山城は『日本書紀』に記述のみえる大野城や基肄城などのほか、記述は見えないものの、山地や丘陵に城壁(城塁)を廻らすものがあり、「わが国の歴史の正しい理解に欠くことができない遺跡」として、史跡指定がなされてきた。文献に記述がありながら未発見の山城も存在し(注1)、今後の引き続いての踏査・発見が期待される。大野城や基肄城は百済亡命官人の技術的指導を受け、その構造等が朝鮮半島の山城と類似したものであることから、「朝鮮式山城」と呼ばれるのに対し、文献に見えないものは、列石が廻るという特徴を有することから、霊域、神域を区画する施設との解釈もなされ、高良大社に関する史資料にみえる「神籠石」の名称があてられた。明治時代から大正時代にかけて神籠石論争が展開したことはよく知られているところである。朝鮮式山城に対し、後者は神籠石系山城と呼ばれている。

神籠石の名称の元となった高良山の列石は、天正12年(1584)の奥書がみえる『高良玉垂宮縁起』では「八葉の石畳」と呼ばれ、神籠石はその別称であるかのような割注がみえる。しかし、戦国期の成立と考えられる『高良記』(高良玉垂宮神秘書)では、「八葉の石畳」と「神籠石」とは別物として登場する。そこでは、列石が「八葉の石畳」であるのに対し、高良大菩薩の神馬の爪痕がある、現在の馬蹄石が神籠石とされている。そうした理解は『絹本著色高良大社縁起』においても同様である。それに対し、安永6年(1777)編纂の地誌『筑後志』では、列石を神籠石と呼ぶように変化している。そこでは、「俗に蓮花石と云は非也」と、仏教に由来する「蓮華八葉」の名称を否定し、神籠石の名称を採用するに至った。これが小林庄次郎による明治31年(1898)の学界への報告へとつながっていったのである。(注2)

- (1) うち、長門国の城については城名が伝えられていない。
- (2) 高良山神籠石の名称の由来を追跡した古賀寿は、このように神籠石が本来、列石の名称でないことを明らかにする一方、「コウゴ」「カワゴ」「カガ」「カゲ」等の語が巨石の謂とする井上農夫の説を紹介し、それをさらに広く収集し、それが「磐座」の別名に他ならないと結論づけている。古賀は、幕末の久留米藩士矢野一貞が山城説を主張していることにも注目し、「明治以前の記録・文献の中に、神籠石の名称の由来を解く鍵や、郷土先人の優れた業績が秘められていたのである。しかし、これら地方に遺る記録・文献の類いも実は調査研究の不徹底なため、空しく埋もれていることが多いのである」と述べている(「高良山神籠石研究史序説」昭和42年)。

2. 史跡指定の歩み

ここでは史跡指定の歩みをたどり、古代山城を文化財保護という観点から考えてみたい。 朝鮮式山城と神籠石系山城を総称して古代山城と呼ぶこととする。

文化財保護法は昭和25年に制定され、同26年に指定基準が定められている。指定基

鞠智城・東京シンポジウム

「鞠智城跡ーその歴史的価値を再考するー」

日時: 平成30年1月28日(日) 13:00~17:30

場所:明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール(東京都千代田区神田駿河台1-1)

主催:熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援:明治大学博物館·明治大学社会連携機構·熊本県文化財保護協会

日程

12:00 開場

13:00 開会

あいさつ 熊本県教育長 宮尾 千佳子

明治大学文学部教授・日本古代学研究所長 石川 日出志

来賓紹介

13:20 基調講演 13:20~14:20

『古代山城の保存と活用』

佐藤 正知(文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官)

14:20 休憩

14:35 講演① 14:35~15:15

『列島古代史における鞠智城』

吉村 武彦 (明治大学名誉教授)

15:15 講演② 15:15~15:55

『文化遺産としての鞠智城』

舘野 和己(奈良女子大学特任教授)

15:55 休憩

16:10 ディスカッション 16:10~17:30

コーディネーター 佐藤 信(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

パネラー 佐藤 正知 (文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官)

吉村 武彦 (明治大学名誉教授)

舘野 和己(奈良女子大学特任教授)

木村 龍生 (熊本県教育委員会)

17:30 閉会

平成29年度(2018年1月28日開催)

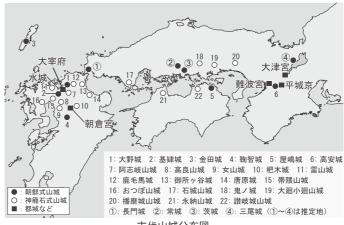
資料編

鞠智城・東京シンポジウム 成果報告書

鞠智城関連年表

西暦(年号)	内容
645 (大化元) 年	大化の改新。
646(大化2)年	改新の詔の発布。
660(斉明6)年	唐・新羅により百済滅亡。
661(斉明7)年	朝倉橘広庭宮に遷宮
663(天智2)年	白村江の戦い ※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664 (天智3)年	対馬、壱岐、筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665 (天智4)年	筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667 (天智 6) 年	近江大津宮に遷宮
	大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築く。
669(天智7)年	高安城を修理。
670 (天智9) 年	高安城を修理
672(天武元)年	壬申の乱
676(天武5)年	新羅が朝鮮半島を統一。
678 (天武7) 年	筑紫国大地震
696 (持統 10) 年	※「肥後国」の文献上の初見。
698(文武2)年	大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕治する。
	高安城を修理。
699(文武3)年	高安城を修理。
	大宰府をして、稲積、三野の二城を修理する。
701(大宝元)年	大宝律令制定。
710(和銅3)年	平城京に遷都
719(養老3)年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
756(天平勝宝8)年	怡土城を築城。
794 (延暦 13) 年	平安京に遷都
799 (延暦 18) 年	大宰府管内を除いて、烽を廃止。
858(天安2)年	(閏2月) 菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
	(5月) 肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
	(5月) 菊池城の不動倉11棟が火災に遭う。
875(貞観 17)年	カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草を噛み抜く。
879(元慶3)年	肥後国菊池城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

≪参考資料≫







研究会) 熊本県教育委員会

古賀寿 1967『高良山神籠石研究史序説 - 神籠石なる名称の由来と明治以前の研究史ー』筑後地区郷土研究会

斎藤忠 1974『日本考古学史(日本歴史叢書 34)』吉川弘文館(1995 新装版)

斎藤忠 1976「神籠石雑考」『月刊考古学ジャーナル』 117 号、ニュー・サイエンス社

佐伯有清 2006『邪馬台国論争(岩波新書 990)』

坂詰秀一1976「神籠石の名称」『月刊考古学ジャーナル』117号、ニュー・サイエンス社

鈴木靖民 2011「七世紀後半の日本と東アジアの情勢-山城造営の背景-」『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館

田村晃一 1971「「神籠石」に関する若干の考察」『青山史学』2, 青山学院大学文学部史学研究室 築紫豊 1972『筑紫文化財散歩』学生社

西川宏 1973「消されていた朝鮮式山城」『日本のなかの朝鮮文化』17号

仁藤敦史 2006『女帝の世紀 (角川選書 391)』

仁藤敦史 2010「七世紀後半の領域編成-評と大宰・総領-」『日本歴史』 748 号

乗岡実 1992「古代山城」近藤義郎 編『吉備の考古学的研究』下, 山陽新聞社

堀江潔 2016「百済滅亡後における倭国の防衛体制-斉明紀「繕修城柵」再考-」『日本歴史』818 号

松本清張 1971「神籠石は山城か(上)(下)」『藝術新潮』263 号,264 号(『遊古疑考』1973 所収)

南健太郎 2017「瀬戸内海沿岸における古代山城の年代論」『徹底追求!大宰府と古代山城の誕生』(大宰府学研究・古代山城に関する研究会合同シンポジウム) 九州国立博物館・熊本県教育委員会

森浩-1990「地域王権と古墳」『歴史読本』臨時増刊'90-3、新人物往来社

向井一雄 1991「西日本の古代山城遺跡-類型化と編年についての試論-」『古代学研究』125 号

向井一雄 2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡 II (遺物・遺跡編)』奈良文化財研究所

向井一雄 2010「特輯『日本古代山城の調査成果と研究展望』に寄せて」『古代文化』61-4

向井一雄 2016『よみがえる古代山城-国際戦争と防衛ライン (歴史文化ライブラリー440)』吉川弘文館

村上幸雄・乗岡実 1999『鬼ノ城と大廻り小廻り (吉備考古学ライブラリィ 2)』吉備人出版

八木充 2008「百済滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』722 号

柳田國男 1910『石神問答』聚精堂(『柳田國男全集 15 (ちくま文庫)』東京、筑摩書店 1990 年所収)

李進熙 1977「朝鮮と日本の山城」『城 (日本古代文化の探求)』社会思想社

渡辺正気 1988「神籠石の築造年代」『考古学叢考』中,吉川弘文館

註

- (1) 中村修也が 2015 年に『天智朝と東アジアー唐の支配から律令国家へ』(NHK ブックス) で発表した唐 築城説は 1983 年に田辺昭三が『よみがえる湖都一大津の宮時代を探る』(NHK ブックス) で発表した説 の焼き直しだが、田辺の著書への言及はない。1979 年、古田武彦は『ここに古代王朝ありきー邪馬一国 の考古学』(朝日新聞社) で神籠石=九州王朝築城説を発表している。古田は 1998 年にも『失われた日 本』(原書房) の「神籠石の証明」で 79 年とほぼ同じ論旨を繰り返し主張しているが、何故か瀬戸内の 山城には触れられていない。晩年の古田や九州王朝支持者は、この指摘に慌てて瀬戸内の山城も九州王 朝が築いたと主張し始めている。
- (2) 1959 年「神籠石の諸問題」『考古学研究』6-3 で愚城説を発表した原田大六は、85 年の『日本歴史大辞典』(河出書房)の神籠石の説明で「朝鮮式山城の形式化した非実戦的城塞と考えられる」と九州の神籠石系山城の核心部分を指摘している。喜田が霊域説に拘ったのもこの点であり、出宮徳尚も 2006 年「(神籠石系山城)はむしろ威しの造形、地域を軍事的に威圧するための一つの道具として造られて来たのではないかという、非常に観念的評価をしています…実戦的機能面から見ると…非常に施設や設備の欠落して、簡略化した構築状況でも、結構山城として日本列島では通用したと考えています」と述べ、神籠石系山城の非実戦的な性格を指摘している(『大廻小廻山城跡の謎に迫る一吉備最大の古代山城ー(国指定記念シンポジウム記録)』岡山市教育委員会)。
- (3) 689 年 (持統3) の「筑紫新城」を北部九州の神籠石系山城に比定する意見を1970 年代に筑紫豊や 田村晃一が提起しているが、年代を古く考える研究者にとってこの記事は論外で、一顧だにされていな い。当時の年代論が各研究者のこの種の遺跡に対する先入観に左右されていた点は否めない。

参考文献

赤司善彦 2002「筑紫の古代山城」『東アジアの古代文化』112号, 大和書房

石野博信 1991『古代近畿と東西交流』学生社

稲田孝司 2012「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』34 号

井上和人 2017「日本列島古代山城の軍略と王宮・都城」『日本古代学』9号、明治大学

江上波夫 1967 『騎馬民族国家 - 日本古代史へのアプローチ (中公新書)』

近江俊秀 2018「律令国家の誕生と鞠智城」『鞠智城と古代社会』6号, 熊本県教育委員会

大塚初重・戸沢充則・佐原真編『日本考古学を学ぶ』(1) 有斐閣

小澤佳憲 2012「朝鮮式山城と神籠石系山城-古代山城の考古学的検討-」『日本考古学協会 2012 年度 福岡大会研究発表資料集』

小野忠熙 1986「日本における朝鮮式山城の考古地理学的考察」『日本考古地理学研究』大明堂

狩野久 2015「西日本の古代山城が語るもの」『岩波講座日本歴史 月報』21 号

亀田修一 2015「古代山城を考える一遺構と遺物一」『古代山城と城柵調査の現状』(全国公立埋蔵文化財 センター連絡協議会第 28 回研修会) 岡山県古代吉備文化財センター

木村龍生 2016「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』(古代山城に関する

46 資料編

のである。80 年代の研究は占地分類が主流だったが、最近は城壁構造の研究が目立つ。軍事施設である古代山城を評価するためには、両面からの検討こそ重要である。さらに山地の高低や城壁単体の比較に止まらず、中世城郭における縄張り研究と同じような視点を持って遺構を分析する必要がある。当然のことかもしれないが、古代山城に取り組むには広い意味での城郭や軍事(戦闘・戦争)に関する知識が必須であり、攻城側の導線設定(守城側に有利に設定されている)や横矢掛け(守城側が二方向以上から攻撃できるように工夫されている)など、城としての遺構の機能や目的を読み取る方法や知識を最低限身に付けなければならない。日本における中・近世城郭の研究は長い研究実績を持ち、城の研究として中近世城郭の研究に学ぶべきところは多い。

日本の古代山城の築城年代を7世紀後半と考える筆者は、まず「軍事性」を基軸として 山城の占地を評価しようとしている。そこに縄張りと城壁構造の編年を組み合わせて一軍 事性が高い城から低い城へ、列石に関しては原初的なものから装飾的なものへ変化すると みる一この点に関しては研究の進んだ韓国側資料とも照合して編年序列をクロスチェック することも忘れてはいない。日本列島に古代山城が伝播した時期は、百済・高句麗の滅亡、 統一新羅の成立と渤海の建国という激動の時代の中で韓国の城郭が大きく変化した時期で もある。そのダイナミズムを見極める上でも日本の古代山城研究は韓国側から注目されて いる。戦争という両国間の悲しい歴史から生まれた遺跡であるが、互いの歴史研究、城郭 研究に寄与する重要性もまた大きい。

日本では、古代山城を「対外防衛用」「逃げ込み城(避難用)」とするイメージが根強いが、韓国では古代の城郭に関して国防施設というより、朝鮮三国の互いの進出地域での「支配拠点」や侵攻作戦の「軍事基地」として捉える傾向が強い。日本でいう逃げ込み城用途のものは高麗以降の保民用山城が機能的には近いとされている。これは日本の古代山城が白村江の敗戦を契機に造られたと記録にみえることや 80 年代に韓国の山城が日本に紹介された時、「朝鮮半島の城郭は日本の中世城郭と違って異民族の侵略から一般住民を避難籠城させる「逃げ込み城」である」と強調されたことによるのだろう。韓国の古代山城では小型の山頂式山城が圧倒的多数を占めることもかなり以前から指摘されているが、列石構造が統一新羅以降普及することと同様、日本の古代山城研究では共通認識とはなっていない。

古代山城は旧国単位で一、二箇所といった分布状況であるため、一遺跡だけの検討に陥りがちだが、氾西日本的な分布は国家的レベルの遺跡であることを示し、他の古代山城との比較を行うことで遺跡の評価が可能となる。神籠石系山城に比べて、朝鮮式山城は文献に記録があるため、国防・有事籠城というステレオタイプなイメージのまま調査が進められてきたが、城内の大量の倉庫群の存在など他の古代山城にはない特殊性を持っており、初築当時の構造や律令期の「城」としての性格について再検討が必要となっている。今こそ、古代山城の研究は年代論や築城主体論から次フェーズの研究段階へステップアップしていくことが求められている。

ていることを印象付けた。2012 年、稲田孝司は、山城築城の年代的な範囲が天智・天武朝を中心とした7世紀後半期にあるとし、山城が系統差を超えて3段階で変遷することを論じた。同年10月の日本考古学協会の福岡大会では文化会シンポジウムで小澤佳憲が、九州の考古学者の中では赤司善彦に続いて神籠石系山城の後出説支持を打ち出した。

古代山城は文献記録が少ないこともあって、文献史学の研究者による研究は活発とはいえず、文献史学では、日本の古代山城は全て白村江戦後に同時に造られた防衛施設と捉えるような論調が多い。そういう中で、鈴木靖民は 2010 年 9 月開催の「鬼ノ城フォーラム」で、古代山城について「大宰・総領との対応関係…が考えられ」「山城群は、(徴兵・武器集中、民衆把握の) 施策との密接な関連のもとに…おおむね 670~680 年以降の時期に…造営された」とする考えを発表した。仁藤敦史も同年「朝鮮式山城造営と連動して「筑紫」「周防」「伊予」「吉備」という広域行政ブロックが機能していたことは明か」と述べている。2015 年には狩野久が 7 世紀後半に大宰・総領が置かれた地域に集中して古代山城が築かれ、庚午年籍作成の契機を山城築城による徭丁・軍丁調達と関連付ける論考を発表している。山城築城が単に防衛網を造っただけではなく、武器の集中管理と戸籍による民衆把握によって「軍国体制」を立ち上げることと連動した事業だったとする点は今後特に重要な観点になっていくだろう。

2017年、井上和人は古代山城の軍略に関する論文を発表、南健太郎も同年開催の九博と 熊本県の合同シンポジウムで瀬戸内の古代山城の築城年代について発表している。いずれ も基本的に築城年代は後出説を取るが、井上は同時築城を主張し、南は筆者や乗岡、稲田 の編年観とは異なる案を提起するなど、後出説の中でも編年指標の捉え方で微妙な違いを 見せている。2018年3月には近江俊秀が鞠智城跡「特別研究」成果報告会で講演して、古 代山城の築城を7世紀後半の三段階に分け、駅路との関係で整理を試みている。

2015~16年、木村龍生や亀田修一は古代山城からの出土遺物の整理を行っている。木村は、朝鮮式山城は白村江直後に築城され、神籠石系山城はやや遅れて築城された傾向が認められ、神籠石系山城には白村江直後か若干下がった時期に築城されたものと7世紀第4四半期~8世紀第1四半期に築城されたものがあるとする。亀田は7世紀中葉~後半と7世紀末~8世紀初め頃の遺物が多く、遺物の多いグループ(朝鮮式と一部の神籠石系)と遺物の極めて少ないグループ(神籠石系)に分けられそうだとしている。

3. おわりに-古代山城研究法

古代の日本列島には「城」がない時代が長く続いた。そのため研究者-特に考古学者たちにとって城はあまり馴染みのない研究対象であるのも事実である。隣国韓国の研究者らは三国時代といういわば戦国時代が研究対象であり、城の研究は避けて通れないのとは対照的といえる。日本の考古学・古代史の研究者にとって城は苦手な研究対象といえるかもしれない。

山城遺構を検討する上で「占地・縄張りプラン」と「城壁構造」は車の両輪のようなも

44 資料編

2010 年代の研究

従来の考え方に見直しを迫ったのは鬼ノ城の発掘調査の進展だった。総社市による外郭線の調査によって鬼ノ城の外郭線や城門などの構造面が明らかにされると共に、1999年の岡山県による城内試掘調査、2006年からの本格調査によって鬼ノ城の年代を示す土器が多量に出土した。鬼ノ城が古代山城として朝鮮式山城と比べて遜色ない構造を持つこととその築城・維持された年代が7世紀第4四半期を中心としていることは、文献未記載の山城を斉明天皇四年是歳条を頼りに説明してきた先行説の研究者も無視できず、再考を迫ることになった。御所ヶ谷城や永納山城など文献に記録のない山城からも7世紀後半の土器が出土することに対して、神籠石系諸城の未完成・放棄、白村江戦後の一部修築・朝鮮式山城との並存といった一種の解釈論・折衷案が出された。

2008 年に発表された八木充の論文は、斉明朝築城説の再考を促す文献史学からの警鐘となった。八木論文の要旨は、斉明四年是歳条の「国家」が倭国ではなく百済であり、この記事の「兵士甲卒、陣西北畔」「繕修城柵」が百済滅亡後の復興軍の活動を示しているということで、新解釈によれば斉明朝築城説はその論拠を根底から失いかねない。翌年開催された「神籠石サミット久留米大会」では八木論文の影響からか、斉明天皇一色だった論調がトーンダウンし、これ以降、考古学者が斉明朝築城説を表立って主張することはなくなった。

八木説への反論は渡辺からは出されなかったが、2016 年、堀江潔が反論を発表した。堀江は斉明四年是歳条の「由是」以下の文は倭国を主語として読むべきで、倭国の西と北の国境地域(九州・北陸地方)で兵士配置と防塁・木柵などを備えた何らかの施設の修繕が行われたことが読み取れるという。北部九州各地では神籠石・山城の築造・修築など防衛体制整備が進められたというが、考古学的根拠はほとんど提示されていない。そもそもこの斉明四年是歳条の記事は、658 年 (斉明 4)の出雲における雀魚大量漂着から始まる予兆記事であり、『日本書紀』編者は、不吉な雀魚の話から二年後の海の向こうの百済滅亡を予言し、百済救援軍の派遣とその後の防衛体制の話をこの記事に語らせたかっただけかもしれない。斉明四年是歳条の解釈に頼って考古学的検討を怠り、八木論文で簡単に転向した考古学者らも無責任だが、不確かな文献史料では神籠石系山城の築城年代を決めることはできない。この記事を重視するならば、583 年の日羅の塁塞や 689 年の筑紫の新城(3)、699 年の三野・稲積城も取り上げねば、恣意的だと誹りを受けても仕方がない。斉明四年是歳条に「繕修」とあることからそれ以前に城があった証拠だと解釈する考古学者も多いが、考古学者が年代を決めるのに、文献史料だけに頼るようになってはもはや考古学者ではない。

2010年3月の条里制・古代都市研究会「山城と都市・交通」では、筆者らによって、古 代山城の発掘調査の最新成果や駅路、国郡境などと密接に関係した「地域編成」と関わる 遺跡であると報告が行われ、歴史地理学・文献史学研究者に古代山城の研究が様変わりし ち返ることが求められている。

斉明朝築城説

1988年に渡辺正気の「斉明天皇西下時築城説」が発表されると、九州の研究者や調査担当者はこぞってこの説を引用、支持するようになった。神籠石遺跡から土器などの出土が少ない点が年代を推定する上で最大のネックとなっており、考古学研究者らを悩ませていたが、斉明四年是歳条分注「或本」は長年の問題を解決する福音となった感すらある。渡辺説は九州の神籠石遺跡に限定したものだったが、その後、他の研究者らによって瀬戸内の古代山城も斉明朝に造られたと拡大解釈されるようになる。

80年代の古代山城研究は、瀬戸内の山城発見を契機に古代山城遺跡を再評価するところから始まった。しかし発掘が充分行われていない段階であったため、築城年代を絞り込むことができず、文献記載=朝鮮式、文献未記載=神籠石系という分類に固定化されたことが山城遺跡の多様性を見る視点を失わせ、最終的に斉明四年是歳条という文献史料に築城年代や契機を仮託するに至った。80年代の研究によって、70年代までに一定のコンセンサスが得られつつあった年代論・築城主体論が再び振り出しに戻されてしまった感が強い。本来の神籠石の名称にはなかった「文献に記録のない山城」という定義が広まり、讃岐城山城や鬼ノ城といった山城も城山神籠石、鬼城山神籠石と呼ばれ始めたのもこの時期で、神籠石という分類呼称が考古学的意味を失っていった。

90 年代に入ると史跡整備のために各地の古代山城で継続的な調査が開始された。瀬戸内では 1985~89 年の大廻小廻山城の後、94 年から鬼ノ城の調査が総社市によって行われ大きな成果を上げることになる。また熊本県では 1994 年から鞠智城の史跡公園計画が始動し、93 年からは金田城や御所ヶ谷城、94 年に鹿毛馬城の調査が始まるなど九州でも山城調査の機運が高まっていく。1987 年の播磨城山城の発見や 98 年の屋嶋城での南嶺石塁の発見、そして 1999 年の阿志岐山城、唐原山城の発見など - 90 年代は新しい遺跡・遺構の発見も続いた。このような新しい研究状況の下で、古代山城論にも新しい動きがみられるようになった。それは、1988~92 年にかけて、山上弘や乗岡実、筆者などから、相次いで

後出説が発表されたことである。神籠石系山城の年代を朝鮮式山城より新しくみる後出説自体は既に 70~80 年代に小野忠熈、田村晃一などによって提唱されていたが、新しい後出説の特徴は遺跡の占地や縄張りと城壁構造から類型化を行い、その上で山城遺跡の編年を検討しようというところにある。しかし学界の趨勢としては斉明朝築城説を前提とした論説が数多く発表され、後出説は異端視され今暫く受け入れられない時代が続いた。



図3 阿志岐山城の列石

在までの調査で長期間にわたる継続使用や改築の痕跡は確認されておらず、古墳時代後期 に築城後、律令国家が再利用したというストーリーは根拠のない想像に過ぎない。

考古学史上の編年論争

「文献に記録のない山城が在地勢力の逃げ込み城である」というイメージは今でも古代 山城研究にまとわりついている。「神籠石系が古く、朝鮮式は新しい」という年代観も固定 されたイメージとなっている。これでは古代山城の研究が始まった明治末年の段階と何も 変わっていない。古代山城は近年の発掘調査や研究の進展によって、ようやくその真の姿 をあらわしつつある。しかし一部の書籍などには戦前からの旧説が今だに生き残っており、 学界での研究成果が古代史ファンをはじめとする一般の方々へ正確に伝えられていない。

考古学上の年代や編年観が覆った事例は意外と多い。研究や資料が少ない段階ではよくある話ともいえる。例えば、古墳の埋葬施設である「竪穴式石室」と「横穴式石室」について、かつて喜田貞吉が「前期の古墳には竪穴式石槨(=石室)があり…後期の古墳はもっぱら横穴式石槨である」と論じたのに対して、高橋健自は「横穴式石槨はずっと古い時代から行われたもので」「竪穴式石槨の方は、横穴式石槨に比べると寧ろ後に起つて…横穴式石槨の方が竪穴式石槨よりも古い」と反論している。高橋の論旨は、イザナギの黄泉国訪問譚の光景が横穴式石室に相当するというもので、喜田は後期の横穴式石室について「韓土との交通より、高句麗の葬法を輸入せるもの」と大正段階の研究としては優れた見解を示している。

日本における近代的な考古学研究は 1877年(明治 10)のモースによる大森貝塚の発掘から始まった。その7年後、東京市本郷区向ヶ岡弥生町で弥生土器が発見されたが、その所属年代については、多くの意見が提出されて長く議論が続いた。名称についても、弥生式土器、中間土器、有紋素焼土器、埴瓮土器など様々な意見があった。中間土器は、古墳出土の土器(土師器)と石器時代の土器(縄文土器)との中間に位置するという意味であり、埴瓮土器は土器の製作材料から古墳出土土器(土師器)も含めた名称である。1900年代の初頭では、縄文土器と弥生土器の差を、それを使用した民族の違いと見ようとする意見が多く、中間土器を提唱した八木奘三郎は弥生土器の使用者を「国栖土蜘蛛種族等の遺物であり」「マレイ族の一派」としている。縄文土器と弥生土器との年代的関係は1917-18年(大正 6-7)の国府遺跡(大阪府)の発掘調査によって、層位的に立証された。

横穴式石室の年代根拠にイザナギの黄泉国訪問譚を用いたり、縄文土器と弥生土器の差を民族の違いと見る研究は、日本考古学草創期の古典的な段階の研究とはいえ、ある意味示唆に富んでいる。安易な文献史料との対比が研究の停滞を招いた事例は「倭国大乱と弥生中期の高地性集落」や「仁徳・応神天皇陵と中期古墳の編年」など、その後も時折見られ、考古学者が陥りやすい傾向である。型式学的な研究方法は現在では常識となっているが、古代山城研究においては朝鮮式と神籠石系を対立的に捉える考えが強く、この点は19世紀的との誹りも免れない。考古学研究はまず考古資料の検討からという王道に今こそ立



図2 鬼ノ城西門と版築土塁

発表されたが、かたや学説が乱立し混乱した時代でもあった。西川宏は、瀬戸内地域でも確認されはじめた古代山城を広く渡来系の遺跡と捉えて注意を喚起し、また地方勢力の築城から律令国家の修築まで長期間にわたる段階的な使用を想定した。西川は「古代貴族は…(神籠石を)記録の上から消そうとしたのである」と述べ、この頃の古代山城研究の思想的動機が奈辺にあったかが窺える。このような「古代山城再評価」は当時、上田正昭や金達寿

らの進める「渡来文化見直し論」と軌を一にするもので、李進煕の「渡来系氏族築城説」はその最も先鋭化した説といえる。西川や李の従来説との違いはその段階的使用を想定しているところで、朝鮮半島の山城が時代を越えて継続使用されているという知識によっている。

松本清張も神籠石について論じており、「神籠石は「国家」の命令によって、構築されたものではなく…地方豪族によって造られたもの」で、防塞的機能が貧弱であることから「神籠石を「山城」と考えることはできない」とし「神籠石の宗教性」から住民の「集会・祭祀・避難場所」だったとしている。江上波夫も騎馬民族説の考古学的証拠として「神護(ママ)石についての再検討」を主張している。森浩一は古代山城周辺の古墳群と山城の築城主体を同一視する説を繰り返し述べており、文献に記録のない山城を在地勢力の逃げ込み城とする見方が一般の方々に流布し、民間古代史論における古代山城像のベースになっていることは間違いない。このように地域勢力築城説が現在でもなお命脈を保っている理由は、森一人の責任ではない。地方豪族築城説は石野博信など専門研究者の間でも神籠石系の山城に対する一つの城郭観となっている。石野は「地域の豪族によって築造された神籠石は文献に記録されず、大和政権が築造した公城は文献に登場する」とされる。最近の調査によって築城年代や縄張り、工法の規格性・共通性などが判明してきたため、築城工事の発動(命令)は畿内政権とし、工事の実務については民間(地方豪族)が担当したと考える一種の折衷説も考古学者の間では根強い。

地域勢力築城説が根強い人気を誇るのは、80年代頃から盛んに提唱され始めた「地域王国論」や「地域国家論」の影響も大きい。古代山城がそういった強大な地方勢力の象徴もしくは過去に実在した証拠として説明し易い遺跡であるため、築城年代が新しいと判明しても、現在地表に残る遺跡の下層に古く遡る遺構が眠っているのではないかと想像し「空想の複合遺跡」を想定する説が跡を絶たない。さすがに最近は神籠石と邪馬台国を結びつける説は見かけなくなってきたが、これらの諸説に共通するパターンとして、神籠石の所在地には7世紀以前(古くは3世紀)から何らかの施設(聖地・宮殿・山城)があり、列石はその遺構で、山城として改築・利用されたのは白村江敗戦後と考えている。しかし現

神籠石呼称の存続の是非

「神籠石」が古代山城を表わす名称として不適当な呼称であることは明らかなのだが、 学界では慣習としてこの名称を使い続けている。神籠石論争の遺産として愛着のある名称 であり、捨てがたいというのは学問的とはいえない。

1971年の鬼ノ城、73年の大廻小廻山城の再発見、そして77年には永納山城が発見されるに及んで、瀬戸内での古代山城の存在が注目される中、斎藤忠は、神籠石を「神籠石式山城」のような形で学史的な名称として継承しようとしたのに対し、坂詰秀一は、まず西日本の古代山城を一括して把握し、外郭構築技術と内部機能の検討によって新たな遺跡呼称を検討する必要性を説いた。両人共に神籠石という名称が「その対象について不明瞭」「先入観となって歪められる」「"名"と"実"とが一致していない」と述べていること、そして「文献にないことをもって必要以上に穿鑿し、想察すべきではない」としていることは注意すべき点である。70年代末の瀬戸内での古代山城遺跡の発見は研究史の上で大きな転機になるはずだったが、80年代以降の研究者は「神籠石」という分類名称を使用し続け、かえって分類を固定化してしまい、文献に記録があるか、ないかといった「文献の記載状況」に研究の主眼を置かれることになっていった。

現在、古代の山城については、記録の残る山城は「朝鮮式山城(天智紀山城)」、記録のない山城は「神籠石系山城」と呼ばれているが、文献に記録のあるなしによる分類は考古学的分類としては実態にそぐわない。近年の調査成果によると、神籠石系山城もいくつかの類型に分けられるし、朝鮮式山城自体多様である。遺跡の多様なあり方を先入観なしに見定める上にもまず「古代山城」として一括して捉えるべきであろう。

2. 研究の推移

地方勢力築城説の源流

戦前の神籠石論争以来、1960年代の発掘調査までは、神籠石系山城(特に北部九州の山城)はその分布から邪馬台国や磐井といった九州の在地勢力に関係するもの、年代も文献史料になく伝承も残されていないことから、かなり古い時代に造られ忘却された遺跡とする考えが支配的だった。史書にみえない山城を在地勢力に関わるものと捉える考え方は決して目新しいものではない。古くは矢野一貞が高良山の八葉石塁(神籠石)を磐井が築いた山城と『筑後国郡志』などに書き残している。神籠石論争に先立つこと十年前に、久米邦武が高良山や雷山の遺跡に注目し「筑紫君の邪馬臺は此地方に在べし」と指摘している。橋本増吉は女山や高良山を現地調査して、「邪馬臺国に統属していた倭人諸国が…韓人諸国の山城制を移入するに至るべきことは、寧ろ当然」で「同一型式の遺址が、当時の倭人諸国の根拠地と認められる各地に、現に残存している」と結論している。

'80 年代の古代山城ブーム

古代山城ブームの時代ともいわれる 1980 年代は従来の枠にとらわれない研究が次々と

言葉であること以外、詳細はわからない。柳田も「カウゴ (こうご)」の字義については意味不明としている。

神籠石論争の帰着点

「神籠石號」の3年後の1913年(大正2)、『考古学雑誌』4・2で山城特集号が組まれ論争の趨勢としては山城説に傾いたかに見えた。論争の第二ラウンドは関野や谷井といった朝鮮半島の山城を熟知した研究者が参加し、関野は列石を木柵の根止め石とし、谷井は列石上に土壁(土塁)の存在を想定した。その後の調査の知見に照らせば谷井の「土壁の基石」説が正鵠を射ていたわけだが、切石列石の不経済的、虚飾的な部分が、城郭研究者である大類伸をして列石遺構を城郭と断ずるのを躊躇させたようだ。大類は『考古学雑誌』4・7の「『神護(ママ)石』問題解決尚早論」で列石上の塁柵論に疑問を呈し、「山城々壘と「神護(ママ)石」列石との間には、尚研究の餘地を存する」としている。

列石上の土塁の存在を立証せよという問いに対し、発掘調査を伴わない調査段階であったため、戦前の考古学者たちは答えることができなかった。今では山城説と霊域説は互いに相容れない対立する学説のように理解されているが、大類は「(神籠石は) 朝鮮山城の思想を学びしもの」と述べ、列石が山地を廻る囲繞形態ー遺跡の平面プランが朝鮮式山城に類似している点は大類、喜田両人共に認めており(2)、論争の最終段階では遺跡の立面構造の解明が焦点となっていた。

朝鮮式山城という学術用語

「朝鮮式山城」という用語は、関野が最初に用いており、朝鮮半島様式の城郭という意味で大野城などに対して「朝鮮式直写の山城」と表現している。学術用語としては、戦後、鏡山猛が論文・著書などで用いて定着した。「朝鮮式」の意味について、大野城などの築城を百済からの亡命貴族が指導したことによるという解釈を時に見かけるが研究史的には誤解である。ちなみに「古代山城」という用語は、神籠石論争時に谷井が「日本上世山城」という表現を最初に使っている。1960年代頃まで古代の山城を表す用語は「朝鮮式山城」しかなく、北部九州を中心に分布する高良山などの神籠石遺跡は単に「神籠石」と呼ばれていた。朝鮮式山城と神籠石を総称した名称としては当初「古代城柵」が用いられていたが、斎藤忠が「古代山城」を提唱し、葛原克人や出宮徳尚が神籠石と朝鮮式山城を「古代山城」と総称した論文を発表、徐々に使用する研究者が増え学術用語となった。

朝鮮式山城を「ちょうせんしきやまじろ」と訓む研究者もいるが、朝鮮の山城=さんじょうから造られた造語であり、鏡山も「ちょうせんしきさんじょう」としている。古代山城も同様に「こだいさんじょう」と訓むのが正しい。史跡名称として、唐原山城跡以降、古代の山城を「さんじょう」、中世以降の山城を「やまじろ」と名付けようというルールもあるようだが、学術用語としては上記のような経緯があることをご理解いただきたい。

それでは「神籠石」が「古代山城」の遺跡呼称としてどうして定着してしまったのか?その経緯について神籠石論争の推移に沿って確認してみよう。勃興期の日本考古学界において、法隆寺再建論争と並ぶ二大論争といわれる神籠石論争は、八木奘三郎、関野貞、谷井済一の山城説に対して、喜田貞吉が霊域説を唱えることで 14 年に及ぶ論争となった。論争はおおよそ明治、大正の二時期に分けられるのだが、こと遺跡の名称として喜田は「神籠石」の使用を繰り返した。これに対して関野や谷井は「神籠石の名称は改めねばならぬ」「普通名辞として…冠するは絶対に避けざるべからず(避けなければならない)」と主張し、関野はその著書の中でも「高良山山城」などと表記し、神籠石という言葉は一切使っていない。

確かに神籠石という名称は高良山だけで見られるもので、各地で発見された他の同種の遺跡には神籠石の名称はなかった-例えば雷山は「筒城」、鹿毛馬は「牧の石」、御所ヶ谷は「景向天皇行宮」、石城山は「山姥の穴」など様々な呼称が付けられていた。後年、古賀によって高良山の列石も元は神籠石と呼ばれていなかったことが明らかにされたが、時既に遅く古代山城の遺跡呼称として「神籠石」が定着していた。喜田がこれらの遺跡に対して「神籠石」と呼ぶことを止めなかった理由は、自説である霊域説に有利な名称であったからに他ならない。「神の籠もる石」-いかにも霊域、神域を画する列石として神々しく、少し変わった読み方も不思議なインパクトを与えたのだろう。

柳田國男の神籠石批判

喜田は、高良山の列石遺構の報告の後、次々と各地で発見された同種の遺跡をまとめて、1910年(明治 43)に『歴史地理』15-3で「神籠石號」を出して、霊城説こそ真説であると主張した。ところが同年『石神問答』で柳田國男から強力な反論を受けることになる。柳田は「(神籠石は) 孤立せる奇石の名なり」と喜田の磐境説を支持するどころか、神籠石を列石遺構の名称として使用することに疑義を唱えた。これを受けて喜田は『歴史地理』16-3の「神籠石と磐境」と題する論文中で、「(神籠石の名称を) 眞の意味に於ける「神霊の鎮座せる巨岩」に附するを至當とす」と一旦は柳田の磐座説を認めている。しかし一度学界に流布した呼称は一般名称化し、喜田はその後も神籠石を列石遺構の名称として使用することを止めようとはしなかった。

柳田は、神籠石が皮籠石、革籠石、交合石、皇后石、川子石など様々な当て字で表記され、全国的な分布状況を持つ点も指摘しているが、現在まで筆者が収集した神籠石類似の神体石や地名は全国で140例以上、北は宮城県から南は鹿児島県まで広がっている。神籠石は、革籠石、香合石など石材の形態に由来するものや交合石のように夫婦岩信仰が加わったもの、また北部九州に多い神功皇后伝承と関連付けられた皇后石など、いずれも本来の意味から離れて別の由来や伝承が付会したものも多い。文献的には高良大社や忌宮神社(下関市)に伝わる文書・絵図から鎌倉時代頃まで遡れるが『記紀』などにはみえず、古代まで遡る呼称ではない。式内社クラスの古社に多く、磐座などの岩石祭祀と関係のある

似ることからの名。」とある。教科書で定評のある『山川 日本史小辞典(改訂新版)』2016年では「こうごいし【神籠石】大きな切石を隙間なく連ねた列石を根固め石とする土塁と水門・門などからなり、9ヵ所とも築造方法は基本的には同じ。7世紀代に、大和朝廷によって交通上の要衝や政治的に重要な地点の近くに構築された。」「現在9ヵ所が確認される(岡山県大廻・小廻山、愛媛県永納山の類似遺構は含めない)。」と少し詳しい説明となり、朝鮮式山城については「ちょうせんしきさんじょう【朝鮮式山城】天智朝以後、朝鮮の山城築造技術の影響をうけて、西日本各地に造られた山城をさす。(中略)築造には、朝鮮半島からの渡来人が参画していたが、山城の立地、縄張り、城壁の構築法、水門の構造、城門施設などは各山城の間で一様ではない。」「その多くは文献の記載と一致するが、城山遺跡(香川県)のように文献に記載されていないものもある。」となっている。

引用が少し長くなったが、いずれも簡にして要を得た説明といえる。ただしこの短い説明文の中にも、古代山城論の混乱が見え隠れしている。2003 年刊行の『日本考古学事典』ではどうだろう。神籠石は「朝鮮式山城の多くが『日本書紀』に記事のある城をさすのに対して、その種の記録のないものを一括して呼ぶ。(中略)霊域をさす名称を避けて神籠石式(系)山城と呼ぶ人もいる。」とし、列石をめぐらすことではなく、記録のあるなしが分類呼称として登場する。2008 年の『歴史考古学大辞典』では「こうごいし【神籠石】西日本、特に瀬戸内・北部九州に分布する古代山城。(中略)近年は、神籠石の呼称をなくして古代山城跡として一括整理する研究者が多い。」とあり、『広辞苑』や『山川 日本史小辞典』よりも最近の研究成果に基づいた記述が増えている。

神籠石の呼称

「神籠石」というと福岡県久留米市の高良山を廻る列石のこととされているが、実は 1898 年 (明治 31)、高良山の列石遺構が小林庄次郎によって学会誌へ報告された際に「列石の 呼称は神籠石」と誤って紹介されたことによる。高良大社の官司を務め地域史研究家でも ある古賀寿の研究によると、列石遺構はかつて「八葉の石畳」と呼ばれていたこと、現在 高良大社の参道脇にある「馬蹄石」という巨大な岩盤が「本来の神籠石」だったことがわ かる。

高良大社の最古の文書である『高良記』によれば、高良山にはもともと地主神である高牟礼神がいたが、高良大菩薩(高良玉垂命)が結界(=列石)を張って高牟礼神を騙して追い出したという。この大菩薩の神馬の爪跡が馬蹄石に残る窪みだとされている。馬蹄石と参道を横切る列石線はすぐ近くにあるため、江戸時代には既に両者は混同されはじめていて、明治の学界への報告でも誤認したというのが真相らしい。

図1 高良山の馬蹄石

【講演③】

神籠石系山城の捉え方-築城年代・築城主体論の克服

向井 一雄(古代山城研究会代表)

はじめに

神籠石系山城の研究はこの数年落ち着きを見せている。学界では長い論争の末、特に 20 ~2012 年の鬼ノ城の城内調査によって築城年代の議論がようやく収束を見せ始め、研究者間にコンセンサスが形成されつつある。

筆者は1991年に拙稿「西日本の古代山城遺跡」を『古代学研究』誌上に発表して以来、日本の古代山城に関する論考を発表してきたが、築城年代と築城主体についての検討に時間とエネルギーを割いてきた。日本の古代山城に対する関心が「いつ」「だれが」「何のため」に築城したのか、謎の遺跡とされる神籠石系山城の議論に集中していたからだ。

学界での議論がまとまり始めたものの、民間古代史論においては神籠石系山城を在地勢力による築城とする考え方が蔓延している。最近では唐の倭国占領軍が築城したとする陰謀史観的な珍説が再提起されるなど(1)、古代山城研究をめぐって議論がやまない状況が続いている。

本稿では、神籠石系山城の研究史を振り返り、築城年代や築城主体の議論がどのように 推移し、現在の研究がどのような段階にあるのか、わかりやすくご紹介したいと思う。

1. 朝鮮式山城と神籠石系山城

古代山城と学術用語

古代山城に対するイメージはどこかモヤモヤとしたものがつきまとっている。年代や築城主体の明かな朝鮮式山城がある一方、神籠石と呼ばれる遺跡は誰が何のために造ったのかわからない"謎の遺跡"といわれている。「神籠石」という不思議な名前も謎の遺跡感をいっそう高める。シンロウセキを「こうごいし」と読むことをどのくらいの人がわかるだろうか?「城」なのに何故「石」なのか?とますます古代山城に対する焦点が定まらなくなってくる。かたや、一般向けの概説書を読むと、朝鮮式山城も神籠石もいっしょの地図に描かれ、神籠石は朝鮮式山城と同じ古代山城の一種だと説明されている。同じ種類の遺跡なのに、朝鮮式山城、神籠石、古代山城……と、どうして様々な名前で呼ばれているのか?混乱は深まっていく。

試みに「神籠石」を辞典で調べてみよう。最新(2018年)の『広辞苑(第七版)』では、「こうごいし【神籠石】古代の山城の遺跡。北九州と中国・四国に 10 ヵ所ほどが知られる。丘陵上に切石で列石をめぐらし、谷間には水門のある石塁がある。門址のあるものもある。神籠石式山城。」となっている。朝鮮式山城は「ちょうせんしきやまじろ【朝鮮式山城】 唐や新羅の侵攻に備えて七世紀後半に西日本で築かれた山城。構造が朝鮮半島の城に

稲穀が貯積されていたことになる。立地条件の違いを超えてほぼ同数の倉庫が維持されていたことになり、仮定すれば稲穀の蓄積量が事前に定められていて、計画的な倉庫の造営と管理・運営がなされていたことを示している。

なぜ平地ではなく山城に膨大な稲穀を蓄積しておく必要があったのか。まずは唐・新羅の侵攻に備え、山城の兵糧を蓄積することが重要だと思われる。次に天平年間の大宰府政庁前面の溝からは、基肄城に蓄えている稲穀を九州北部の各国へ分け与えるよう記した木簡が出土している。天変地異などの非常事態に備えて稲穀(籾米)を蓄えていたことも大きな理由である。

西海道は、他地域と異なり中央にとって歴史的に警戒すべき地域でもあった。地域の豪族層によって成立している郡衙正倉に頼ることなく、大宰府の管轄下で独自の財源を確保しておくために大野城・基肄城・鞠智城の内部に不動倉とでもいうべき稲倉を形成したと思われる。そこには、大宝初年より拡充された倉庫制度が国司を通じて国家管理を進めようとした姿が重なってくる。大野城・基肄城そして鞠智城の大型で礎石化した倉庫群が、8世紀前半に整備された意図が見えてくる。つまり、古代山城に膨大に蓄積された稲穀は、非常事態への備えであるだけでなく、地域支配に不可欠な不動穀としての性格を備えていたということになる。8世紀前半になると太宰府口城門は防御機能よりも荘厳化や威厳を保つ方向に転換されるなど大きな方針の変更があったことを物語っている。

また、9世紀になって大野城と鞠智城で倉庫群の大規模な拡張がなされる。各種の史料からは8世紀末ごろから新羅への脅威や外国人がもたらす疫病(感染症)に対する対外的な不安がうかがえ、こうした背景の中で古代山城は物心両面での支えとなる存在としてクローズアップされたと考えられる。山城の立地は稲穀等を長年にわたって保存するうえで平地より適していたということである。争乱や盗難・破損などの人的な要因、地震や台風、水害・火災などの災害要因、温湿度や紫外線などによる劣化要因、虫やカビなどによる生物要因など、さまざまな影響要因について考慮した結果だと考えられる。

最も恐れるのが略奪や盗難である。ひとたび乱が起きると、場合によっては灰塵に帰することも想定される。当然ながら山城は要害堅固である。しかも、昼夜を問わず警備がなされていた。つまり収納物を護るのにこれ以上の場所はないであろう。この強固な警備が山城に倉庫を造営した最も大きな要因といえるかもしれない。このように朝鮮式山城は兵站から備蓄へと主要な機能が変化したのである。

Ⅲ期(9世紀~10世紀代) 大野城で3×4間の礎石式総柱建物が造営された時期である。基肄城では現在のところ3×4間は確認されていない。鞠智城では8世紀後半は空白期だが、9世紀以降になると、礎石が大型化し3×4間の定型的な規模の倉庫が多数造営されるようになる。9世紀ごろから八角形建物や各種の倉庫が造営される。大野城と同じ動向にあり、不動穀蓄積の停滯期から増加期に転じたとも考えられる。

年代の根拠は大野城では9世紀前半までの土器や、平安期の瓦が主城原地区を中心に出土する。鞠智城では比較的まとまって9世紀から10世紀後半ごろまでの土器が出土している。

このように筑紫城として全体を俯瞰すると、変遷と存続時期が細かい点まで全て合致するわけではないが、7世紀末から8世紀前半の長倉形式の礎石総柱建物の出現と続く礎石式倉庫群の造営、さらには9世紀の礎石倉庫群の拡張は同じ歩調と理解できる。

おわりに 一筑紫城の倉庫群の意義―

古代の史料では一口に倉庫といっても、その呼称は内容によって異なっていた。稲・穀・栗などを収納する「倉」、兵器・文書・書籍・布帛・宝物を納める「庫」、そして、クラの総称あるいは中央政府の貯蓄施設の意味で用いる「蔵」の使い分けがある。これら山城の倉庫は、重量に耐えうる総柱高床構造で桁も長い。桁の長い倉は壁材に角材を使った板倉と考えられ、一般的には稲穀等を収納する倉と考えられている。大野城では、これまでに尾花地区で倉に接した位置で炭化米がまとまって出土している。詳細な調査によるものではないが、かなりの量が廃棄埋没している。鞠智城に関する史料には『日本文徳天皇実録』天安二(858)年に不動倉11棟の火災記事がよく知られている。このように、これらの倉庫の多くは稲穀を不動穀として貯積されていたとみられる。

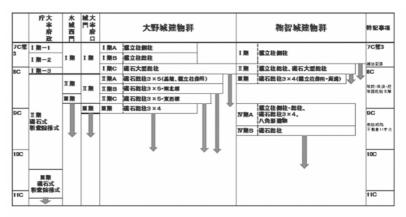
ところで、全国の諸国郡に設置された倉を正倉と呼ぶ。各国の場合は国司が管理して原則として郡衙に付属して設置されるものである。これら山城の倉庫群も配置や規模からみると、永年蓄積を目的に郡衙正倉と同じ管理方式に則って倉庫が形成されていることが理解できる。また3つの山城には長倉が造営されていた。郡衙正倉には法倉と呼ばれる超大型もしくは高質の倉庫が設置されている。古代山城の長倉も法倉と類似した規模で、倉庫群の中心的な位置にあるのは違いなく、この点でも山城の倉庫群が律令制の財政基盤となる正倉のあり方を本質的にそのまま適用していることが指摘できる。しかも規模が大きいことから、大郡クラスの郡倉に対比でき、諸国郡の稲穀収納の場所へと性格が変化したのではないかと考えている。この指摘は日本の古代山城の性格を考える上で重要である。

さて、II 期の大野城と基肄城では 3×5 間の規則的な規模の倉庫が造営されているが、その棟数は、大野城で確実な例で 32 棟、不明なものを加えると 35 棟となる。基肄城では確実なものが 23 棟を数える。不確実な倉庫建物が 12 棟である。これまでに 3×4 間は確認されていないので、この規模が不明なものも桁行 5 間の可能性があり、これを加えると 35 棟となる。両城とも同時期にほぼ同数の倉庫が造営されているのである。つまり同量の

柱建物へと建替えられる。 I 期の終わりには、大野城・基肄城・鞠智城には礎石式の建物が出現する。礎石式建物の初めての造営で、3×8間以上(おそらく9間か)の長倉である。文武二(698)年の大野城・基肄城・鞠智城の修繕記事が、この礎石式への転換に該当するとみられる。同じ頃、7世紀末になると大宰府政庁域に筑紫大宰府の中枢施設と思われる大型の掘立柱建物が整然と配置される。

時期決定は基肄城の大礎石群(長倉)出土の百済系単弁八葉軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が7世紀後半であること。大野城主城原地区出土も高句麗百済系とされる鎬弁の単弁八葉軒丸瓦は鞠智城出土と同系統であり、同時期とみられる。瓦は掘立柱形式の建物にも用いた可能性があるが、礎石式建物に葺かれていたと考える。

Ⅱ期(8世紀初頭~8世紀末) 大宰府政庁Ⅱ期の殿舎が完成した時期から、794年の平安遷都の頃の時期までである。大野城と基肄城では全ての規模とプランさらには柱間寸法まで規格が統一された3×5間の礎石倉庫が随所に建てられる。主城原地区では、礎石式の長倉をこの形式の建物に建て替えており、大きな画期となっている。大野城では、まず基壇を有する建物や掘立柱を巡らせた礎石・掘立柱併用建物が造営される。しかも全て南北棟である。次に基壇や周囲に掘立柱を備えない南北棟で構成される。その後順次拡張され南北棟の用地確保が難しくなったためか、東西棟が造営された時期である。鞠智城では、この時期に3×5間の規模の礎石式倉庫はないが、3×4間のうち、礎石掘立柱併用建物や周溝を巡らした大野城と同じ格の高い礎石式倉庫がこのころ築造されたと考えられる。



第2図 大宰府政庁・水城・大野城太宰府口城門・大野城建物群・鞠智城建物群変遷図

時期決定は大野城や基肄城では鴻臚館式やその系統の軒瓦・軒平瓦、老司Ⅱ式軒丸瓦などが随所から出土している。これらはⅡ期政庁の造営のために使用された瓦である。Ⅱ期政庁とほぼ同時期もしくは少し遅れた年代の造営が考えられる。

次に、大規模な総柱式の高床倉庫の存在も、共通する特徴である。鞠智城では3×9間の規模で、基壇を有す格の高い建物である。大野城では、3×8間以上の建物が最も見晴らしの良い主城原地区に建てられ、基肄城では大礎石群と呼ばれる3×10間の建物が、倉庫群の中で最も高い場所に造営されている。大野城の重複関係では、3×5間の倉庫に先立って造営されていたことが判明している。倉庫の礎石化はまさに倉庫景観の中心となるような場所に建てられることから始められている。先行研究の成果を援用すれば、郡衙正倉には、一般的な倉庫とは異なる長大な規模や瓦葺きあるいは基壇を有すなどの高質な倉庫が1つもしくは複数設置される特定の倉庫があり、これは法倉の可能性が高いとされる。法倉は飢饉などの大災害や天変地異が起こった際に、民衆を救済するため賑給用の稲穀を納めた特別な倉とされる。

なお、大野城・鞠智城そして高安城にのみ、礎石の周囲に掘立柱を巡らせた礎石・掘立 柱併用建物が確認できている。8世紀前半頃の造営で、他の倉庫より高品位と考えられる。



第3図 大野城礎石式倉庫跡

6 大宰府と古代山城(筑紫城)の関わり

筑紫城の建物について、その時期変遷を検討するが、基肄城は発掘調査が実施されていないので掘立柱建物は未確認である。地表に残る礎石を手掛かりにするだけである。

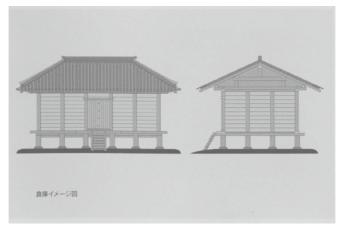
筑紫城の建物の変遷を大きく3つの画期で整理してみた。 I 期は大宰府政庁I 期である。 I 期は大宰府政庁が礎石式となって大きく生まれ変わった政庁I 期である。 II 期の存続期であるが、平安時代からの大きな動きのあった時期である。

I期(665年~8世紀初) 大野城が築城された当初の時期である。大野城の主城原地区 と鞠智城の長者原地区に掘立式側柱建物が造営される。大野城ではその後掘立柱式の総 量の武器や甲冑などの武具類が集積されていたことが分っている。大宰府での厳密な管理下で大野城は必要最小限度の兵站機能を担っていたと結論できる。では山城の倉庫はすべて兵站機能かというと、そうではない。

5 筑紫城の存続と備蓄

朝鮮式山城のうち大宰府管轄下の山城は「筑紫城」と呼ばれていた。その大きな特徴は、城内で多数の建物が築造されていたことである。大野城ではこれまでに9か所で49棟の高床倉が確認された。最も棟数の多い建物は、短辺が3間(柱と柱の間の数)で、長辺が5間の礎石式の高床倉である。奈良時代の前半頃から末頃まで順次建て続けられていた。これが総計で約35棟を数える。南の基肄城でも同一の倉が、約35棟あったと考えられる。鞠智城ではこれまでに72棟が確認されている。少なくとも構造と主軸方位が判明しているものは62棟である。このうち掘立柱建物は側柱建物が25棟、総柱建物が13棟造営されている。礎石建物は21棟で、20棟が総柱建物である。このほかに、日本の古代山城では初めて検出された八角形建物がある。八角形建物は掘立柱式と礎石式がある。

共通する建物の特徴を探してみたい。礎石建物では大野城と基肄城では8世紀前半以降に 3×5 間の規格化された総柱建物が造営され、早くとも8世紀末頃以降で9世紀を主な時期 として 3×4 間の総柱建物が造営されている。 鞠智城では 3×5 間は確認されていないが、 3×4 間は確実なところで9棟である。総柱建物が20棟であることからすると約半数を 3×4 間の総柱建物が占めていることになる。なかには、柱間寸法が七尺等間で、大型の礎石を用いているところも大野城の 3×4 間と共通する。



第2図 3間×5間の倉庫建物

重視されたのは交通路の封鎖であり、峠(関)、河川(渡河地点)、港(上陸地点)を迎撃地点として陣を構えて、弓矢による戦闘が主体をなしていたという。さらに壬申の乱での三野城と高安城を舞台にした使われ方も踏まえて、古代山城は戦場となることを想定しておらず、兵士を派兵するための集結場所、供給する兵糧・武器の守衛、高所からの敵軍把握が想定されていたと推測している(小嶋篤「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』4 熊本県教育委員会 2016)。

山城が高所に位置しているのは、防御に適しているからである。斜面を登るというのは 攻めにくい。さらに眺望がきく利点がある。では高ければどこでもよいかというとそうで はなく、選地には意味がある。大集団の軍隊は交通路を進んで攻め込んでくるので、その 交通路の要所で迎撃する戦略である。その場所に近接した位置で眺望がよく、さらには攻 めにくい複雑な地形の山が選ばれているのである。高所であれば敵軍がスルーすればよい ではないかと考える人もいるが、通過後、野営場を背後から攻撃される恐れがあり無視は できない。つまり攻守の適地が選ばれているのである。事実、古代山城は先述したように 古代の主要幹線に接した位置に築城されている。古代山城は戦闘時に迎撃のために駐屯し、 作戦に必要な兵士、武器・武具、食料などの補給や整備、そして監視による連絡という兵 站機能が重要視されていると考えられるのである。

大野城や鞠智城で築城時の建物がいくつか確認されている。それらは兵舎やその関連施設とも解釈されてはいるが、仮に数百名単位での常駐を考えると、あまりにも少ない。『類聚三代格』貞観十二 (870) 年と貞観十八 (876) 年には大野城の倉庫は「城庫」と呼ばれ、守衛兵士に支給する米や武器武具を収納していたことがわかる。大野城の兵站機能を裏付けるものである。おそらく築城時の建物がこうした兵站の倉庫だったとみられる。ところが、武器となる鞠智城での鉄鏃の出土例を唯一として皆無である。平時の警備や訓練で使用によって破損した武器・武具も見いだせないのである。大野城は面積 200ha 近い広さである。廃城された段階もしくはその後にひとつ残らずきれいに持ち去られたとする可能性はない。落としたものなども含めてすべての痕跡を消し去ることは不可能であろう。であれば、平時には城内への多量の武器類の持ち込みはなかったということかもしれない。武器武具をなどの鉄製品を制作していた鍛冶遺構もないことから、すべての武器武具は外から運び込まれたと考えられる。もちろん、兵士は最小限度の武器は携帯していた。

軍防令では徴発された兵士は武器類を各自自ら用意して備えることとされていた。各自が弓1張と弓矢50隻、大刀1口などの武器のほか、行軍や野営に必要な飯袋、水桶あるいは刀子や砥石などの工具も携帯させ、これらが欠けたり少なかったりしてはならないと定められていた。つまり戦闘時には、大量に使用される弓矢など消耗品は、そのつど外部から運び込まれ、平時には必要最小限度の武器類が収納されていたと思われる。

松川氏によると、大宰府での大量の武器類は大宰府政庁の付近に設置された兵庫に備蓄されていたとみている(前掲書)。近年、大宰府政庁の西に隣接する蔵司地区では大型礎石建物とともに複数の高床倉庫建物が存在し、さらには戦闘用の矢(鉄鏃)を主体にした大

た。戸籍の作成は一般農民から兵を徴発する基盤である。白村江での敗因ともいうべき豪 族軍主体の軍事編成に変えて、新たに国家統制のとれた軍団制への移行が文献史学で説か れていたが、これを7世紀末段階で裏付ける資料となった。

九州北部を中心とする大宰府管内では、防人制がこれに加わる。つまり外的な防備は天智朝期に成立した防人制が続いており、奈良時代の西海道の軍制は、防人制と軍団制との2本立てが特徴である。防人は主に対馬・壱岐・筑紫の沿岸部で国境警備のために配備された兵士で、8世紀中頃以降に西海道が負担するまで、東国の出身者を中心に3千人ほどが徴発されていた。その配備地は、「防」という施設で、「さきもり」の読みからして岬などの沿岸部とみられる。佐賀県唐津市中原遺跡出土の「甲斐国」・「戍」銘木簡は、防人が肥前国の沿岸にも配置されていたことを示すだけでなく、8世紀末に、東国防人廃止後も現地に留まっていた東国防人の実在を示す資料である。これら防人が配備された「防」や「戍」の遺跡はまだ明らかではないが、中世の元寇防塁にみられるように海辺での防衛ラインが想定されていたとみられ、内陸の山城も守護の対象として兵士が常駐していたと考えられている(鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4 2010)。

さて、山城の維持管理は本来は所在国の国司が担っていた。大野城は筑前国。基肄城は肥前国、鞠智城は肥後国となる。各国司の管轄下に置かれた軍団が平時には国府と併せて山城の警固も担っていたのであるが、大野城の場合は大宰府が直接関わってもいた。西海道(九州)には、西海道を統括し対外的な交流や防備を担った大宰府が大野城の南麓に置かれた特殊事情があった。大宰府管轄下のみは各国から交代勤務で集められた軍団兵士が常駐していた。彼らが大宰府の諸官衙をはじめ大野城を守護するなど、大宰府常備軍の母体をなしていたと考えられている(松川博一「大宰府軍制の特質と展開一大宰府常備軍を中心に一」『九州歴史資料館研究論集』37 2012)。このように防人もしくは軍団兵士が古代山城の警固や修繕などを担っていたと考えられるがその人数や実態は不明な点が多い。

4 朝鮮式山城の兵站機能

古代山城は軍事施設であるので、多くの人が要塞としての機能を思い浮かべると思われるが、実態はほとんどわかっていない。昔から大野城は大宰府の官人や周辺農民の逃げ城だといわれてきた。籠城したとしても唐や新羅軍が圧倒的に強く攻め込まれたら助からない確率が高い。それならば、地の利に長けている地元の農民であれば、敵が来ないような奥深い山中に身を潜めてやり過ごした方が助かるのではないだろうか。そもそも朝廷が一般農民を救う根拠史料も希薄であり、もっと考慮すべきではないかと思う。多数の一般農民の籠城を本気で想定した築城とは、施設面や防御面でとても思われない。住民の保護とはかけ離れたところで山城は築城されているようだ。

ではどのような機能が想定されたのだろうか。古代山城の築城後、幸い唐・新羅軍との 戦争は現実には起こらなかったので、本当のところはわからない。『日本書紀』の戦闘記事 を分析した小嶋篤氏によれば、山城や砦などの防御施設主戦場にした戦闘は乏しく、最も

学史的 な分類	山城名	7 ts	時 期 #紀 8世紀 9世紀 10世	+ 52		
10-72'991	大野城	/ [5	INC STENC STENC TOTAL	181		
亭門 飯羊	京 G王L成	1 2		Ť		
	企出城			Ť		
70	医帽顶			Τ		
城	高安城	1		ı		
	製造品性			Ė		
36	播票域山域	-		+		
神戸	人廻小廻山城	1		į		
施内	鬼ノ城			÷		
石の	證岐城山城			÷		
系 山 一 城	永納山城	j .		ł		
	石城山神籠石			÷		
	御所を谷神籠石	1		i		
	阿志岐山城			ŧ		
~ .	高良山神籠石			Ŧ		
神州能の	雷山神籠石			t		
	女山狸籠石			÷		
石品	鹿毛馬神籠石			Ŧ		
※ 城	帯隈山神籠石			Ŧ		
	おつぼ山神能石	\blacksquare		t		
	杷木神籠石			İ		
	唐原山城	- 3		1		
			川土遺物などからみて確実			
	備考	ШШ	可能性がある			
			出土遺物はあるが極少量であるなど不確実			

第1表 古代山城の出土土器からみた存続時期

建物の柱や門扉の軸、方立を受ける仕口があり、掘立柱に伴う唐居敷もある。門の床面は 段差のないのが一般的だが、前面に段差のある懸門構造や、石敷きの階段を設けたものも ある。また、城門強化のための半円形の城壁である甕城も一部で確認されている。

城内では兵舎や兵庫とおもわれる建物や、後述する稲穀を貯積したとみられる多数の倉庫群が確認されている。そのほかに井戸・貯水場・工房などが確認されている。ただし、朝鮮半島の山城で通有の人工的な貯水遺構はまだ発見されていない。

築城と存続時期 出土土器や瓦から7世紀後半に築城されたことは確実である。土塁や石塁の構造も類似点が多い。ほとんどの山城が8世紀には廃城となるが、大野城と基肄城、鞠智城、高安城は8世紀後半以降も存続している。考古学の成果からみると、山城の消長を示す土器や瓦等の遺物は非常に少なく、第1表に示した通りであるが、確実なところで7世紀後半~8世紀前半と考えられる。このようにほとんどの山城は、文献史料と同じく8世紀前半で役割が終わったと考えられる。ところが近畿の高安城と九州の大野城・基肄城・鞠智城のみは、8世紀後半以降も存続していることが確実である。この三つの山城は698年に大宰府が大野城・基肄城・鞠智城を修理した城である(『続日本紀』)。また、718年の養老衛禁律には「筑紫城」に不法侵入した場合の罰則がある。この筑紫城は九州のこの3つの山城を指すと考えられている。

3 古代山城の兵士

奈良時代の律令制下では、戸籍に基づく徴兵制が敷かれ、徴発された一般農民出身の兵士は各国ごとの軍団に編成される。太宰府市国分松本遺跡から、7世紀末の戸籍に関する木簡が出土した。現在の福岡市西区・糸島市にあたる嶋評の戸籍で「兵士」の文字があっ

知られるようになった。関野貞氏は実地調査した翌年、朝鮮半島各地の古代山城を「朝鮮式山城」と呼び、その特色を示すとともに、大野城・基肄城は朝鮮式山城の形式と同一であり、百済人の関与があったことから朝鮮式であることは当然とだと記す(「所謂神籠石は山城址なり」『考古学雑誌』4-2 1913)。そして天智朝期の金田城や屋嶋城、高安城なども朝鮮式山城であろうとみなした。神籠石が山城であるというのが趣旨ではあったが、神籠石と区別して朝鮮式山城の名称が用いられた。その後「上代九州山城」などの名称も用いられることもあった。

戦後、九州考古学をリードした鏡山猛氏がいわゆる朝鮮式山城の研究を行い、昭和 34 年度文部科学研究費による総合研究のテーマ名は「西日本に於ける朝鮮式山城の研究」で あり、鏡山氏の論考で朝鮮式山城の名称が広く浸透していった

2 朝鮮式山城の特徴

立地 立地は、全て官道成立以前の古い交通路が近くにあるなど、交通の要衝となる場所 に位置している。金田城は対馬中央の浅芽湾に面し、屋嶋城は瀬戸内海に面しともに船舶 の寄港に最適の地である。なにより全ての山城が見晴らしのよい高所を取り込むことが多 い。

土塁 城壁は、谷を取り込み規模が大きい。また城壁線は全周するのではなく自然の急崖を利用する場合が多い。土塁は丘陵尾根線の少し下がった傾斜部に片壁式(内托式)にもたせかけて構築することが多い。尾根線に両壁式(挟築式)で土塁を築き上げるより、工法上簡略化できることが大きいが、高所を城壁内側に置くことの優位性も大きい。

構築方法は。まず土塁構築する地面を段切りして基礎盛土を行い、その上に版築による築土をおこなう。作業工程上、受け持ちの範囲が決まっていたと思われるが、土塁正面から見たとき区切りのない連続的な版築に見えることが多い。

大野城では 1m前後の厚さで築土の単位が認められる。版築のための土塁前面の堰板柱穴は直線的に延び、間隔は 2m前後である。一部で土塁に補強の盛土がある。また、土塁下部に列石を有する土塁の例もある。

石積 総石垣の石塁と内部が盛り土の貼り石垣がある。基本は一定の規格性のある自然石あるいは野面(板石・玉石)の割石を予め揃えて、布目地だけでなく縦目地も意識した乱積みとする。現地で採取した石材を用いる。横目地の単位が1m弱~1.5mで認められる。横目地は築石だけでなく、内部もこれに合わせて平坦面が認められ、大野城では接続する土塁の積み土と対応していたる。この時に作られる平坦な上面は、作業の通路として機能していたものか。接合面は現場での部分調整(合端合わせ)をおこなう。隙間はあるが小石で埋めることはしない傾向にある。築石の背後に栗石より大ぶりで控えの長い石材を積んでいるところもある。

施設 城壁には水門や突出部あるいは一部に堀切が伴うことがある。また、城壁で最も重要な施設が出入りとなる城門で、掘立柱式や礎石式の建物が設置される。城門の礎石には

『日本書紀』によれば、663年の白村江敗戦の翌年に、対馬・壱岐両島と北部九州の沿岸部を中心に防人(さきもり)と烽(とぶひ)を配置し、同時に九州北部の筑紫に水城を築造。その翌665年には瀬戸内への関門である長門、筑紫に大野城・椽(基肄)城と、さらに2年後には近畿の高安城と瀬戸内の屋嶋城、対馬に金田城を築いたと記す。戦略としては、まず防人による海浜警備と、通信網となる烽火の体制を整えたのである。次に太宰府地域に内陸の防衛拠点を形成して、さらには対馬から瀬戸内そして畿内の王都に至るまでの陸路・海路の主要幹線に多重防御線を敷いたと解釈できる。

さて、上記のように文献記録に表れる城は 665 年の長門国の城・筑紫国の大野城・基肄城の築城に始まり、7世紀末の修復時期を経て、719 年の茨城・常城の廃城記事にみられるように 8 世紀前半には終焉を迎えている。このように 7 世紀後半の築城から 7 世紀末の修繕、そして 8 世紀前半には廃城という短い存続期間がおおまかに文献記録からは窺える。ところで、築城期が天智朝にあることから、「天智紀」あるいは「天智朝期」山城と呼ばれることもある。 史料に名称が記載されていたのは、編纂された段階で戦略的に維持する必要のある城だったからだと思われる(狩野久「西日本の古代山城が語るもの」日本歴史月報21 2015)。

1 朝鮮式山城とは

辞典には「663年の白村江の敗戦後、朝鮮からの来襲をおそれた日本の古代政権が国土防衛のため築造した山城。北九州から瀬戸内海沿岸の重要地点に、亡命百済人の指導で朝鮮様式に築かれた。筑紫国大野城・基肄城、対馬島金田城・讃岐国屋嶋城・大和国高安城などがある。多くは標高300~400mの急峻な地形にある。稜線に沿って石塁または土塁を築き、城内に倉庫群があり、谷間に渓流が流れるか泉があるのが特徴。なお北九州・瀬戸内地方に分布し、宗教施設と考えられてきた神籠石は、近年の発掘調査によって古代の山城遺構であることが確定的となった。」(百科辞典マイペディア 平凡社)とある。

朝鮮式山城の名称はいつから用いられたのか 大野城・基肄城の認識は貝原益軒の『筑前 国績風土記』(1706年)の中で、大野城は「四王寺山、則大野城なる事明らかなり」、基肄 城については「坊中山というは・・・椽城を築せ玉ふ」と記す。また、文化三(1806)年制 作の『太宰府旧蹟全図』には両城の城壁線が描かれている。このように近世の史料には両城 が現在地に比定されていることが知られていたが、明確に意識されるようになったのは明治 時代の後半以降のことである。

明治31年に久留米市高良山を取り巻く列石遺構が神籠石の名称で中央の学界に報告された。 その後も雷山や女山などの列石遺構が発見されたことで注目が集まり、その性格をめぐって 城郭説と霊域説とに分かれたいわゆる神籠石論争が始まった。この長い論争の中であらため て大野城や基肄城に注目が集まった。

実は両城については史料に関心のある人間には知られていたが、遺跡の現状を実地踏査する 人はいなかったようで、大正元年に関野貞氏の実地調査を皮切りに多くの人に現状が

24 資料編

【講演②】

朝鮮式山城の特徴 - 主に兵站と備蓄について-

赤司 善彦 (大野城心のふるさと館長)

はじめに

文献に記載のある朝鮮式山城と、記載のない神籠石系山城という分類がなされて久し い。近年では、各地で古代山城の調査が進展し、この分類は学史的な用語として扱われ、 全ての山城を共通の事項で検討することが定着してきた。ここでは朝鮮式山城に限った特 徴を示したい。『日本書紀』・『続日本紀』記載いわゆる朝鮮式山城は以下の12城である。

長門城 天智 4 (665) 年築 所在地不明(山口県)

大野城 天智4 (665) 年築・文武2 (698) 年繕 福岡県大野城市・太宰府市・宇美町

基肄城 天智4 (665) 年築・文武2 (698) 年繕 佐賀県基山町、福岡県筑紫野市

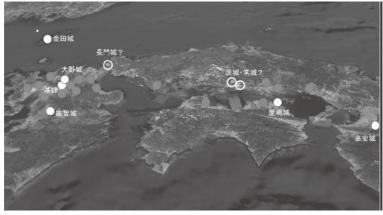
金田城 天智6 (667) 年築 長崎県対馬市

屋嶋城 天智6 (667) 年築 香川県高松市

高安城 天智6 (667) 年築・天智9 (670) 年修・文武2 (698) 年修

大宝元 (701) 年廃 大阪府八尾市、奈良県平群町・三郷町

三尾城 天武元 (672) 年陥 所在地不明(滋賀県) 鞠智城 文武 2 (698) 年繕 熊本県山鹿市・菊池市 三野城 文武3 (699) 年修 所在地不明(福岡県) 稲積城 文武3 (699) 年修 所在地不明(福岡県) 常城 養老3 (719) 年停 所在地不明(広島県) 所在地不明 (広島県) 茨城 養老3 (719) 年停



第1図 古代山城分布図

対外防衛と辺要地域の行政 天智期-筑紫大宰

周芳大宰・伊予大宰(越智郡の立郡)・吉備大宰

天智~天武期-国宰の分離と併存 西国(壬申紀)から東国(天武五年)へ展開か

持統期-大宰・国司の併存/六年サイクルの交替制度開始

律令期-大宰と山城の廃絶 西海道大宰府のみ残存

山城との密接な関係-対外的緊張による軍管区として機能 →在地支配の拠点

『日本書紀』天武元年六月丙戌条

筑紫国者元**戍二辺賊之難**-也。其峻、城深、隍、臨、海守者、豊為二**内賊**-耶。今畏命而発 軍、則国空矣。

参考文献

池内宏「百済滅亡後の動乱及び唐、羅、日の関係」(『満鮮史研究』上世第二冊、吉川弘文館、1960)

坂本太郎「天智紀の史料批判」(『日本古代史の基礎的研究』上、東京大学出版会、1964)

鈴木靖民「百済救援の役後の百済および高句麗の使について」(『日本歴史』241、1968)

大和岩雄『古事記と天武天皇の謎』大和書房、1969

鈴木靖民「百済救援の役後の日唐交渉」(『続日本古代史論集』上、1970)

松田好弘「天智朝の外交について」(『立命館文学』415・6、1980)

直木孝次郎「近江朝末期における日唐関係の一考察」(『末永雅雄先生米寿記念献呈論文集』、奈良明信社、1985)

鬼頭晴明「壬申の乱と国際的契機」(『千葉史学』13、1988)

新蔵正道「「白村江の戦」後の天智朝外交」(『史泉』71、1989)

下向井龍彦「日本律令軍制の形成過程」(『史学雑誌』100-6、1991)

森公章『白村江以後』講談社選書メチエ、1998

廬泰敦『古代朝鮮 三国統一戦争史』岩波書店、2012

川本芳昭「白村江の戦いと古代東アジアにおける世界秩序の変動」(『文明研究・九州』11、2017)

早川庄八「律令制の形成」(『天皇と古代国家』講談社、2000、初出1975)

狩野久「山城と大宰・総領と「道」制」(『永納山城跡-平成14年度~16年度調査報告書-』西条市教育委員会、2005)

狩野久「瀬戸内古代山城の時代-築造から廃止までー」(『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、2010)

鈴木拓也「文献からみた古代山城」(『条里制・古代都市研究』26、2010)

伊予-讃岐(土佐・阿波?) 讃岐国山田郡屋島城 ←御城郡(含山田郡か)

吉備-吉備・播磨 鬼ノ城

畿内-河内・大和(摂津・山背?) 高安城

東国-東国全体(東方八道) 天武の信濃遷都計画 新城と難波京の三京

★白村江敗戦以降順次整備

天智期の朝鮮式山城築城記載と神籠石系山城(鬼ノ城)の時期差ありや

- ★大宰府が庚午年籍七七○巻を直接管理 →令制国の非存在
- ★山城と大宰

『続日本紀』文武二年五月甲申条

令=大宰府繕=治大野・基肄・鞠智三城-

「大宰府出土木簡」(『日本古代木簡選』五〇〇号) 天平期

為=班_給筑前・筑後・肥等国-遣-基肄城稲穀-随-大監正六上田中朝□□□-

★大宰府と山城の密接な関係

大宰府と三城(肥後国菊池城院-文徳実録/肥前国基肄郡) 広域行政 大宰府大監が基肄城稲穀を筑前・筑後・肥(前)等国に班給

★畿内(河内・大倭)と東国(常陸)の広域行政ブロックの可能性 →按察使へ継承 壬申の乱における畿内・美濃・尾張および東国からの迅速な兵力動員体制

畿内国司

畿内-「畿内」国司・「畿内」国(大化二年) 河内国司守と倭京留守司

高安城に「畿内」の田税(天智八年)

東国・「倭京」・筑紫・吉備へ興兵使(壬申紀) 倭京留守司と小墾田兵庫

「畿内」国司の任命(天武五年)

高安城の雑儲物を「大倭・河内」に移動

★四至畿内(孝徳期)→四畿内(天武・持統期)

用語は持統六年/四国名は天武四年

★高安城に畿内の田税/穀と塩/大倭と河内二国へ雑儲物を移動-広域行政と軍事 天武朝に周芳惣令所と筑紫大宰へ「儲用物」の送付例 →軍事物資か 壬申紀の国司-伊勢・美濃・尾張・河内 倭京留守司=大和

【おわりに】

七世紀後半における広域行政組織としての大宰(官司)・総領(長官)制の存在 大宰府の帯筑前国と同じような大宰の帯国制度-国宰の統括官司 国司とも表現される

孝徳期-畿内国司と東国国司 国を超える広域行政官/立評を担当 下位の国司なし

『日本書紀』天武十四年十一月甲辰条

儲用鉄一万斤送_於**周芳総令所**_、是日、**筑紫大宰**請_儲用物、•一百疋、糸一百斤、 布三百端、庸布四百常、鉄一万斤、箭竹二千連_、送_下於筑紫_

★周芳惣令所と筑紫大宰 軍事物資の集積

大宰=官司名 惣領=長官名の区別

長官のいる所=「周芳大宰惣令所」の意 「筑紫将軍所」(崇峻五年十一月条) 筑紫大宰府=この他にも地名+大宰が存在か 吉備大宰

『日本書紀』持統三年八月条

- 詔-**伊予総領**田中朝臣法麿等--曰、讃吉国**御城郡**所▶獲白莫、宜-放鷹--焉
- ★伊予総領田中朝臣法麻呂 讃岐国御城郡への命令 伊予国司田中朝臣法麻呂 字和郡からの献上(持統五年七月庚午条)
- ★大室総領と国司の併任例か

「御城郡」は隣接した山田郡の屋島城と関連

『日本書紀』持統四年七月辛巳条

大宰・国司皆遷任焉

◆文武期

『続日本紀』文武四年(七〇〇) 六月庚辰条

薩末比売・久売・波豆、衣評督衣君県、助督衣君弖自美、又肝衝難波、従_→肥人等→、 持_→兵剽_→劫覓国使刑部真木等→。於_→是勅<u>→</u>**竺志惣領**→、准→犯决罸

『続日本紀』文武四年十月己未条

以二直大壱石上朝臣麻呂-為二**筑紫捻領**-。直広参小野朝臣毛野為二大弐-。直広参波多朝臣牟後閇為二**周防捻領**-。直広参上毛野朝臣小足為二**吉備捻領**-。直広参百済王遠宝為二常**陸守**-。

★文武四年六月に**竺志惣領**-薩摩・大隅の土豪に処罰命令

十月に**竺志捻領**(長官)・大弐(次官)/周防捻領・吉備捻領/常陸守

『続日本紀』文武二年七月癸未条

以直広肆高橋朝臣嶋麻呂為=伊勢守-。直広肆石川朝臣小老為=美濃守-。

★美濃・伊勢国司も大山位(天武四年条) - 勤位 - 六位クラスより上位 大宰総領や常陸と同じく直位 - 五位クラス 総領的国司の存在 伊賀(天武朝に分立)・志摩・飛騨国など周辺の下国的諸国との関係 →白村江敗北以降に、美濃・尾張では西国大宰総領と同様な動員体制

◆大宰総領制と山城

筑紫-西海道(筑紫国) 水城・大野城・椽(基肆)城・鞠智城

带筑前国 対馬国金田城

周芳-安芸 長門は独立? 長門城

「大唐(皇)帝敬問=日本国天皇―」の書と国書書函の題「大唐皇帝敬問=倭(和)王―書」

(『善隣国宝記』所引元永元年四月二十七日「菅原在良勘文」、『異国牒状記』)

筑紫大津の客館に安置-入朝を認めなかった天智(反唐的立場)

二度目の国書-天智の死後に親唐的大友皇子への書か

唐『日本書紀』天武元年(六七二)五月壬寅条

以二甲・冑・弓・矢-賜ニ郭務悰等-。是日。賜ニ郭務悰等-物。総合・一千六百七十三匹・ 布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。

★郭務悰に、大量の甲胄・弓矢と・・布・綿を賜る-**唐との軍事的同盟の証**

大友皇子は親百済・唐的立場か 前年 12 月に天智死去

以後 702 まで唐との交渉が途絶えるのは熊津都督府の滅亡と親唐派の没落(大友皇子) →大宰総領・山城体制の存続と対応

◆高句麗滅亡後の外交路線の対立−分裂外交

天武・鎌足・(天智)-反唐・親新羅的

大津(新羅僧行心)

大友皇子・蘇我赤兄-親唐・反新羅的 近江朝廷の立場 持統(大宝遣唐使)

- ◆唐・新羅との国交回復時期-唐との正式な国交回復いつか?
 - 666 **唐への遺使「封禅の儀」**(1) 白村江の捕虜と留学生による参列か
 - 668 新羅と国交回復(新羅使・遣新羅使開始) ←高句麗滅亡 天智即位
 - 670 唐への遺使「賀平高句麗」② 676 まで新羅の対唐戦争

この間30年間唐との通交なし 親新羅外交

大宰総領・山城体制の維持 親唐派(大友皇子)による一時的な和平か 701 大宝遣唐使3

【大宰総領と国宰】

《惣領の設置時期・範囲・職掌》

大宰と総領の異同

竺志惣領(長官)・大弐(次官)の任命記事(『続日本紀』文武四年十月己未条) 大宰=官司名 惣領=長官名の区別

・国司(国宰・宰)との上下関係

津田説一国の長官の別称

坂本説−国司の統括官司→通説化

東国国司と東国惣領 以後と異質

時期差-関晃説/国司統括官-薗田・坂元説

伊予惣領と伊予国司 按察使との類似→総領と国司の兼帯と書き分け

「以西諸国司等」(壬申紀)の内容と権限

筑紫大宰府と筑紫国の兼帯/天智期以前は西海道地域は筑紫一国

「大唐(皇)帝敬問=日本国天皇-」の書と国書書函の題「大唐皇帝敬問=倭(和)王-書」

(『善隣国宝記』所引元永元年四月二十七日「菅原在良勘文」、『異国牒状記』)

筑紫大津の客館に安置-入朝を認めなかった天智(反唐的立場)

二度目の国書-天智の死後に親唐的大友皇子への書か

唐『日本書紀』天武元年(六七二)五月壬寅条

以_甲・胄・弓・矢-賜_**郭務**悰等-。是日。賜_**郭務**悰等-物。総合・一千六百七十三匹・ 布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。

★郭務悰に、大量の甲胄・弓矢と・・布・綿を賜る-**唐との軍事的同盟の証**

大友皇子は親百済・唐的立場か 前年 12 月に天智死去

以後 702 まで唐との交渉が途絶えるのは熊津都督府の滅亡と親唐派の没落 (大友皇子) →大宰総領・山城体制の存続と対応

◆高句麗滅亡後の外交路線の対立−分裂外交

天武・鎌足・(天智) - 反唐・親新羅的

大津(新羅僧行心)

大友皇子・蘇我赤兄-親唐・反新羅的 近江朝廷の立場 持統(大宝遣唐使)

- ◆唐・新羅との国交回復時期-唐との正式な国交回復いつか?
 - 666 **唐への遺使「封禅の儀」**(1) 白村江の捕虜と留学生による参列か
 - 668 新羅と国交回復(新羅使・遣新羅使開始) ←高句麗滅亡 天智即位
 - 670 唐への遺使「賀平高句麗」② 676 まで新羅の対唐戦争

この間30年間唐との通交なし 親新羅外交

大宰総領・山城体制の維持 親唐派(大友皇子)による一時的な和平か

701 大宝遣唐使3

【大宰総領と国宰】

《惣領の設置時期・範囲・職掌》

大宰と総領の異同

竺志惣領(長官)・大弐(次官)の任命記事(『続日本紀』文武四年十月己未条) 大宰=官司名 惣領=長官名の区別

・国司(国宰・宰)との上下関係

津田説-国の長官の別称

坂本説−国司の統括官司→通説化

東国国司と東国惣領 以後と異質

時期差-関晃説/国司統括官-薗田・坂元説

伊予惣領と伊予国司 按察使との類似→総領と国司の兼帯と書き分け

「以西諸国司等」(壬申紀)の内容と権限

筑紫大宰府と筑紫国の兼帯/天智期以前は西海道地域は筑紫一国

遣_阿曇連頬垂於新羅~。

★遣新羅使② 新羅と唐へ新・唐戦争の状況把握のため使者

天智十年(671)

唐『日本書紀』 天智十年 (六七一) 正月辛亥条

百済鎮将劉仁願遣-李守真等-上表。

- ★この段階では百済支援は唐支援と同義となる
- ★高麗・新羅と百済(三部使人)・唐が倭国へ相互に外交攻勢
- ★熊津都督府の衰退、唐による百済領の維持政策と倭国への警戒緩和
- 唐『日本書紀』天智十年(六七一)十一月癸卯条

对馬国司遣_使於筑紫大宰府_言、月生二日、沙門道文·筑紫君薩野馬·韓嶋勝娑婆· 布師首磐四人従レ唐来曰、唐国使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、合二 千人、乘_船四十七隻_、俱泊_於比智嶋_、相謂之曰、今吾輩人船数衆。忽然到レ彼、 恐彼防人驚駭射戦。乃遣_道文等_、預稍披_陳來朝之意_。

唐軍の倭人捕虜・亡命百済人送還か

威圧ではなく懐柔策、対新羅外交への牽制 唐本国ではなく都督府との交渉

- →軍事援助の要請か 唐の援軍が対吐蕃戦の大敗により困難な時期
- ★671 大唐総管の薛仁貴が大軍の兵を新羅へ派遣 唐兵が百済を救いに来る (『三国史記』新羅本紀文武王十一年七月二十六日条)

仁貴の楼船竟に風帆に翼し、旗を連ね北岸を巡る。

この大軍の一部が倭国へ派遣か

新『日本書紀』天智十年(六七一)十一月壬戌条

是日。賜_二新羅王絹五十匹。·五十匹。綿一千斤。韋一百枚-。

★天智七年の使者よりも賜物多い 百済旧領支配の黙認

新羅への賜物 671 →以後天武元年 672 における唐への武器援助への変化

★二面外交ではなく、この間に外交方針の転換か

前年 12 月の天智死去、10 月親新羅派の大海人出家 による外交方針の変化

天武元年(672)

唐『日本書紀』天武元年(六七二)三月壬子条

郭務悰等再拝、進_書函与信物-。

新羅を討つため倭国との軍事同盟を迫る高宗の国書

◆菅原在良が隋唐以来、本朝に献じられた書例を調べたもの

★新羅との通交が再開ー新羅使と遣新羅使 異例なほど丁重な扱い

御調船を送ることにより和平を受け入れ朝貢を求める。

高句麗滅亡 9/12 が確実な段階で、半島支配の主導権を狙う新羅の思惑

★高句麗滅亡により唐・新羅による倭国侵攻への恐怖緩和と新羅の対唐戦争の前提

→新羅・倭国両国の協調連携の動き 反唐的立場を共通点(廬説)

天智八年(669)

唐『日本書紀』 天智八年 (六六九) 是歳条

遣-小錦中河内直鯨等-、使-於**大唐**-。

又以-佐平余自信·佐平鬼室集斯等男女七百余人-、遷-居近江国蒲生郡-。

又大唐遣=郭務悰等二千余人-。×削除

★第⑥次遣唐使、河内鯨等を唐に遣わす。

★郭務悰の記事は天智十年と重複→削除(池内宏・坂本太郎・鈴木靖民説)

- ◆十一月、倭国使、唐朝に到り方物を献じる(『冊府元亀』巻九七○外臣部朝貢三)。 倭国並遣レ使献-方物-
- ◆翌年三月条に高句麗平定を祝賀する目的の使者とある 前年末からの使者派遣 遣唐使記事はいずれも是歳条で、不正確な記事のみ

10 月の高句麗滅亡以降、日本侵攻が現実化したこととの関連→急遽派遣か

★親新羅派の中臣鎌足十月に死去 →親唐派による遣唐使

天智八・九年には筑紫率に親唐派蘇我赤兄が在任

天智七年七月(重複記事か)と天智十年六月に栗隈王の筑紫率の記事。

唐『三国史記』新羅本紀文武王下、文武王十一年秋七月二十六日条

国家(唐)は船艘を修理し、外には**倭国を征伐する**に託し、其の実は新羅を打たんと欲す

- **★是歳、唐は日本遠征を計画、**新羅が唐に反するのは翌年
- ◆天智十年に「唐人所計」とあるのは、前年からの倭国征討の準備

天智九年、百済救援の役に出征して捕虜となり、唐に抑留中の筑紫上陽咩郡の人大伴

部博麻・土師富杼等四人と唐の情報を日本に伝えることを謀る

唐総管薛仁貴セツジンキの軍は日本遠征を準備していたか

天智九年(670)

唐『冊府元亀』巻九七〇外臣部朝貢三

倭国王遣レ使賀レ平-高麗-。

◆三月是月、倭国王、唐に遣使して、高句麗平定を賀す(『唐会要』『新唐書』)。 親唐派による派遣か

新『日本書紀』天智九年(六七〇)九月辛未朔条

『旧唐書』巻八四

麒徳二年、封泰山。仁軌領新羅及百済・耽羅・倭四国酋長赴会。

『資治通鑑』巻二百一唐紀十七

劉仁軌以新羅・百済・耽羅・倭国使者、浮海西還、会祠泰山

『冊府元亀』外臣部盟誓

高宗麟徳二年八月、開府儀同三司新羅王金法敏・熊津都尉(督)扶余隆、盟于百済之熊 津城。……於是、仁軌領_新羅・百済・耽羅・倭国四国使-、浮レ海西還、以赴-太山之

★劉仁軌は 8/13 の熊津での盟の後、新羅・百済・耽羅・**倭国**四国使を連れて出発 自村江の戦いに耽羅も関係(『旧唐書』劉仁軌伝「倭衆幷耽羅国使、一時並降」) 都督・刺史は12月に泰山集合の命令

10/29 に東都を出発した「倭国酋長」と劉仁軌に率いられた「倭人国使」は別

★唐使に対する非積極的な対応 664 から反唐的外交方針の転換-二面外交か

『善隣国宝記』所引元永元年中原師安勘文所引「海外国記」 今見-客等来状-者、非-是天子使人-、百済鎮将私使

天智六年(667)

唐『日本書紀』 天智六年 (六六七) 十一月乙丑条

百済鎮将劉仁願遣上熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聡等」。送上大山下境部連石積等 於筑紫都督府-。

劉仁願は前年からの高句麗征討に関与し、高句麗と日本の連携を阻止する使者か 対高句麗戦の兵力集結を倭国は脅威と認識している可能性

倭国高安城・讃岐国山田郡屋島城・対馬国金田城築城(天智六年十一月是月条)

★天智六年までは防衛拠点の構築記事あり、警戒態勢を維持

『日本書紀』 天智元年 (六六二) 三月是月条

唐人・新羅人、伐-高麗-。々々乞-救国家-。仍遣-軍将-、拠-疏留城-、由レ是唐人不 ↓得レ略-其南堺-、新羅不レ獲レ輪-其西塁-。

★倭国が高句麗に援軍を送った先例を警戒

前年には高麗からの救援要請の使者あり

天智七年(668)

新『日本書紀』天智七年(六六八)九月丁未条

中臣内臣使-沙門法弁・秦筆-、賜-新羅上臣大角干庾信船一隻-、付-東厳等-。

★『家伝』の「或人諫レ之」−鎌足・大海人の親新羅政策への反対論の存在

『日本書紀』天智七年(六六八)九月庚戌条

使_布勢臣耳麻呂-、賜下新羅王輸_御調-船一隻上、付_東厳等-。

664 熊津都督に扶余隆(『旧唐書』百済伝)

五部から州県制への再編-現地勢力の登用による懐柔策(『旧唐書』本紀・百済伝)

- 665 新羅王法敏と劉仁願との誓盟により両国の境を決定(新羅本紀文武王十一年)
- 666 唐での封禅の儀
- 668 高句麗の滅亡、唐は安東都護府を平壌に置く
- 669 高句麗遺民の反乱→唐の州県化困難となる
- 670 新羅は高句麗遺民剣牟苓ケンボウシンと結び**対唐戦争へ転換** 新羅の対唐戦争は671/6~676/11 676に統一完成
- 677 唐は安東都護府を潦東半島へ移転
 - →朝鮮征服を断念し、新羅が大同江以南の統一

【天智期の外交】

天智四年(665)

唐『日本書紀』天智四年(六六五)是歳条

遣_小錦**守君大石**等於**大唐**_、云々。〈等謂_小山**坂合部連石積・**大乙吉士岐弥・吉士針間_。 **盖送**-**唐伸人**_平。〉

- ★是歳、守大石・坂合部石積等を唐に遣わす 第**5次遣唐使派遣?** 記載に混乱/官位表記の曖昧さ →親唐派による非公式の派遣か
- ★翌年の封禅の会には時間的に間に合わない帰国は12/14(『日本書紀』) 遺唐使?=国交回復のための全権大使?→送唐人使と百済からの捕虜倭人国使か
- ★大唐へ行った守君大石と送唐使人境部連石積とは別使節、『書紀』が誤解し合叙か

守君大石は百済救援の将軍で帰国記事ないので唐の捕虜か 小錦という曖昧な位階 天智四年に唐へ送られた使節のうち境部連石積のみが帰国、守君大石の名前はない 実際の送使は大乙吉士岐弥・吉士針間

坂合部連石積は白雉四年から天智六年まで在唐か-天智四年の出発不可能 天智六年十一月乙丑条に石積の帰国記事 白雉四年以後の帰国記事なし

★劉仁軌に率いられた百済在留捕虜の「倭人国使」元将軍守君大石は唐に残留 留学生の境部連石積が東都を出発した「倭国酋長」として封禅に参加後、帰国

天智五年(666)

唐『冊府元亀』外臣部盟誓

麟徳二年十月丁卯、帝発**東都**赴東嶽、……**倭国**及新羅・百済・高**麗**等諸蕃**酋長**、各率 其属**属**従。

- ★新羅・百済・耽羅・高麗等四国酋長唐泰山の封禅に赴会す 正月五日(冊府元亀)
 - 『冊府元亀』に「古来帝王封禅、未レ有-若レ斯之盛者-也」とある盛儀
- ★以下の史料と異なる内容一耽羅と高句麗の異同

14 資料編

【講演①】

七世紀後半の国際関係と古代山城

仁藤 敦史(国立歴史民俗博物館教授)

【はじめに】

★高安城を素材に山城と大宰総領制の関係を考察

報告「七世紀後半の戦乱と高安城」第33回古代史サマーセミナー全体会報告「高安城とその時代」二〇〇五年八月二五日、於信貴山

拙稿「高安城からみた広域行政区画」(原秀三郎先生傘寿記念文集『学縁』、二〇一四年)

★広域行政区画として大宰・総領制を考察

拙稿「広域行政区画としての大宰総領制」(『国史学』二一四、二〇一四年)

★七世紀の外交的対立関係

拙稿「「大化改新」と東アジア情勢」『日本史かわら版』四、帝国書院、二〇一七年

【白村江後の倭国の立場】

唐軍の百済駐留

→**日本侵攻の現実的可能性**(天智 8 · 9年ごろ)

「征=战倭国-」新羅本紀/「唐人所」計」持統四年十月条

→・西日本各所に山城造営

「築-長門城一、筑紫城二-」(天智九年二月) 四年八月条の重出説あり

- ・百済「兵法」(天智十年正月条)の導入
- ・天智十年に筑紫の防人が唐使を侵攻軍と誤解(彼防人警駭射戦)
- ・広域行政組織整備と山城連動 国造軍から軍団兵士制への転換

大宰(筑紫・周防・伊予・吉備/畿内・東国)・国宰-評-五十戸体制

★高安城も畿内ないし倭・河内国を単位とする総領により造営管理されたか 天智期における評の分立

国造の大規模評からの分立 ←百済役における国造軍の活動

防衛体制の強化と立評・評寺(白鳳寺院の全国的拡大増加)の関係

五十戸=一里制を前提とした律令軍団制の導入(一里から兵士五十人)

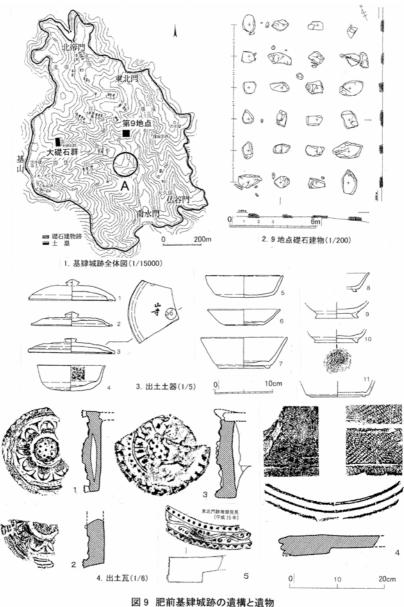
庚午年籍(天智九年)に収斂される評の再編分立と五十戸編成

近江遷都・倭京留守司(天智六年三月条)-国土防衛

★唐・新羅は、百済滅亡後、高句麗征討に集中→高句麗滅亡→新羅の対唐戦争

663 新羅に鶏林州都督府を置き、全体を州県体制に組み込む 都督に金春秋の子、法敏を任命

664 新羅王弟金仁問と百済元王子扶余隆との和親誓盟



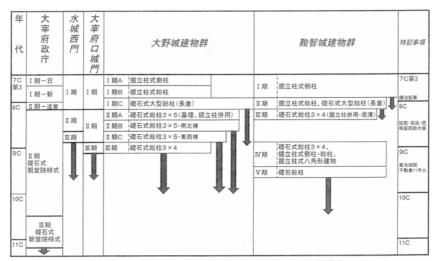
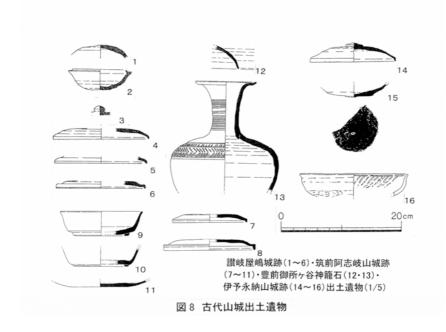
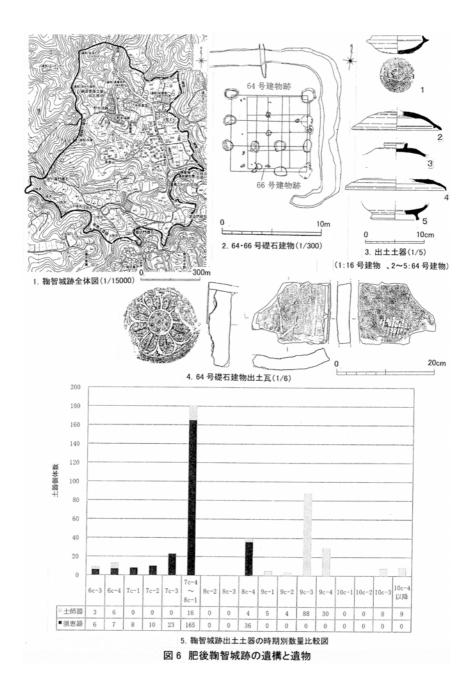
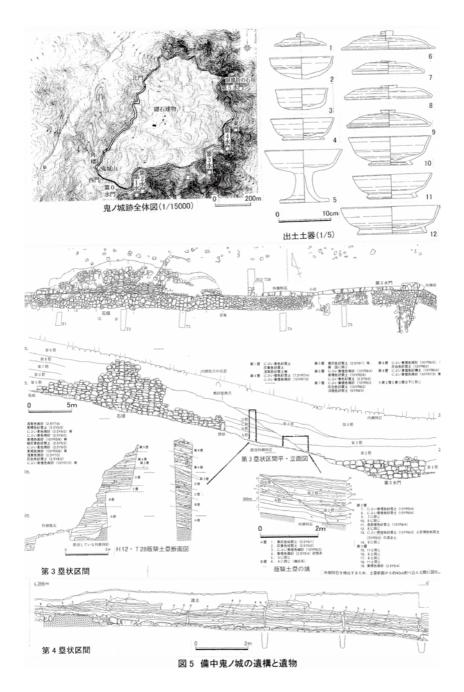


図 7 赤司善彦の大宰府政庁・大野城・鞠智城の変遷図案







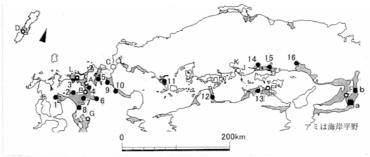


図1 関連遺跡の分布

- A. 大野城跡 B. 基肆城跡 C. 長門城 D. 金田城跡 E. 屋嶋城跡 F. 高安城跡 G. 鞠智城跡 H. 三野城 I. 稲積城 J. 茨城 K. 常城 L. 怡土城跡 1. おつぼ山神籠石 2. 帯隈山神籠石 3. 雷山神籠石 4. 阿志岐城跡 5. 鹿毛馬神籠石 6. 杷木神籠石 7. 高良山神籠石 8. 女山神籠石 9. 御所ヶ谷神籠石 10. 唐原山城跡 11. 石城山神籠石 12. 未納山城跡 13. 濃岐城山城跡 14. 鬼ノ城 15. 大猩小猩山城跡 16. 播磨城山城跡 a. 飛鳥寺・牽牛子塚古墳・高松塚古墳・キトラ古墳 b. 薬師寺
- C·H·I は所在地不明



1. 豊前唐原山城跡

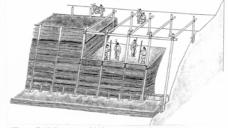


図3 豊前御所ヶ谷神籠石土塁築造復元図



2. 筑前阿志岐城跡 図 2 未完成の古代山城

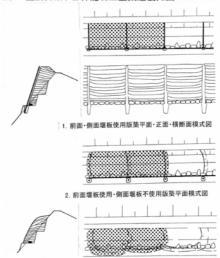


図 4 版築模式図 3. 堰板不使用版築平面・横断面模式図

小田富士雄編 1983 『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書 10、名著出版

小田富士雄編 1985『西日本古代山城の研究』日本城郭研究叢書 13、名著出版

亀田修一 2014a 「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ ―論考編―』

亀田修一2014b「百済山城と刻印瓦の階層性(予察)」『半田山地理考古』2、岡山理科大学地理考古学研究会

亀田修一 2015「古代山城を考える一遺構と遺物一」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』 平成 27 年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第 28 回研修会発表要旨集、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会

亀田修一 2016 「西日本の古代山城」 須田勉編『日本古代考古学論集』 同成社

亀田修一 2018a「日本列島古代山城土塁に関する覚書-版築・堰板について-」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』 大韓民国ウリ文化財研究院

亀田修一 2018b「繕治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究(大宰府史跡発掘調査 50 周 年記念論文集)』高志書院

木村龍生 2012「第VI章 第 1 節 (1) 鞠智城跡出土の土器について」『鞠智城跡 Ⅱ』熊本県教育委員会

木村龍生編 2015 『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・ 温故創牛館

熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ - 鞠智城跡第 8~32 次調査報告 - 』

松川博一 2018「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』43、九州歴史資料館

宮小路賀宏・亀田修一1987「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学6 歴史時代』雄山閣

向井一雄 2010「古代山城研究の成果と課題・近年の調査成果からみた新古代山城像一」『季刊邪馬台国』 105、梓書院

向井一雄 2016 『よみがえる古代山城-国際戦争と防衛ライン-』歴史文化ライブラリー440、吉川弘文館

矢野裕介 2012「第VI章 第 3 節 遺跡の時期区分と変遷」『鞠智城跡 II』熊本県教育委員会

渡辺正気 1988「神籠石の築造年代」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻、吉川弘文館

[引用挿図](いずれも一部改変引用)

図1:村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古学ライブラリィ2、吉備人出版

図 2、図 5 全体図、図 9-1: 古代山城サミット実行委員会 2010『古代山城サミット展示会 あつまれ!!古代山城』

図 3、図 $8-12\cdot 13$: 小川秀樹 2006 『史跡御所ヶ谷神籠石 I 』 行橋市教育委員会

図 5 土器:金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡鬼城山 2』岡山県教育委員会

図 5 遺構図:村上幸雄・松尾洋平 2005『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会

図 6:熊本県教育委員会 2012

図7:赤司2016

図 8-1~6: 高松市教育委員会 2010『古代山城日韓シンポジウム~瀬戸内・日本・東アジアからの視点で屋嶋城の実像 にせまる~』、7~11: 草場啓一編 2008『阿志岐城跡』筑紫野市教育委員会、14~16: 渡邊芳貴 2012『史跡永納山城 跡 Π 』 西条市教育委員会

図9: 小田富士雄「基肄城跡」基山町史編さん委員会編『基山町史 資料編』基山町

ただ、一方で、出土土器を詳細にみると 8 世紀前半以降の土器も少なからずある。しかし、これらが「城」で使用されたのか、それとも「城」機能終了後に何らかの意味で使用されたのか、その検討も 重要である。

筑前大野城跡では宝亀5 (774) 年に対新羅用に四天王寺埝像(塑像)4 体が作られている。肥前基 肄城跡では8世紀後半の「山寺」墨書土器も出土している。備中鬼ノ城においても詳細な時期は不明 であるが、瓦塔が出土し、隆平永寶(初鋳796年)が柱穴から出土した平安時代前半の仏堂が検出さ れている。

さらに筑後高良山神籠石には『延喜式』式内社高良大社があり、『日本紀略』延暦 14 (795) 年条に、高良神が初めて従五位下の神階を授けられたことが記されており、周防石城山神籠石にも『延喜式』式内社石城神社があり、『日本三代実録』貞観 9 (867) 年条に石城神が従四位下の神階を授けられたとある。

このように神籠石系山城の中には8世紀前半以降に宗教施設に変容したものがあるようである。8世紀以降の土器に関してはそのような視点からの検討も必要である。

古代山城の変容ー使用され続けた古代山城ー

上記のように、古代山城が廃止され、その後わからなくなったもの、寺や神社にかわったものがあるが、筑前大野城・肥前基肄城では8世紀前半代の軒先瓦を含む瓦が使用され、瓦葺建物が新築、改築されたことがわかる。これらに関しては、すでに検討されているように、大宰府の地域支配との関係も含め倉庫群が新たに建てられ、維持管理されたことが考古資料・文献史料から明らかにされている(赤司 2016、松川 2018 など)。

また、肥後鞠智城跡に関しては、8世紀中頃に一時空白があり、8世紀末頃から新たに瓦葺建物が建てられ、倉庫などとして使用されたことがこれも考古資料・文献史料から明らかにされている。ただ、ここでは8世紀の軒先瓦は確認されていないようである(熊本県教育委員会2012、木村2015など)。 そして、これら698年に繕治された3つの城は9世紀後半頃には使用されなくなったようである。

5. おわりに

7世紀中頃から後半の百済の滅亡・白村江の戦いなどを契機に築城された日本列島の古代山城は8世紀初め頃の廃止・停止を経て、そのまま存在が確認できなくなった城と、寺や神社など形態は異なるが、宗教施設に変わり、その宗教施設が現在まで続いているものがある。

一方、大宰府周辺の大野城・基肄城・鞠智城は宗教施設も含みながら、9世紀後半頃までやはり単なる城ではなく、地域支配の機能も含めて、性格をやや変えながら継続している。

古代国家・大宰府、それぞれの地域にとって重要と認識された城は途中途切れることもあったかもしれないが、変容しながら継続し、あるものは現在まで続いたようである。

[参考文献]

赤司善彦 2016「輪智坡の建物景観の推移」『海と山と里の考古学』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会 明日香村教育委員会 2006 『酒船石遺跡発掘調査報告書』 両論ある。

660年の百済滅亡、663年の白村江の戦いの後に築かれた古代山城

天智天皇 2 (663) 年の白村江の戦いに破れた後に築かれたものが、『日本書紀』同 3 (664) 年の水 城、同 4 (665) 年の長門城、筑紫国大野城・椽城(基肄城)、同 6 (667) 年の倭国高安城、讃吉国山田郡屋嶋城、対馬国金田城跡である。

これらは明らかに唐・新羅の攻撃を意識して築かれたものであり、長門城・大野城・基肄城に関して は百済から亡命してきた達率答体春初・憶禮福留・四比福夫らの指導によることが記されている。

そして『続日本紀』文武天皇 2 (698) 年に締治された城が大野城・基肄城・鞠智城である。肥後鞠智城跡に関しては初めての記録への登場であり、築城年代は不明である。ただ、この繕治記事への登場、その後の記録などから 665 年の大野城・基肄城、または 667 年の金田城などと同時期に築かれたものと推測されている。ただ、その地理的な位置から対唐・新羅用、対隼人用の意見がある。

神籠石系山城はいつ築かれた?

神籠石系山城の築城時期に関しては、朝鮮式山城の前、同時期、後という考えがあるが、これまで述べてきたように決定的な出土遺物がなく、現在も意見は定まっていない。

そのなかで備中鬼ノ城に関しては、比較的調査が進み、ほかの神籠石系山城に比べると出土遺物も多い。城壁は完成し、修繕もされ、城内に管理棟・倉庫などもあり、懸門・石敷き門道などの城門構造、角楼(雉城)の存在などの諸特徴が対馬金田城跡、讃岐屋嶋城跡などと類似することから、筆者はこれらと同時期に築かれたと考えている。北部九州から河内・大和への交通路上の重要性から、瀬戸内海(備讃瀬戸)を挟む讃岐に屋嶋城が築かれ、吉備に城が築かれないとは考えにくいこともその考えの基礎にある。さらに出土土器も肥後鞠智城跡の土器の出土傾向を参考にすると、やはり上記の想定で問題ないと考えている。

そのほかの神籠石系山城に関しては、やはり決め手に欠けているといわざるをえない。瀬戸内海沿岸地域と北部九州地域の神籠石系山城、これらがすべてほぼ同時に築城を開始したのか、それとも地域的に時期がズレながら築城されていったのか。未完成・完成という観点からもさらに検討すべきであると考えている。

また、築城の背景に関しても、鬼ノ城に関しては朝鮮式山城と同じように対唐・新羅防御用と考えている。さらに地域支配のための山城築城の考えに関しては、築城時期によってより検討しなければならないが、山陰道や東山道など西日本の古代山城築城地域以外になぜ築かれなかったのかという点に関する検討も必要であろう。

(2) 古代山城の終焉とその変容

古代山城の停廃記事

以上のように 664 年の水城、665 年の大野城・基肄城などの築城、698 年の大野城・基肄城・鞠智 城繕治など、7 世紀後半代には古代山城が築かれ、維持管理されている。しかし、大宝元 (701) 年の 高安城を廃城、和銅 5 (712) 年の河内国高安烽の廃止、そして養老 3 (719) 年の備後国安那郡茨城・ 葦田郡常城の停止記事などと、各山城の出土遺物からほとんどの古代山城は 8 世紀初め頃には停止さ れたのではないかと考えられている。

4 資料編

1、2点、7世紀末頃から8世紀初め頃の土器が4、5点出土すると確実な年代として7世紀末頃から8世紀初め頃の山城であると理解されることがある。

鞠智城跡では7世紀第3四半期の須恵器が23点、7世紀第4四半期~8世紀第1四半期の須恵器が165点出土している。鞠智城の築城年代はわからないが、698年に繕治されており、後者の165点はこれに関わるものと考えられている。そして前者の23点が築城時関連のものと考えられている。この数字を1/10にしてみると、築城時が2、3点となり、繕治段階が16点前後となる。この数字はそのまま神籠石系山城築城年代決定に反映できるとは言えないが、十分参考になる。

このような出土遺物の検討は筑前大野城跡や肥前基肄城跡でも進められているが、より検討を進めていただければ、そのほかの古代山城研究に大きな影響を与えるものと考えている。

遺物が比較的多く出土している山城は 698 年に繕治された大野城跡・基肄城跡・鞠智城跡と、これら 3 つの城ほどではないが、対馬金田城跡、備中鬼ノ城がある。これらは完成したと考えられる山城である。遺物出土量の多寡も完成・未完成論で説明しやすいと考えている。

(3) 遺構と遺物の総合化

遺構と遺物のそれぞれの検討例をあげたが、古代山城にかかわらず、考古学では両者を総合的に検 討しなければならないと考えている(亀田 2015)。

遺構があれば、人間が大地に関わった痕跡であり、遺物も残ると考えている。その遺構の数が多ければ、遺物もそれに応じて残っていると考えている。これまで述べてきた古代山城の遺構と遺物の話もこれと同じであると考えている。

古代山城の発掘調査・研究が進んでいる肥後輪智城跡を例に挙げると、木村龍生 (2012) の土器変遷案と矢野裕介 (2012) の遺構変遷案は重要な調査研究成果である。両者にはややズレがあると赤司善彦は考え、2016年の論文においての両者の関係の修正案を提示している (図 7)。確かに、木村と矢野の考えをそれぞれ少しずつ幅広く捉えるとうまくいくのではないかと思われる (亀田 2018b)。

このような遺構と遺物の総合化は、肥前基肄城跡の礎石建物群と百済系単弁軒丸瓦・重弧文軒平瓦の使用のされ方に通じるものと考えている(図 9)。

4. 古代山城の成立と変容

(1) 古代山城の成立

660年の百済滅亡、663年の白村江の戦いの前に築かれた古代山城

660年の百済滅亡、663年の白村江の戦い以前に築かれた可能性がある古代山城関連遺跡が酒船石遺跡である。『日本書紀』斉明天皇 2 (656)年是歳条に記された「宮の東の山に石を累ねて垣となす」の「垣」である可能性が推測されている。ただ、石列の南東部は途切れており、全周はしていない。全長は確認されていないが、約700mはあるようである。時期は出土土器などから7世紀中頃に造営され、天武天皇13(684)年の白鳳南海地震で倒壊したものと推測されている(明日香村教育委員会2006)。

また、渡辺正気 (1988) は『日本書紀』の斉明天皇 4 (658) 年是歳条の末尾にみえる「或本云。至 庚申年 (660) 七月、(中略) 由是国家以兵士甲卒陣西北畔。繕修城柵、断塞山川之兆。」に注目し、前 半が斉明天皇の西征、後半が神籠石を示すのではないかと考えた。この渡辺説に関しては、現在も賛否

3. 遺構と遺物の個々の検討と総合化

(1) 遺構

古代山城の遺構としては、土塁・門・建物・その他いろいろあるが、土塁に関しては一般的に版築土 塁と考えられている。ただ、この版築土塁も詳細に検討すると、一般的に描かれる「堰板」がすべて使 用されているのか、その使用に関しても前面(正面)・側面すべてに使用されているのか、よくわから ないものが多い。そのような意識で版築土塁を検討すると、堰板使用版築土塁も全面堰板使用版築土 塁・一面堰板使用版築土塁などがあり、堰板を使用していない堰板不使用版築土塁も存在することが 推測できた(図 3・4、亀田 2018a)。

例えば備中鬼ノ城の西門南東部では前面(正面)・側面に堰板を使用した全面堰板使用版築の可能性が推測できる(図 5)が、その他大多数の山城の土塁は少なくとも側面にいつも堰板を使用していたのではないように推測でき、さらに備前大廻小廻山城では前面・側面ともに堰板を使用していない堰板不使用版築土塁の存在の可能性が推測できた。

このような土塁構築技法に関しては、朝鮮半島の山城においてもみることができ、これらの違いが どのような意味を持つのかは今後さらに検討しなければならないが、少なくとも日本列島の古代山城 の土塁構築技法が単純ではなく、朝鮮半島からの土塁構築技術の伝播のあり方も意識して、古代山城 全体を検討すべきと考えた。

そのほか門の構造(掘立柱門 [唐居敷の有無]、礎石立門)、門の完成・未完成・建て直し、いろいろな建物(管理棟・兵舎・倉庫など)の有無、その他貯水施設(井戸、池)、鍛冶場、石切場など多くのことが検討されており、これまで述べてきた小生の完成・未完成論で考えるならば、神籠石系山城の城内遺構の確認・未確認、多さ・少なさも説明しやすいように思われる。

(2) 遺物

古代山城出土遺物としては、土器・瓦・その他がある。最も多く確認されるものは土器である。しか し、神籠石系山城は調査地点との関わりもあるであろうが、一般的に出土量は少ない。

また、瓦が出土する山城は筑前大野城跡、肥前基肄城跡、肥後鞠智城跡、そして実際に城内の城関係 建物に使用されたかはわからないが、備中鬼ノ城で少量出土している。7、8世紀における瓦の使用は 寺院、官衙などが一般的で、その他の施設ではほとんどみることができない。古代山城は国家が関わる 「城」であり、「官衙」関連として使用されることは問題ないが、確実な古代山城使用例は上記の3つ の山城である。瓦の使用も山城の「重要性」「機能」などを表わしている可能性がある(亀田 2014b)。 ただ、古代山城に宗教施設が造営される、古代山城が宗教施設に変容するなかで瓦が使用される可能 性も考えておくべきである。

そのほかの遺物も含め、土器・瓦類は山城の築城・使用・廃城年代決定に重要な意味を持つ。ただ、多くの神籠石系山城では前述のようにその点数が極めて少なく、年代決定に苦労しているのが実態である(図 8)。そのような中で木村龍生(2012)が行った鞠智城跡出土土器の検討は極めて重要で、土器出土量の変遷によって鞠智城の変遷が推測できるようになった(図 6)。この鞠智城跡の土器出土量の変遷とその他神籠石系山城の出土遺物を比較検討することで多少なりとも神籠石系山城の年代も推測できるようになっている。神籠石系山城では全体で数点しか土器が出土しない場合、7世紀中頃の土器が

古代山城の成立と変容

亀田 修一(岡山理科大学教授)

1. はじめに

古代山城 (小稿では朝鮮式山城・神籠石系山城をあわせてこのように呼ぶ) に関する研究は、古くよりなされ、これまでの成果では、660年の百済滅亡前後の朝鮮半島における混乱、663年の白村江の戦いの敗戦を契機として、対唐・新羅用に築かれたとの考えがおもな意見と考えられる(図1)。ただ、細部ではいろいろな意見もある。

今回の発表では、これまでの諸先学の研究成果によりながら、「古代山城の成立と変容」について、 小生が最近、おもに指摘していることがら、「未完成と完成」、「遺構と遺物の総合化」などを中心にお 話ししたい。

諸先学の研究成果に関しては、報告書も含め多くのものがあるが、ここでは末尾に参考文献として おもなもの、今回の発表に関わるものをいくつかあげさせていただいた。

2. 未完成と完成

古代山城が未完成であることは古くから指摘されている。亀田は 2014a の論文で改めて未完成であることについて取り上げ検討し、半数以上 (9/16) の神籠石系山城が未完成、またはその可能性が推測されることを指摘した。筑前阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・杷木神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石、豊前唐原山城跡、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、播磨城山城跡などである(図 2)。

ただ、これらの未完成に関しても、土塁造成予定場所を加工し、列石を途中まで並べたが、土塁を盛っていない豊前唐原山城跡や、列石+土塁はできあがっているが、その列石土塁が全周していない筑前阿志岐城跡・筑後女山神籠石など、また門の唐居敷用の石を途中まで加工して門の場所近くまで運んでいるが、その加工が途中で止まっている讃岐城山城跡などいろいろな段階の未完成がある。

逆に、完成している、またはほぼ完成している古代山城は、朝鮮式山城のその所在地が確認されている 6 ヵ所のうち、4 ヵ所が挙げられる。 筑前大野城跡、肥前基肄城跡、対馬金田城跡、肥後鞠智城跡である。 このほか神籠石系山城であるが、備中鬼ノ城も完成していると考えている。

このほか詳細がわからないものが多いが、上記のような完成・未完成の古代山城をすべて同列に扱って古代の防衛体制を論じて良いかというのが、亀田の考えの一つである。

さらに、文献史料から 719 年頃までには古代山城の機能は停止されたと考えられているが、698 年の「繕治」を含めて 8 世紀以降も維持管理、再利用されたことが考古資料・文献史料から確認できるものが筑前大野城跡、肥前基肄城跡、肥後鞠智城跡の 3 つの城である。これら北部・中部九州に位置する 3 つの城はこれまでの諸先学が述べているとおり、当時の国家・大宰府が特別に重要視・意識した山城と考えられる (亀田 2018b)。

鞠智城・古代山城シンポジウム

古代山城の成立と変容

目時: 平成30年10月14日(目) 10:30~17:10

場所:明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール(東京都千代田区神田駿河台1-1)

主催:熊本県、熊本県教育委員会、明治大学日本古代学研究所

後援:明治大学博物館、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会

日 程

9:30 開 場

10:30 開 会

あいさつ 熊本県教育長 宮尾 千加子 明治大学日本古代学研究所所長 石川 日出志

来賓紹介

10:50 基調講演 10:50~11:50

「古代山城の成立と変容」

亀田 修一(岡山理科大学教授)

11:50 昼食休憩 11:50~13:00

13:00 講 演① 13:00~13:40

「七世紀後半の国際社会と古代山城」 仁藤 敦史(国立歴史民俗博物館教授)

13:40 講演② 13:40~14:20

「朝鮮式山城の特徴ー主に兵站と備蓄についてー」 赤司 善彦 (大野城心のふるさと館館長)

14:20 講 演③ 14:20~15:00

「神籠石系山城の捉え方〜築城年代・築城主体論の克服」 向井 一雄(古代山城研究会代表)

15:00 休 憩 15:00~15:20

15:20 パネルディスカッション 15:20~17:10

コーディネーター 佐藤 信 (大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事)

パネリスト 亀田 修一 仁藤 敦史

赤司 善彦 向井 一雄

中村 友一 (明治大学准教授)

五十嵐 基善 (明治大学兼任講師)

矢野 裕介(熊本県教育委員会)

17:10 閉 会

※10/7~10/15「古代山城の城門 (パネル展)」を開催 (アカデミーコモン 1F展示スペース)

平成30年度(2018年10月14日開催)

資料編

鞠智城・古代山城シンポジウム 成果報告書

古代山城の成立と変容

鞠智城・古代山城シンポジウム 二〇一八 成果報告書

発行年月日 平成三二(二〇一九)年三月二二日

〒八六二Ⅰ八六○九

電話 〇九六ー三八三ー一一一(代表)熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号

サンコー・コミュニケーションズ株式会社

印

刷

この電子書籍は、古代山城の成立と変容 鞠智城シンポジウム 成果報告 2018 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村 教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大 学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直 接、各施設にお問い合わせください。

書名:古代山城の成立と変容

鞠智城シンポジウム成果報告 2018

発行:熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話: 096-383-1111

URL: http://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:西暦 2022 年7月21日